

水走遺跡第4次発掘調査報告

2000・11

東大阪市教育委員会
財団法人 東大阪市文化財協会

は し が き

近鉄東大阪線の開通、阪神高速道路東大阪線の延伸と第二阪奈有料道路の建設、それに伴う国道308号線の整備などにより、水走遺跡内での開発事業は大幅に進み、水田・畑地の多くは姿を変え、現在では工場・住宅・会社などの建造物が建ち並んでいます。

「水走」地域の大規模な開発は、平安時代後半から鎌倉時代にかけて活発に行なわれました。その開発氏族である水走氏の存在とともに、所領などの状況を記した「水走文書」は、文献史上からも注目されてきました。今回の調査においては、その開発過程を遺構・遺物から明確に裏付けることができたとともに、当時の精神生活の一端を窺う多量の祭祀遺物なども出土し、多大の成果を得ることができました。これらの資料が日本の歴史を語る上で貴重な存在であることを確信しています。

最後に、調査・整理・報告書作成にあたってご協力、ご指導を賜った関係諸機関、諸氏に感謝するとともに、今後とも一層のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げます。

平成12年11月

財団法人東大阪市文化財協会
理 事 長 日 吉 亘

例 言

1. 本書は東大阪生駒電鉄株式会社（現在・近畿日本鉄道株式会社）が計画した東大阪都市高速鉄道東大阪線（現在・近畿日本鉄道東大阪線）建設、阪神高速道路公団が計画した阪神高速東大阪線延長工事に伴う水走遺跡第4次発掘調査の結果報告書である。
2. 発掘調査は昭和59年1月30日より昭和59年12月28日まで実施した。
3. 調査は若松博恵、阿部嗣治、田中龍男（現・財団法人大阪府文化財調査研究センター）が担当した。
4. 調査における土色名は農林省農林水産技術事務所監修・財団法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帖』によった。
5. 調査時、国土座標の設置および写真測量実測については国際航業株式会社に委託して実施した。
6. 木器の保存処理および樹種鑑定については財団法人元興寺文化財研究所、パリノ・サヴェイ株式会社に委託して実施した。
7. 遺物の写真撮影については木器の一部は上野利明が行ない、他はGFプロに委託して実施した。
8. 調査に際しては、宮崎大学農学部藤原宏志教授および同研究室（当時）松田隆二氏に委託してプラント・オパール定量分析を実施し、その結果報告を賜った。また、貝遺体の同定は故・梶山彦太郎氏より御教示を得た。
9. 本書の編集・執筆は若松が担当した。
10. 調査時には立命館大学 日下雅義教授（現・徳島文理大学教授）、大谷女子大学 中村浩教授、大阪府教育委員会 渡辺昌宏氏・禰宜田佳男氏（現・文化庁）、整理および報告書作成に際しては田中龍男氏の教示・協力を得た。
11. 「水走文書」の閲覧に際しては水走益雄御夫妻の御許可を得た。
12. 調査および整理作業にあたっては多くの方々の協力を得た。

本文目次

はしがき

例言

本文・挿図・表・図版目次

I. 調査に至る経過	1
II. 位置と環境	5
III. 調査の概要	7
1. 調査の方法	7
2. 層序	9
3. 遺構と遺物	22
a. 弥生時代	22
b. 奈良時代～平安時代前半	25
c. 平安時代後半	32
d. 鎌倉時代から江戸時代前半	37
e. 江戸時代前半以降	86
IV. 東大阪：水走遺跡におけるプラント・オパール定量分析結果	88
V. まとめ	92
付編1	101
付編2	111

挿図目次

第1図 調査地点位置図	2・3
第2図 水走遺跡周辺遺跡分布図	6
第3図 調査地地区割図	7
第4図 調査地基本層位模式図	8
第5図 A地区西断面図	11
第6図 A地区南断面図(部分) [1]	12
第7図 A地区南断面図(部分) [2]	13
第8図 B-1地区南断面図(部分)、西断面図	17・18
第9図 B-2地区南断面図	19・20

第10図	A地区第22・29層出土弥生土器実測図	22
第11図	A地区第35層上面落ち込み、第30層上面自然流路、第18層上面遺構平面図	23・24
第12図	A地区第29～37層出土遺物木製品・骨製品実測図	25
第13図	A地区第21・22層出土木製品実測図	26
第14図	A地区第5遺構面平面図	27・28
第15図	A地区堤防・堰状遺構平面図	29・30
第16図	A地区堤防状および堰状遺構断面図	31
第17図	A地区第16～20層出土土器実測図	32
第18図	A地区第11～13層出土土器実測図	33
第19図	A地区第16層上面遺構平面図	34
第20図	B-1地区第15層上面遺構平面図	35
第21図	A地区第12～15層出土木製品実測図	36
第22図	A地区第4遺構面平面図	39・40
第23図	A地区溝10および溜まり状遺構断面図	41
第24図	B地区溝13・河川8平面図	42
第25図	A地区溝8出土土器実測図	43
第26図	B-1地区溝13出土土器実測図	43
第27図	A地区溝8・10出土木製品実測図	44
第28図	B-2地区河川6～8出土土器実測図	46
第29図	B-2地区河川6・8出土木製品・鉄製品実測図	47
第30図	B-1地区落ち込み7出土土器実測図	48
第31図	B-1地区落ち込み7出土木製品・鉄製品実測図	49
第32図	B-2地区河川7・4出土木製品・鉄製品実測図	50
第33図	B-1地区溝24出土土器実測図	52
第34図	B-1地区溝24出土木製品・鉄製品実測図	53
第35図	B-1地区土坑61・58、溝28・25出土土器実測図	54
第36図	B地区第4遺構面平面図、B-2地区河川5遺物出土状況平面図	55・56
第37図	B-2地区河川5出土瓦器椀実測図(1)	58
第38図	B-2地区河川5出土瓦器椀実測図(2)	59
第39図	B-2地区河川5出土瓦器椀・瓦質土器実測図	60
第40図	B-2地区河川5出土瓦器椀実測図(3)	61
第41図	B-2地区河川5出土土師器皿・土器質土師器実測図	62
第42図	B-2地区河川5出土木製品実測図(1)	64
第43図	B-2地区河川5出土木製品実測図(2)	65
第44図	B-2地区河川5出土木製品実測図(3)	66

第45図	B-2地区河川5出土木製品実測図(4)	67
第46図	B-2地区河川5出土木製品実測図(5)	68
第47図	B-2地区河川5出土鉄製品実測図	69
第48図	B-2地区河川4出土土器実測図	70
第49図	B-2地区河川4出土木製品実測図	71
第50図	B-1地区溝14出土土器実測図	72
第51図	B-1地区溝14下層出土人形木製品実測図	72
第52図	B-1地区溝14出土木製品実測図	73
第53図	B-1地区土坑60出土土器実測図	74
第54図	B地区第3・2遺構平面図	75・76
第55図	B-1地区第B・B'層出土土器実測図	77
第56図	B-1地区土坑28平面図	78
第57図	B-1地区土坑28側面図(南西より)	79
第58図	B-1地区土坑28出土土器実測図	79
第59図	B地区土坑21・22・28、溝9出土土器実測図	80
第60図	B-2地区土坑15出土土器実測図	81
第61図	B-2地区第4層上面遺構平面図	82
第62図	A地区第11層上面ハス田畦畔、第9層上面足跡、第4・5層上面遺構平面図	83・84
第63図	A地区第8・9層出土木製品実測図	85
第64図	A地区第9層・土坑4出土貨銭	85
第65図	A地区土坑6・溝2出土木製品実測図	86
第66図	A地区土坑6・14出土磁器・陶器実測図	86
第67図	B-1地区第4層上面遺構平面図	87
第68図	第7次調査出土の木簡	95
第69図	川中比定の松原城(水走城)址推定地略図	97
第70図	[水走氏屋敷概念図]	111
第71図	水走氏の墓塔と銘文	112

表 目 次

第1表	水走遺跡発掘調査一覧表	2・3
第2表	プラント・オパール定量表	89
第3表	プラント・オパール定量グラフ（A地区）	90
第4表	プラント・オパール定量グラフ（B地区）	91
第5表	『枚岡市史第三巻 史料編一』所収「水走文書」の項目一覧表	93
第6表	水走氏相続・文書関連系譜	94
第7表	水走遺跡と水走氏関係年表	98・99
第8表	〔系譜Ⅰ〕	102
第9表	官・位階相当表	103
第10表	〔系譜Ⅱ〕	104・105
第11表	〔系譜Ⅲ〕	108・109

図 版 目 次

図版1	遺構	調査地航空写真
図版2	遺構	1. B地区 調査前（東より） 2. A地区 調査作業風景（西より）
図版3	遺構	1. A地区 南断面（上）1 2. A地区 南断面（下）1
図版4	遺構	1. A地区 南断面（上）2 2. A地区 南断面（下）2
図版5	遺構	1. A地区 西断面（上） 2. A地区 西断面（下）
図版6	遺構	1. A地区 南断面（最下部） 2. B地区 南断面（上）1
図版7	遺構	1. B-1地区 南断面（上）2 2. B-1地区 南断面（下）
図版8	遺構	1. B-1地区 西断面（上） 2. B-1地区 西断面（下）
図版9	遺構	1. B-2地区 南断面（上）

2. B-2 地区 南断面（下）
- 図版10 遺構 1. A-2 地区 第35層上面落ち込み（西より）
2. A地区 第30層上面自然流路（東より）
- 図版11 遺構 1. A-3 地区 第21層上面足跡（南より）
2. A-4 地区 第21層上面足跡（東より）
- 図版12 遺構 1. A-3 地区 第18層上面畔・足跡（南より）
2. A-1 地区 第18層上面足跡（南より）
- 図版13 遺構 1. B-1 地区 第15層上面足跡（南より） 1
2. B-1 地区 第15層上面足跡（南より） 2
- 図版14 遺構 1. B-2 地区 第15層上面足跡（東より）
2. B-1 地区 溝32・33（西より）
- 図版15 遺構 1. A-3・4 地区 第16層上面遺構（南より）
2. A-3 地区 第16層上面遺構（北より）
- 図版16 遺構 1. A-1 地区 第13層上面足跡（南より）
2. A-4 地区 第13層上面足跡（西より）
- 図版17 遺構 1. A-2 地区 堰状遺構上部（西より）
2. A-2 地区 堰状遺構断面（西より）
- 図版18 遺構 1. A-2 地区 堰状遺構断面部分（西より） 1
2. A-2 地区 堰状遺構断面部分（西より） 2
- 図版19 遺構 1. A-2 地区 堰状遺構部分（東より）
2. A-2 地区 堰状遺構部分（西より）
- 図版20 遺構 1. A-1・2 地区 堤防状遺構（西より）
2. A-3・4 地区 堤防状遺構（東より）
- 図版21 遺構 1. A-2 地区 溝9・溜まり状遺構（東より）
2. A-1・2 地区 溝8・10（西より）
- 図版22 遺構 1. A-3・4 地区 溝8（東より）
2. 溝8内漆器碗出土状況
- 図版23 遺構 1. B-1 地区 溝13（東より）
2. B-2 地区 河川6内遺物出土状況
- 図版24 遺構 1. B-1 地区 溝24遺物出土状況
2. B-1 地区 落ち込み7・溝24・25（西より）
- 図版25 遺構 1. B-2 地区 河川5（東より）
2. 河川5内上層遺物出土状況
- 図版26 遺構 1. 河川5内下層遺物出土状況
2. 河川5内貝遺体出土状況

- 図版27 遺構 1. B-2地区 河川4 (東南より)
2. 河川4内遺物出土状況
- 図版28 遺構 1. B-1地区 第3遺構 (西より)
2. B-1地区 溝14上層小柄出土状況
- 図版29 遺構 1. 溝14堰状遺構 (東より)
2. B-1地区 P38柱根検出状況
- 図版30 遺構 1. B-1地区 土坑28上層遺物出土状況 (南より)
2. 土坑28下層遺物・遺構検出状況 (南より)
- 図版31 遺構 1. B-2地区 第3遺構 (南より)
2. B-2地区 第3遺構 (東より)
- 図版32 遺構 1. B-1地区 第2遺構 (西より)
2. B-1地区 落ち込み5内漆器碗出土状況
- 図版33 遺構 1. B-1地区 第2遺構 (西より)
2. B-1地区 第2遺構足跡 (北より)
- 図版34 遺構 1. B-2地区 第2遺構 (南より)
2. B-2地区 第2遺構 (東より)
- 図版35 遺構 1. B-2地区 溝1、落ち込み1、土坑19~26 (東より)
2. B-2地区 土坑15遺物出土状況 (東より)
- 図版36 遺構 1. A-2地区 ハス田畦畔 (東より)
2. A-1・2地区 ハス田畦畔 (西より)
- 図版37 遺構 1. A-3地区 ハス田畦畔 (西より)
2. A-4地区 ハス田畦畔 (西より)
- 図版38 遺構 1. A-1地区 第9層上面足跡 (北より)
2. A-2地区 第9層上面足跡 (北より)
- 図版39 遺構 1. A-3地区 第9層上面足跡 (西より)
2. A-4地区 第9層上面足跡 (西より)
- 図版40 遺構 1. A-1地区 第4・5層上面遺構 (東より)
2. A-2地区 第4・5層上面遺構 (北より)
- 図版41 遺構 1. A-3・4地区 第4・5層上面遺構 (東より)
2. B-1地区 第4層上面遺構 (西より)
- 図版42 遺構 1. A-3地区 井戸2上部
2. A-4地区 井戸1下部側面
- 図版43 遺構 1. B-2地区 河川2 (西より) 2
2. B-2地区 河川2東肩 (西より) 1
- 図版44 遺物

图版45 遺物
图版46 遺物
图版47 遺物
图版48 遺物
图版49 遺物
图版50 遺物
图版51 遺物
图版52 遺物
图版53 遺物
图版54 遺物
图版55 遺物
图版56 遺物
图版57 遺物
图版58 遺物
图版59 遺物
图版60 遺物
图版61 遺物
图版62 遺物
图版63 遺物
图版64 遺物
图版65 遺物
图版67 遺物
图版68 遺物
图版69 遺物
图版70 遺物
图版71 遺物

I. 調査に至る経過

東大阪市のほぼ中央を東西に貫く大幹線道路の国道308号線（通称・中央大通り）は、市内を南北を走る中央環状線・外環状線と接続し、特に昭和40年代前半以降増加し続ける交通量により、交通渋滞など道路機能に破綻をきたすようになった。また、大阪市のベッタウン化が激しい奈良県内との鉄道輸送量も飽和状態となり、その解消のための対策をこうじる必要が生じてきた。

このような中から、新たな鉄道建設の必要と、国道308号線の整備および阪神高速道路の延長―第二阪奈道路建設とその接続―が実施されることになった。そのため、東大阪市教育委員会は東大阪生駒電鉄株式会社（現在、近畿日本鉄道株式会社）、阪神高速道路公団、大阪府八尾土木事務所と協議を進め、建設予定地内にある遺跡―鬼虎川、西ノ辻、植附遺跡―の発掘調査および、周知の遺跡以外の埋蔵文化財包蔵地の確認が行われることになった。この確認調査によって、水走、神並遺跡が発見され、発掘調査の実施対象となった。

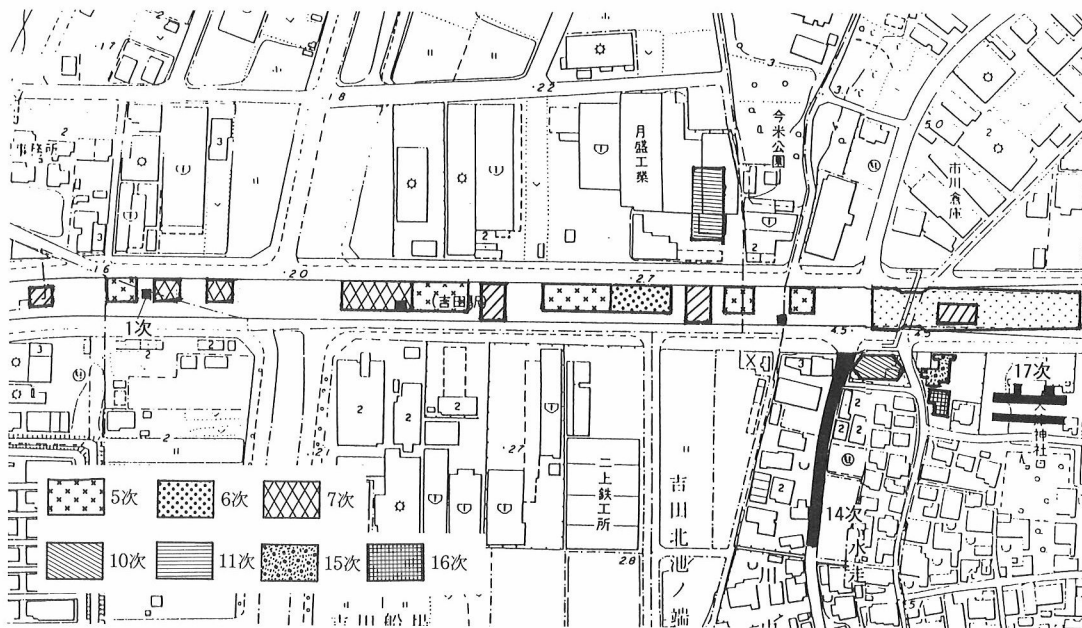
この間、調査の早期終結、充実をはかるため、昭和57年には東大阪市遺跡保護調査会、国道308号線関係遺跡調査会、瓜生堂遺跡調査会を解散して財団法人東大阪市文化財協会が設立されるとともに、大阪府教育委員会（大谷女子大学をも含めて）と調査体制が生まれ、発掘調査を実施していった。本報告書は、昭和59年1月から12月にかけて実施した水走遺跡第4次発掘調査の報告である。

水走遺跡では今までに（平成11年度）17次の発掘調査が行われている。この遺跡は、現在の近鉄東大阪線（当初、東大阪都市高速鉄道東大阪線）建設および阪神高速道路の延長工事に先立つ、恩智川から長田間（約1.8km）で実施された遺跡の確認調査―昭和54・55年実施、第1次調査^①―において周知されるようになった遺跡である。その後、鉄道・高速道路建設工事の具体的計画に基づき、まず昭和57年度に吉田船場から恩智川の間で水走・鬼虎川遺跡の範囲をより明確にするための試掘調査が行われ、縄文時代から近世に亘る遺物とともに、平安時代後期の堰状遺構、鎌倉時代の土坑墓、鎌倉～室町時代の柱穴群などの遺構が検出されて、水走遺跡の性格が明確になった^②。そのため、翌年の昭和58・59年にかけて、大阪府教育委員会―第5・7次調査^③―・大谷女子大学―第6次調査^④―・東大阪市文化財協会―第3^⑤・4次調査―本報告―によって橋脚部分を中心とした発掘調査が行われた。それとともに、阪神高速道路東大阪線水走ランプ建設に伴う橋脚部分の発掘調査も昭和59・60年度に実施された―第8・9次調査^⑥―。また昭和62年以降、周辺地域での数多くの開発工事に伴い、銀行などの会社建設―第10次^⑦、第11次調査^⑧―、マンション・個人住宅建設―第15～17次調査―とともに、国道308号線および沿線道路での公共下水道管理設工事―第12～14次調査^⑨―による発掘調査が実施されている。

*○番号は文献の番号

第1表 水走遺跡発掘調査一覧表

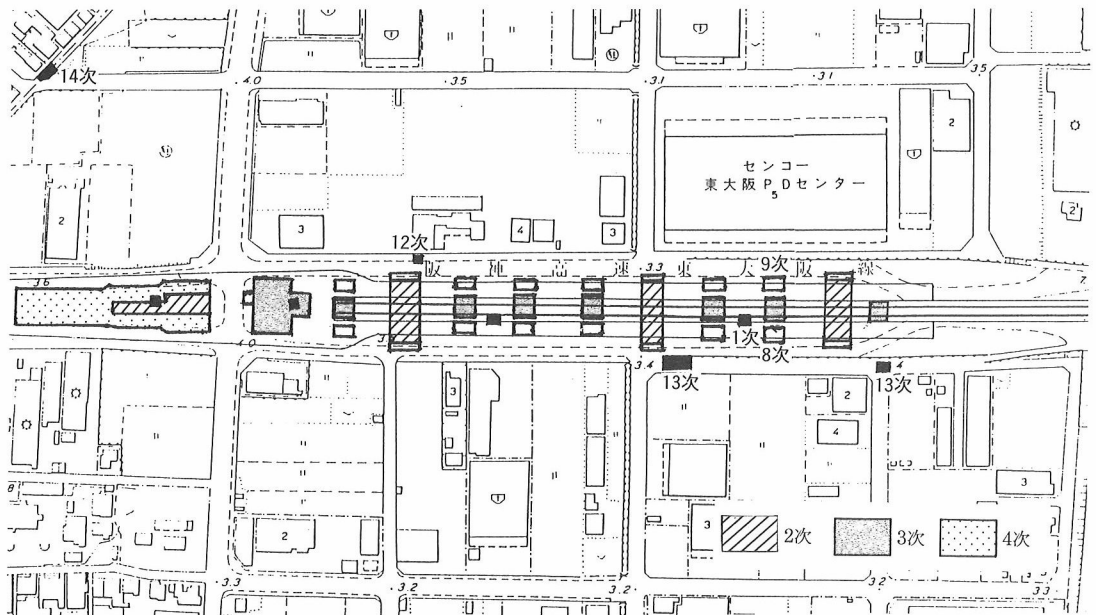
次数	調査年月	調査原因	調査地名	調査面積	調査主体	調査概要 主な遺構と遺物など	文献
1	S54. 12 ～55. 4	鉄道・高速道路 建設計画に基づ く遺跡の確認	荒本 ～水走	450m ²	調査会	水走遺跡の周知	①
2	S57. 6 ～58. 4	鉄道・高速道路 建設工事に先立 つ試掘	吉田船場 ～水走	2458m ²	協会	堰・堤防状遺構、柱穴群、土坑墓 縄文土器、弥生土器、石鏃、須恵器、 土師器、瓦器、陶磁器、砥石、 木製品（人形・下駄・漆器碗）、 鉄製品（刀子・鎌・鍋）、貨銭、 土製品（ミニチュア土器・土鍾）	②
3	S58. 1 ～12	鉄道・高速道路 建設工事	水走	1755m ²	協会	落ち込み、足跡群、井戸 弥生土器、石鏃、須恵器、土師器、 瓦器、陶磁器、 木製品（木筒・人形・下駄）	③
4	S59. 1 ～12	同上	川中 ～水走	2859m ²	協会	堰・堤防状遺構、溝、柱穴群、河川 弥生土器、土師器、瓦器、陶磁器、 石製品（石鏃・石鍋・砥石）、 鉄製品（小刀・刀子）、貨銭、 木製品（祭祀具・漆器碗・下駄）	⑩ 本書
5	S59. 1 ～8	同上	今米～ 中新開	1266.2m ²	府教委	畦畔、井戸、溝、足跡、河川 土師器、瓦器、瓦、陶磁器、漆器	⑩
6	S59. 2 ～3	同上	中新開	485m ²	大谷女 子大学	井戸、足跡群、溝 縄文土器、弥生土器、須恵器、土師 器、瓦器、陶磁器、瓦、牙製装飾品	④
7	S59. 4 ～12	同上	中新開	2021.4m ²	府教委	井戸、足跡、溝 弥生土器、土師器、瓦器、瓦、木筒、 漆器碗、壺状製品、鉄鏃、貨銭	⑩



第1図 調査地点位置図 (1/2,500)

8	S 59. 5 ~60. 3	阪神高速道路東 大阪線水走ラン プ建設工事	水走	1291m ²	協会	足跡群、土坑、溝、落ち込み、弥生 土器、須恵器、土師器、瓦器、陶磁 器、木製品（下駄・羽子板）、和銅 開珎、鉄鏝、石鏝	⑤
9	S 60. 5 ~61. 3	同上	水走	1235.8m ²	協会	井戸、足跡群、溝、自然流路、弥生 土器、須恵器、土師器、瓦器、陶磁 器、瓦、石鏝、 木製品（琴柱状・刺突具）	⑤
10	S 62. 2 ~3	ビル建設工事	川中	346m ²	協会	河川、堤防、井戸、地震跡 土師器、瓦器	⑥
11	H 2. 2 ~3	ビル建設工事	中新開	240m ²	協会	大溝、柱穴群、土坑、落ち込み 土師器、瓦器、青磁、漆器碗、 石製品（砥石・石臼）	
12	H 5. 11	下水道管埋設工 事	水走	32m ²	協会	ピット、地震跡 土師器、瓦器、陶磁器、木製品	⑦
13	H 6. 1 ~2	同上	水走	21m ²	協会	足跡群、地震跡 弥生土器	⑦
14	H 6. 1 ~3	同上	川中	84m ²	協会	溝、地震跡 須恵器、瓦器、陶磁器、瓦、石鏝、 土製品（ミニチュア下駄）	⑦
15	H 9. 6 ~8	共同住宅建設	水走	164m ²	協会	柱穴群、土坑、溝、護岸、地震跡 土師器、瓦器、漆器碗、曲物、柱根	
16	H 9. 9	個人住宅建設	水走	191.14m ²	市教委	河川	
17	H10. 11 ~11. 2	共同住宅建設	水走	258.63m ²	協会	溝、整地層、地震跡 土師器、瓦器、陶器、瓦、漆器碗	

＜調査主体＞ 調査会…東大阪市遺跡保護調査会 府教委…大阪府教育委員会（文化財保護課）
協会…財団法人東大阪市文化財協会 市教委…東大阪市教育委員会（文化財課）



文献 <発掘調査関連>

- ① 上野利明 「東大阪市長田・恩智川間の遺跡確認調査」 『調査会ニュース』 No.18 東大阪市遺跡保護調査会 1981・1
- ② 『水走遺跡第2次・鬼虎川遺跡第20次発掘調査報告』 東大阪市教育委員会 (財) 東大阪市文化財協会 1992・3
- ③ 大谷女子大学 『水走遺跡―東大阪生駒電鉄建設予定地内発掘調査概要―第6次 (VE地区)』 大阪府教育委員会 大谷女子大学考古学研究会 1984・8
- ④ 『水走遺跡第3次・鬼虎川遺跡第21次発掘調査報告』 東大阪市教育委員会 (財) 東大阪市文化財協会 1997・3
- ⑤ 『水走・鬼虎川遺跡発掘調査報告 阪神高速道路東大阪線水走ランプ建設に伴う調査』 東大阪市教育委員会 (財) 東大阪市文化財協会 1998・3
- ⑥ 「水走遺跡第10次発掘調査報告」 『東大阪市文化財協会概報集―1996年度(1)―』 東大阪市教育委員会 (財) 東大阪市文化財協会 1997・3
- ⑦ 「水走遺跡第12次発掘調査概要」 『東大阪下水道事業関係発掘調査概要報告―1993年度―』 (財) 東大阪市文化財協会 1995・3
- ⑧ 「水走遺跡第13次発掘調査概要」 『東大阪下水道事業関係発掘調査概要報告―1993年度―』 (財) 東大阪市文化財協会 1995・3
- ⑨ 「水走遺跡第14次発掘調査概要」 『東大阪下水道事業関係発掘調査概要報告―1993年度―』 (財) 東大阪市文化財協会 1995・3
- ⑩ 「水走遺跡 (5次・7次) 現地見学会資料―東大阪市中新開・今米所在―」 大阪府教育委員会 1984・9・8
- ⑪ 「水走遺跡第4次発掘調査現地説明会資料」 財団法人東大阪市文化財協会 1984・9・8
- ⑫ 「水走遺跡第11次発掘調査」 『東大阪市文化財協会ニュース』 Vol. 5. No.1 東大阪市関連埋蔵文化財調査一覧 (財) 東大阪市文化財協会 1990・9
- ⑬ 『甦る河内の歴史―国道308号線関係遺跡発掘調査中間報告展―』 (財) 東大阪市文化財協会 1984・12
- ⑭ 『発掘20年のあゆみ 市制20周年記念特別展示』 東大阪市教育委員会 (財) 東大阪市文化財協会 1987・3
- ⑮ 『遺物にみるまつりといのり』 東大阪市立郷土博物館 1990・2
- ⑯ 勝田邦夫「水走遺跡にみられる地震の痕跡」 『東大阪市文化財協会ニュース』 Vol. 3. No. 3 (財) 東大阪市文化財協会 1988・2

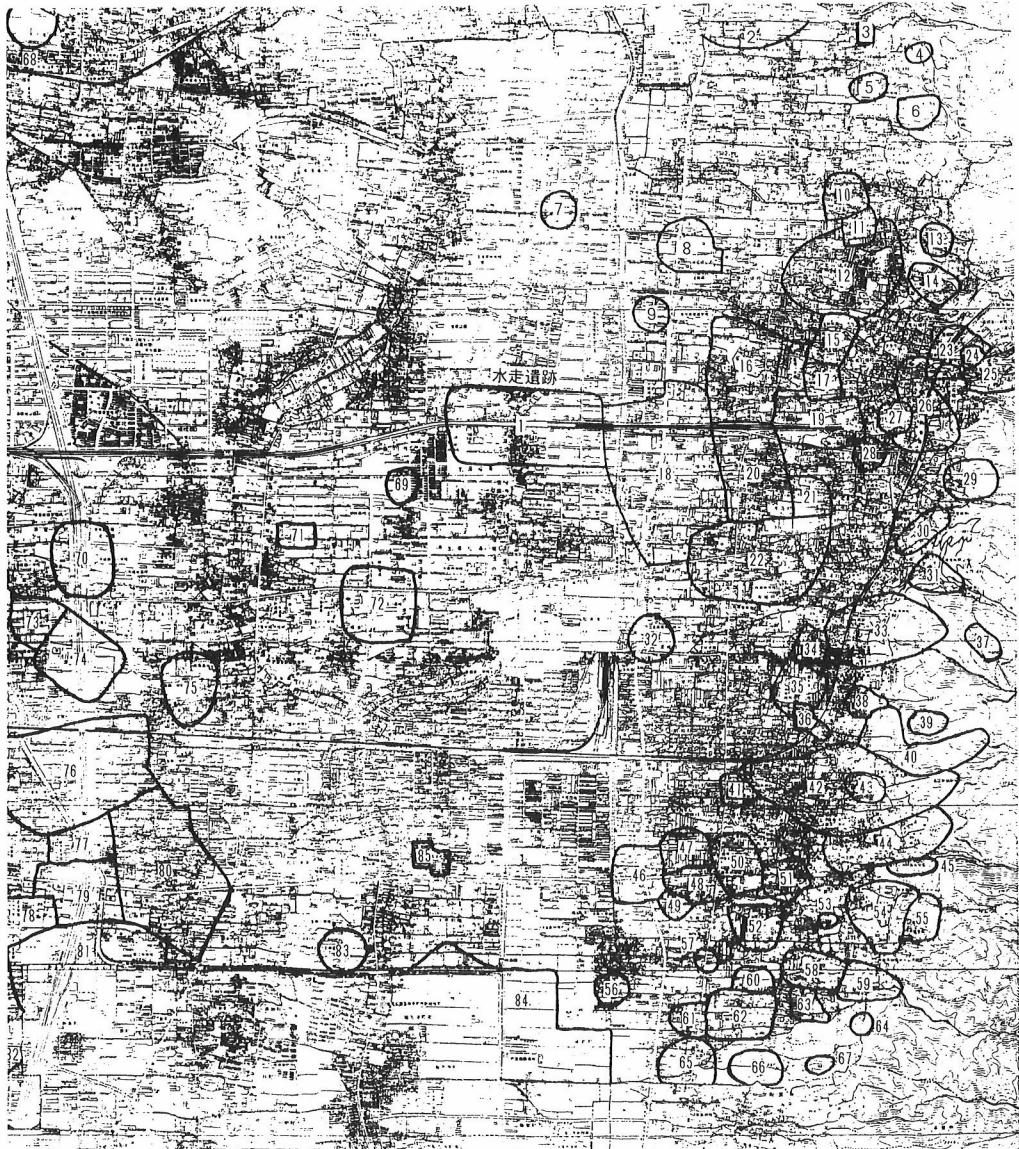
*⑩・⑪は1984年9月8日に、大阪府教育委員会と合同で実施した現地説明会の資料。

II. 位置と環境

水走遺跡は東大阪市の中東部、水走・川中・今米・吉田船場に位置し、国道308号線を中心として東西に広がる弥生時代から江戸時代にわたる複合遺跡である。この地域は現在、国道308号線とその中に近鉄東大阪線および阪神高速東大阪線が走り、主要幹線道路としてだけでなく、奈良県との重要な交通機関としての鉄道（大阪市営地下鉄中央線と連結し生駒に至り、吉田駅が存する）・高速道路（第二阪奈有料道路と連結し、水走ランプが存する）が機能しており、それに伴い徐々に開発が進み、住宅・マンション・商店・会社・銀行などが建ち並び、水田・畑地はほとんど見られなくなった。

約12,000年前から地球の温暖化が始まり、6,000～5,000年前の縄文時代前期にはいわゆる縄文海進がピークに達して大阪平野の大半は海（河内湾）と化し、東に隣接する鬼虎川遺跡東端でこの時期の海蝕崖が検出されている。その後、縄文時代中・後期になっていくと温暖化は徐々に後退し、それに伴い河内湾も河内潟へと推移し陸部も増していくが、水走遺跡一帯はまだまだ潟内に位置していた。そのため縄文時代の遺跡の多くは日下・神並・鬼塚・縄手・馬場川遺跡など東部の山麓地域に点在している。縄文時代晩期になると陸化は一段と進み、弥生時代になると鬼虎川・瓜生堂・山賀遺跡など、平野部において集落が営まれるようになっていった。水走遺跡の東に隣接する鬼虎川遺跡では集落をとりまく数条の環濠をはじめ、方形周溝墓・貝塚・柱穴などの遺構と多量の遺物（弥生土器・石器・木器・自然遺物など）が検出されており、前期から中期にかけての大集落が形成されていた。水走遺跡ではこの時期、西端部において前期の遺構・遺物、遺跡全体にわたっても弥生時代相当層を確認しているが、全般的には希薄である。弥生時代後期から古墳時代になると海はさらに後退し、潟西北部（現・上町台地北端の先）が狭まって湖（河内湖）と化するとともに陸化は進み、山麓部の河岸段丘・扇状地一馬場川・北鳥池遺跡など一、平野部の自然堤防上一西岩田・意岐部遺跡など一に集落が営まれていた。古墳時代後期には市内の平野部に集落が点在するようになる一市尻・西の口・山賀など一とともに、山麓部では山畑・客坊山・出雲井などの群集墳や、平野部の植附・段上・山賀などにも小型低方墳などが形成されていった。

南から北上していた旧大和川の各水系（玉串川・吉田川・菱江川・長瀬川・楠根川など）が流れ、水走などの地域は江戸時代前半の大和川付け替えまで、微高地を除き大半は湿地状態が続いていた。水走遺跡では飛鳥・奈良時代から平安時代前期までの遺構・遺物は希薄であるが、東部の扇状地・河岸段丘や平野部の自然堤防上などに、若江廃寺、河内寺、法通寺などの寺院をはじめ集落が営まれ、平安時代になると各地に荘園も経営されていった。特に平安時代後期から室町時代前期にわたっては平野部での開発が活発化し、水走遺跡でも堰・堤防・大溝などが構築され、水走氏による開発が行なわれた。室町時代後期から安土・桃山時代にかけての戦乱状況の中、若江城などの城郭などが営まれたが、平野地域の多くはハス田と化し、再開発は大和川の付け替えを待たねばならなかった。



- | | | | | |
|------------|-------------|------------|-------------|-------------|
| 1. 水走遺跡 | 2. 中垣内遺跡 | 3. 足立氏館跡 | 4. 善根寺山遺跡 | 5. 善根寺遺跡 |
| 6. 池端遺跡 | 7. 加納遺跡 | 8. 和泉遺跡 | 9. 北島遺跡 | 10. 日下遺跡 |
| 11. 馬場遺跡 | 12. 芝ヶ丘遺跡 | 13. 正法寺山遺跡 | 14. 芝坊主山遺跡 | 15. 辻子谷遺跡 |
| 16. 植附遺跡 | 17. 法通寺跡 | 18. 鬼虎川遺跡 | 19. 神並遺跡 | 20. 西ノ辻遺跡 |
| 21. 額田寺跡 | 22. 鬼塚遺跡 | 23. 千手寺山遺跡 | 24. 墓尾古墳群 | 25. 辻子谷古墳群 |
| 26. 神並古墳群 | 27. 正興寺山遺跡 | 28. 若宮古墳群 | 29. 額田山古墳群 | 30. みかん山古墳群 |
| 31. 豊浦谷古墳 | 32. 鶴立遺跡 | 33. 出雲井遺跡群 | 34. 弧塚遺跡 | 35. 皿池遺跡 |
| 36. 河内寺跡 | 37. 神津嶽祭祀遺跡 | 38. 水走氏館跡 | 39. 五条山古墳群 | 40. 客坊山遺跡群 |
| 41. 市尻遺跡 | 42. 山畑古墳群 | 43. 山畑遺跡 | 44. 花草山古墳群 | 45. 五里山古墳群 |
| 46. 北鳥池遺跡 | 47. 五合田遺跡 | 48. 段上遺跡 | 49. 下六万寺遺跡 | 50. 縄手遺跡 |
| 51. 上六万寺遺跡 | 52. 船山遺跡 | 53. 桜井古墳群 | 54. 岩滝山遺跡 | 55. 往生院金堂跡 |
| 56. 池島東遺跡 | 57. コモ田遺跡 | 58. 半堂遺跡 | 59. 浄土寺谷古墳群 | 60. 北屋敷遺跡 |
| 61. 西代遺跡 | 62. 馬場川遺跡 | 63. 具花遺跡 | 64. 浄土寺跡 | 65. 楽音寺遺跡 |
| 66. 西の口遺跡 | 67. 萩山古墳 | 68. 北鴻池遺跡 | 69. 吉田遺跡 | 70. 新家遺跡 |
| 71. 菱江寺跡 | 72. 稲葉遺跡 | 73. 意岐部遺跡 | 74. 西岩田遺跡 | 75. 岩田遺跡 |
| 76. 瓜生堂遺跡 | 77. 巨摩庵寺遺跡 | 78. 上小阪遺跡 | 79. 若江北遺跡 | 80. 若江遺跡 |
| 81. 山賀遺跡 | 82. 友井東遺跡 | 83. 玉串遺跡 | 84. 池島遺跡 | 85. 花園遺跡 |

第2図 水走遺跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)

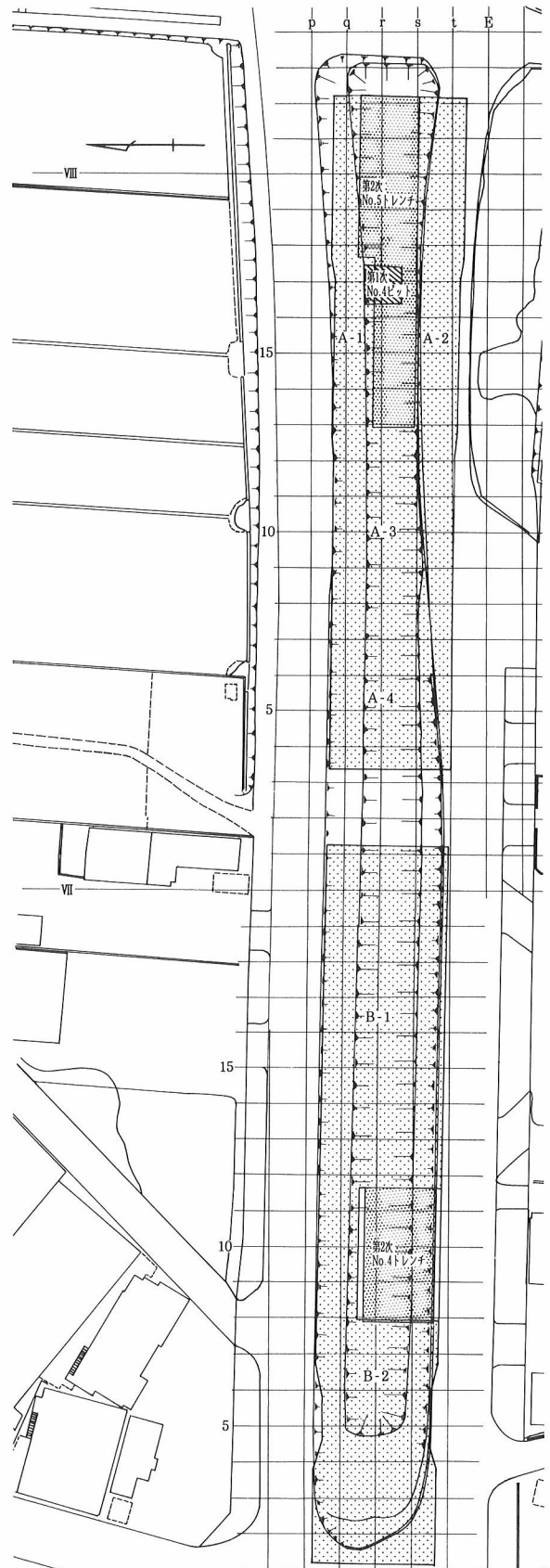
III. 調査の概要

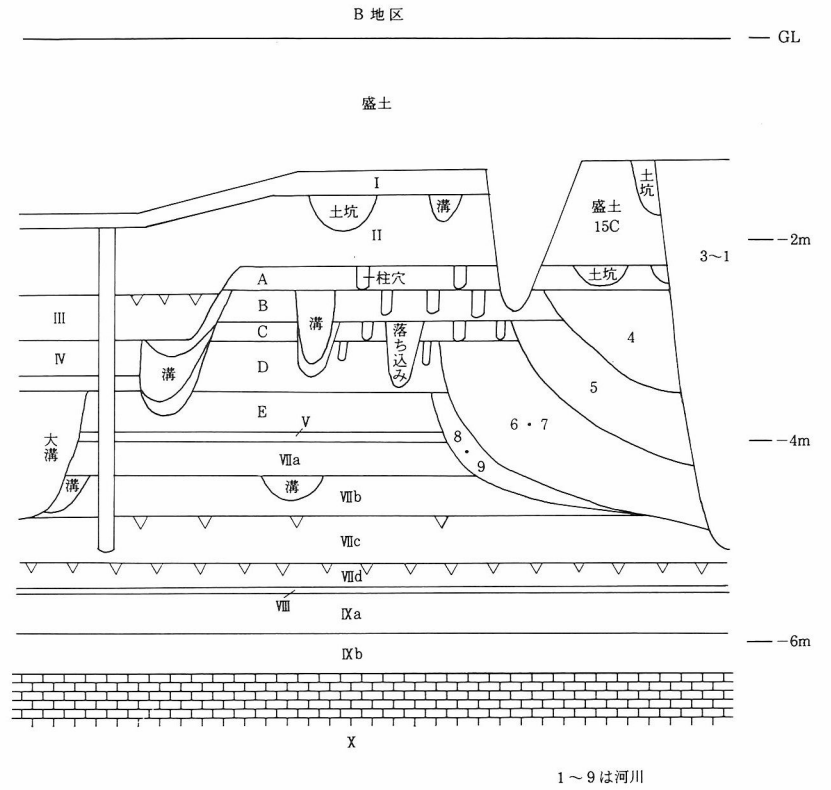
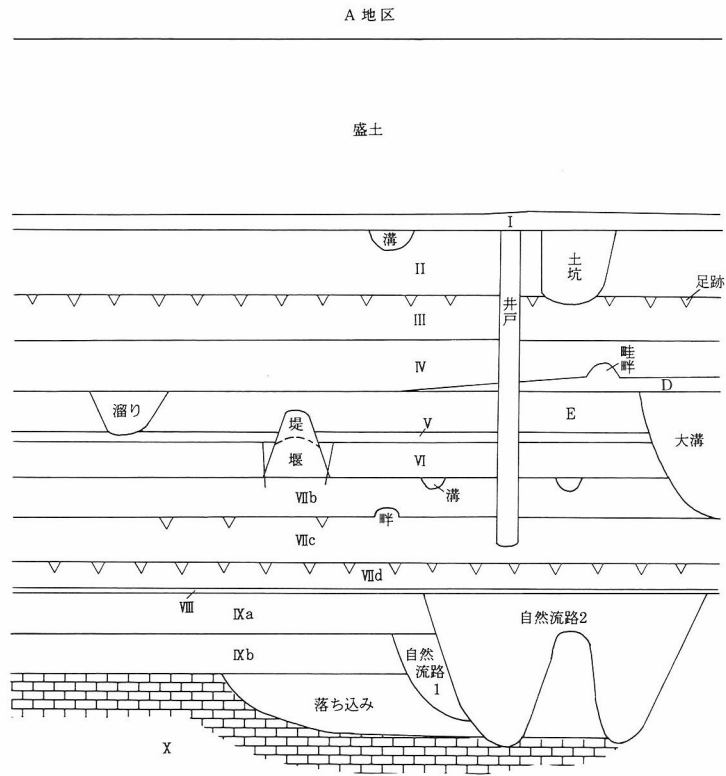
1. 調査の方法

今回の調査は水走遺跡第1・2次調査において確認した調査結果に基づき、昭和58年度に実施した第3次調査の西、水走交差点から川中交差点までの間の国道308号線内中央分離帯に設けられる鉄道・高速道路一体橋脚部分を対象とし、第2次調査実施範囲（No.4・No.5 トレンチ）を除いて2地区に分けて発掘調査を実施した。

調査に際しては東側をA地区、西側をB地区と設定した。調査は国土座標を使用して地区割りを行ない、国道308号線関係の調査開始時に設けた座標基準によった。それは東大阪市川中の $X = -146.200$ km、 $Y = -34.600$ kmの交差点を原点として、100m方眼を大地区とし、100mごとにY軸は東方向へI ($Y = -34.500$)、II ($Y = -34.400$)……とローマ数字で、X軸は南方向へA ($X = -146.300$)、B ($X = -146.400$)……と大ローマ字で表示し、さらに大地区を5m方眼に分割して20の小地区とし、南北ラインを1・2……20までアラビア数字で、東西ラインをa・b……tまで小ローマ字で表示し、2方向のラインの組み合わせによって地区名称とした。たとえば大地区IAでの西北端小地区はIA1aとなり、東南端小地区はIA20tとなる。調査時の遺物取り上げ（層位・遺構と）、実測図の作成および本報告書内での遺構・断面実測図の基準表示はこれに基づいている。

第3図 調査地区割図





第 4 図 調査地基本層位模式図

発掘調査にあたっては、A地区1,378㎡、B地区1,481㎡の計2,859㎡を対象とし、上層1.2～1.7mは国道308号線建設時の盛土であり掘削用機械を用いて除去し、下層は第2次調査の結果に基づき、以下3.8～5.8mを人力掘削により調査を行なった。また、A地区は第2次調査No.5トレンチの北側をA-1地区、南側をA-2地区、西側の東部をA-3地区・西部をA-4地区とし、B地区は第2次調査No.4トレンチの東側をB-1地区、北および西側をB-2地区と設定して実施した。

2. 層序

基本層位（第4図）

今回の調査においては弥生時代から江戸時代に亘る遺構・遺物を検出した。以下、A・B地区における基本的層位について概要を記す。

盛土

I. 第2層（オリーブ黄色シルト質砂）

近代の層。B-1地区北西部の第2層上面で溝12条検出。

II. 第3層（a-にぶい黄色砂-）、第4層（a-暗黄褐色粘土質シルト-）

江戸時代後半の層で、磁器・陶器など出土。B-1地区第3層上面で土坑3基検出。

第5層上面で溝・土坑・井戸など検出。

III. 第5層（灰白色砂）～第8層（暗緑灰色シルト質粘土）

江戸時代前半の堆積層など。

A地区およびB地区東部の第9層上面で多数の足跡検出。

A. 暗緑灰色粘土質シルト 江戸時代前半の整地層。東端部の段肩沿に木株・石、上面で落ち込みなど検出。磁器・陶器など出土。第8層対応。

IV. 第9層（a-オリーブ黒色シルト質粘土-など）

室町時代後半から安土桃山時代のハス田層で、上面およびa層下部に植物遺体層が部分的に見られ、4～5層に分かれる。A地区で畦畔を検出。植物遺体（ハスの実など）・土師器など出土。

A'. 暗緑灰色シルト質粘土 室町時代前半～安土桃山時代の整地層。上面で柱穴・溝・土坑など検出。土師器皿・磁器・陶器など出土。第9層に対応。

B. 暗緑灰色粘土質シルト 室町時代前半の整地層。上面で柱穴・溝・土坑など検出。土師器皿・瓦器椀・瓦質土器など出土。

C. 暗緑灰色シルト質粘土 鎌倉時代後半の整地層。上面で土坑・溝など検出。土師器皿・瓦器椀・瓦質土器など出土。

D. 灰色シルト質粘土 鎌倉時代前半の整地層。2時期に分かれ、下層上面で土坑墓、上層上面で大溝を検出。土師器皿・瓦器椀など出土。

[A～Dは集落形成地域（B地区中央付近）の整地層。]

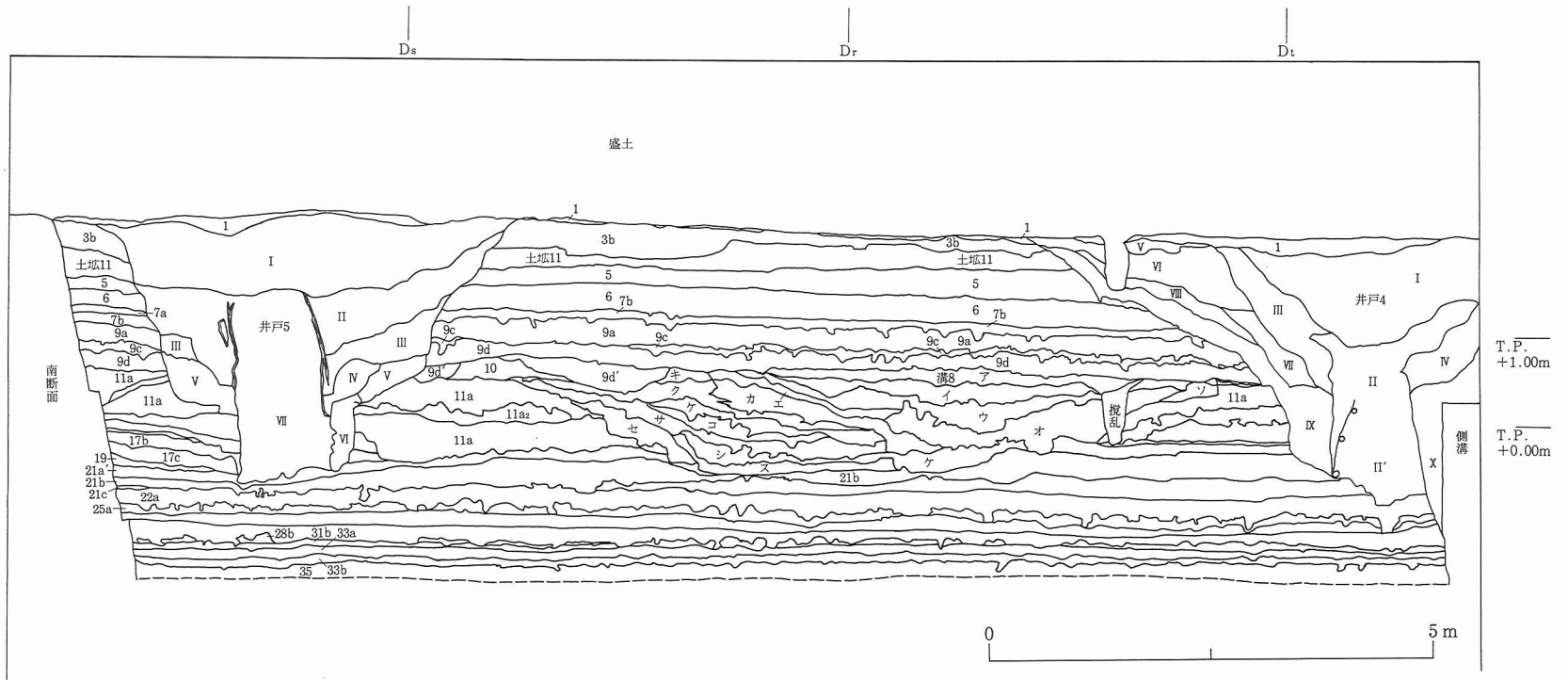
①. a-暗緑灰色シルト質粘土-など12層 上面で土坑など検出。土師器皿・瓦器椀・瓦質

土器など出土。Bに対応。

- ②. a-暗緑灰色シルト質粘土-など4層 土師器・瓦器碗・瓦質土器など出土。Cに対応。
- ③. a-暗オリーブ灰色質粘土-など7層 上面で溝など検出。土師器皿・瓦器碗・瓦質土器など出土。D対応。

[①～③はA地区およびB地区東での盛土・整地層。]

- V. 第18層(a-浅黄色粗・中粒砂-など)・第19層(a-暗オリーブ灰色粘土質シルト-)・第20層(a-黄褐色中・粗粒砂-) 堰・堤防状遺構検出。第18層は堤防構築後の堆積、第19層は堤防の盛土、第20層は堰構築前後の堆積。瓦器碗など出土。
 - VI (a～e). 奈良時代から平安時代の堆積層。
 - a. 第21層(a-暗オリーブ色粘土質シルト-) A・B地区において上面で溝を検出。
 - b. 第23層(a-暗オリーブ灰色シルト質粘土-)。上層には砂層(第22c層-浅黄色細・中粒砂-)があり、A地区で畔と足跡を検出。
 - c. 第25層(a-暗緑灰色シルト質粘土-)。上層には砂層(第24層-浅黄色中・細粒砂-)があり、A・B地区で多数の足跡検出。
 - VII. 第28層(b-黒褐色粘土-)。弥生時代後期の堆積層。植物遺体多く含む。
 - VIII. 第30層(a-黒色粘土質土-) A地区で弥生時代中期末の自然流路(第29a層-ぶい黄色粗・中粒砂など)検出。
 - IX. 第32層(a-黒褐色粘土質土-)～第33層(a-オリーブ黒色粘土-) A地区第32層上面で弥生時代中期中半の自然流路(第30a層-灰色粘質シルト-など)検出。
 - X. 第36層(暗オリーブ灰色粘土質シルト)。ベース層。A地区で落ち込み(第34a層-オリーブ黒色シルト質粘土-など)検出。
- 1～9. 河川(旧大和川水系の吉田川)の堆積層など。
- (1・2). 西端の一部で整地AとB-1(16世紀代から17世紀代)対応層確認。
 - 3. 整地層B-2に対応。14世紀後半～15世紀代。
 - 4. 整地層C-1に対応。東岸斜面より瓦器碗・土師器皿・瓦質土器(羽釜など)など多数の遺物出土。14世紀中。
 - 5. 整地層C-2に対応。東岸斜面より瓦器碗・土師器皿・瓦質土器・木製品・貝遺体などの遺物多数検出。14世紀前半。
 - 6. 整地層D-1に対応。東岸斜面より瓦器碗・土師器皿・瓦質土器・木製品などの遺物多数検出。13世紀末。
 - 7. 整地層D-2に対応。東肩部に盛土をして堤防を構築(第I～V層)。13世紀後半～末。
 - 8. 整地層E-1に対応。13世紀前半。
 - 9. 整地層E-2に対応。13世紀前半。



溝8

- ア 暗緑灰色 (10G3/1) シルト質砂 上半は粗粒砂
- イ 暗青灰色 (10BG4/1) 粘土質シルト 粗粒砂・粘土多く含む
- ウ 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 砂質土 植物遺体含む
- エ 暗緑灰色 (5G3/1) シルト 砂少し含む
- オ 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘質土 植物遺体・中粒砂含む
- カ 浅黄色 (5Y7/4) 砂
- キ 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) シルト質粘土 細粒砂ブロック含む
- ク 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト 粘土質シルトを含む
- ケ にぶい黄色 (2.5Y6/4) 中・粗粒砂
- コ 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘土質シルト 植物遺体含む
- カ 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト質粘土 植物遺体・細粒砂含む
- ク 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 粘土質シルト 細粒砂含む
- シ 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘土質シルト 植物遺体含む
- セ 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト質粘土と黄褐色 (10YR5/8) 砂の混層
- ソ 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト質粘土 砂との混層

セ・ソは溝構築時の壁面・肩の補強のほり付け土 溝は2期にわかれ、スベク堆積後(1期)、キで埋め、再度掘削してカなど堆積(2期)、のち埋める

井戸5

- I 緑灰色 (5G5/1) 砂 ややシルト質、暗灰色粘土ブロック多く含む
- II 黄褐色 (10YR5/6) 砂 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 粘土ブロック多く含む
- III 青灰色 (5BG5/1) 砂 暗灰色粘土ブロック多く含む
- IV 青灰色 (5BG5/1) シルト質砂 暗灰色粘土ブロック・粗粒砂多く含む
- V 青灰色 (10BG6/1) シルト
- VI 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト質粘土
- VII オリーブ黄色 (7.5Y4/1) 砂と暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘土ブロックの混層

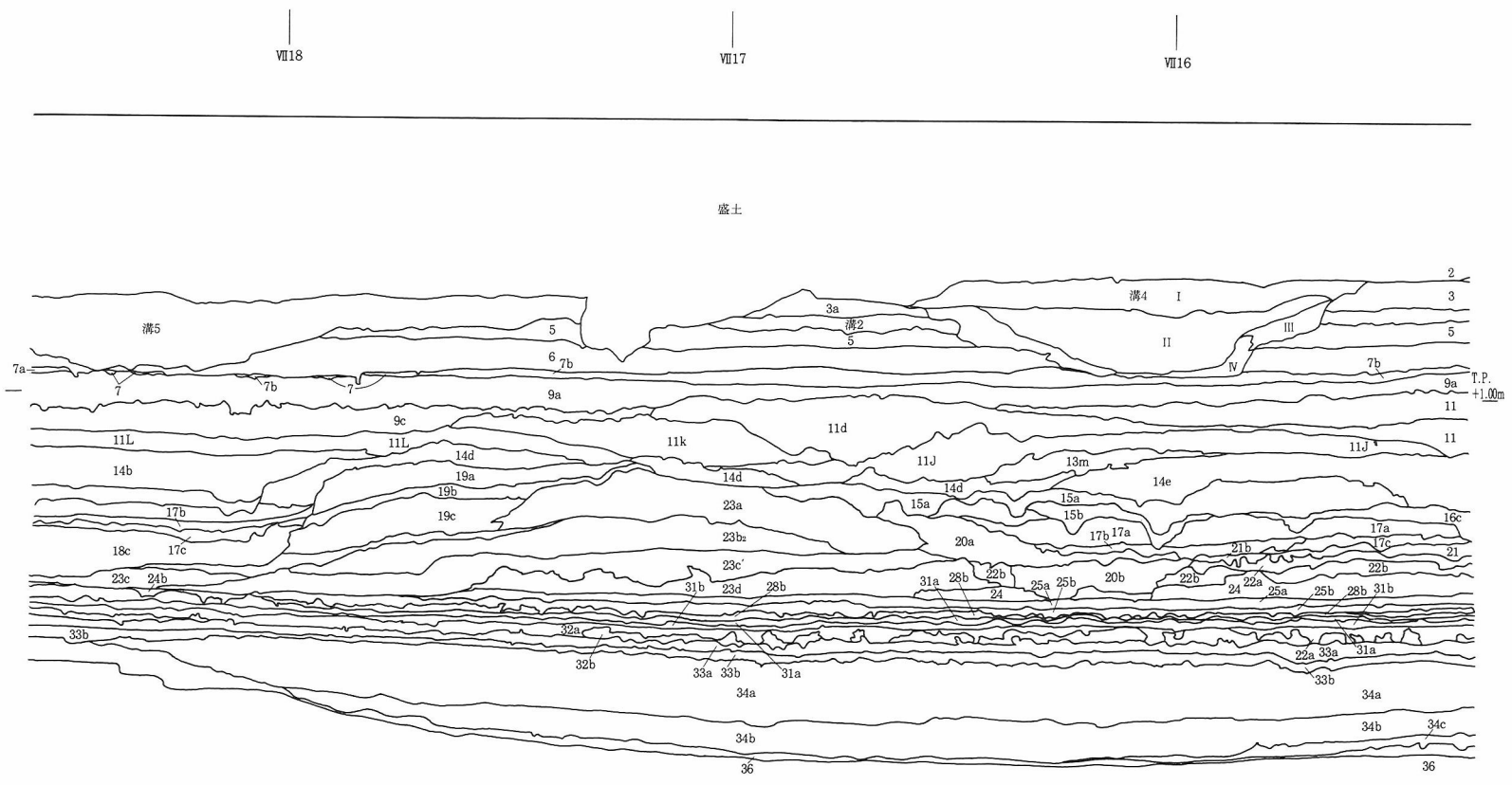
土坑11

- 明褐色 (7.5YR5/8) シルト質砂 青灰色粘土ブロック少し含む

井戸4

- I 暗緑灰色 (10GY4/1) 砂質シルト 粗粒砂・青灰色粘土ブロック多く含む
- II 暗緑灰色 (10GY3/1) 粘土 砂ブロック含む
- II' 黄褐色 (2.5Y5/3) 細粒砂
- III 暗青灰色 (5BG4/1) 砂質シルト 粗粒砂・青灰色粘土ブロック多く含む
- IV 暗緑灰色 (5G4/1) 砂
- V 黄色 (2.5Y8/6) 砂
- VI 黄褐色 (2.5Y5/1) 砂
- VII 浅黄色 (2.5Y7/4) 砂
- VIII 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂
- IX 黄灰色 (2.5Y5/4) 細・中粒砂と灰色 (10Y4/1) 粘土質シルトの混層
- X 暗緑灰色 (10G4/1) シルト質粘土

第5図 A地区西断面図



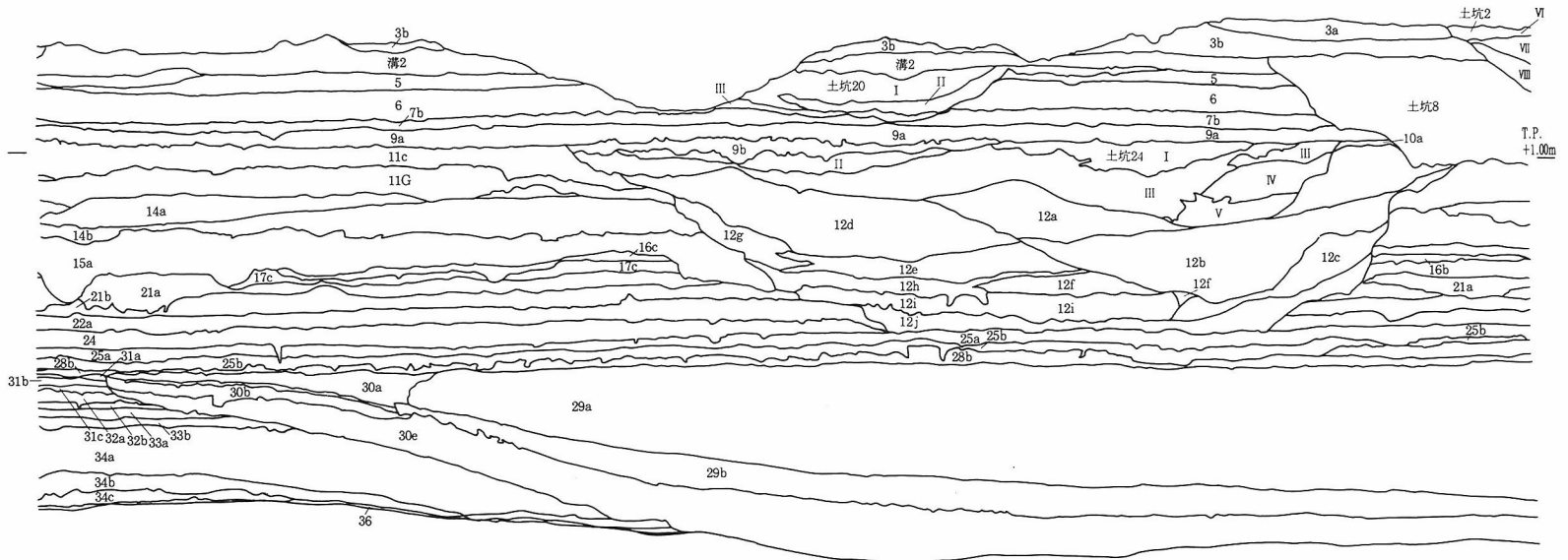
第 6 图 A 地区南断面图 (部分) [1]

VII13

VII12

VII11

盛土



第7图 A地区南断面图(部分) [2]

A地区の層序と主な出土遺物（第5～7図 図版3～5）

- 第1層 オリーブ黄色 (5Y6/3) シルト質砂 褐色土粒多く、下半は粗粒砂含む
- 第3a層 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂
- 第3b層 黄褐色 (2.5Y5/4) 砂
- 第3層からは、土師器、磁器、瓦器、瓦の小・細片出土
- 第5層 灰白色 (5Y8/1) 粗粒砂-小礫主体 土師器、須恵器の細片若干出土
- 第6層 暗緑灰色 (5G4/1) シルト質粘土粘土とシルトの互層であり、粘土部分は灰白色を呈し、厚層は1～2cmで3層認められる。土師器、瓦器、磁器、陶器、瓦、杭の小・細片出土
- 第7a層 緑灰色 (10G5/1) 砂 砂とシルトの互層
- 第7b層 青灰色 (10BG6/1) 砂 若干シルト質 無遺物
- 第7層からは、土師器、瓦器、陶器、瓦の小・細片、砥石、漆器碗などの木製品出土
- 第9a層 オリーブ黒色 (10Y3/2) シルト質粘土 ハス田層、土師器、瓦器、須恵器、陶器、磁器の小・細片と漆器碗、動物遺体、貝遺体出土
- 第9b層 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 粘土質シルト 青灰色粘土と粘土質シルトの互層で、洪水等による堆積層と思われる。土師器、瓦器、須恵器、陶器の小・細片出土
- 第9c層 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト質粘土 第9a層よりはシルト質で、砂粒を多く含む。遺物は第9a層よりも多く、土師器、瓦器、須恵器、陶器、平瓦の小・細片、木製品、貨銭、動物遺体、ハスの実、桃の種、炭出土
- 第9d層 暗青灰色 (10BG4/1) 砂質シルト 土師器、瓦器、陶器、動物遺体出土
- 第9d'層 暗緑灰色 (5G4/1) シルト質粘土 e層-棒巻き柄片出土
- 第10上層 浅黄色 (7.5Y7/3) シルト質砂 灰色シルトのブロック・ラミナを含む
- 第10a層 暗緑灰色 (10G4/1) 砂
- 第10b層 黄褐色 (2.5Y5/4) 粗粒砂
- 第11a層 暗緑灰色 (10G4/1) シルト質粘土 土師器、瓦器、須恵器、陶器小・細片出土
- 第11b層 暗緑灰色 (5G4/1) 粘土質シルト 土師器小片出土
- 第11c層 暗緑灰色 (5G4/1) 砂質シルト
- 第11g層 暗緑灰色 (5G4/1) 粘土質シルト
- 第11j層 暗緑灰色 (5G3/1) シルト質粘土 瓦器出土
- 第11k層 暗緑灰色 (10GY3/1) シルト質粘土
- 第11l層 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘土質シルト 瓦器出土
- 第11m層 暗オリーブ灰色 (5G3/1) シルト質粘土
- 第14a層 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト質粘土 中粒砂を含む
- 第14b層 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト質粘土と粗・中粒砂の混層
- 第14c層 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト質粘土 粗・中粒砂を含む
- 第14d層 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 粘土質シルト 中・細粒砂を含む
- 第14層からは、土師器、瓦器の小片、漆器碗などの木製品、動物遺体、桃の種、ヒシの実、松ぼっくり、シイの実、軽石出土
- 第15a層 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト質粘土 粗・中粒砂のブロックを含む
- 第15b層 暗オリーブ灰色 (2.5GY9/1) シルト質砂 シルト質粘土・粗粒砂を含む
- 第15層からは、土師器、瓦器、柄などの木製品出土
- 第16a層 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘土質シルト
- 第16b層 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘土質シルト
- 第16c層 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト質粘土 粗・中粒砂が小ブロック状に含む
- 第16層からは、土師器皿、瓦器などの小片、木製品片、桃の種出土
- 第17a層 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト質粘土と細粒砂の互層
- 第17a'層 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 砂質シルト やや粘土質
- 第17b層 暗緑灰色 (10GY3/1) 粘土質シルト 細・中粒砂を含む
- 第17c層 黄褐色 (2.5Y5/6) 中・細粒砂 シルト質粘土を含む シルトと互層
- 第17e層 暗オリーブ灰色 (2.5GY9/1) シルト質粘土
- 第17層からは、土師器、瓦器、木製品片、桃の種出土
- 第18c層 浅黄色 (5Y7/4) 粗・中粒砂 桃の種、炭出土
- 第18層からは、土師器、瓦器、瓦質羽釜の小片、木製品片、動物遺体、植物遺体出土
- 第19a層 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 粘土質シルト 中・細粒砂ラミナ状に含む。瓦器碗、木製品片出土
- 第19b層 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 粘土質シルト
- 第19c層 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) シルト 細粒砂とシルトの互層
- 第19層からは、瓦器碗、土師器小・細片、斎串、銀などの木製品、動物遺体、桃の種などの植物遺体、炭出土
- 第20a層 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) シルト質粘土 粗・中粒砂の混層
- 第20b層 灰オリーブ色 (5Y6/2) 砂
- 第20層からは、土師器、瓦器の小・細片、木製品片、植物遺体出土
- 第21a層 黄褐色 (2.5Y5/4) 粗粒砂 シルト質粘土のブロック含む
- 第21b層 暗緑灰色 (10GY4/1) 粗・中粒砂 シルト質粘土のブロック含む
- 第21c層 浅黄色 (2.5Y7/4) 細・中粒砂 木製品小片出土
- 第21層からは、土師器、瓦器の小・細片、木製品片、桃の種、ヒシの実などの植物遺体、焼土出土
- 第22a層 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト質粘土 植物遺体含む
- 第22b層 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) シルト質粘土とシルトの互層
- 第22層からは、土師器小・細片、木製品片、クルミなどの植物遺体出土
- 第23a層 黄褐色 (2.5Y5/4) 中・粗粒砂 シルト質粘土のブロック多く含む
- 第23b1層 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 粘土質シルト
- 第23b2層 浅黄色 (2.5Y7/4) 粗・中粒砂 土師器、須恵器小・細片、植物遺体出土

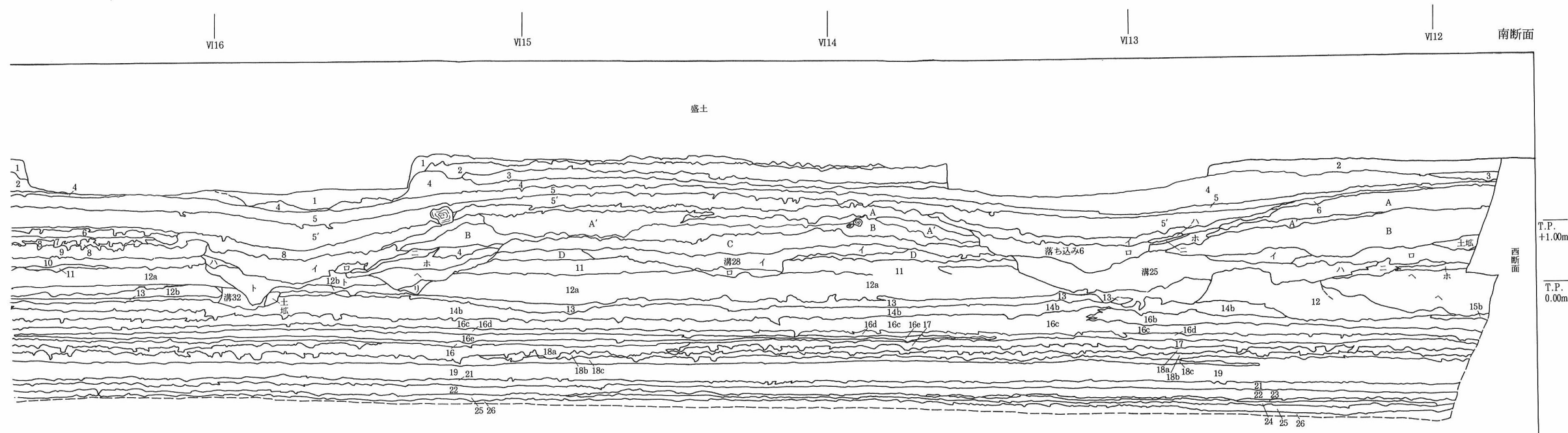
- 第23c層 ぶい黄色 (2.5Y6/4) 中・粗粒砂 杭出土
- 第23c層 ぶい黄色細粒砂 シルト質粘土の間層が2条ある
- 第23d層 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) シルト質粘土 砂を多く含む混層である。土師器小片、木製品片、植物遺体出土
- 第24層 浅黄色 (5Y7/4) 中・細粒砂 青灰色 (5BG5/1) シルト質砂の間層がある、木製品小片出土
- 第25a層 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト質粘土
- 第25b層 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト質粘土 植物遺体を含む、木製品小片出土
- 第26a層 ぶい黄色 (10YR7/4) 中・細粒砂 シルト質粘土のブロック混じる
- 第26b層 黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質土 多量の植物遺体 (木片など) の層
- 第26層からは、木製品小片出土
- 第28a層 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト質粘土
- 第28b層 黒褐色 (10YR2/3) 粘土 植物遺体多く含む 弥生時代後期
- 第28層からは、弥生土器小片、木製品小片、桃の種などの植物遺体出土
- 第29a層 ぶい黄色 (2.5Y6/3) 粗・中粒砂 下層に細粒砂および植物遺体層が見られる。弥生時代中期後半相当層 (IV様式の土器片含む)
- 第29b層 灰色 (7.5Y4/1) 砂質シルト 植物遺体を含む。壺・鉢などの弥生土器片、木製品小片、植物遺体、貝遺体、炭出土
- 第30a層 灰色 (5Y4/1) 粘土質シルト 植物遺体を含む
- 第30a層 灰色 (5Y3/1) 植物遺体層
- 第30b層 オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘土質シルト 植物遺体を含む
- 第30e層 灰色 (7.5Y4/1) 粘土質シルト 植物遺体を含み、細粒砂を多量に含む。第30f層 黒色 (2.5Y2/1) 粘土質シルト 植物遺体を含む。貝遺体、動物遺体出土
- 第30層は弥生時代中期相当層、各層より若干の弥生土器片、骨製・木製刺突具など出土、植物遺体含む
- 第31a層 黒色 (10YR2/1) 粘土質シルト 植物遺体を多く含む
- 第31b層 黒色 (10YR2/1) 粘土質シルト 植物遺体、炭化物、細粒砂を含む
- 第31c層 黒褐色 (10YR2/3) シルト質粘土 植物遺体を含む
- 第31層からは、弥生土器小片、木製品片、石礎出土。
- 第32a層 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土質シルト 植物遺体を含む。第32b層をまきあげている
- 第32b層 黒褐色 (7.5YR3/1) 粘土質シルト 植物遺体を多量に含む
- 第32層からは、弥生土器片、木製品片、植物遺体出土
- 第33a層 オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘土 植物遺体を多く含む
- 第33b層 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 粘土 若干シルト質 植物遺体を少し含む
- 第33層からは、弥生土器小片、杭などの木製品、松ぼっくり、桃の種などの植物遺体出土
- 第34a層 オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト質粘土 植物遺体を含む。弥生時代前期相当層
- 第34b層 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘土質シルト 細粒砂及び植物遺体を含む、弥生時代前期土器片検出
- 第34c層 オリーブ黒色 (5Y3/1) シルト質粘土 植物遺体を含み、第37層をまきあげている
- 第35層 緑灰色 (7.5GY5/1) シルト質粘土 粘質度高い、最終ベース層。灰黒色の粘土ブロック、植物遺体を多く含む
- 第35c層 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト質粘土 植物遺体、シルトの小ブロックを含む
- 第36層 暗オリーブ灰色 (2.5Y3/1) 粘土質シルト シルト質細粒砂の小ブロック含む、貝遺体出土
- 溝2 灰オリーブ (5Y5/2) 砂
- 溝4
- I 灰黄色 (2.5Y6/2) 砂質シルト
- II 暗オリーブ灰色砂 (5GY4/1) 砂
- III 灰オリーブ色 (7.5GY6/2) シルト質砂
- IV 灰オリーブ色 (7.5Y5/3) シルト質粘土
- 溝5 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) シルト質砂
- 土坑2
- VI 灰オリーブ色 (5Y6/2) シルト質砂
- VII 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 砂 ややシルト質、上半は黄褐色粗粒砂多い
- VIII 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト質砂
- 土坑8 暗緑灰色 (10G4/1) 砂 粗粒砂主体、青灰色粘土ブロック多く含む
- 土坑22 灰オリーブ (5Y5/3) シルト質砂
- 土坑24
- I 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 砂質シルト
- II 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト質粘土
- III 暗緑灰色 (10G4/1) 砂 青灰色シルトブロック多く含む
- IV 暗緑灰色 (10G4/1) 砂質シルト
- V 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘土質シルト 粗粒砂多く含む
- 溝A
- a 浅黄色 (7.5Y7/3) 粗・中粒砂とシルト シルト質粘土のブロック含む
- b 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粗粒砂 東肩部は粘土質シルト
- c 暗緑灰色 (5G3/1) 粘土質シルト シルト質粘土のブロック多い
- d ぶい黄色 (2.5Y6/3) 粗・中粒砂
- e ぶい黄色 (2.5Y6/4) 粗粒砂
- f 黄褐色 (2.5Y5/3) 中・粗粒砂
- g 黄緑色 (7.5GY4/1) 粘土質シルト
- h 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘土質シルト
- i 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) シルト質粘土
- j 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト質粘土
- 溝Aからは、土師器皿、瓦器、下駄などの木製品、動物遺体、桃の突出土

B-1地区の層序（第8図 図版7・8）

- 第1層 盛土
- 第2層 オリーブ褐色（2.5Y4/4）砂質シルト 旧耕土
- 第3層 灰オリーブ色（5Y5/2）砂質シルト 床土 黄褐色粘土ブロック含む
- 第3'層 灰オリーブ色（5Y5/2）砂質シルト 粗粒砂主体
- 第4層 灰白色（5Y8/1）粗・中粒砂 小礫混じる
- 第5層 暗緑灰色（7.5GY4/1）砂質シルト 極細粒砂、シルト、シルト質粘土、若干の植物遺体・炭含む
- 第5'層 暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粘土質シルト 植物遺体、炭含む
- 第6層 灰色（10Y4/1）シルト質粘土 暗茶褐色粘土ブロック、粗粒砂含む
- 第7層 黄褐色（2.5Y5/4）粗粒砂
- 第8層 暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粘土 若干シルト質、いわゆるハス田層
- 第9層 灰色（10Y4/1）シルト質粘土 砂礫多く、暗褐色粘土ブロック混じる、ハス田層か
- 第10層 暗緑灰色（10G4/1）シルト質粘土 上半部はシルト質強く、鉄分の沈着多い
- 第11層 灰オリーブ色（7.5Y5/3）砂質シルト 主体は細粒砂で暗青灰色粘土ブロック多く含む
- 第12a層 暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）砂質シルト 砂礫、暗灰色粘土、暗灰色粗粒砂混じり合って形成、盛土
- 第12b層 暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂質シルト 砂礫、暗灰色粘土、暗灰色砂混じり合って形成、盛土
- 第13層 暗オリーブ灰色（5GY4/1）シルト質粘土 植物遺体多く含む
- 第14a層 オリーブ色（5Y5/6）細粒砂・シルトの互層
- 第14b層 暗緑灰色（10GY4/1）細粒砂・シルトの互層、植物遺体のラミナ含む
- 第15a層 暗オリーブ灰色（5GY4/1）砂質シルト 細粒砂のラミナ多く、上半部には粗粒砂多く含む
- 第15b層 暗緑灰色（7.5GY4/1）シルト質粘土
- 第16a層 暗オリーブ灰色（5GY4/1）細粒砂・シルトの互層
- 第16b層 オリーブ黄色（7.5Y6/3）砂 粗粒砂主体、植物遺体のラミナ多く含む
- 第16c層 暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）シルト・細粒砂・シルト質粘土の互層、植物遺体のラミナ含む
- 第16d層 灰色（10Y4/1）粘土質シルト・細粒砂・シルトの互層、植物遺体のラミナ含む
- 第17層 オリーブ黄色（7.5Y6/3）砂 上半部に植物遺体のラミナあり、下半部は粗粒砂
- 第18a層 暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）シルト質粘土 植物遺体多く含む、上面で足跡検出
- 第18b層 暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）シルト質粘土 植物遺体多く、砂ブロック含む
- 第18c層 暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）粘土質シルト 植物遺体多く、細粒砂、シルト、暗灰色粘土をブロック状に含む
- 第18d層 暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）砂質シルト 粗粒砂、植物遺体のラミナあり、西側は砂が主体になる
- 第19層 灰オリーブ色（5Y6/2）砂 粗粒砂主体
- 第20層 オリーブ色（5Y5/6）シルト質粘土 植物遺体多く、細粒砂のラミナ含む
- 第21層 灰色（7.5Y4/1）シルト質粘土 植物遺体層 上面で足跡検出
- 第22層 暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘土 植物遺体多く含む
- 第23層 黒褐色（10YR2/3）粘土 黒色粘土・灰色粘土のブロック含む
- 第24層 暗オリーブ灰色（5GY3/1）粘土 黒色粘土ブロック多く含む
- 第25層 オリーブ黒色（5Y3/1）粘土 黒色・灰色粘土のブロック含む
- 第26層 緑灰色（7.5GY5/1）粘土 植物遺体含む

整地に伴う盛土

- A層 暗緑灰色（7.5GY4/1）シルト質粘土 砂礫多く混じり、黄褐色粘土ブロック含む
- A'層 暗緑灰色（5G4/1）粘土 上半は粗粒砂含みシルト質強い、全体に砂ブロック混じる
- A''層 暗緑灰色（10G4/1）砂質シルト 粗粒砂、暗青灰色粘土ブロック多く含む
- B層 暗緑灰色（10GY4/1）シルト質粘土 砂粒多く混じり、暗青灰色粘土ブロック多く含む
- B'層 灰オリーブ色（7.5Y5/2）砂質シルト 暗灰色粘土ブロック含む
- C層 暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘土 砂粒混じり、とくに下半には植物遺体、暗青灰色粘土ブロック多く含む
- D層 暗緑灰色（5G4/1）シルト質粘土 暗灰色粘土ブロック含み、上半は砂多い



落ち込み6

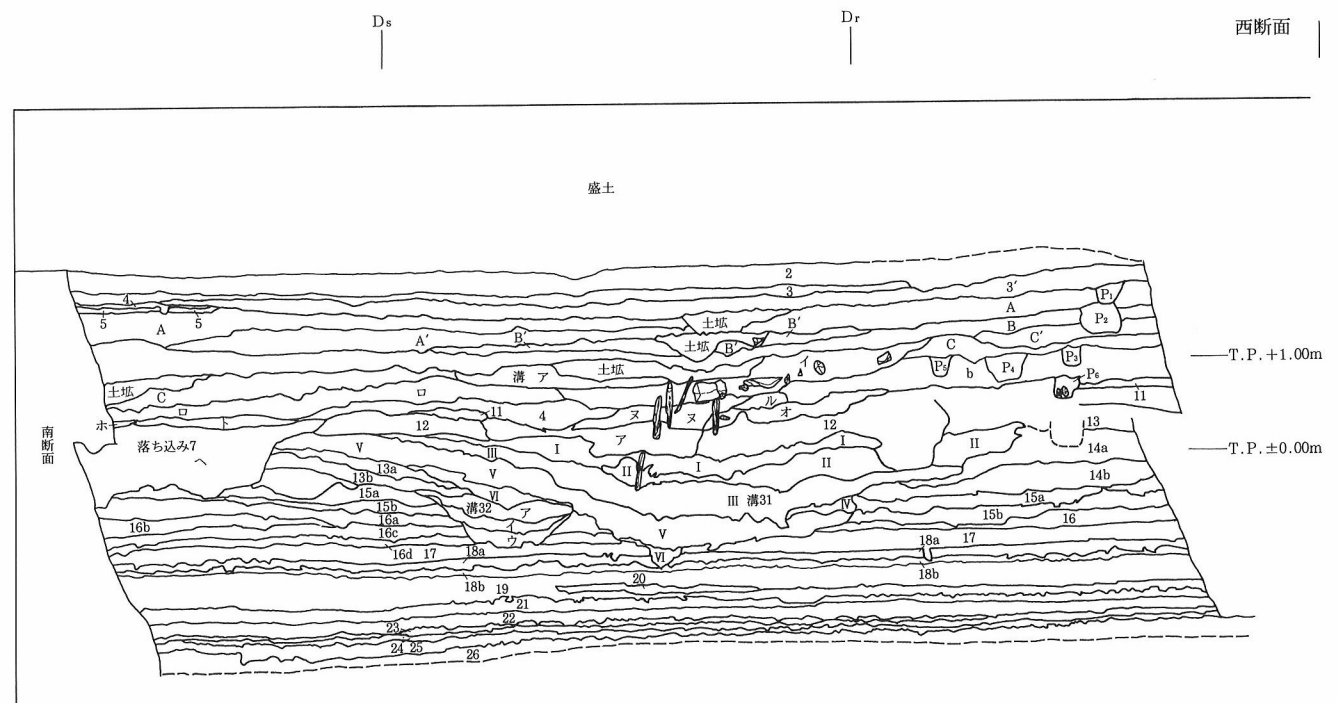
- イ層 暗褐色 (10YR3/3) シルト質粘土 若干砂礫混じり、上半は暗青灰色粘土ブロック多く含む、下半は植物遺体層形成
- ロ層 灰オリーブ色 (5Y4/2) 砂礫 青灰色粘土ブロック含む
- ハ層 灰色 (10Y4/1) シルト質粘土 若干砂礫混じり、茶褐色粘土と暗灰色粘土ブロック多く含む
- ニ層 灰色 (7.5Y4/1) シルト 砂粒、植物遺体を含む
- ホ層 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 粗粒砂 暗青灰色粘土ブロック多く含む
- 土坑A 暗緑灰色 (5Y4/1) 粘土質シルト 粗粒砂混じり、暗青灰色粘土ブロック多く含む

溝14

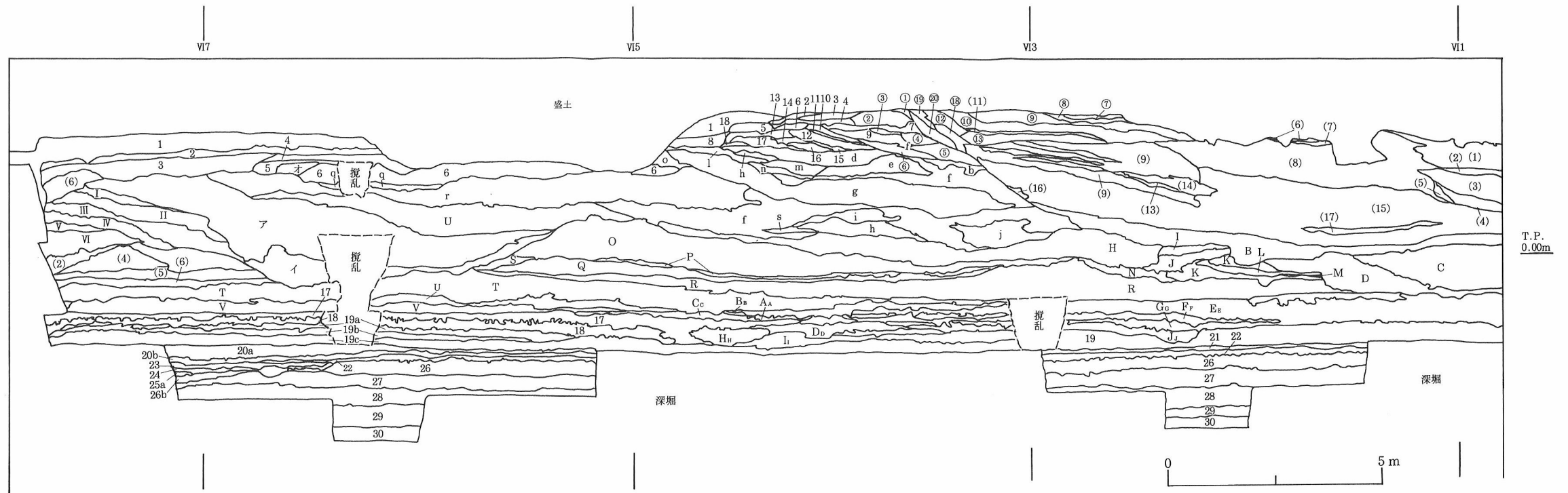
- イ層 オリーブ灰色 (10Y5/2) 粘土 下半に粗粒砂若干混じり、暗灰色粘土、多くの青灰色粘土のブロックと種子などの植物遺体含む
- ロ層 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 砂質シルト 粗粒砂多く混じり、暗灰色、灰色粘土ブロック含む
- ハ層 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト質粘土 粗粒砂混じり、灰色粘土ブロック、植物遺体含む
- ニ層 暗灰黄色 (2.5Y4/2) シルト質粘土 上半は粗粒砂多く混じり、青灰色粘土ブロック若干と植物遺体のラミナ多く含む
- ホ層 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト質粘土 植物遺体層、砂のラミナあり
- へ層 灰色 (10Y4/1) シルト質粘土 細粒砂混じり、青灰色粘土のブロック多く含む
- ト層 暗緑灰色 (10GY4/1) 砂質シルト 青灰色粘土、暗灰色粘土ブロック非常に多く含む
- チ層 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト質粘土 粗粒砂多く混じり、灰色粘土ブロック多く含む
- リ層 暗緑灰色 (10GY4/1) 砂質シルト 暗灰色粘土ブロック多く含む

落ち込み7

- イ層 灰オリーブ色 (5Y4/2) シルト質粘土 砂礫混じり、暗青灰色粘土ブロック多く含む
- ロ層 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト質粘土 下半に砂含む
- ハ層 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト質粘土 粘質強く、上半に砂礫、植物遺体多く含む
- ニ層 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 砂質シルト 暗青灰色粘土ブロック多く含む
- ホ層 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト質粘土 粗粒砂がブロック状に混じる
- へ層 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト質粘土 シルト質強く、暗灰色粘土ブロック、植物遺体多く含む
- 溝25 灰色 (7.5Y4/1) シルト質粘土 下半粘性強く、砂礫混じり。灰色粘土ブロック若干と植物遺体・炭多く含む
- 溝28 灰色 (7.5Y4/1) 粘土 上半に砂粒若干混じり、植物遺体多く含む
- ロ層 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト質粘土 粗粒砂混じり、下半に青灰色粘土ブロック集中
- 土坑B 灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト質砂 粗粒砂混じり、暗灰色粘土ブロック多く含む
- 溝32 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 砂 砂礫混じり、暗灰色粘土多く含む



第8図 B-1地区南断面図(部分)、西断面図



河川8

- I 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 粘土 細粒砂帯状に含む
- J 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 粘土質シルト シルト・細粒砂・粘土の互層、粘土内に植物遺体若干含む
- K 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 砂質シルト 暗灰色粘土のブロック含む
- L 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト質粘土 上半に砂、下半に細粒砂混じる
- M 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 砂質シルト
- N 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 細粒砂・シルトの互層 暗灰色粘土のブロック若干含む
- O 灰色 (10Y4/1) シルト質粘土 上半は粘土質シルトで植物遺体多く含む 下半は粘性強い
- v 暗緑灰色 (5G4/1) 砂質シルト 細粒砂のラミナ多くあり (上端部)
- P 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 砂質シルト シルト質粘土のラミナあり
- S 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘土 細粒砂少し混じる
- Q 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト質粘土 細粒砂のラミナあり
- R オリーブ灰色 (10Y6/2) 粗粒砂 粘土ブロック若干含む
- (2) 灰色 (5Y4/1) 粘土 若干シルト質 植物遺体下半を中心に多く含む
- (4) オリーブ黄色 (7.5Y6/3) 粘土質シルト 上半はシルト質強い、下半は粗粒砂から細粒砂多い、最上部東側に植物遺体のラミナあり、全体的に暗灰色粘土ブロック若干含む
- (5) 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 砂質シルト 下半は若干粘性あり、植物遺体含む
- (6) 灰白色 (7.5Y7/2) 砂礫 若干の暗灰色粘土ブロック含む (2)～(6)は河川8の東側盛土・整地土

河川9

- T オリーブ黒色 (7.5GY3/2) シルト質粘土 細粒砂のラミナあり、植物遺体含む
- U 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト質粘土 中粒砂・小礫多く混じる
- V 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 砂礫 上半に暗灰色粘土
- Bb 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト 細粒砂混じる
- Aa 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 粘質土 粗粒砂および小礫多く混じる
- Cc 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粗粒砂 灰色シルトおよび小礫多く混じる
- Er 緑灰色 (5G5/1) 粘土質シルト 小礫多く混じる
- W 灰色 (10Y4/1) シルト質粘土 小礫および細粒砂を若干混じる
- X 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト質粘土 小礫および細粒砂を多く混じる
- Y 灰色 (10Y4/1) 粘土 小礫および細粒砂多く混じる
- Z 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 粘土 細粒砂多く混じる
- Ff オリーブ黄色 (5Y6/3) 粗粒砂 緑灰色シルト質粘土ブロック少し含む
- Gg オリーブ灰色 (10GY4/1) 粘土 植物遺体含む 細粒砂を帯状に若干含む
- Jj 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 細粒砂 灰色シルトを上部および下部に帯状に含み、中部に帯状に植物遺体含む
- Dd オリーブ灰色 (5GY5/1) 細粒砂 暗灰色シルトを帯状に多く含む
- Hh 灰色 (10Y4/1) 粘土 植物遺体含む 細粒砂を帯状に若干含む
- Ii 灰オリーブ色 (7.5Y5/3) 細粒砂 上部に植物遺体多く含み、下部に灰色シルトを含む
- 20a 黒褐色 (5YR3/1) 粘土 植物遺体多く含む
- 20b 黒褐色 (10YR2/2) 粘土 植物遺体少し含む
- 22 黒色 (10Y2/1) 粘土 植物遺体多く含み、灰色粘土を少し含む
- 23 黒色 (10YR2/1) 粘土植物遺体少し含む
- 24 黒褐色 (10YR3/2) 粘土 植物遺体少し含む
- 25a 黒褐色 (5Y3/1) 粘土 植物遺体多く含む
- 25b オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘土 植物遺体多く含み、下部に灰色粘土ブロック多く含む
- 26 灰色 (5Y4/1) 粘土 下半は若干シルト質、上半は上層の黒色粘土浸み込み多く、下半中心に植物遺体多く含む
- 27 灰色 (7.5Y4/1) シルト質粘土 植物遺体多く含み、白色細粒砂のラミナ多く混じる
- 28 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 粘質シルト 植物遺体、木片若干含み、細粒砂がブロック状に少し混じる
- 29 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 砂質シルト 茶褐色粘質シルトがブロック状に混じり、植物遺体若干含む
- 30 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト質粘土 植物遺体多く含み、細粒砂のラミナが多く混じり、貝遺体多く出土

第9図 B-2地区南断面図

B-2地区の層序（第9図 図版9）

1 盛土

2 旧耕土

3 灰オリーブ色 (5Y5/3) 砂質シルト

4 灰オリーブ色 (5Y5/2) 砂質シルト 若干遺物出土

5 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) シルト質砂 暗灰色粘土ブロック・炭混じる

オ 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質シルト 黄褐色粘土のブロック含む 土坑埋土

河川1

(1) オリーブ灰色 (2.5Y4/6) 粘土質シルト 粘土、シルト、粗・細粒砂の互層

(2) 灰色 (10Y4/1) 粘土

(3) 緑灰色 (10GY5/1) シルト質粘土

(4) 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 粘土 若干シルト質

(5) オリーブ灰色 (10Y4/2) シルト質砂 粘土ブロック含む

(6) 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘土質シルト

(7) 黄褐色 (10YR5/8) 細粒砂

(8) オリーブ褐色 (2.5Y4/6) シルト質粘土 粘土、シルト、細粒砂の互層

(9) オリーブ褐色 (2.5GY4/6) シルト質粘土 粘土、シルト、細粒砂の互層、下半は粘土主体

(10) 黄褐色 (2.5Y5/6) 砂質シルト 細粒砂、シルトの互層

(11) にぶい黄色 (2.5Y6/4) 細粒砂

(12) にぶい黄色 (2.5Y6/4) 細粒砂

(13) 明褐色 (7.5YR5/6) 粗粒砂

(14) オリーブ黒色 (10Y3/2) シルト質粘土 シルトのラミナあり

河川2

(15) オリーブ褐色 (2.5Y4/6) 砂 中・粗粒砂 下半は淡黄色 (5Y7/4) 粗粒砂～細礫主体

(16) 暗オリーブ色 (7.5Y4/3) 砂質シルト 植物遺体多く含む

(17) オリーブ灰色 (10Y4/2) 粘土質シルト

B オリーブ灰色 (5GY5/1) シルト質粘土 上半はシルトと粘土の互層 下半は粘性強い 中位に植物遺体含む

C 淡黄色 (7.5Y7/3) 砂 上半から下半にかけて細粒砂から粗粒砂に変化

D 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト質粘土 下半は砂質シルト 上半から中位に植物遺体のラミナ多い

河川4

b 暗緑灰色 (10GY4/1) 砂質シルト 暗青灰色粘土多く含む

d にぶい黄褐色 (10YR5/3) 砂質シルト 黄褐色粘土ブロック多く含む

k 黄褐色 (10YR5/6) 砂質シルト 中粒砂多く混じる

l にぶい黄色 (10YR5/4) 粘土質シルト 砂礫混じる

m 黄褐色 (2.5Y5/3) 砂質シルト 細粒砂、粗粒砂、シルトの互層

n 灰オリーブ色 (5Y5/3) 粘土質シルト

河川5

e オリーブ灰色 (10Y5/2) 砂質シルト 粗粒砂、細粒砂、粘土質シルトの互層

f 暗緑灰色 (10G4/1) シルト質粘土 砂礫多く含む

g 暗オリーブ色 (5Y4/3) 砂 下半は粗粒砂、上半は砂礫主体

o 灰オリーブ色 (5Y5/2) シルト質粘土 シルト質強い

p 灰オリーブ色 (5Y6/2) 砂質シルト 粗粒砂混じる

6 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 砂質シルト 粗粒砂混じる、o・p・6は河川5東層盛土・整地土

河川6

q 灰オリーブ色 (7.5Y5/2) 砂質シルト 粗粒砂混じる

r 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 砂質シルト 中半に砂礫多く混じり、下半は細粒砂主体

f 暗緑灰色 (10G4/1) シルト質粘土 砂礫多く混じる

i 灰オリーブ色 (7.5Y5/3) 粗粒砂 暗灰色砂ブロック含む

h 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト

j オリーブ色 (5Y5/6) 砂礫

s 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト質粘土

(3) オリーブ黄色 (5Y6/3)・暗緑灰色 (7.5GY4/1) 砂 上半は細粒砂、下半は中粒砂、中位に粘土質シルトのラミナあり

H 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) 砂質シルト シルト質粘土のラミナあり

u にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粗粒砂 下半に青灰色シルトのラミナあり

河川7

A 黄褐色 (10YR5/6)・灰白色 (10Y7/2) 粗粒砂 中位あたりに細粒砂、植物遺体のラミナあり

I 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 砂

I 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト 粗粒砂、暗灰色粘土ブロック含む

II 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト質粘土 砂礫若干混じり、木片多く含む

III 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト質粘土 砂礫非常に多く混じり、木片多く含む

IV 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 粘土質シルト 木片含み、下半は細粒砂混じる

V 暗緑灰色 (10GY4/1) 粘土質シルト 細粒砂のラミナあり、木片多く含む

VI 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 砂質シルト 細粒砂、小礫混じり、木片含む

(1) 暗緑灰色 (10GY4/1) シルト質粘土 粗粒砂ブロック状に多く含む。I～VIは河川7東層の盛土・整地土

3. 遺構と遺物

a. 弥生時代

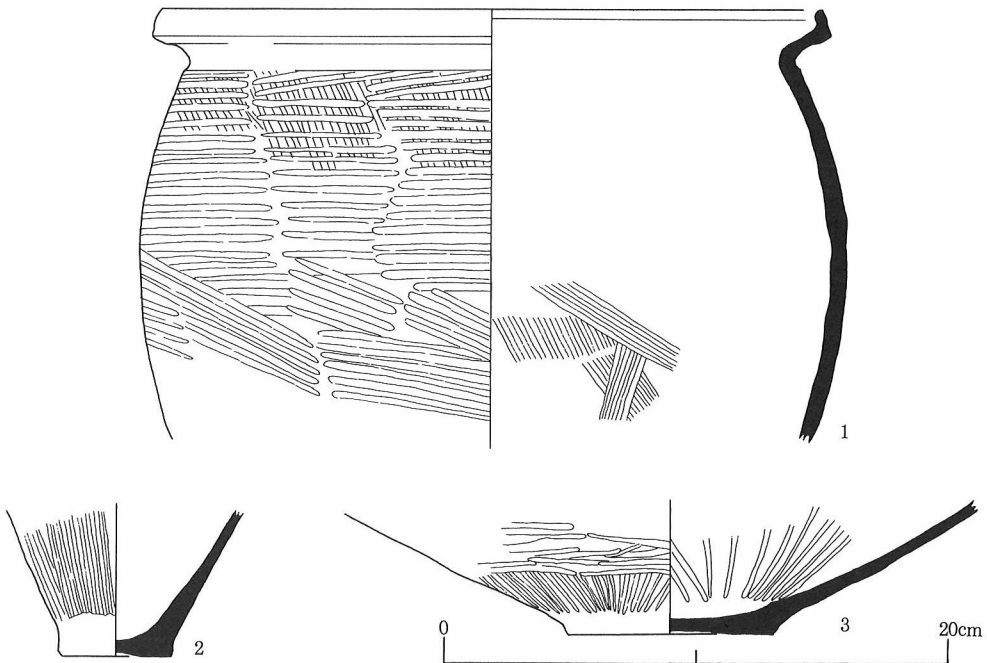
この時代の遺構はとくにA地区で検出しており、第2次調査No.5 トレンチ（以下、第2次No.5 と記す）の報告—文献②—をも参考にして記述していく。

落ち込み（第11図① 図版10）

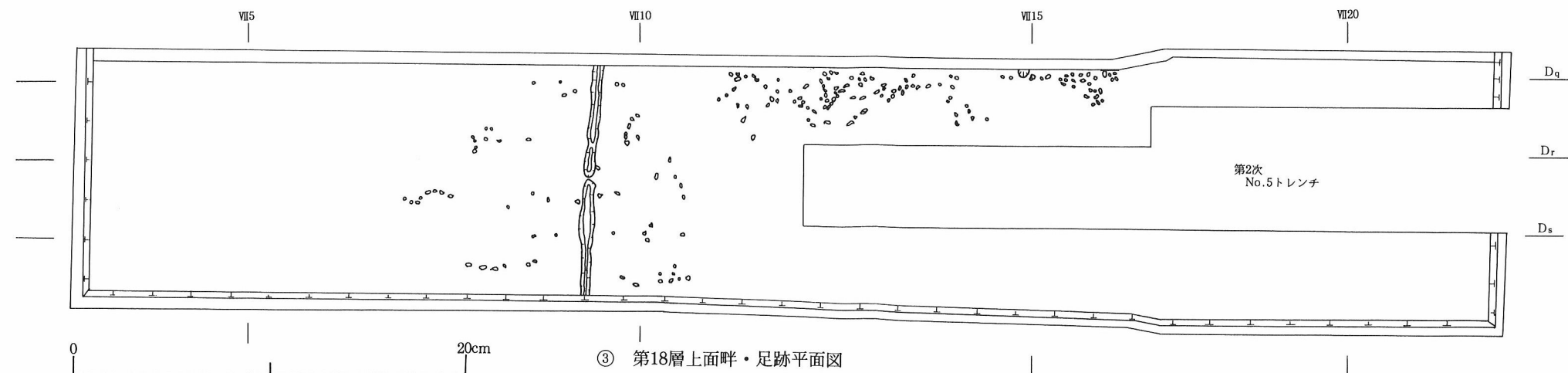
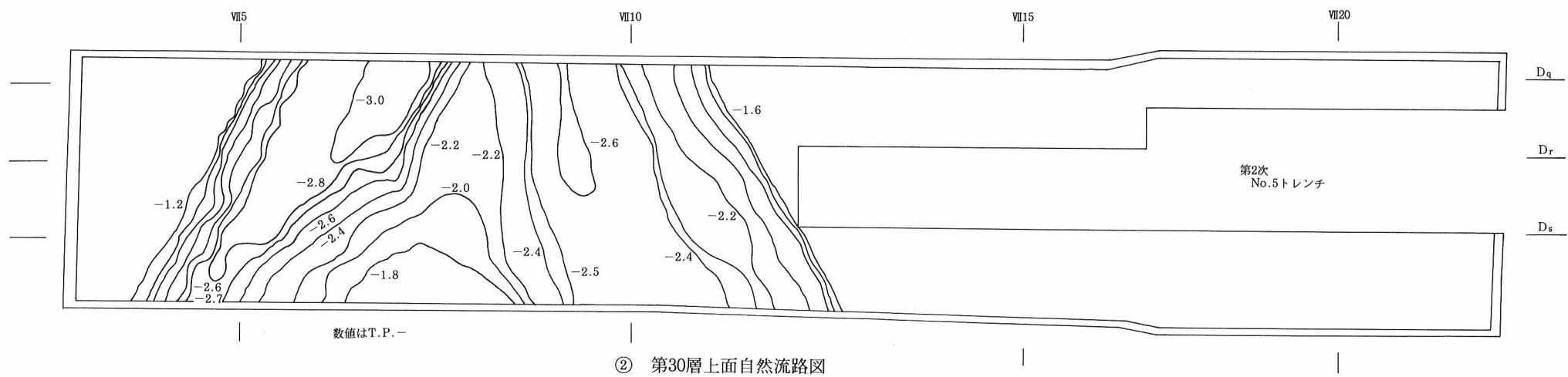
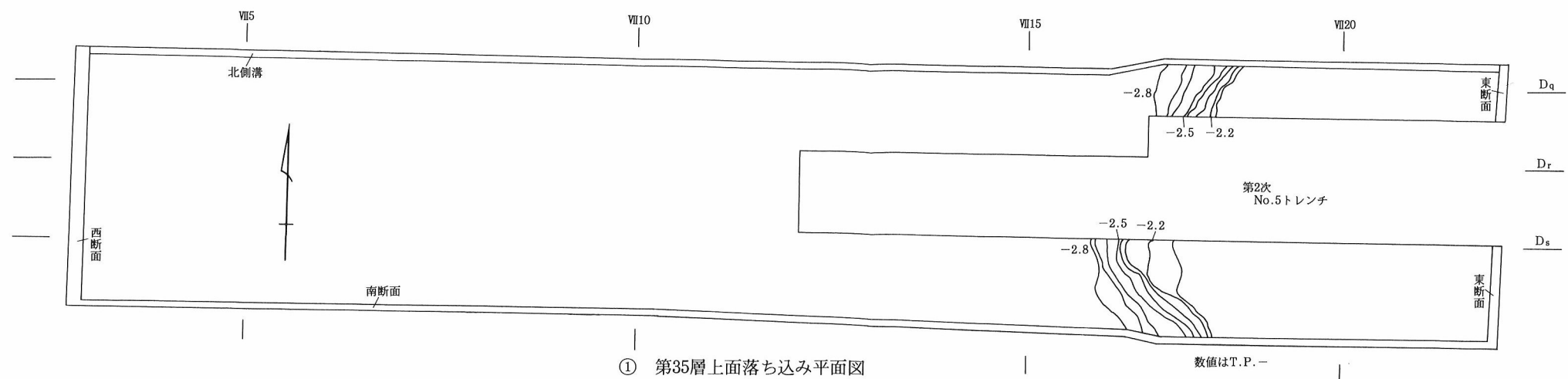
A地区東側の最下層（第36層）で落ち込みの東肩を検出した。この東肩は第2次No.5でも検出されているもので、2段に落ちていた。調査地西側では西肩は確認できず、B地区で検出されていないことから、東西幅は80mを越えるものか、後述する弥生時代中期の自然流路によって消失したのかは不明である。深さは1.2~1.5mを測る。落ち込みはこれまでの調査においても確認されており（水走遺跡 第3次、第8・9次—文献④、⑤—）、河内潟の時期、その底面に自然に形成された凹みまたは溝状のものと考えられる。この落ち込み内は第34a~c層の3層に分かれ、第2次No.5の第A層に相当する。骨製刺突具（8 第12図 図版57）以外、遺物はほとんど出土しなかった。縄文時代晩期~弥生時代前期。

自然流路1

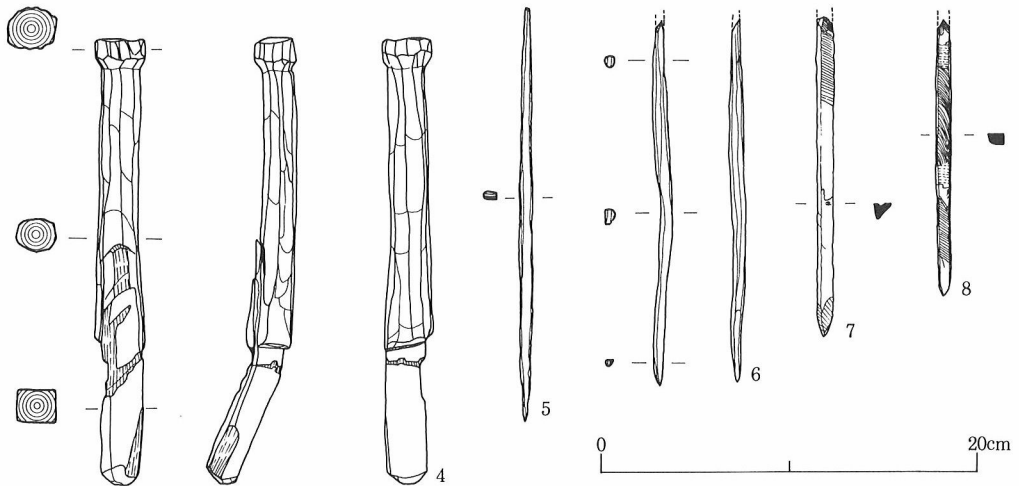
A地区中央東よりの第31層において自然流路の東肩を検出した。第31~33層は前期後半から中期前半の堆積層と考えられ、第31層からは石鏃（有茎柳葉形式）が出土した。西肩は自然流路2のよって切断されており不明であるが、東西幅は50mを越えると思われる。最深は1.7mを測る。流路内は12層（第30a~k層）に分かれ、h層は粗~細粒砂、j層は粘土であるが、他は砂混じりの粘土質シルトであり、とくに中・上層は淀んだ状態で堆積したものと思われる



第10図 A地区第22・29層出土弥生土器実測図



第11図 A地区第35層上面落ち込み、第30層上面自然流路、第18層上面遺構平面図



第12図 A地区第29～37層出土遺物木製品・骨製品実測図

(第2次No.5の第5-1層に相当)。流路はほぼ南南東から北北西方向に流れていた。流路内からは弥生土器・壺(3 第10図)とともに、木製刺突具—モミ属の一種—(5・6)、骨製刺突具(7)—第12図 図版57—、石鏃(凹基三角形式)が出土した。弥生時代中期中～後半。

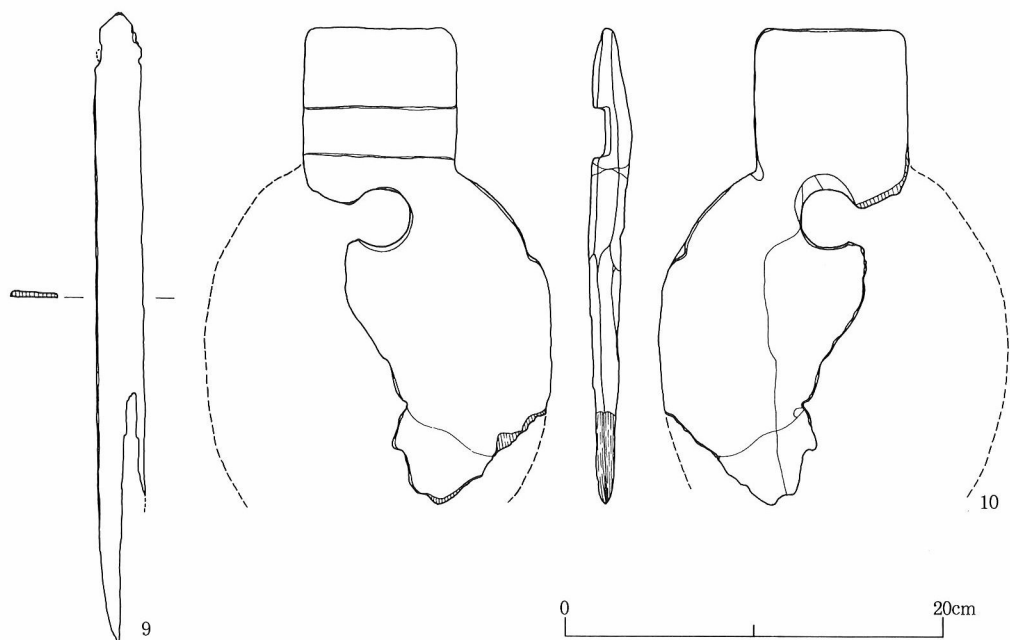
自然流路2(第11図② 図版10)

ほぼ自然流路1の流路に沿って再度形成されたもので、東肩は自然流路1の第30a層上面、西肩は第31層上面で検出した。調査地南部分では流路のほぼ中央に自然流路1の堆積層が三角形の中州状に残存し、流路は調査地南側では二股に分かれ、中央付近で合流していた。調査地内では西流は南南西から北北東方向へ、東流は南南東から北北西方向へ走っていた。南壁側東西幅49m、北壁側東西幅30m、最深1.8mで、南側中州上面の東西幅9m・南北幅3m・高さ東流側1.0m、西流側1.5m、東流路幅17.5m、西流路幅12.5mを測る。流路内は下半が灰色砂質シルト(第29b層)、上半がにぶい黄色粗～中粒砂(第29a層)であり、短期間に流れ込み堆積したと考えられる。流路内から検出した遺物はそれほど多くなく、第29b層から弥生土器(2 第10図)、用途不明木製品—カヤー(4 第12図 図版57)、石鏃(有茎柳葉形式)などが出土した。弥生時代中期末。

第28a・b層は弥生時代後期の堆積層である。遺物は弥生土器・甕(1 第10図)、石鏃(有茎三角形式)、骨製刺突具・木製刺突具の破片などが出土した。また、B地区第22層からも石鏃(凹基三角形式)などが出土した。

b. 奈良時代～平安時代前半

これまで水走遺跡において、古墳時代の遺物は若干出土してはいるが、明確な遺構は検出されておらず、その層をもほとんど見られない。また、奈良時代の遺物も西部でミニチュアのかまどセット・刀子(第2次No.2 トレンチー文献②—)、土器片が出土しているだけで、あまり検出されていないが、相当層はほぼ遺跡全体に広がっている。しかし、層は薄く、遺構も東部で掘り返しによる落ち込みが見られるぐらいである(第3次、第8・9次—文献④⑤—)。今



第13図 A地区第21・22層出土木製品実測図

回の調査地でも奈良時代の層（第27層、B地区第20層）は確認したが、遺構・遺物ともなく、古墳時代の資料もほとんど検出していない。

第25層上面遺構（図版11）－第7遺構面－

A－3・4地区においては、第25層上面で多数の人の足跡群を検出した。とくにA－3地区東部には多く、4地区では北東から南西方向への歩行状態のものが確認できた。

また、B－1・2地区では第18層上面において多数の足跡を確認した。足跡群は人とともに水鳥のものも含まれていた－第13・14図－。第2次調査No.4トレンチ第13層上面足跡。10世紀前半ごろ。

A－第22層からは、黒色土器・椀（11 第17図）と丸鋏などが出土。

丸鋏（10 第13図 図版57） 約1/3残存。装着部は平面上角丸の方形、身部は平面やや縦長の円形を呈する。内面は平坦で装着下部に装着用の溝を有し、外面は装着下部付近を最高とする隆起状を呈する。身部上部中央に外上から内下への円孔を穿っている。

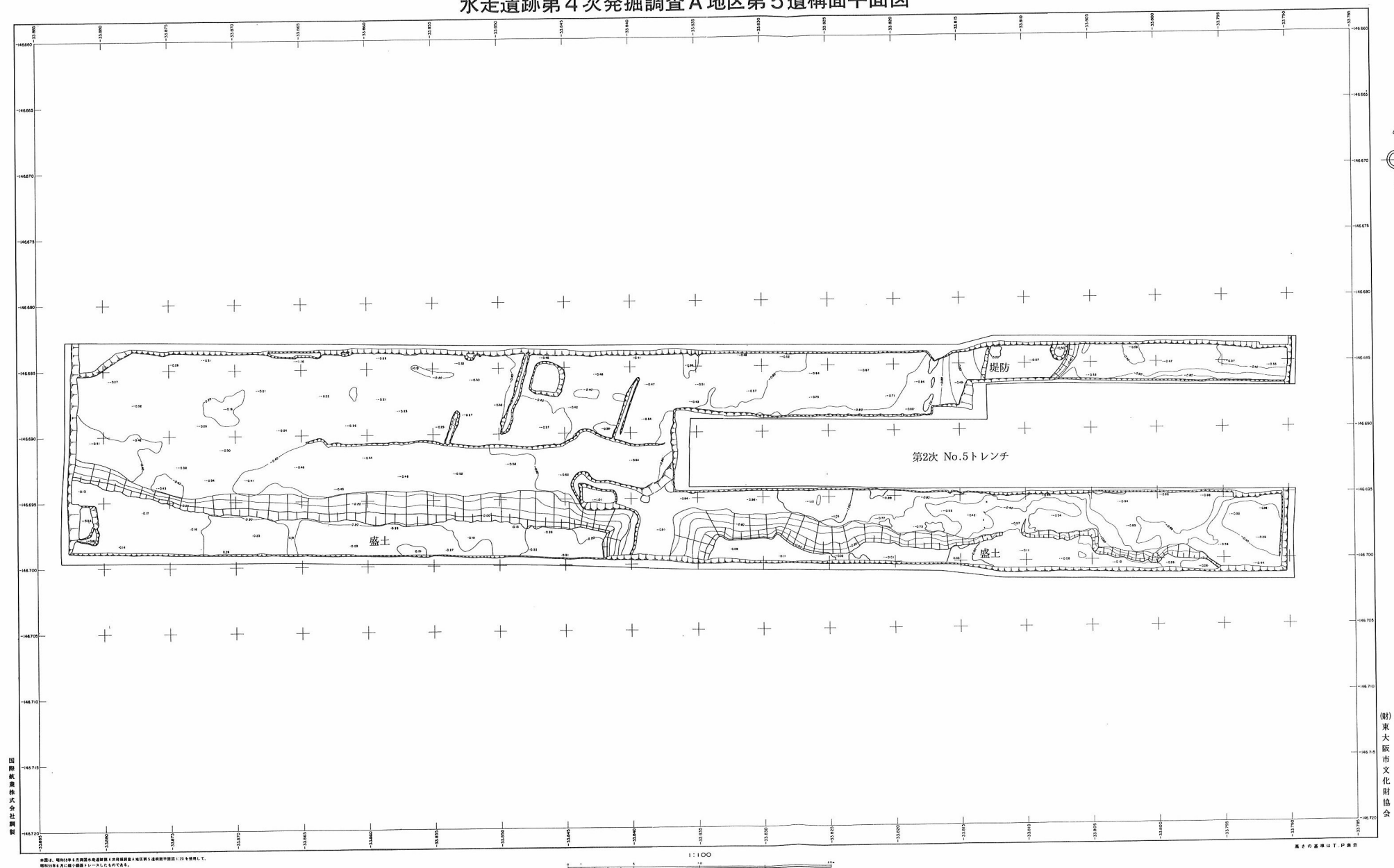
A－第21層からは、黒色土器・椀（12）、土師器・大皿（15）－第17図－と斎串が出土。

斎串（9 第13図 図版57） 片頭部および下部欠損。頭頂部三角形を呈する。上部両側に各2ヶ所のくびれ部がある。下部先端方向にむけて細くなり、先端は尖っていたと思われる。両平面および両側面は木目方向にやや丁寧に調整。両くびれ部はともに上方下方よりカット。上部および下部は両側とも斜め方向に削り先端を尖らせている。スギ。

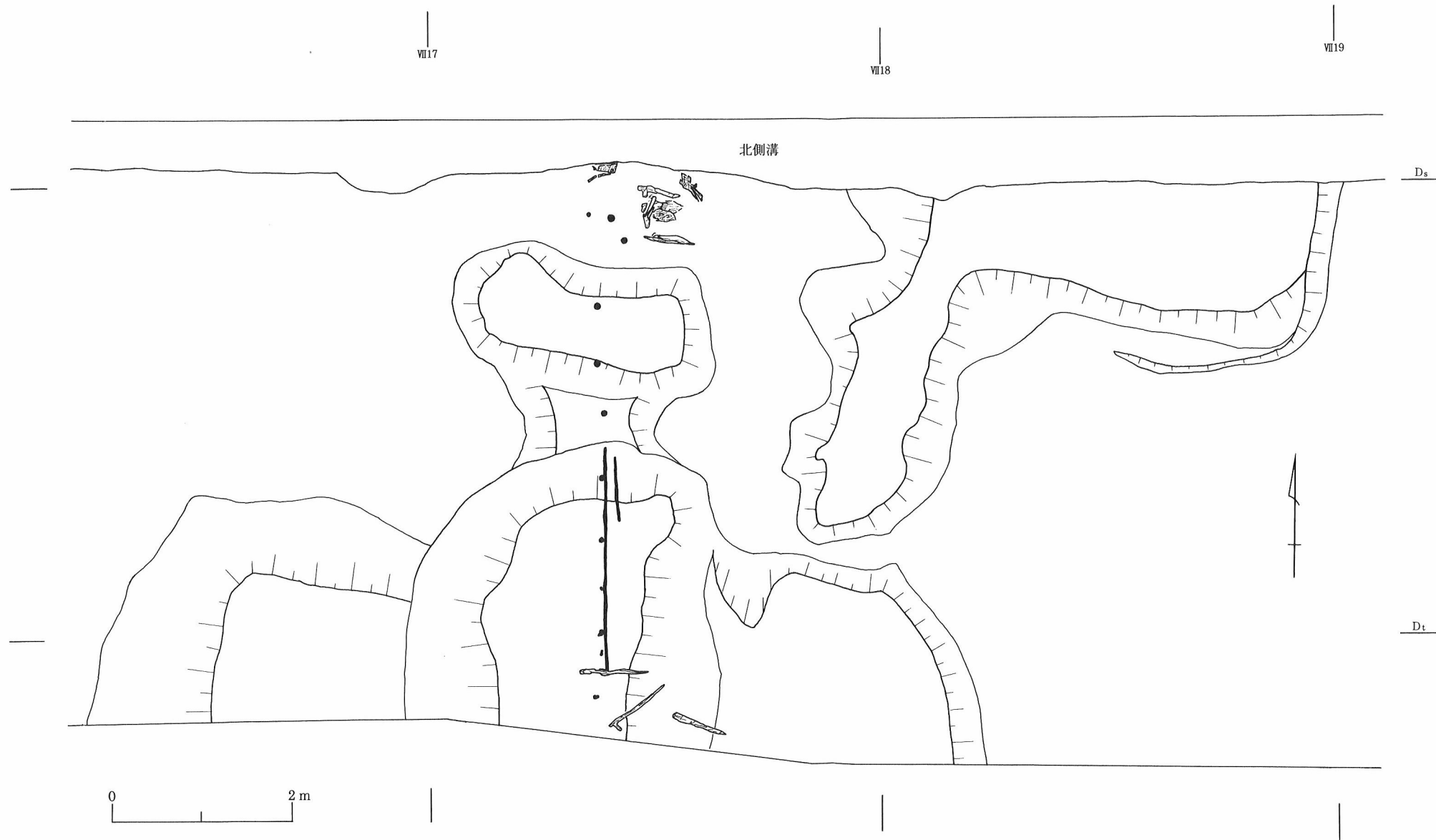
A－第21層上面遺構－第6遺構面－（第11図③ 図版11・12）

1地区において人および鳥などの足跡、3地区において畔と人の足跡を検出した。足跡の数

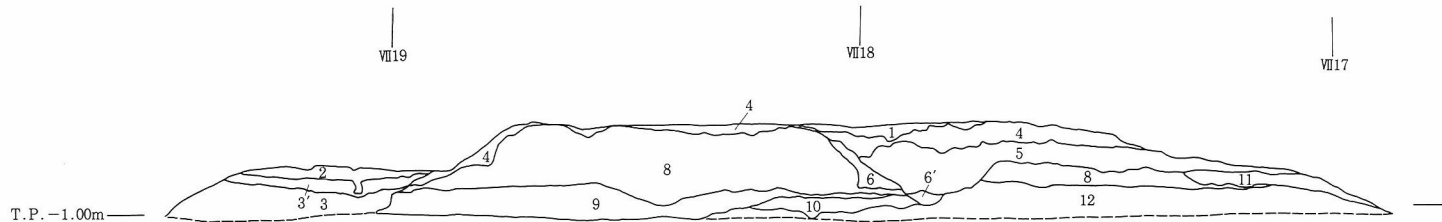
水走遺跡第4次発掘調査A地区第5遺構面平面図



第14図 A地区第5遺構面平面図

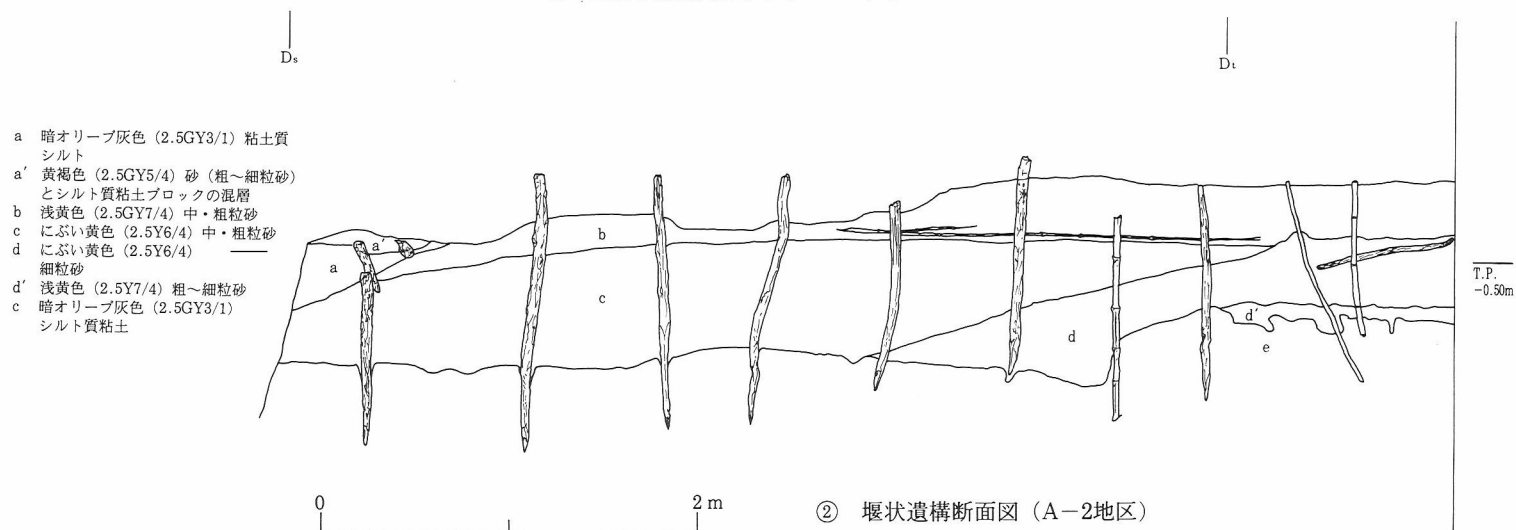


第15图 A地区堤防·堰状遗构平面图



- 1 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 中・粗粒砂 シルト質粘土ブロックを含む 盛土 (第14層に相当)
- 2 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) シルト質粘土・細粒砂の互層 黄褐色細粒砂のブロックを含む
- 3 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) シルト質粘土
- 3' 灰白色 (5Y7/2) 中粒砂 シルト、シルト質粘土の間層あり
- 4 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) シルト シルト質粘土、黄褐色細粒砂ブロック含む 埋土
- 5 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 細粒砂 シルト質粘土のブロック、植物遺体を含む 埋土
- 6 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 細粒砂 シルト、シルト質粘土のブロックを含む 埋土
- 6' 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) 細粒砂 シルト質粘土、黄褐色細・中粒砂ブロック含む 埋土
- 7 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) シルト質粘土 細粒砂、シルトを含む 埋土
- 8 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) シルト質粘土と細粒砂の互層 下層には植物遺体層を間を含む
- 9 灰オリーブ色 (5Y5/2) 粗・中粒砂
- 10 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 細粒砂 シルト質粘土、植物遺体層を間を含む
- 11 暗オリーブ灰色 (5GY3/1) シルト質粘土と細粒砂の互層 植物遺体を少し含む
- 12 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) シルト質粘土と細粒砂の互層 植物遺体の間層あり、下層には粗粒砂を多く含む

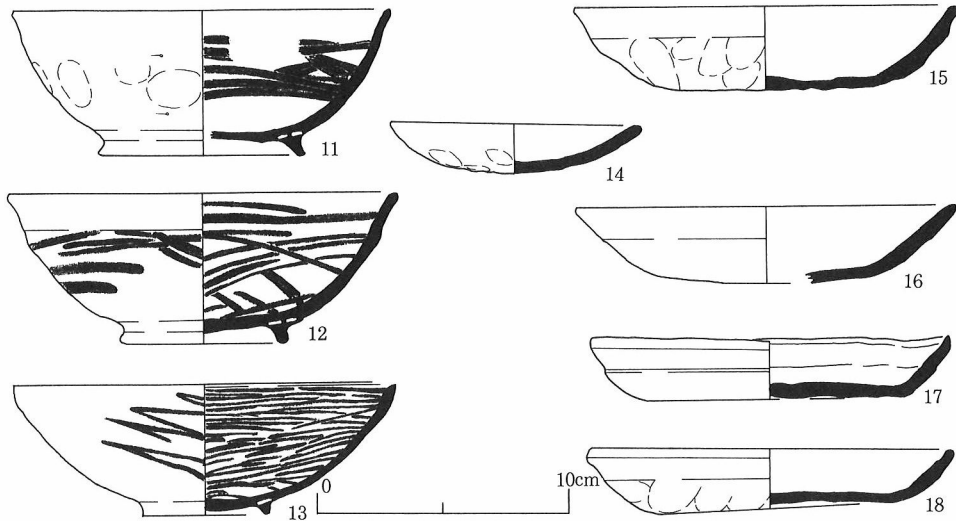
① 堤防状遺構断面図 (A-1地区)



- a 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) 粘土質シルト
- a' 黄褐色 (2.5GY5/4) 砂 (粗～細粒砂) とシルト質粘土ブロックの混層
- b 浅黄色 (2.5GY7/4) 中・粗粒砂
- c にぶい黄色 (2.5Y6/4) 中・粗粒砂
- d にぶい黄色 (2.5Y6/4) 細粒砂
- d' 浅黄色 (2.5Y7/4) 粗～細粒砂
- e 暗オリーブ灰色 (2.5GY3/1) シルト質粘土

② 壕状遺構断面図 (A-2地区)

第16図 A地区堤防状および壕状遺構断面図



第17図 A地区第16～20層出土土器実測図

はそれほど多くないが、3地区で検出した南北に延びる畔は上辺0.3m、高さ0.1mを測る。この畔は、条里制に基づく「水走里」の南北方向の坪境の一部と考えられる。

B-1・2地区第18層上面遺構（図版13・14）

両地区のほぼ全面にわたり、人および鳥・有蹄動物などの足跡を多数検出した。

これらの足跡群・畔などは、10世紀後半ごろ。

c. 平安時代後半

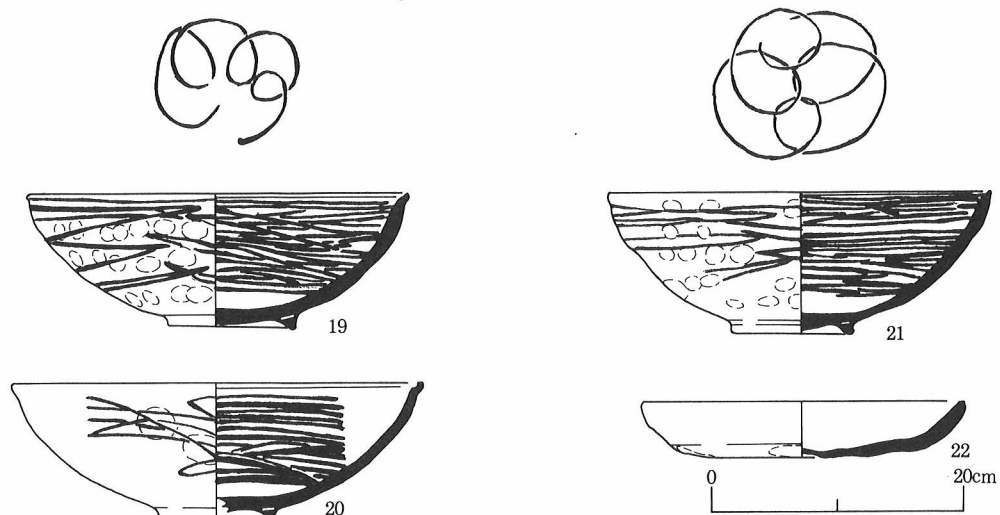
この期間は水走遺跡において大がかりな開発が行なわれ始めた時期であり、dで記述するB地区周辺を中心とした集落形成の先駆けをなす諸事業が実施された。洪水などにより条里に伴う水田が埋没した不毛時期を経て、自然流路内に堰を設け、その箇所にて堤防を構築して流路の流れを安定させ、とくにその西側を中心に盛土・整地をおこない、集落形成部分を確保してその周辺を開発するためのものであった。

第5遺構面（第14図）

第5遺構は堰状遺構、堤防状遺構、第17層上面遺構、第14層上面遺構の4期に分けられ、以下、各遺構および出土遺物について記していく。

堰状遺構（第15・16図 図版17～19） 堆積状態は、南断面図（1）—第6図—参照。

A-2地区で検出。ほぼ南北方向に、長さ1.5～1mの木または竹の杭をほぼ0.45～0.8m間隔に10本（木7本、竹3本）立ち並び、その上部に木・竹を横方向にわたしており、周辺は砂層で覆われていた。この状態を層の堆積状況から見てみると、流路内において河床部は西（第21層上面）と東（第24層上面）で約0.4mの高低差があり、その段東部（低い方）に、南東方向からの水流に対して「第23c層堆積中」やや斜行する形—ほぼ南北方向—で各杭を第24層まで打ち込んで堰を築造し、水流をゆるめて砂「粗～中粒砂—第23b層、中～細粒砂—第23c層」を堆積（隆起）させ、水流をその東側に移行させた。そして、その堆積砂「第23各層」の東側



第18図 A地区第11～13層出土土器実測図

で水流が淀んだ所にはシルト質粘土やシルト〔第19a～c層〕が堆積していった。

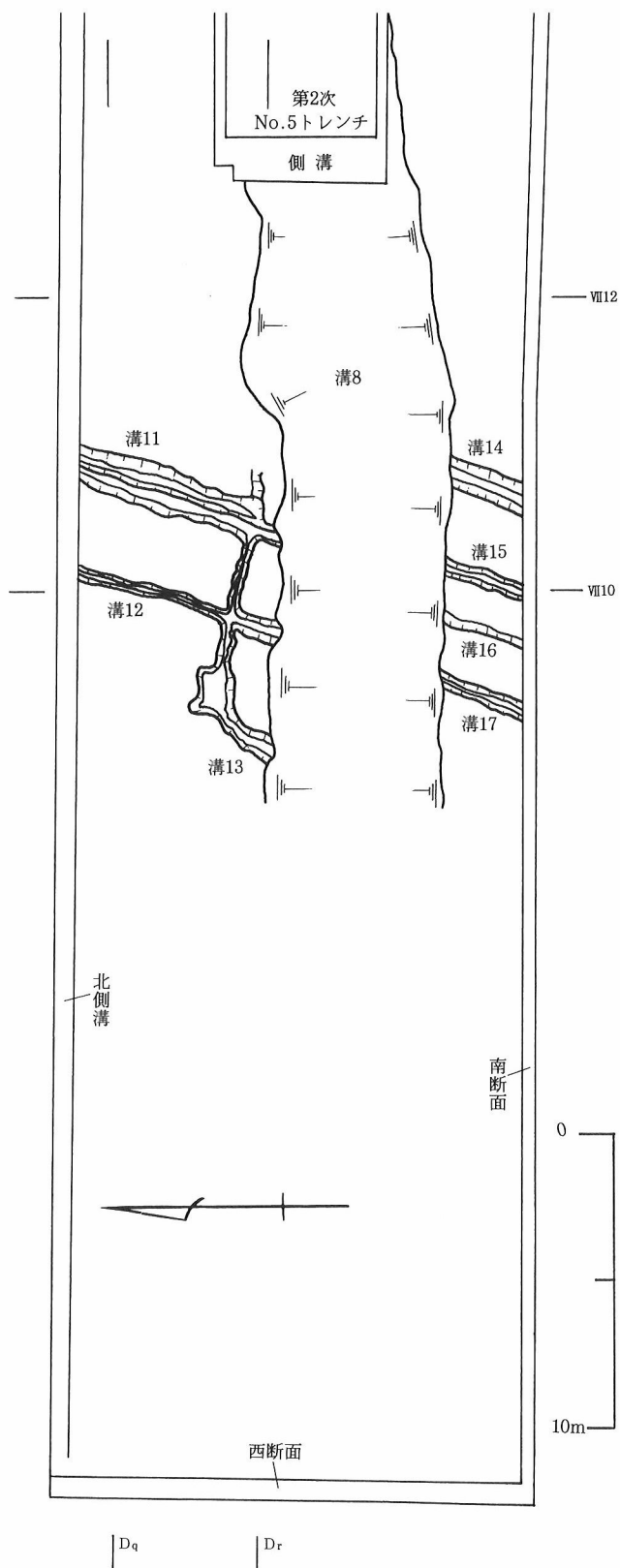
それに対し、A-2地区北端の堆積砂〔第23層〕東側の一部には葦の束が置かれていた。この状況は第2次No.5においても堆積砂東側のほぼ全面にわたり見られた状態である。これはとくに水流の速い場所にあたり、堆積砂を補強するために敷設されたものである。第2次No.5では堰西部の砂層内からも杭・葦束・葦が検出されているが、これらは一度、堆積砂層補強に失敗して決壊した残骸であり、再度築造し直されたものと考えられる。

A-1地区では杭列などの堰状遺構は検出されなかった。この場所は堰状遺構の北端部に位置して水流が淀んだ状態にあり、シルト質粘土などの堆積をうながしうる状況であったと考えられる（第16図参照）。堰状遺構は後述する堤防構築の前段階＝基礎をなし、築造時期は11世紀末～12世紀初頭と思われる。第23層からは瓦器、土師器片などが出土し、A-4の第23c層相当層より瓦器・椀（21 第18図 図版44）が出土した。

堤防状遺構（第15図 図版20）盛土状態は、南断面図（1）－第6図－参照。

A-2地区では、堰状遺構による堆積砂〔第23各層〕の西側の第21層との間に生じた窪地は淀んだ状態になりシルト質粘土〔第19e層〕が堆積した。また、東側にはシルト質粘土・シルト〔第19b・c層〕が堆積し、その上および北端の葦束上に盛土－暗オリーブ灰色粘土質シルト－〔第19a層〕をしたのち、その第19層東側を切断し、第23層西側（第21層との間の窪地）に盛土－暗オリーブ灰色砂のブロックまじりシルト質土〔第20a・b層〕－をして堤防とした。

それに対し、A-1地区の堤防は（第16図参照）、堰状遺構の先端付近に淀んだ状態で堆積したA-1地区第19層相当層の暗オリーブ灰色シルト質粘土層〔第8層〕の東・西を切断し一部盛土して堤防とした。堤防はほぼ南北方向に延び、断面は台形状を呈して、上辺幅約3m、下辺約8m、高さ0.8mを測る。この堤防の構築時期は12世紀前半と考えられる。第19層からは瓦器、土師器片が出土しており、第19層相当層より瓦器・椀（13 第17図 図版44）が出



土した。

しかしその直後、洪水などによる大水がおこり、堤防東側では粗・中粒砂の堆積をもたらした〔第18a～c層〕。第18層からは瓦器、土師器片などが出土し、第18c層から瓦器・椀（i 第18図 図版44）が出土した。

さらに水流は堤防をオーバーフローして流れ、堤防遺構の東・西は湿地状態の中でシルト質粘土などの堆積がみられた〔第17・16各層〕。

第17層からは土師器・大皿（16）および小皿（14）—第17図—などが出土した。

第16層上面遺構（第20・21図 図版14・15）

一時期、安定した段階で堤防状遺構西地域の一部において開発にとりかかっていたと考えられ、A地区第16層上面およびB-1地区第15層上面で足跡と数条の溝、土坑などを検出した。

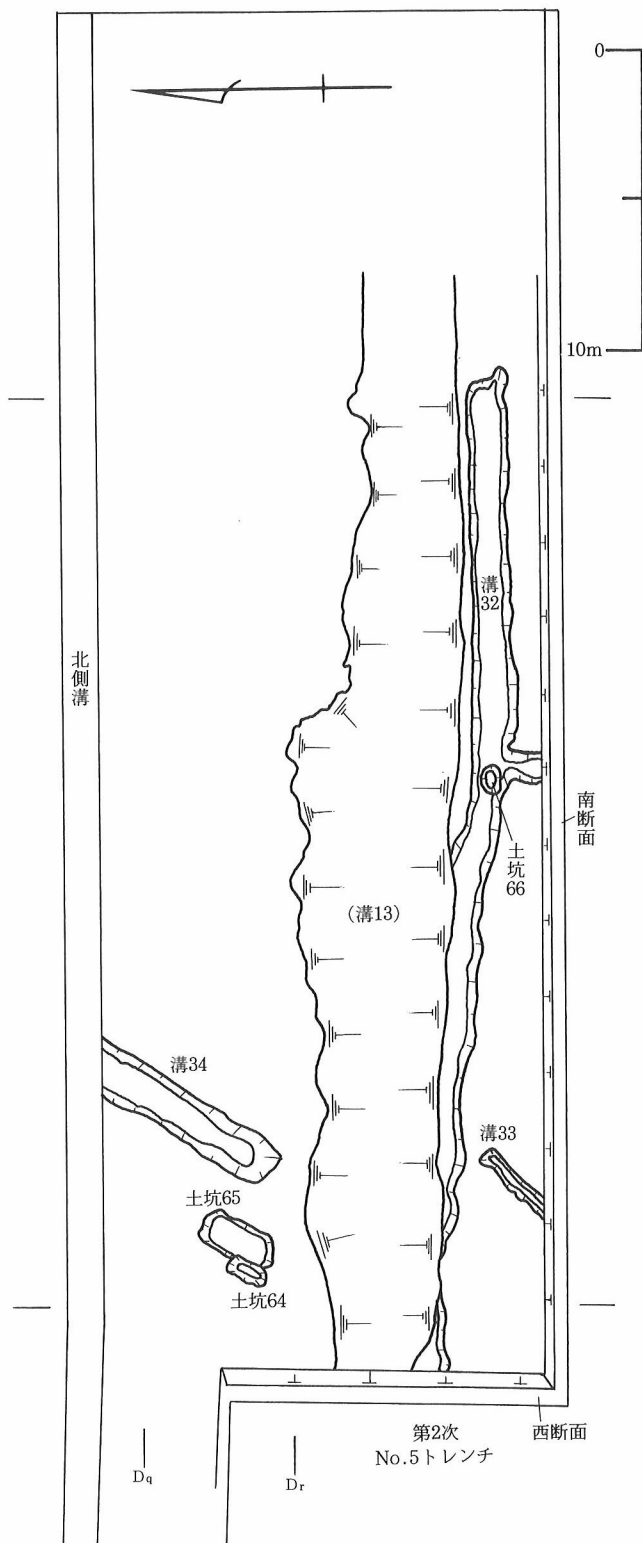
A地区では第16層（一部17層）上面において、A-3で8条の溝と少数の足跡、A-1で足跡群を検出した。A-3の各溝（溝9～16）は後述する第4遺構面の溝8によって切断されていた。そのため

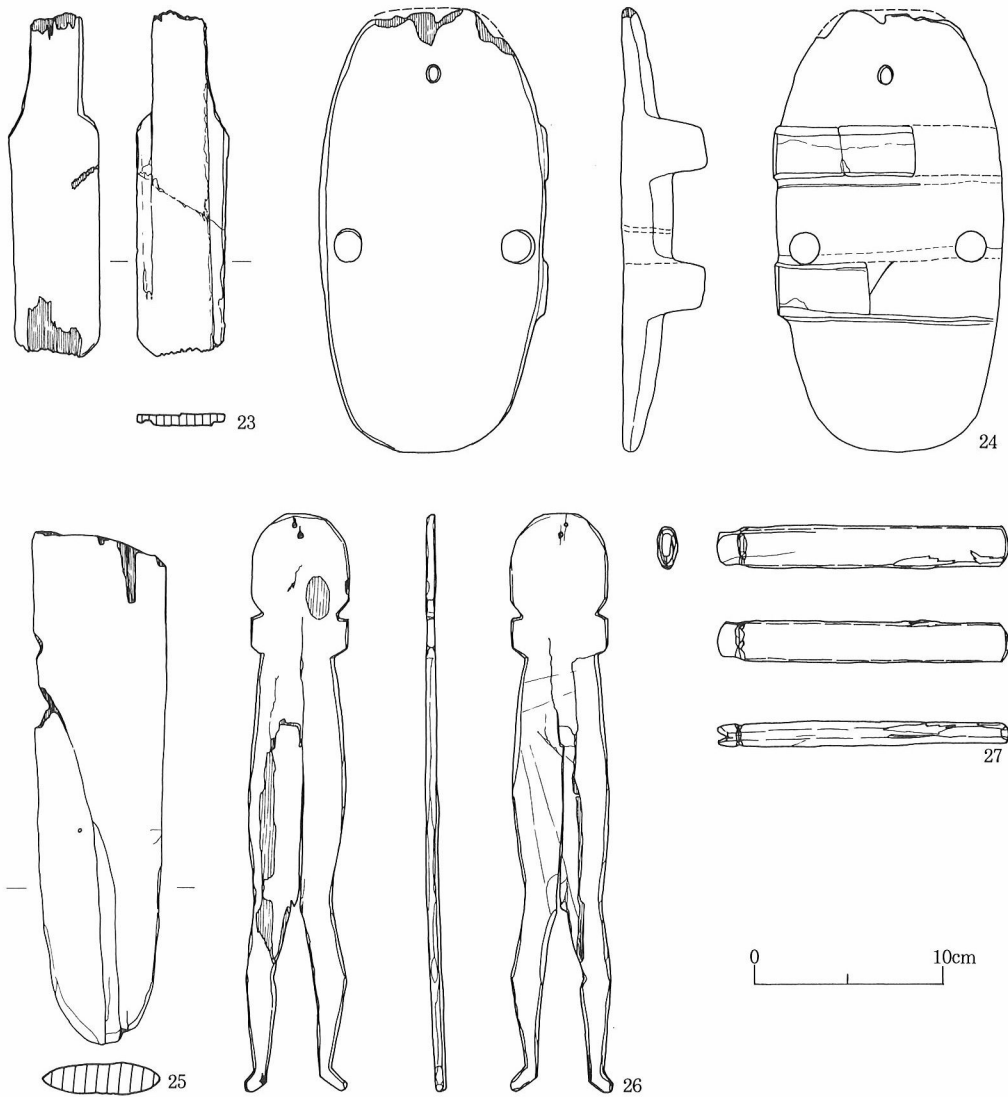
第19図
A地区第16層上面遺構平面図

各溝の関連は明確ではないが、溝8南側で幅0.25~0.6m、深さ0.06~0.14mのほぼ南北方向に延びる溝5条（溝12~16）、北側で幅0.3~1.1m、深さ0.12~0.35mの南北方向の溝2条（溝9・10）とそれを繋ぐように東西方向の1条の溝（溝11）と、溝11西に4個の足跡があった。A-1で人の足跡群を検出したが、踏み込み跡も浅く、残存状態はあまり良くなく、歩行状況などは不明であった。

B-1地区では第15層上面で、溝3条（溝32~34）、土坑3（土坑64~66）を検出した。溝32は検出の東西長29.5m、幅約1.1~1.5m、深さ0.25~0.31mの東西方向に延びる溝で、第4遺構面の溝13によって北側の大半は切断されていた。溝は途中南方向へも派生し、溝内で0.9×0.6m、深さ0.17mの土坑66を検出した。そのほか南西部には溝33、北西部には溝34、土坑64一埋土は灰色（7.5Y4/1）砂質シルトで植物遺体・粗粒砂・青灰色粘土ブロック含む一、土坑65一埋土は暗オリーブ灰色（5GY4/1）シルト質砂で粗粒砂・暗青灰色粘土ブロック

第20図
B-1地区第15層上面遺構平面図





第21図 A地区第12～15層出土木製品実測図

多く含む一があった。これらの遺構内からは、少数の瓦器、土師器、加工木の小・細片が出土したのみである。時期は12世紀中葉前後のものと思われる。

その後、堤防西側では部分的に粗・中粒砂ブロックを含む暗オリーブ灰色シルト質粘土など〔第15a～b層〕で盛土作業にとりかかり、そしてその後、本格的な開発事業＝整地、集落形成など＝へと移行していった。その最初は12世紀後半ごろにおこなわれたのが、堤防状遺構をさしたA地区南側を中心として行なわれた、中粒砂を含む暗緑灰色シルト質粘土など〔第14a～e〕による盛土・整地であり、北側との間に約0.5～1mの段差があった。B地区においてはB-1の第13a(E)層がこれに相当し、この上面では住居跡などの明確な遺構はなく、B地区周辺における集落形成に先立つ整地作業であったと思われる。12世紀後半ごろ。

A地区第15層出土木製品（第21図 図版57）

刀子柄（27） 断面細長の楕円状を呈し、後端部は丸くおさめている。前部は両方向から細かく刻んだ溝を境に細くなり、端部をガマ口状に開けて中を穿ち、刀子の茎を差し込むようにしている。外面調整は木目方向に丁寧に削り成形している。スギ近似種。

平鋏（25） 身部のみ。細長い身部は断面レンズ状を呈し、刃部方向に細くなっている。外面は木目方向に削って成形し、刃部はやや丸みをもち両面から削り出して刃を形成している。コナラ属アカガシ亜属の一種。

A地区第14層出土遺物（第18図 図版44）

瓦器・椀（20）、土師器・大皿（22 図版44）、一木鋤（417 図版57）。

第13層は、A地区の整地1北側に堆積した砂・シルト層（a～g）で、大半は後述する第4遺構（溝8・10など）によって削平・攪乱されていたが、A-3地区北部周辺などに残存していた。この層からは瓦器・土師器の小・細片とともに人形木製品が出土した。

人形木製品（26 第21図 図版58） 13f層出土。正面形の板状の人形で、ほぼ完形。頭部は丸く、両側面にV・レ状にカットして首および腕を表現し、胴部は足の付け根付近でくびれ腹部両側に広がっている。両足は膝を外に開き、足先を外に向けたガリ股状を呈する。頭部の額に2ヵ所木釘が打ち込まれている。ヒノキか。

d. 鎌倉時代から江戸時代前半

この期間は今回の調査範囲内で見える限り、調査地全域にわたっておおがかりな整地がおこなわれ、とくにB地区周辺において集落形成が本格的に行われていった時期である。東側-A地区-は先の事業（堰および堤防と盛土・整地）によってある程度安定したようであるが、B地区での集落形成には特に西側をほぼ南北方向に流れていた旧吉田川（以下、河川と記す。）の氾濫が大きく影響していたと考えられる。それは主に氾濫＝河川に砂などの急激な堆積＝が起こった後に盛土・整地をおこなっていたことが確認されたからである。この集落地域は整地をくりかえしているため-各整地は下部層を削平したり、まき上げたりしてはいるが-テル状に高まっていた。また、この時期の河川はB地区西部にほぼ定まり、その流れは徐々に西に移行していった。前述したように、A地区は第2次No.5、B地区は第2次調査のNo.4トレンチ（以下、第2次No.4とする。）を間に挟んだ地域であり、その成果-文献②-をも踏まえて見ると次のようになる。

①. <整地2> - 鎌倉時代初頭-12世紀末～13世紀初頭

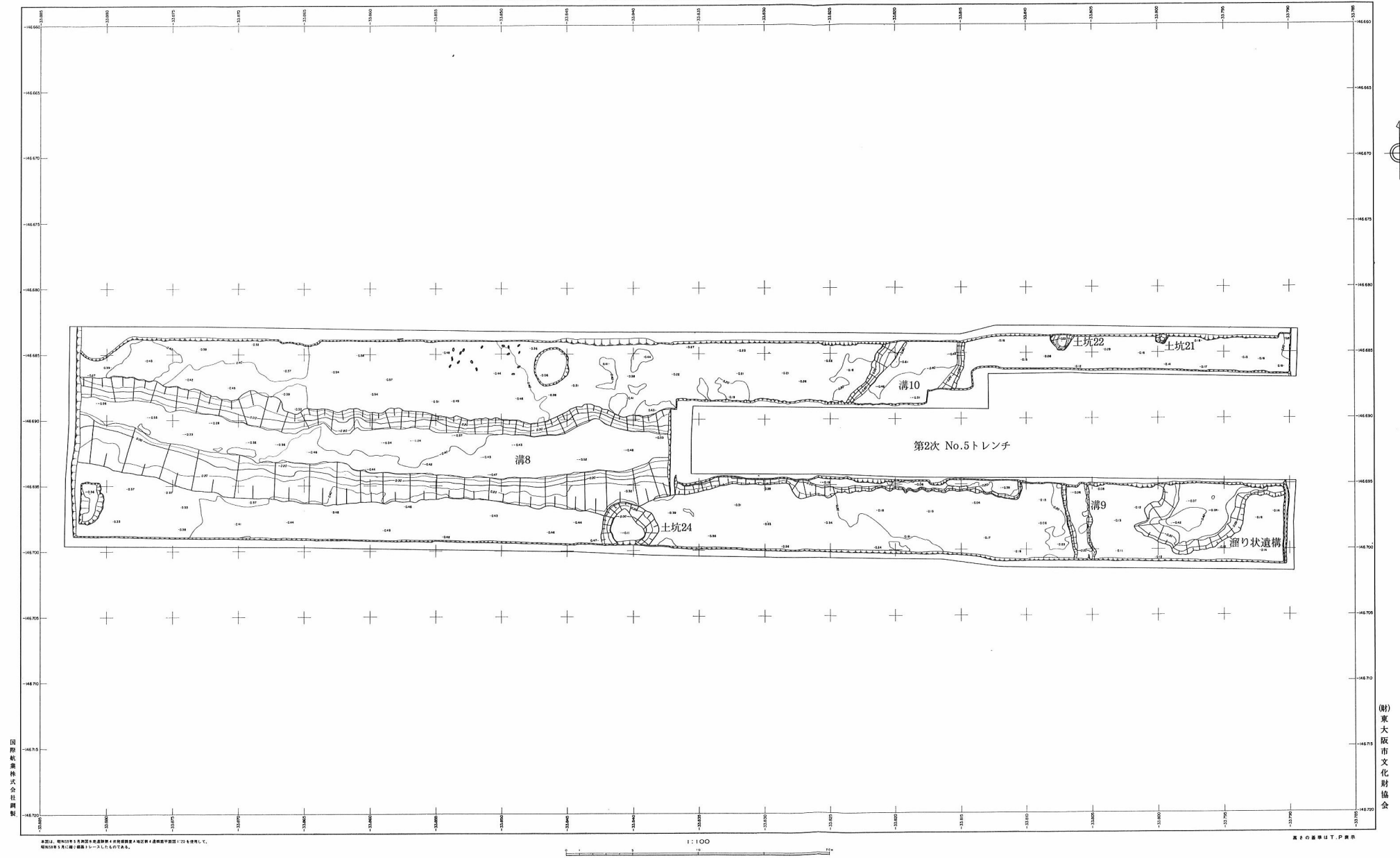
- ・ A地区第11各層、B-1地区の第13b（D下）層、第2次No.4の第4層。
- ・ 上面での遺構としては第2次No.4の土坑墓、大溝（A地区溝8・10、B地区溝31）など。この大溝は旧河川9に流れ込んでいたと思われる。

②. <整地3> - 鎌倉時代前半-13世紀前半

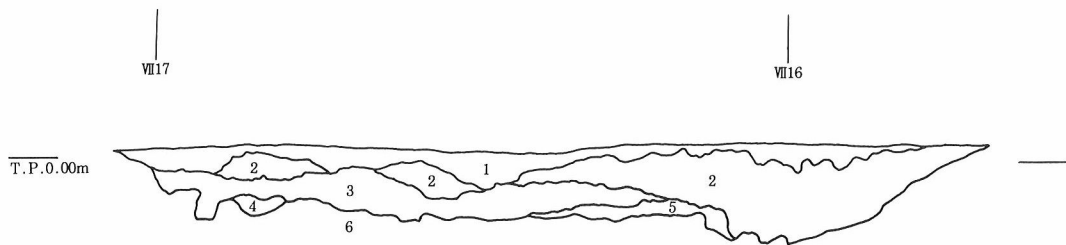
- ・ B-1地区溝31埋没後の整地、第2次No.4第3a～c層。
- ・ B-1・2地区の第12・11・10層

- ・上面での遺構としては土坑58、柱穴など。
 - ・河川9および8対応
- ③. <整地4-1> - 鎌倉時代中～後半-13世紀後半
- ・河川9・8の氾濫（砂堆積、第2次No.4西壁の砂層など）をうけて行われた整地。
 - ・B-1地区の第12・11（D上）層、第2次No.4の第3層。
 - ・上面での遺構としては落ち込み7（第2次No.4のSK17）、柱穴など。
 - ・整地に伴い河川の護岸の堤防状の盛土（B-2地区第I～VI層）を行っている。
 - ・河川7および6対応。
- ④. <整地4-2> - 鎌倉時代末～室町時代初頭-13世紀末～14世紀初頭
- ・河川7・6の氾濫（砂堆積、第2次No.4の自然流路-西壁第4・4'層）をうけて行われた整地。
 - ・B-1地区の第D層、第2次No.4の第2m層。
 - ・上面での遺構としては溝24・25・28、第2次No.4の落ち込み18、柱穴など。
 - ・河川5対応。
- ⑤. <整地5> - 室町時代前半-14世紀前～中半
- ・河川5の氾濫（砂堆積）をうけて行われた整地。
 - ・B-1地区第C層。
 - ・上面での遺構としては溝26、溝22・27（第2次No.4の落ち込み16）、柱穴など。
 - ・河川4対応。
- ⑥. <整地6> - 室町時代中半-14世紀後半～15世紀
- ・河川4の氾濫（砂堆積）をうけて行われた整地。
 - ・B-1地区の第B・B'層。
 - ・上面での遺構としては溝14など。
 - ・河川3対応。
- ⑦. <整地7> - 室町時代後半から安土桃山時代-16世紀
- ・河川3の氾濫（砂堆積）をうけて行われた整地など。
 - ・B-1地区の第A'層、Aの第9層、B-1地区東部の第8層。
 - ・上面での遺構としては、A地区のハス田の畦畔など。
 - ・河川2対応。
- ⑧. <整地8> - 江戸時代初頭-17世紀前半
- ・B-1地区の第A層。
 - ・上面での遺構落ち込み6など。東側は一段低く湿地状態-水田形成か-で、B地区東側およびA地区の9層上面において多数の足跡を検出した。整地東端部の段肩部沿からは木の株・石などを検出した。
 - ・河川1対応。

水走遺跡第4次発掘調査A地区第4遺構面平面図

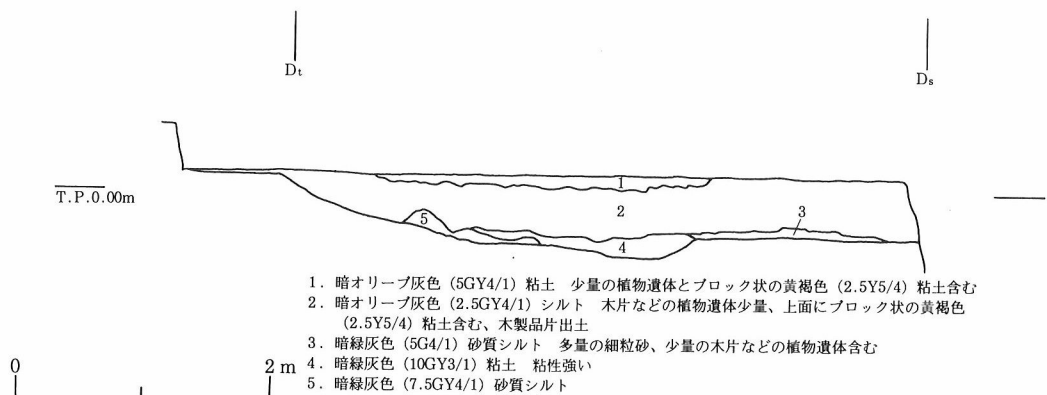


第22図 A地区第4遺構面平面図



1. 暗緑色 (7.5Y4/1) シルト質粘土 細粒砂多く混じる
2. オリーブ黒色 (10Y3/2) シルト質粘土 細粒砂・暗灰黄色シルト質粘土小ブロック・植物遺体含み、木製品出土
3. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) シルト質粘土 粘質強く、細粒砂・暗灰黄色シルト質粘土ブロック混じり、特に上部には植物遺体多く含む、土器片出土
4. 暗緑灰色 (7.5GY3/1) 粘土質シルト
5. 暗緑灰色 (5G4/1) シルト質粘土 暗灰黄色シルト質粘土の小ブロック・細粒砂少し混じる
6. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) シルト質粘土 シルトがラミナ状に含む

① 溝10断面図



1. 暗オリーブ灰色 (5GY4/1) 粘土 少量の植物遺体とブロック状の黄褐色 (2.5Y5/4) 粘土含む
2. 暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト 木片などの植物遺体少量、上面にブロック状の黄褐色 (2.5Y5/4) 粘土含む、木製品片出土
3. 暗緑灰色 (5G4/1) 砂質シルト 多量の細粒砂、少量の木片などの植物遺体含む
4. 暗緑灰色 (10GY3/1) 粘土 粘性強い
5. 暗緑灰色 (7.5GY4/1) 砂質シルト

② 溜まり状遺構断面図

第23図 A地区溝10および溜まり状遺構断面図

以下、上記に沿って各時期の遺構と遺物を記述していくが、A・B地区の主な遺構を各整地層順に記し、遺構などから出土した特色ある遺物について概観する。

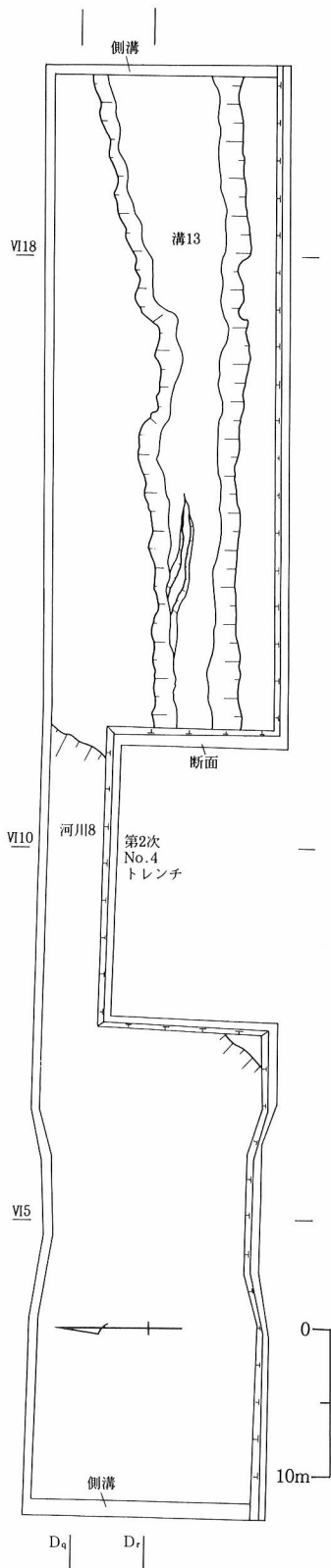
<整地2>

整地1の後、B-1・2地区および第2次No.4周辺における集落形成直前におこなわれた整地。A地区では第11層上面において溝3条（溝8・9・10）、土坑3基、溜まり状遺構、足跡など、B地区では第13層上面で溝1条（溝13）を検出した。

A地区第4遺構面（第22図 図版21・22）

A地区の整地2に相当する層は第11各層-a～1層の12層に分かれる一で、搬入土とともに溝などの掘削土によって形成され、B-2地区河川域を除く調査地全域に広がる大規模な整地層であり、土師器大皿（17・18 第17図）、瓦器碗片などを包含していた。

A-3地区において、後述する溝8（1期目）に接続していたと思われる南北方向の大溝Aがあった一第7図南断面を参照一。しかし大溝Aは短期間に埋り、第11層の上層をさらに整地して2期目の溝8などの各遺構が形成されたと考えられる。溝内からは瓦器と土師器の小・細片とともに木製品などが出土した。



大溝A出土木製品 (第21図 図版58)

下駄 (24) 上端および歯の各一部欠損。一木造りで大判形を呈する。上部中央に小円孔、下歯直上両側よりに円孔をほぼ上面から穿っている。上面は木目方向削って丁寧調整。各歯は両方向から削り出され、底面ともやや荒い調整である。

へら状木製品 (23) 柄部後部欠損。身部はほぼ長方形を呈し、先端部は使用により内弯している。ヒノキ属近似種。

溝8は、A3・4地区のほぼ中央を東西に延びる大溝である。溝は2時期にわかれ、1期目の溝の北肩側は2期目の溝によって切られている。1期溝は先の大溝Aに接続していたと考えられ、検出の長さ54m以上、幅6m以上、深さ1.1m以上を測る。南斜面は黄褐色砂ブロックの混じる暗オリーブ灰色シルト質粘土で補強・整形していた。溝内は6層に分かれ、下層に植物遺体の含む粘土質シルトおよびシルト質粘土、中層に砂の堆積、上層は埋土となっていた—第5図参照—。2期溝は1期溝埋没直後にその北よりに掘削された溝で、A-2地区の北西部をかすめ、第2次No.5内を通して(断面図、落ち込み1-1~3)、A-1地区で検出した南南西—北北東方向に走る溝10につながり、西はB-1地区の溝31に延びて、旧の河川9まで達していたと考えられる。検出長54m以上、幅5.15m、深さ1.15mを測る。溝内は上層より、暗オリーブ色の砂混じり粘土、砂質土、砂などとなっていた—第5図参照—。溝は12世紀末に1期溝が形成され、再度掘削されなおした(2期溝)のち、13世紀中半には完全に埋没したと思われる。

溝8出土遺物 (第25・27図)

2期溝は瓦器碗 (39) など、遺物はそれほど多くなかった。

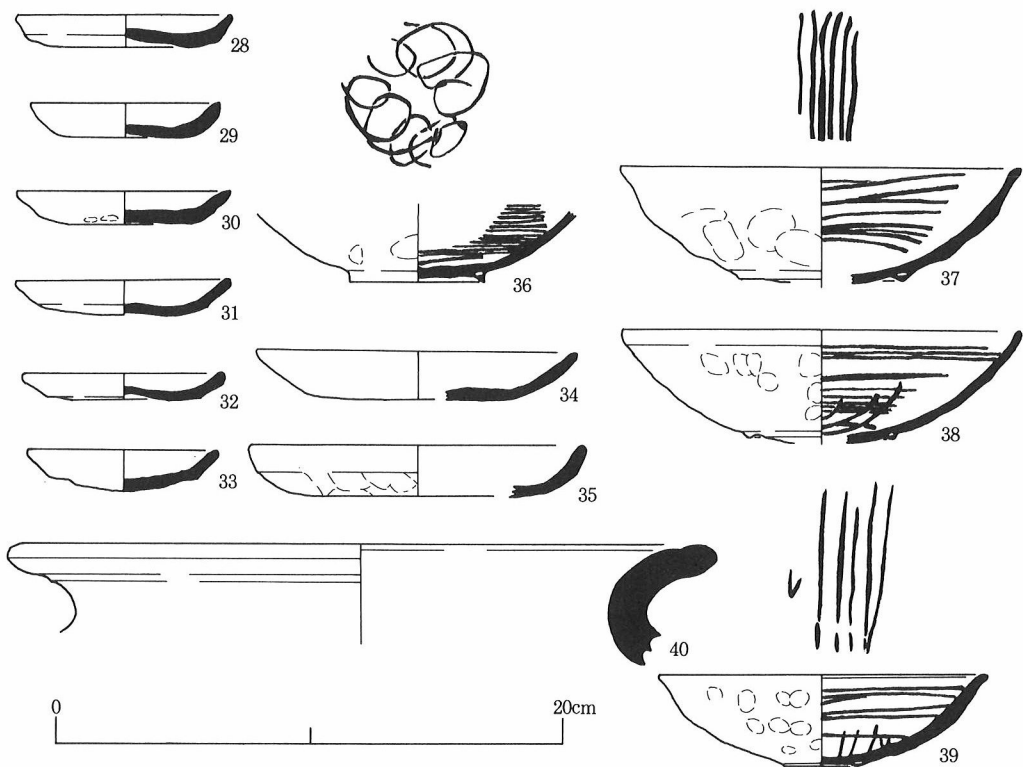
1期溝出土土器類

瓦器碗は大和型1個 (36)、和泉型2個 (37・38)。瓦器皿 (33)、土師器小皿 (28~32)・大皿 (34・35)、甕 (40) など。

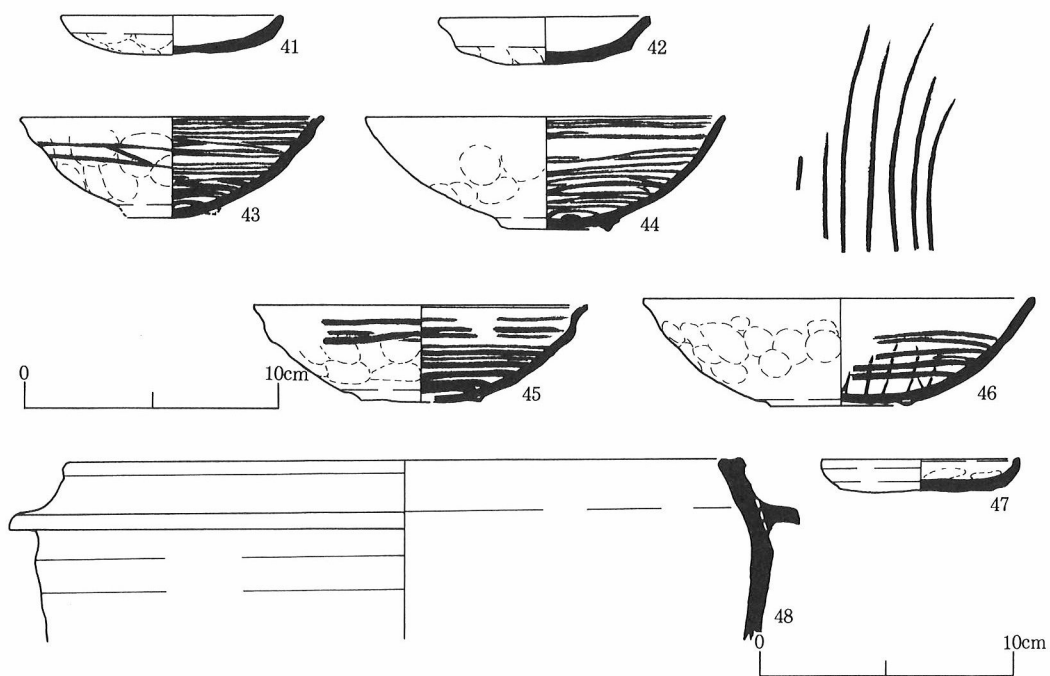
1期溝出土木製品 (図版58・59)

漆器碗 (51) 土圧により変形。一部欠損。やや上傾する高い高台を有し、身部は平な底面から内弯しながら高く立ち

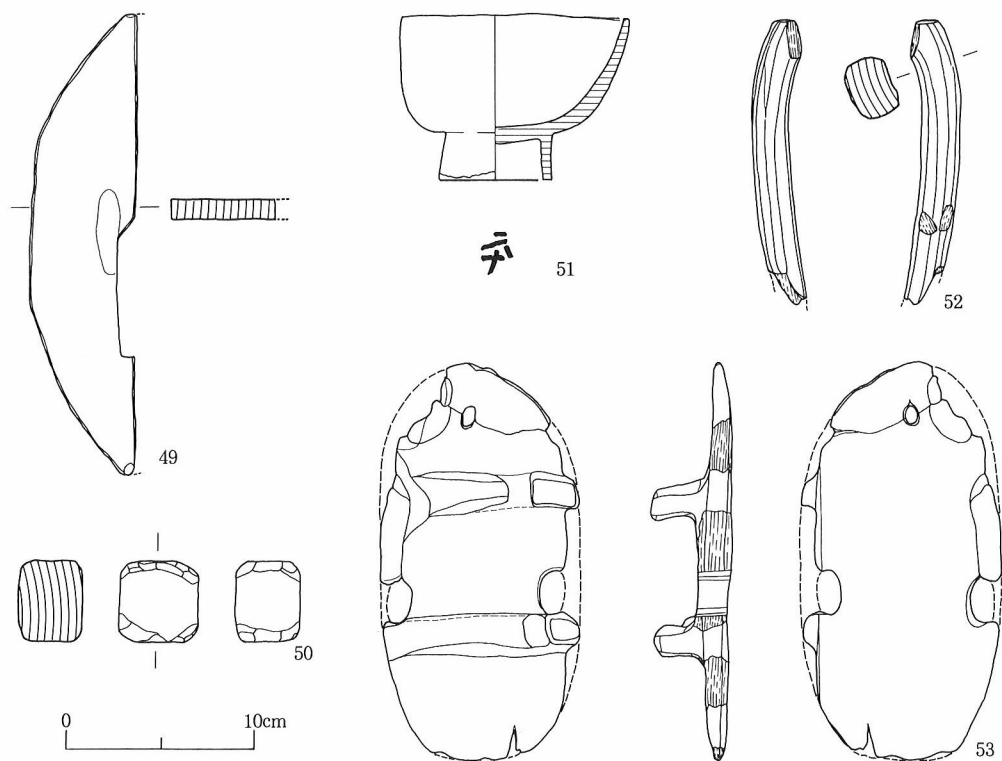
第24図 B地区溝13・河川8平面図



第25图 A地区沟8出土土器实测图



第26图 B-1地区沟13出土土器实测图



第27図 A地区溝8・10出土木製品実測図

あがり、端部を丸くおさめている。剥落しているが外面に朱漆が施されて、底見込み部には黒漆書（判読不明）がある。トチノキ。

そのほか、把手（52）—マツ属複維管束亜属の一種—、蓋（49）—ヒノキ属の一種—、方角形木製品（50）—クリ属近似種—などの木製品や馬の下顎骨などの動物遺体が出土した。

溝10は、A-1地区の中央部において検出した南南西—北北東に延びる大溝で、堆積状況などから2期溝8と一連のものと思われる。検出長5.6m、幅6.2m、深さ0.8mを測り、断面逆台形状を呈する。溝内は下部に堆積の砂層、上部は砂質土・砂まじり粘土の埋土であり—第23図—、瓦器碗・土師器皿の小・細片とともに下駄などが出土した。溝は13世紀前半～中半のものと考えられる。

下駄（53 第27図 図版60） 欠損部多い。一木造りで大判形を呈する。残存状況が不良で調整など不明。クリ近似種。

溝9は、A-2地区東よりで検出した、ほぼ南北方向に延びる溝。第2次 No.5では検出されておらず、A-1地区までは達していない。検出の長さ6.2m、幅1.3～2m、深さ0.2mを測る。溝内は砂で、遺物はほとんど出土しなかった。

溜まり状土坑（図版21）はA-2地区東部で検出した。不定形で、東西9m、南北5.6m、深さ0.62mを測り、遺構内は砂質シルト、粘土、シルトなど5層に分層され（第23図）、瓦器・土師器の小片などが出土した。溜まり状土坑および溝9は形成前に東西約10m、深さ約1.6m

の落ち込みを呈していたと考えられ、第2次No.5南断面図の落ち込み3-1~3がこれにあたると思われる。

A-1地区では2基の土坑（土坑21・22）、A-3地区では大溝A埋没箇所の土坑24と北側で人の足跡を16検出した。

土坑24は、平面は円形をなして断面は浅いボール状を呈し、径4.2m、深さ0.9mを測る。大溝A埋没直後、西側に盛土をして形成され、一度、シルト・砂が堆積したのち再度掘り返されていた。上部は砂まじりシルト質粘土層（埋土）、下部はシルト・砂層（堆積土）—第7図参照—。土師器および瓦器の小・細片が出土したのみであった。

この後、A地区においては整地作業はほとんどおこなわれることはなかった。B地区周辺で整地作業がくりかえしおこなわれて建物・溝などが構築されたのに対し、A地区での遺構は整地7に相当するハス田遺構まであまり形成されることはなかったようである。

B-1地区で整地2に相当する層は第13層であり、瓦器碗、土師器皿、杭・板材・角材・棒材などの木製品、植物遺体（自然木片など）を包含していた。

溝13（第24図 図版23）は、東西に延びる大溝で、堆積状況などから、東はA地区の溝8とつながり、西端は河川9に注ぎ込んでいたと思われる。西側の一部（上部）は後述する溝24・25、落ち込み7などによってそれぞれ削平をうけていた。検出の長さ47m、幅7.5~8m、深さ0.7~1.1mを測る。溝の東側はA地区溝8と同様2期に分かれていたが（A地区溝8参照）、中部から西部にかけては2期目の溝が1期目溝の西肩をも掘削し2期目溝のみになっていた。西部溝内は5層（第I~V層）に分かれ（第8図 西断面図参照）、溝は整地3に伴い完全に埋没してしまった。

溝13出土土器（第26図）

瓦器碗は大和型2個（43・45）、和泉型2個（44・46）、土師器小皿（41・42・47）、羽釜（48）など。

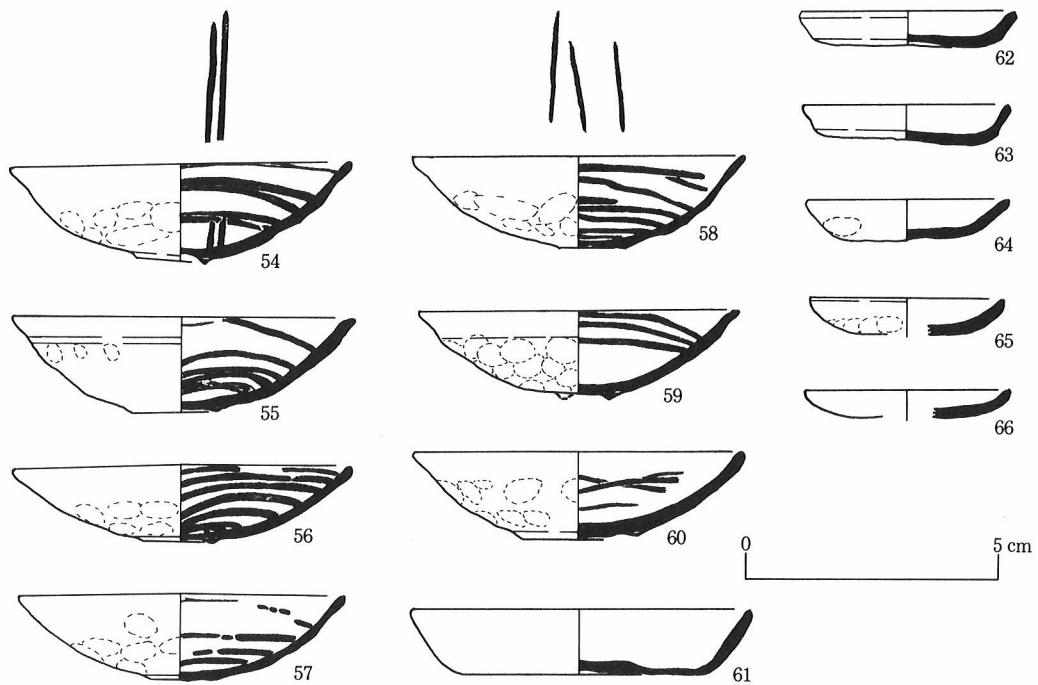
河川9は、ほぼ南北方向に延び、B-2地区東端（IV12ライン西）の第10・11層上面でその東肩および堆積層を検出した。堆積層の上層は暗緑灰色（10GY4/1）砂混じり砂質シルト、下層は黄褐色（2.5GY5/6）粗・中粒砂などで、検出深は1.6m以上を測った。各層内からは若干の瓦器・土師器の小・細片と植物遺体が出土した。

これらの遺構・遺物は12世紀末から13世紀初頭ごろのものである。

<整地3>

B地区第4遺構面-1

この整地層は、溝13を埋没させた後の整地で、第12および11層がこれにあたり、第12層からは杭・円盤状・棒状木製品—一端などやけて炭化した部分あり—などの木製品が出土し、第11層からは杭・板材・円盤状・棒状の木製品、自然木などが出土した（棒状木製品、自然木の中には焼けて炭化部のあるものあり）。遺構としては土坑58・59・61、柱穴（第8図 西断面図P6など）を検出した。また、河川9の東岸・第11層上面に第10層—粗粒砂ブロックを含む緑



第28図 B-2地区河川6～8出土土器実測図

灰色（5G5/1）シルト質粘土を盛り上げて堤防としていた。

土坑58は溝24、土坑59は近代井戸、土坑61は溝26によってそれぞれ破損していた。土坑58からは瓦器碗（129・130 第35図）、土坑59からは瓦器碗・土師器皿の小・細片、土坑61からは土師器小皿（126 第35図）・曲物底板などが出土した。P6には柱根が残存していた。

河川8は、ほぼ南北方向に延び、B-2地区東側（VI11ライン東）の河川9上層上面で東肩および堆積層を検出した。堆積層の上層は黄褐色（2.5Y5/4）粗粒砂混じり砂質シルト、下層は緑灰色（5G5/1）粗粒砂で、検出深1.8m以上を測った。

河川8出土遺物

土器

完形または完形復元できた瓦器碗は54（第28図 図版44）など2個で、和泉型の退化したはりつけ高台を底外面中央に有する。その他、土師器皿片などが出土した。

木製品（第29図 図版61）

剣形木製品（68）頭上部など一部欠損。頭部は上・下部を切り込んで六角形を呈し、剣部は両側を両面からカットして成形して先を尖らせている。モミ。

これらの遺構・遺物は13世紀前半ごろのものである。

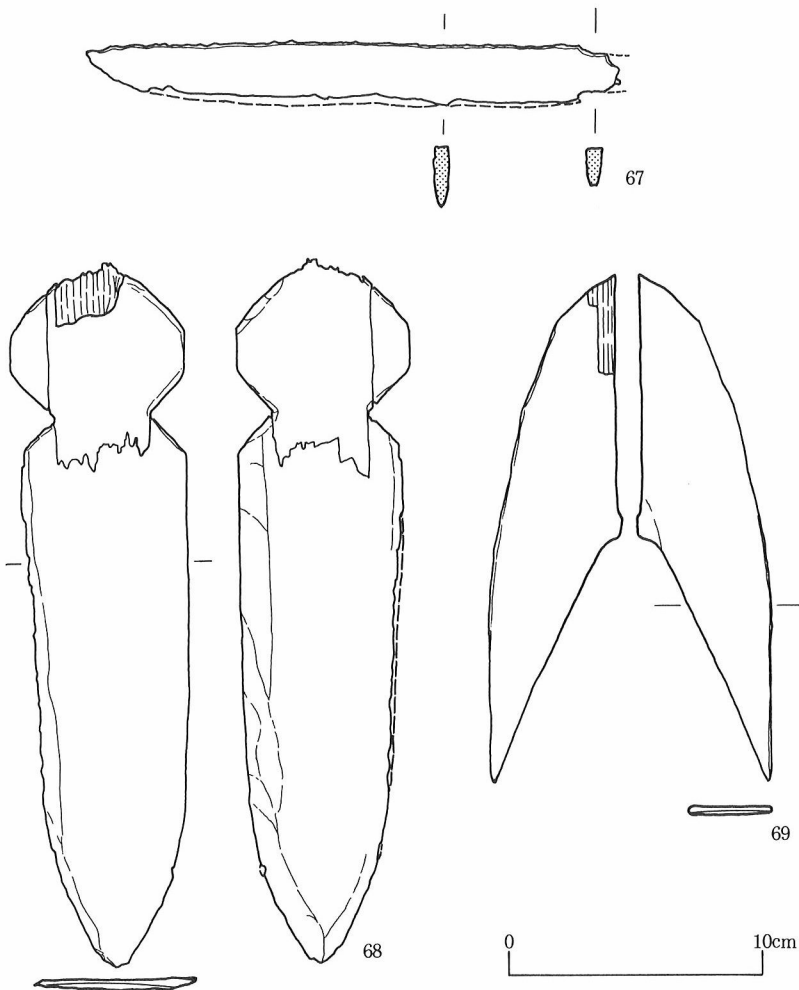
<整地4-1>

B地区第4遺構面-2

整地層は第D層がこれにあたり、この層からは土師器皿、瓦器碗の小片、漆器碗・箸・杭・円板状・板状・角状の木製品片、植物遺体などの遺物が出土した。この時期の遺構は落ち込み

7 などである。

落ち込み7は、B-1地区南西角で検出し、第2次No.4のSK17と一連のものである。検出の南北幅3.1m、東西幅4.1m、深さ0.85mを測り、下部は植物遺体を多く含む暗オリーブ灰色シルト質粘土(へ)が厚く堆積し、上部は薄く3層(ハ~ホ)が堆積していた。ハはとくに多く植物遺体を含む(第8図参照)。とくに下部から、瓦器碗(82)、土師器皿(70~77)、土師器質羽釜(84・



第29図 B-2地区河川6・8出土木製品・鉄製品実測図

87・88)、瓦質羽釜(85)・すり鉢(86)、青磁碗(83)一第30図一、木製品などが出土した。上層には整地土(ロ)が盛られて完全に埋没した。瓦器碗(79~81 第30図)は口内出土。落ち込み7出土木製品・鉄製品(第31図 図版63・65)

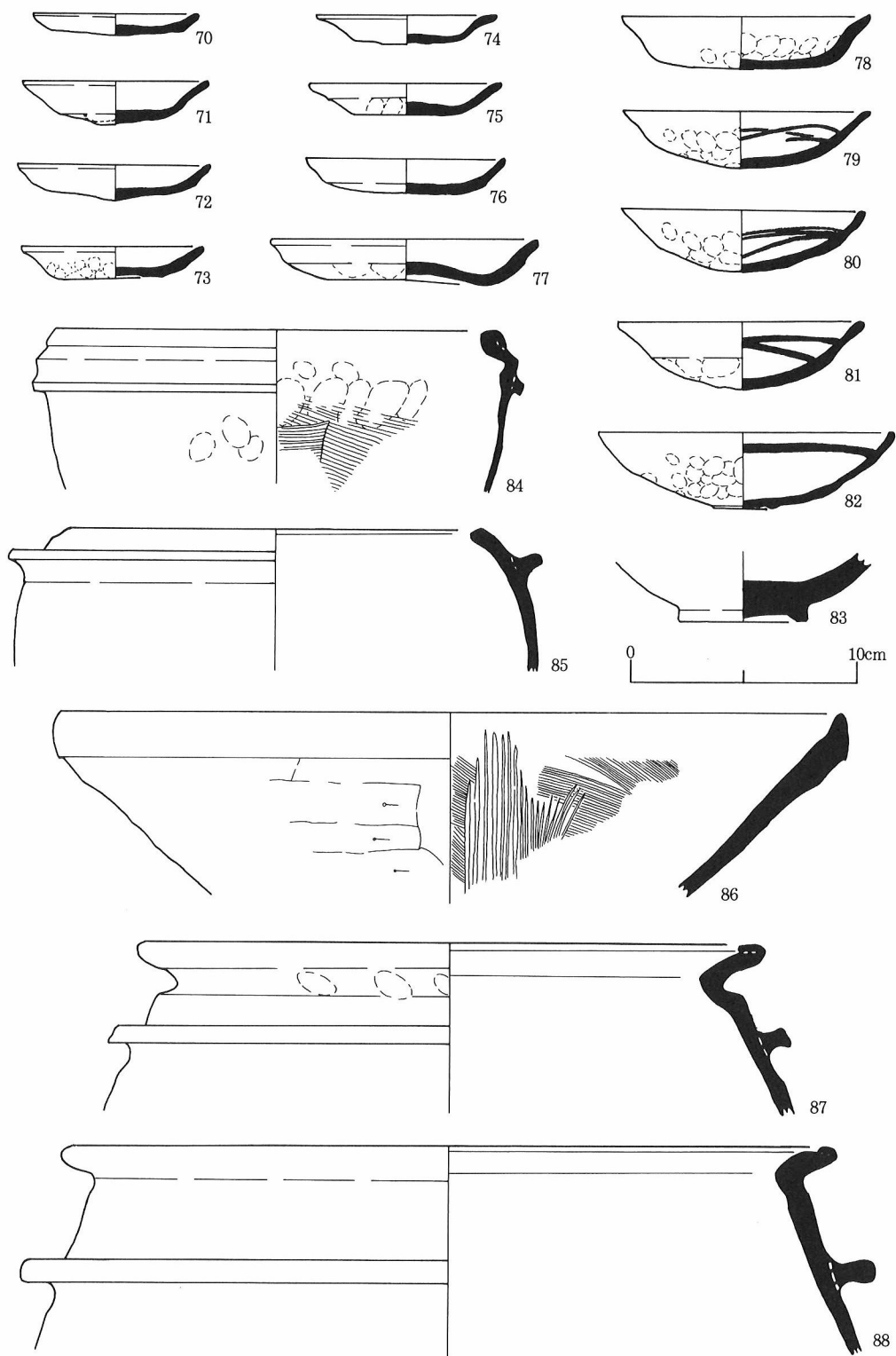
下駄(91) 約2/5残存。上下側やや偏平の大判形を呈する一木造り。下歯上端よりにはほぼ上面から穿たれた円孔がある。上下歯はともに両方向からカットして高く削り出している。上面は木目方向に丁寧に調整。

円板形木製品(92) 約半分欠損。容器底板か。

有尖棒状木製品(93) 断面やや偏平な楕円形を呈し、先端を尖らせている。後端は四角くおさめ先端に向けて細く、端は段を有して円錐状にして後部に小円孔を穿っている。銚か。

小刀(89) 銚および刃関部欠損(出土時、茎後部折れ曲がっていた)。全長25.5cm、刀身19.8cmを測る。背・刃関を有する直刀で、刃こぼれ顕著。

包丁(90) 銚および刃部の一部欠損。身幅は広く、刃関は丸くおさめている。茎は断面四



第30图 B-1地区落ち込み7出土土器実測図

角形を呈し、身背より少し上がって先端方向に細く延びている。

河川7は、南西から北東に延び、東肩をB-2地区東より（北-VI10ライン西、南-VI8ライン東）で検出した。その一部は第2次No.4においても検出されている。東肩は河川8の黄褐色粗粒砂上に暗緑灰色のシルトなど6層の盛土（第9図I~VI）を行なって肩部を形成していた。河川は黄褐色粗粒砂（ケ）の堆積によって完全に埋没した。

河川7出土遺物

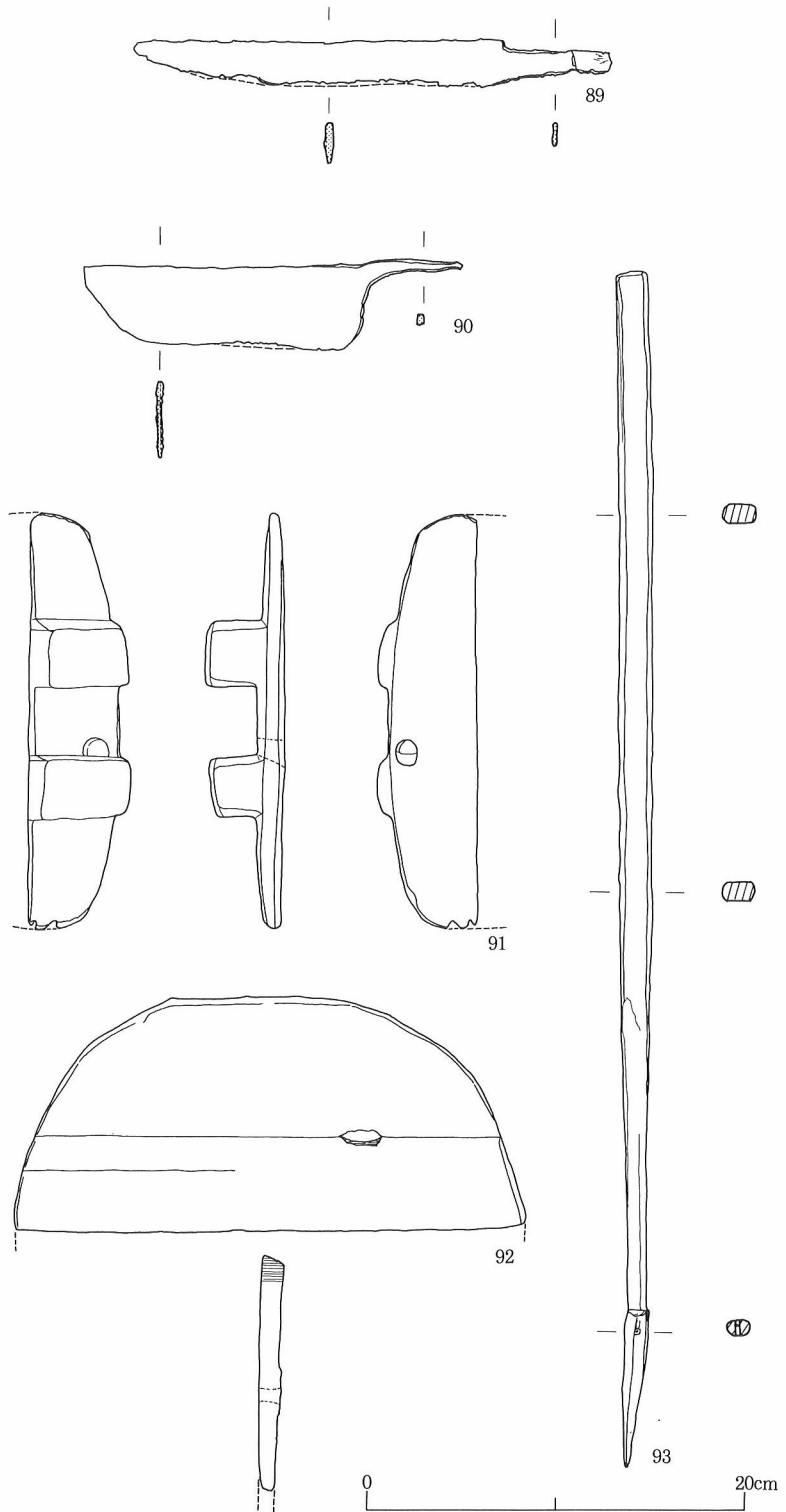
土器

完形または完形復元できた瓦器碗は55（第28図 図版44）など10個で和泉型の退化したはりつけ高台を底外面中央に有する。土師器皿は大皿1枚、中皿1枚、小皿1枚などが出土した。

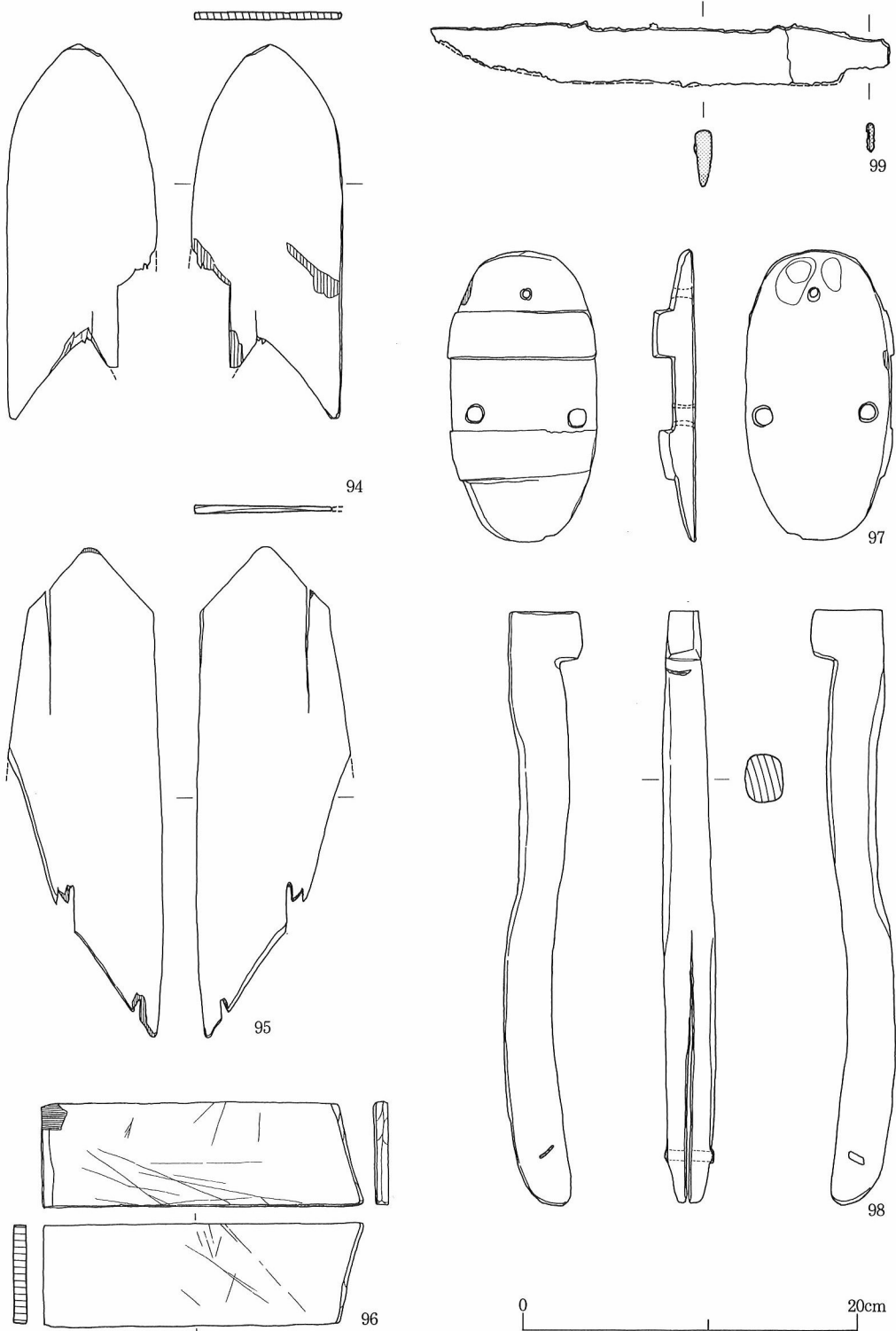
木製品・鉄製品

（第32図 図版66）

下駄（97） ほぼ完形で、大判形を呈する一木造り。上面のくぼ



第31図 B-1地区落ち込み7出土木製品・鉄製品実測図



第32図 B-2地区河川7・4出土木製品・鉄製品実測図

み状況から右足に使用。上中央に1、下歯上両側よりに2の円孔をほぼ上面から穿っている。歯は上下ともに両方向からカットして削り出し、上面は木目方向に丁寧に調整している。

板状木製品(96) 一短辺を両面より斜めにカットしている。ヒノキ属近似種。

用途不明木製品(98) 断面角丸方形の棒状製で、一端は π 状に短く突出し、棒部はゆるやかに弯曲して他端を丸くおさめ、他端部は二股に分かれ鉄釘で留められている。

小刀(99) 直刀。茎の後部および銚の一部は欠損し、残刀身長18.6cmを測る。刃こぼれが顕著である。

河川6は、河川7の砂堆積直後のもので南西から北東方向に延びていた。東肩は河川7の堆積砂のケで、河川7東肩より西に約5mほど移行していた。河川は暗緑灰色砂質シルト(r)によって埋没した(第9図参照)。

河川6出土土器(第28図 図版44)

完形または完形復元できた瓦器碗は56~60など20個で、和泉型の極めて退化したはりつけ高台を底外面のほぼ中央部に有する。その他、瓦器皿1枚、土師器皿は61~62の大皿2枚と、小皿11枚、土師質羽釜、瓦質羽釜などが出土した。

河川6出土木製品・鉄製品(第29図)

矢羽根形木製品(69 図版61) 下層出土。半分は欠損。外側部はゆるやかにカットして外弯している。内側部は外下方向に延びて外側部につづき、先端を尖らせている。両平面は平らで、木目方向に丁寧に調整している。

小刀(67) 茎の大半は欠損し、刀身は19.5cmを測る。背・刃関を有する直刀で、刃こぼれが顕著である。

これらの遺構・遺物は13世紀前半ごろのものである。

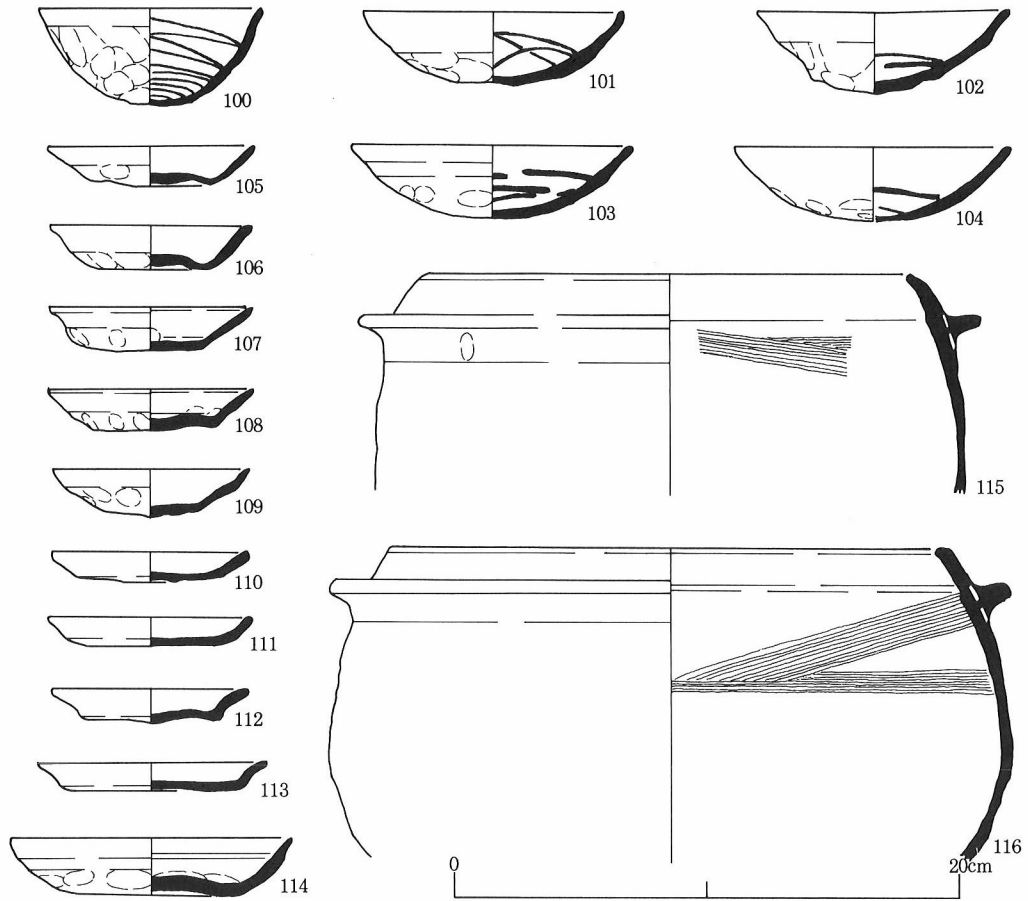
<整地4-2>

B地区第4遺構面-3

遺構面は整地4-1と同じ第D層と第D上層で、土師器皿、上層からは瓦器碗・土師器皿の他に土師質羽釜、瓦質羽釜、瓦質三足羽釜、須恵質土器、青磁などの磁器、陶器、桃の種、炭なども出土した。この時期の遺構は溝24・25・28、柱跡と考えられるピット群などである。

溝24は、南南西から北北東方向に延びる大溝で、南部では底面が高くなるとともに東側で溝25と溝28に分岐していた。幅4.6~4.8m、深さ0.65~0.9mを測り、底部は段をなし西側が深く落ち込んでいた。下部-第1期はオリブ黒色(10Y3/1)シルト質粘土、中部は暗オリブ灰色(2.5GY3/1など)シルト・シルト質砂、第2期の上部下はオリブ黒色(7.5Y3/1)シルト質粘土、上部上は暗オリブ灰色粘土で、常に水が流れていた状態であったと思われる。シルト質砂など(中部)の堆積した後の整地5の時期にもとくに東側を再度掘削し直し活用しており(上部)、整地6期時に完全に埋められた一黄灰色粘土ブロックの混じる灰オリブ色(5Y4/2)砂質シルト-と考えられる。

溝24出土遺物



第33図 B-1地区溝24出土土器実測図

第1期（下部）は木製品類は出土したが、土器は少なく一極めて退化したはりつけ高台を有する瓦器碗片などが出土一、第2期（上部）は逆に土器類が多く、木製品は少なかった。

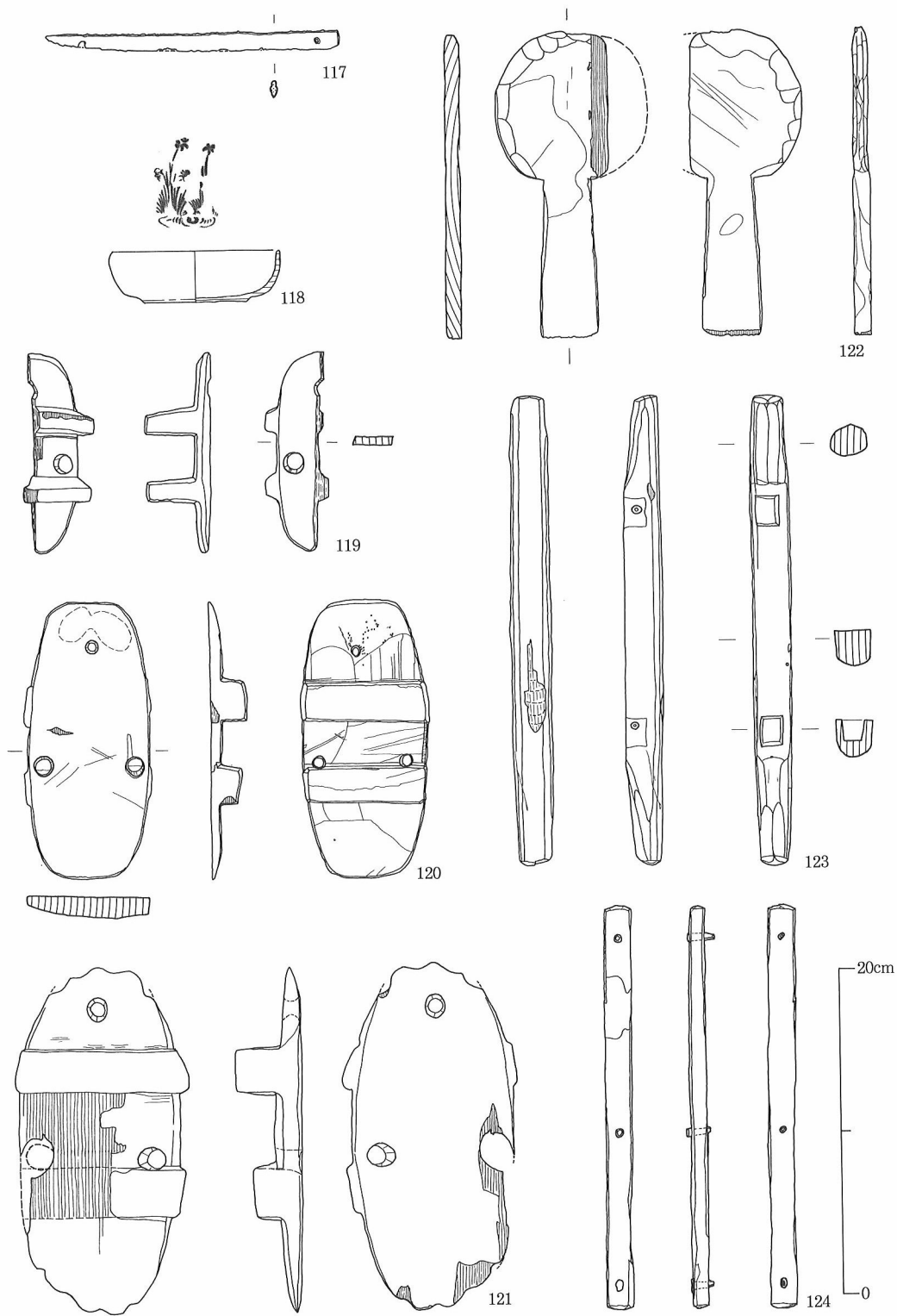
土器（第33図 図版56）

瓦器碗は大和型1（100）と和泉型4（101～104）、土師器皿（105～114）、瓦質羽釜（115・116）など、上部出土。

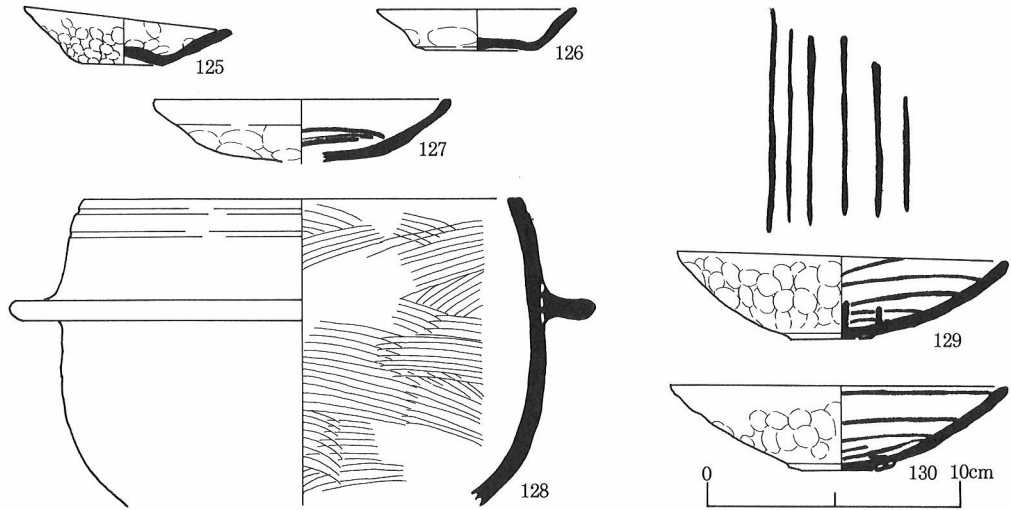
木製品・鉄製品（第34図 図版62・63）

漆器鉢（118） 低い高台から内弯しながら高く立ち上がる。見込み部分に朱塗りの文様があるが、内外面とも漆の剥離が激しく不明。ブナ属の一種。下部出土。

下駄（119～121） 119は約半分欠損。両歯の高い小型で大判形を呈する一木造りーヒノキ属近似種一。120はほぼ完形。上・下縁直線の大判形を呈する一木造りースギ近似種一。下歯後部すりへり顕著で、上面のへこみ状況から右足使用。121は縁辺および下歯の一部などが破損し、残存状況不良。いずれも上中央と下歯上方両側よりにほぼ上面より穿った円孔があり、両歯はともに上下方向から削り出し、底面はやや荒く上面は丁寧に木目方向に調整している。いずれも上部出土。



第34图 B-1 地区溝24出土木製品・鉄製品実測図



第35図 B-1地区土坑61・58、溝28・25出土土器実測図

しゃもじ形木製品 (122) 手鏡状を呈し、身部の一部欠損。身部は両面とも柄部より一段低く、縁辺をカットして円形に成形。柄部は後方に広がる。部分的にコゲ痕が見られる。トキノキ。下部出土。

用途不明の部材 (123・124) 123は両端部断面円、中部断面U字形を呈し、2ヵ所に方形のホゾ孔と各ホゾ孔部一面に小円孔を有する。スギ。124は短冊状を呈し、3ヵ所に木釘が打たれている。ヒノキ属の一種。下部出土。その他、木札・曲物などの木製品片が出土した。

刀子 (117) 背・刃関なく、茎後部に目釘孔がある。刃こぼれ顕著。上部出土。

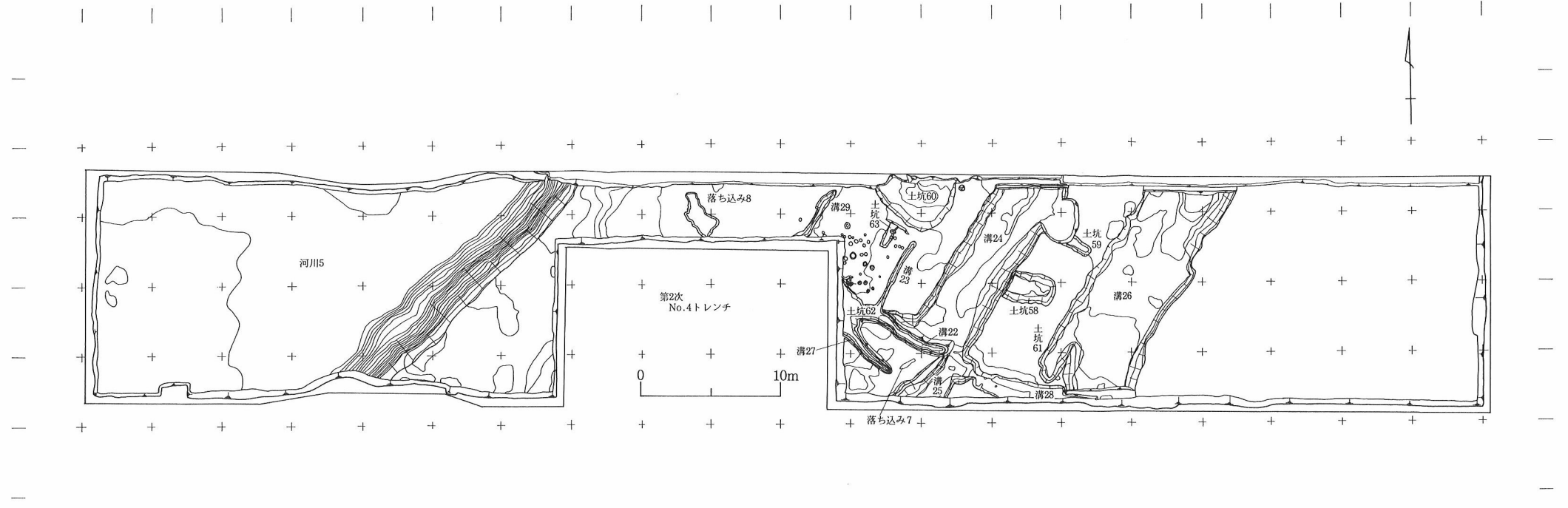
溝25は、溝24南東部から派生して南方向に延びていた。幅3.9m、深さ0.65mを測る。溝内は灰色シルトで、下部は粘質性が強く植物遺体・炭を含み、上部は灰色粘土ブロックが少し混じり、両斜面部には砂・小礫が見られた。瓦器碗 (127 第35図)、土師器皿などの小・細片が出土した。

溝28は、溝25南東部から分岐して南南東方向に延び、幅1~1.4m、深さ0.4mを測る。溝内は上下2層に分かれ、上層は上半に若干砂が混じり植物遺体を含む灰色粘土、下部は下半に粗粒砂・青灰色粘土ブロックを含む暗緑灰色シルト質粘土で、土師器皿 (125)、瓦質羽釜 (128) 一第35図一、瓦器などの小・細片、砥石 (422 図版65) などが出土した。

これらの溝の東側からはこの時期の遺構はほとんどなく、西側 (河川5) との間には多くの柱穴群があり、住居域を画する役割を果たしていたと思われる。

柱穴群は、B-1地区北西部で径0.15~0.5mの円形ピットを35検出した。

河川5は、河川7・6の堆積層 (ケおよびr) 上面に約20~30cmの盛土=灰色 (5Y5/3) 砂混じり粘土質シルト・粗粒砂まじりシルト (第6層 o・p) =を行なって整地し、その西側を南南西から北北東に流れていた。整地の結果、河川東肩は西に約13mほど移行するとともに、住居域が広がった。河川東斜面は北側で上下2層に分かれ、西部の大半は河川3以降の流れに



第36図 B地区第4遺構面平面図、B-2地区河川5遺物出土状況平面図

よって削り取られていたため、川幅は不明。この東斜面の特に北よりに2回（上層・下層）にわたる遺物の集積群を検出した。これらの遺物は多量の瓦器碗・皿、土師器皿をはじめさまざまな形の木製品、小刀、貝遺体（オオタニシ・ヒメタニシ・ナガタニシ・マルタニシのタニシ類と少量のイシガイがほぼ楕円形状に集積したものなどー下層ー）、砥石片（下層）と植物遺体（自然木片含む）などであった。

河川5出土の主な遺物

土器（第37～41図 図版45～53）

下層

瓦器碗（131～151・155・163・167～171・176～191・194～204・214～216・218・225） 完形または完形復元できたものは100個で、いわゆる大和型は163など2個。和泉型98個の内、78個は極めて退化したはりつけ高台を有するが、20個ははりつけ高台がない。

土師器皿（230～244・246・248・249） 大皿11枚、小皿31枚。大皿には内面から焼成後に穿った径4mmの円孔を有するもの、1×8mmの孔のあるものがあり、小皿にも約6mmの孔を穿ったもの、底外面中央に径3mmの凹みを有するもの（235）などがあった。

その他三足羽釜（192・193）、土師質羽釜（250・251）とミニチュア三足羽釜片など出土。

上層

瓦器碗（152・153・164～166・173・205～213・217・219～224・226～229） 完形または完形復元できたものは49個で、いわゆる大和型は2個。和泉型47個の内、15個は極めて退化したはりつけ高台を有するが、32個ははりつけ高台がない。下層に比してはりつけ高台の有無の割合が逆転して多くなっている。164は底中央に径6mmの円孔が穿たれている。

土師器皿は、245・247などの大皿2枚と小皿3枚。

その他、瓦質羽釜（252）など。

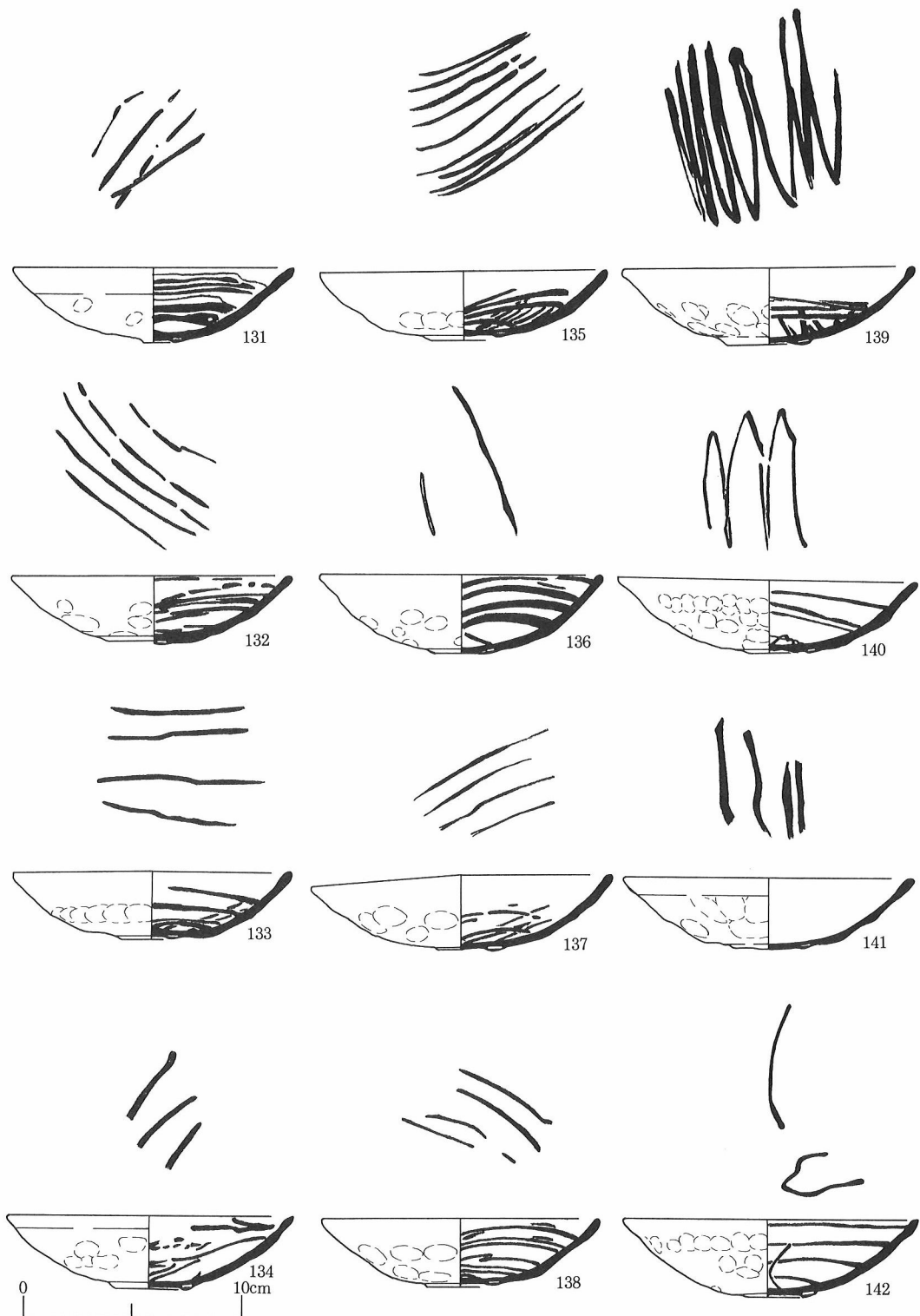
河川5出土木製品（第42～46図 図版61・67～71）

下層

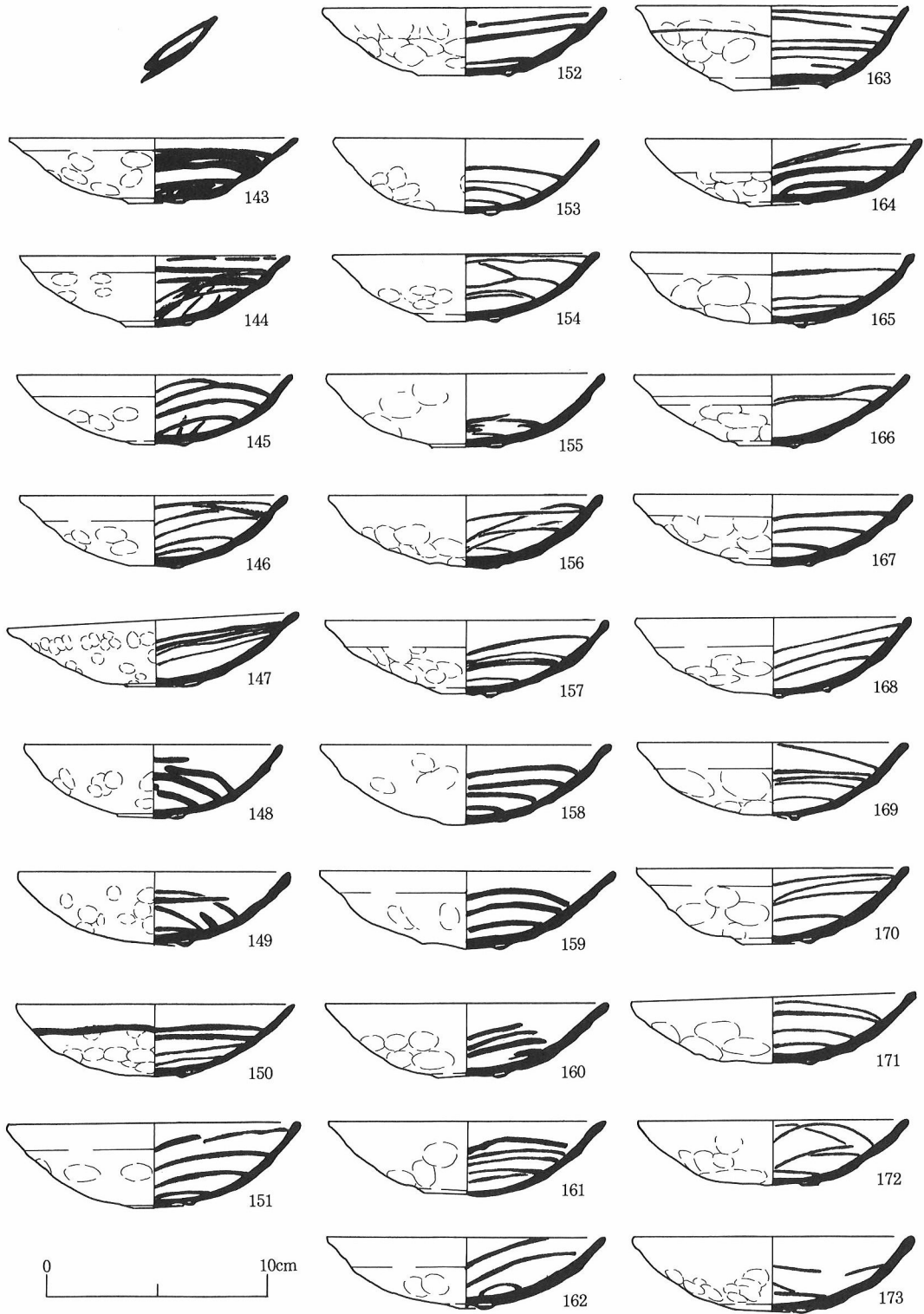
銚形木製品（253） 身部は断面レンズ状を呈して先端を尖らた両刃になっている。柄部との境に両側をそれぞれ2ヵ所上下からカットした造り出しを有し、柄は長く末を尖らせて、断面長方形を呈している。スギ。

剣形木製品（265～267、270・271） 265～267は幅が狭く長い。265は両側中央付近に各2ヵ所に三角形の切り込みを有する。上端は両側より中央部に向け両面からカットして尖らせ剣先に成形。下方は両側から中央部へゆるやかに削り尖らせている。いずれもスギ。270・271は幅広でやや短い。270は頭頂部欠損。両側2ヵ所に三角形の切り込みあり、両刃部は外弯してくんだり先端を尖らせている。鏝部の片平面に、幅2.2cm、長さ5.5cm、深さ0.3cmの溝を有する。刃部は両面から削って調整。くびれ部は上・下方よりカット。両平面とも木目方向に整形している。モミ。

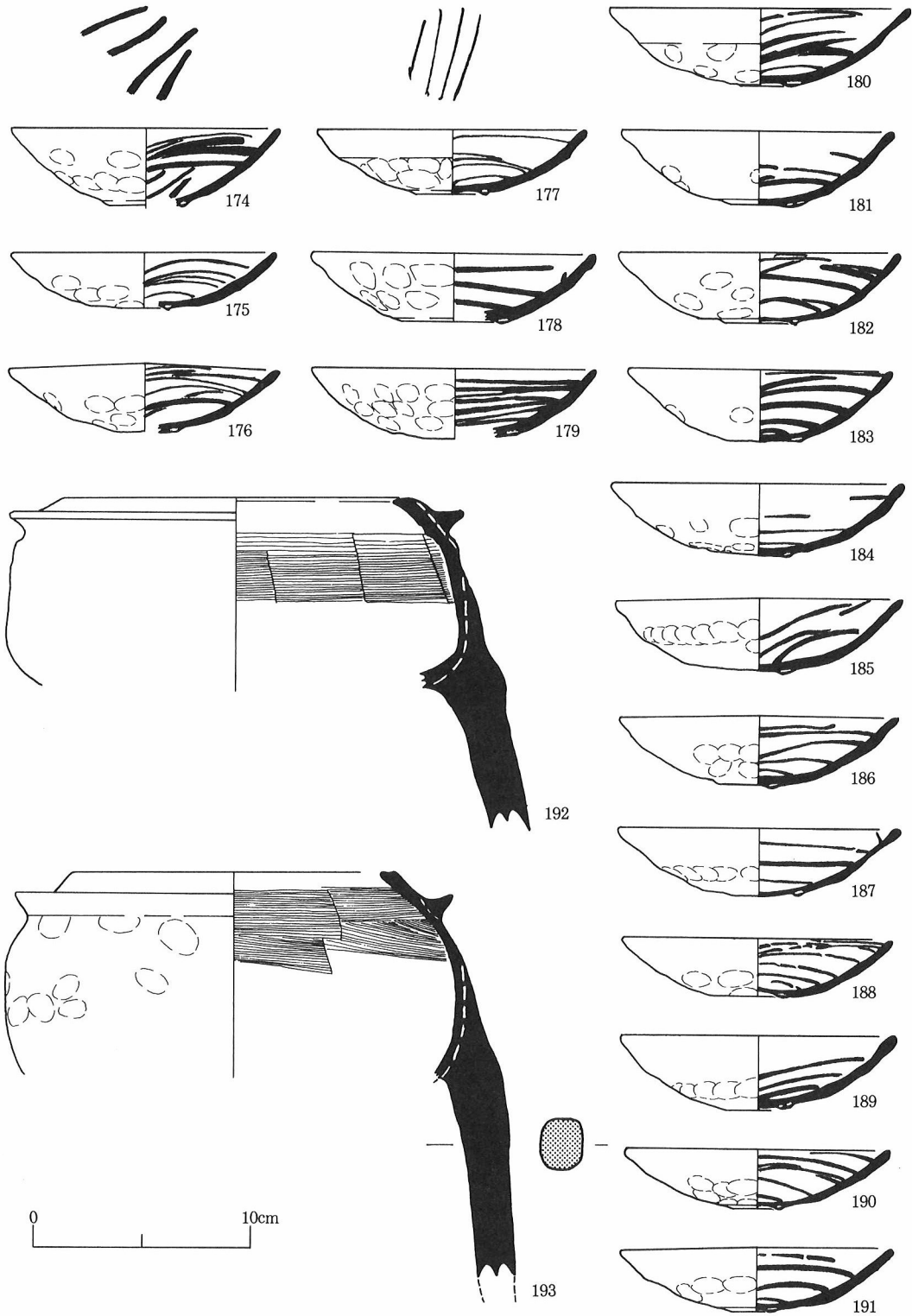
矢羽根形木製品（257～261） 257は半分欠損。外縁は外弯、内側も外弯して下部は角をな



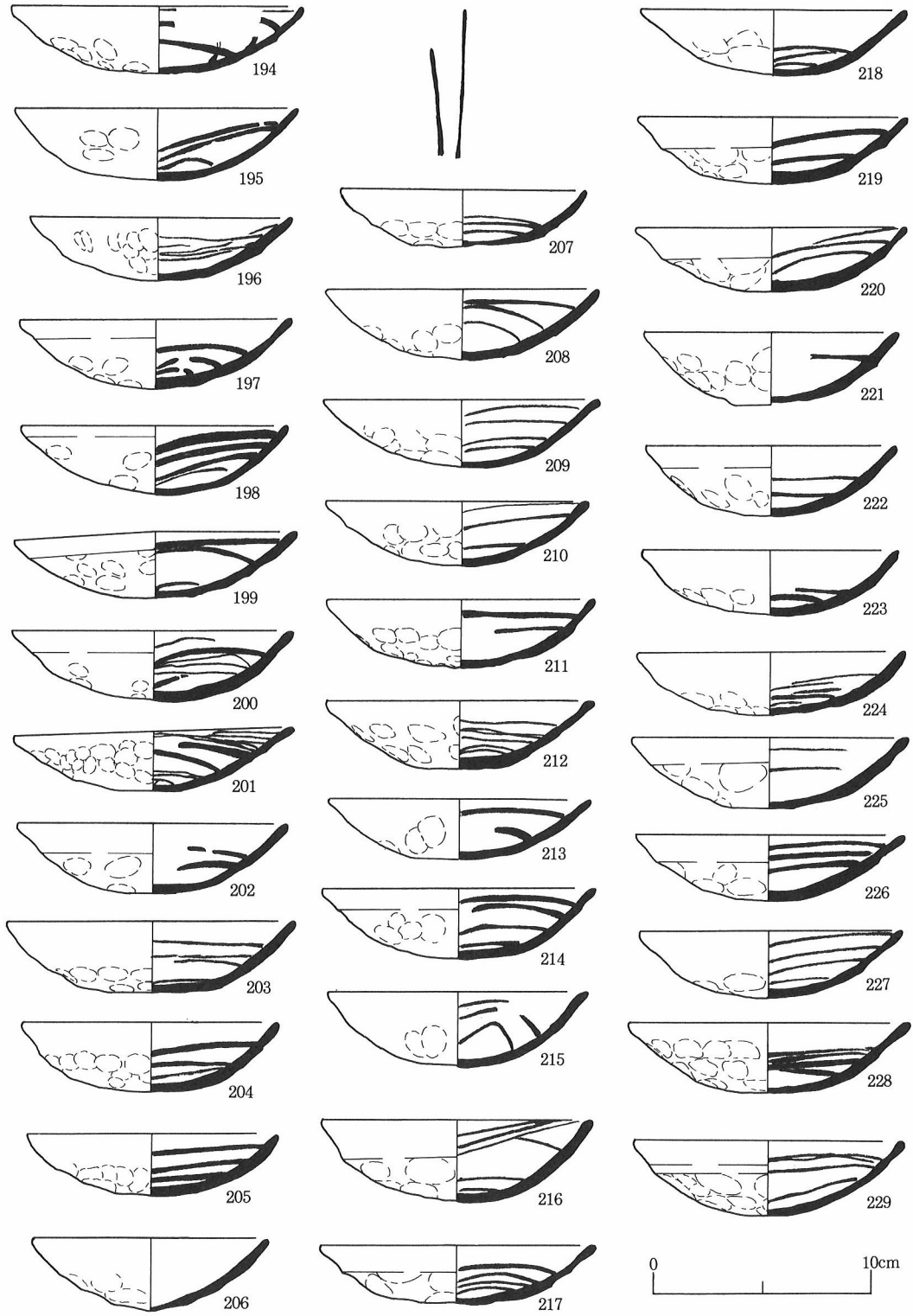
第37图 B-2地区河川5出土瓦器碗实测图(1)



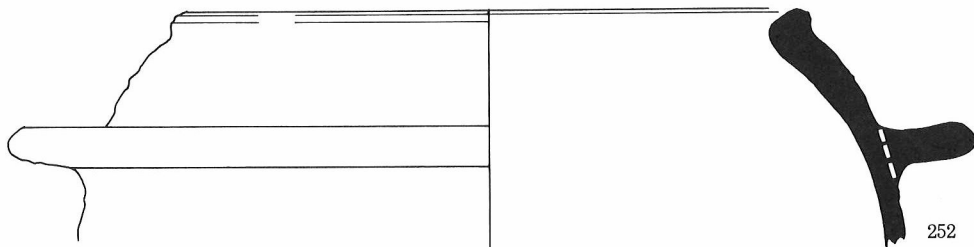
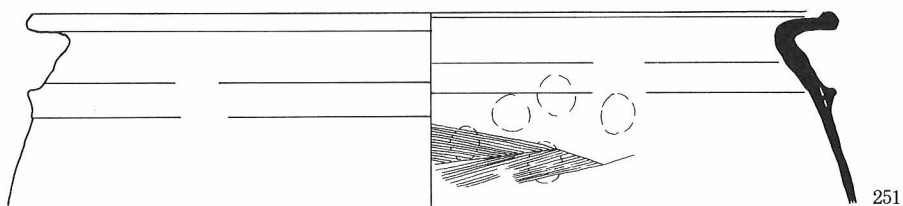
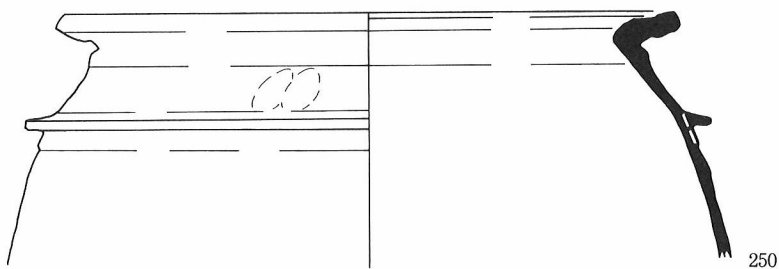
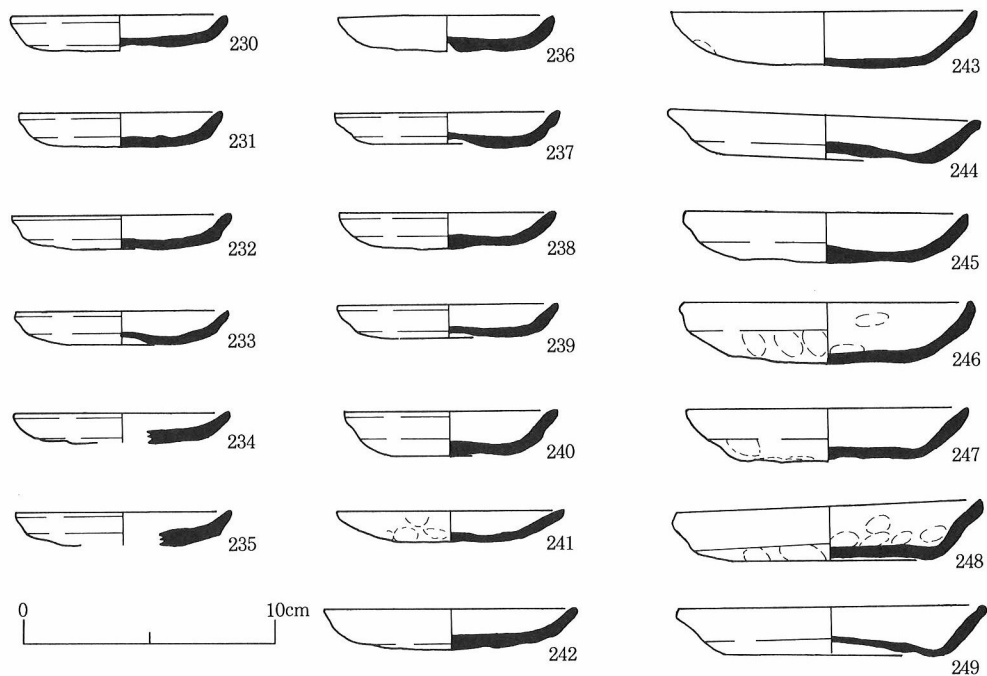
第38图 B-2地区河川5出土瓦器碗实测图(2)



第39图 B-2地区河川5出土瓦器碗・瓦質土器実測図



第40图 B-2地区河川5出土瓦器碗实测图(3)



第41図 B-2地区河川5出土土師器皿、土器質土師器実測図

して外方向に延び外側につづき、先端を尖らせている。内縁は両面より削って刃状を呈する。258は上端部を丸みを呈し、下端部は両側から中央へ三角状に切り込まれている。出土時には長さ約60cmの細い竹を用いた矢が付着していた。上端は両側から5回以上にわたってカットし、丸く仕上げている。下端部は一面から両側よりやや斜めに中央に向けて切り込んでいる。259は一侧の一部欠損。上両角をカットした両側はほぼまっすぐ下りのち外弯して広がる。両下端部から中央部にカットされたえぐりも弧状をなし、上端部にU字の凹みがある。260は約半分欠損。外縁はほぼまっすぐ下り、角をなし大きく外弯したのち下向し端に至る。えぐり部は上端を丸くして斜めに下り角をなして広がり下端に付く。261は約1/3欠損。外縁は上部はゆるやかに内弯するが下方向にはまっすぐに延びる。下部の切り込みは両側から中央部に向けて両平面からカットしている。中央外縁よりに両面がら穿った径0.6cm・0.4cmの2円孔がある。いずれもスギ。

斎串状木製品(273) 上部欠損。細長い短冊形をなし。下端を両側から中央部にむけカットし尖らせている。スギ。

下駄(274) 後部や前歯など一部欠損。一本造りで高さ3.9cmの歯を2本有する。上面のくぼみ状況から右足に使用。上部中央に径1.2cm、中央下よりの両側近くに2.0cmの主上面から穿った円孔がある。上面は木目方向に整形。両側部は上・下部とも斜め方向にカットし、大判状を呈する。歯は上・下方向から荒く削り出している。

その他、箸(284~287)、円板状木製品(291)をはじめ、用途・形状不明の大型板状木製品(254・255・268・269)・小型板状木製品(278~281) —いずれもスギー、小型の円筒形木製品(290)・板状木製品(264) —ともにヒノキ属の一種、用途不明木製品(263)などが出土した。

上層

刀型木製品(256) 刃関を斜めにカットして細くして茎とし、刀身の刃部および銚は両面から削って成形。スギ。

剣形木製品(272) 上部および側部など欠損。下層の270と同形か。

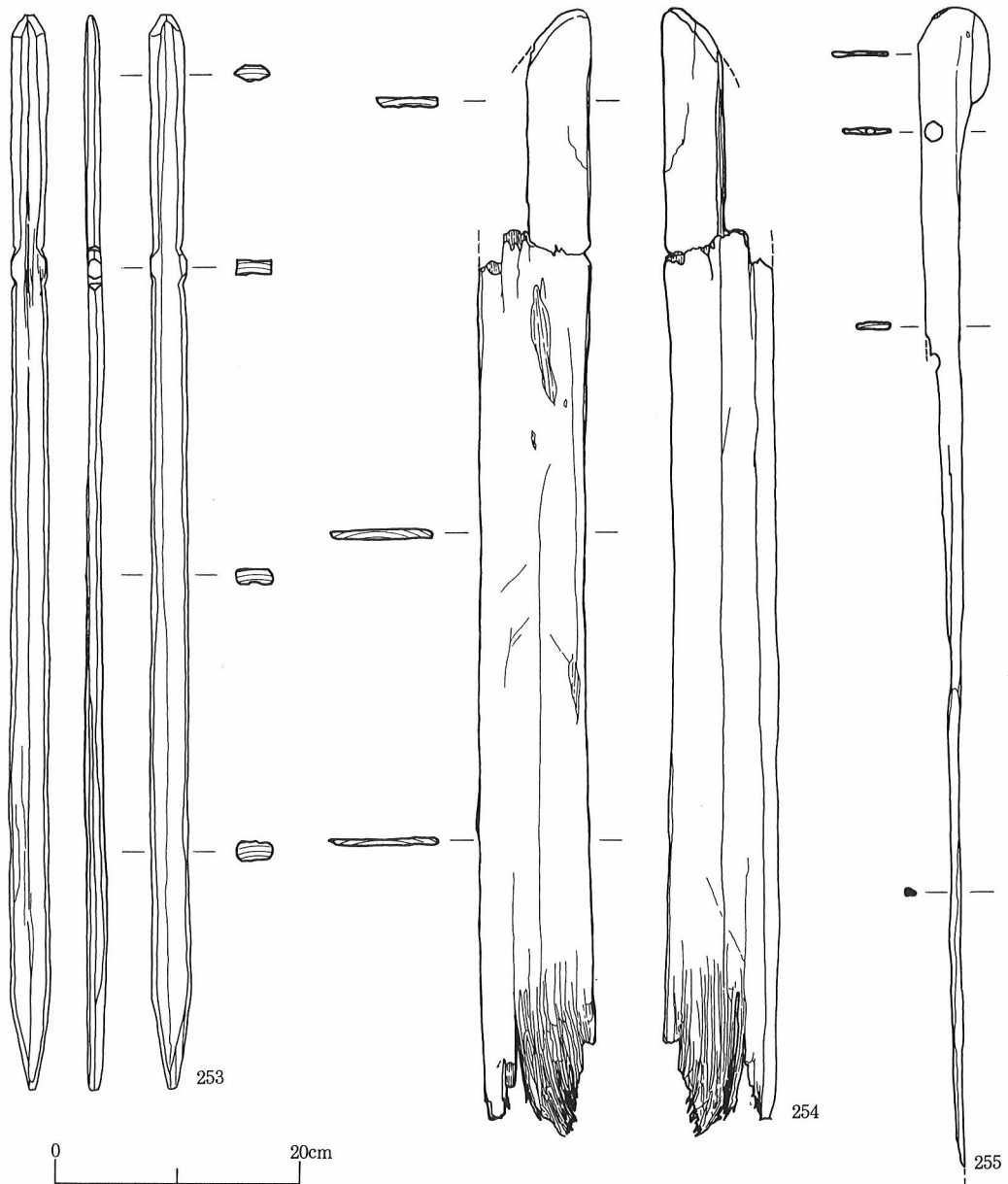
馬型木製品(275) 頭部および後部下側など欠損。頭部から肩部にかけてはゆるやかに彎曲し、顎は三角形に切り込んで現し、背部はほぼまっすぐであるが、後部よりで少しくぼませて座部としている。スギ。

その他、櫛—シキミ—(283)、箸(288・289)、板状木製品(277・282)などがあり、282の一面には「の」字状の墨書が残存していた(図版61)。

河川5出土鉄製品(第47図 図版66)

小刀(292・293) 292は一部刃こぼれがみられるがほぼ完形の直刀。直角の背・刃関を有し、中ほどに目釘孔をもつ茎は、後端が尖り柄の木片が付着している。293は銚など欠損し、刃こぼれも顕著で残存状態が極めて悪い。

これらの遺構と主要遺物は13世紀末から14世紀初頭ごろのものである。

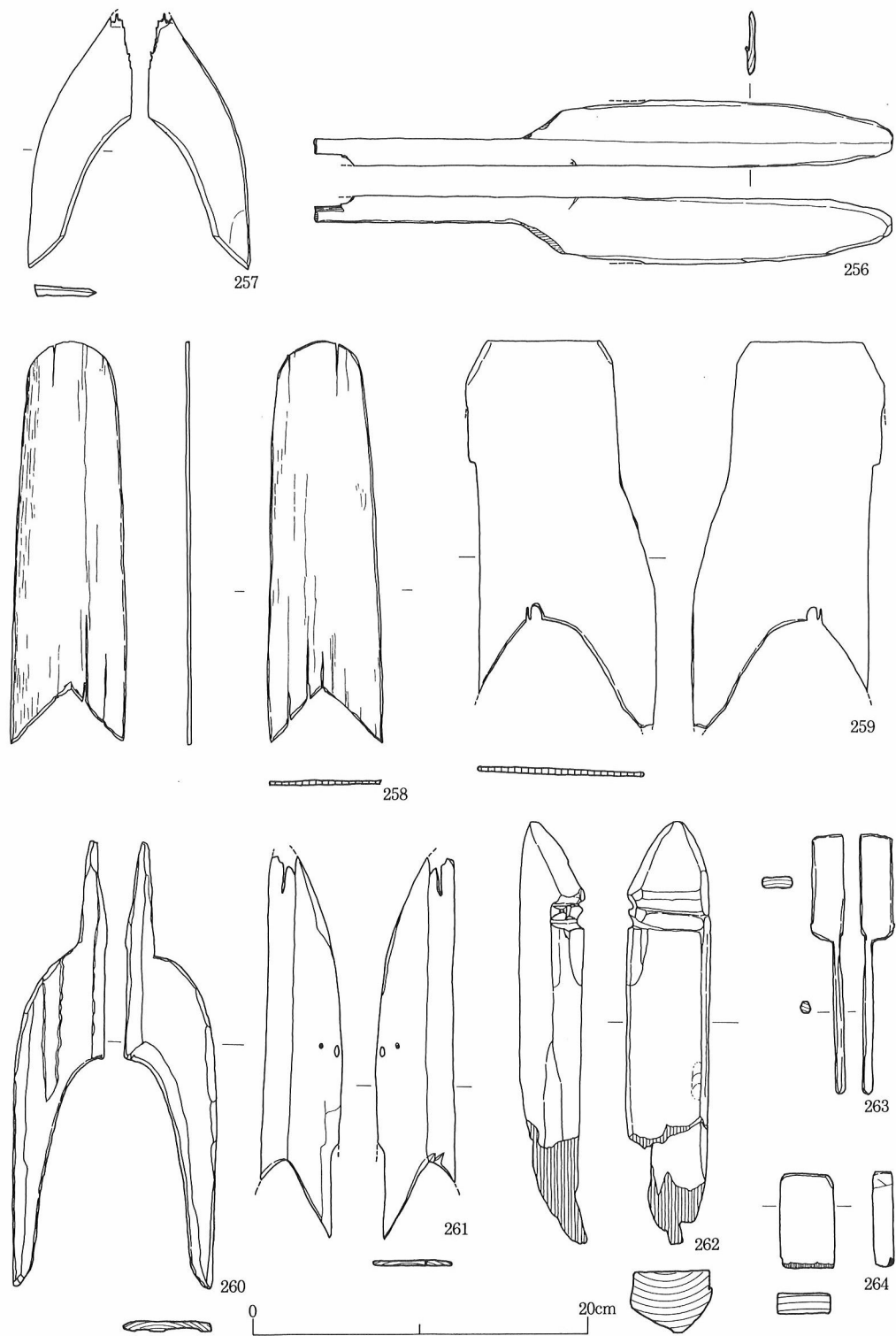


第42図 B-2地区河川5出土木製品実測図(1)

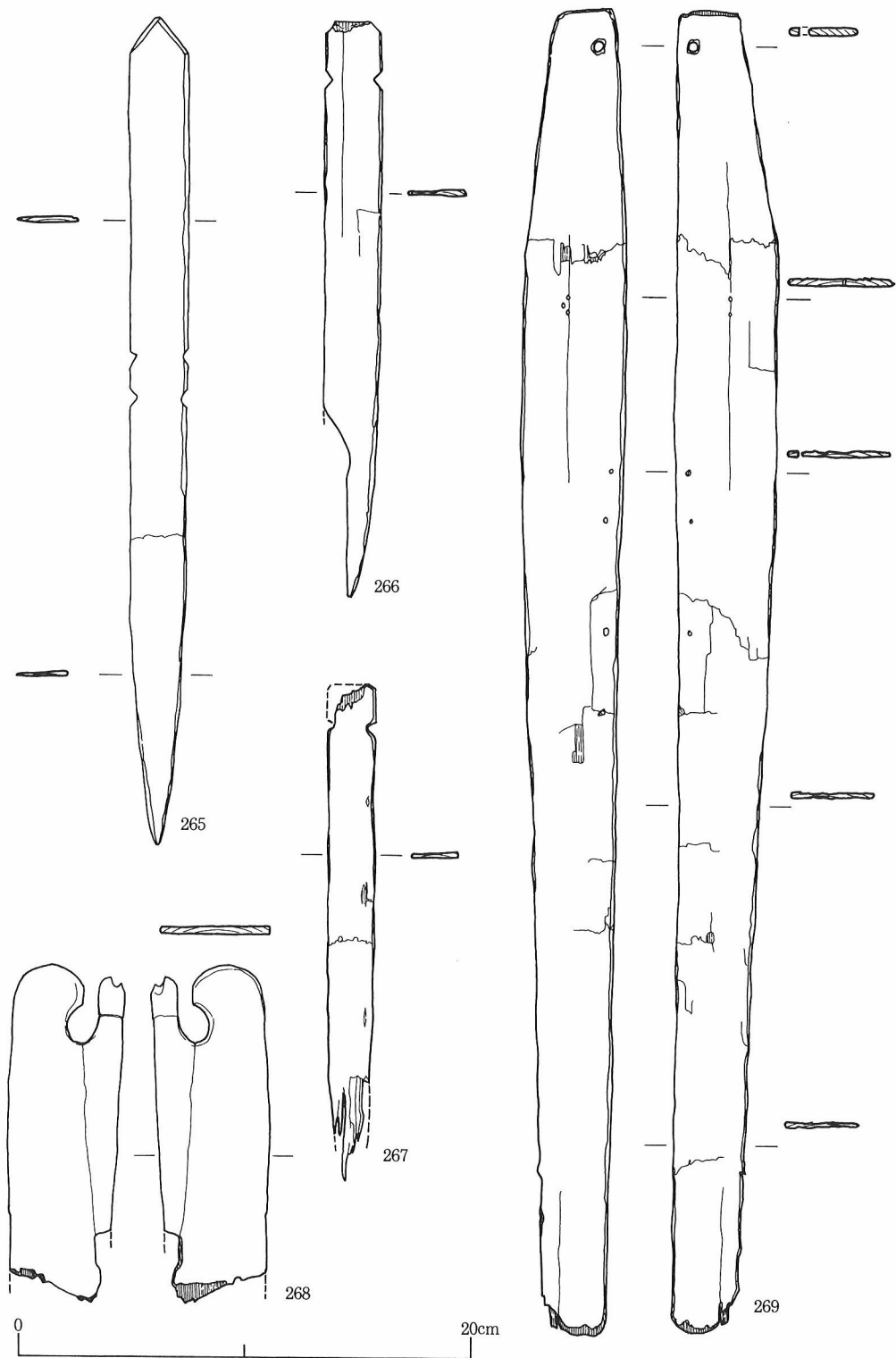
<整地5>

整地5はB-1地区第C・C'層にあたり、土師器皿、瓦器碗の小片、瓦、磁器、陶器、土師質羽釜、瓦質羽釜、瓦質三足羽釜、漆器碗・板材などの木製品、多量の桃の種などの植物遺体、炭、鉄片など出土した。この層上面において、溝26・22・27・28、土坑60・62、柱穴などの遺構を検出した。

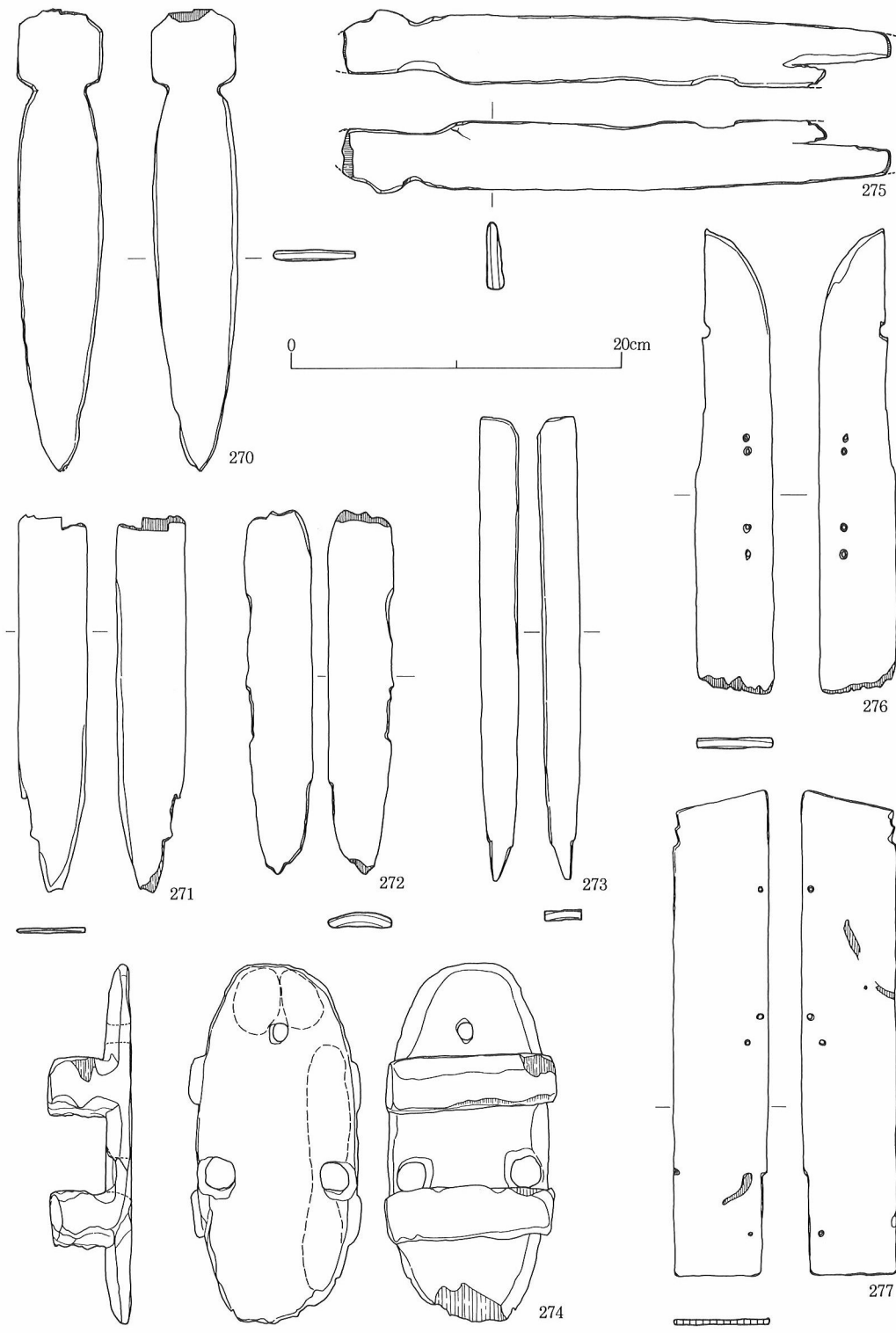
溝26は南から北北東方向に延びる大溝で、幅5~6.8m、深さ0.7~0.8mを測る。溝内はロ~チの7層に分かれ-第8図の東断面図参照-、下部はシルト質粘土・粘土質シルトの堆積層、



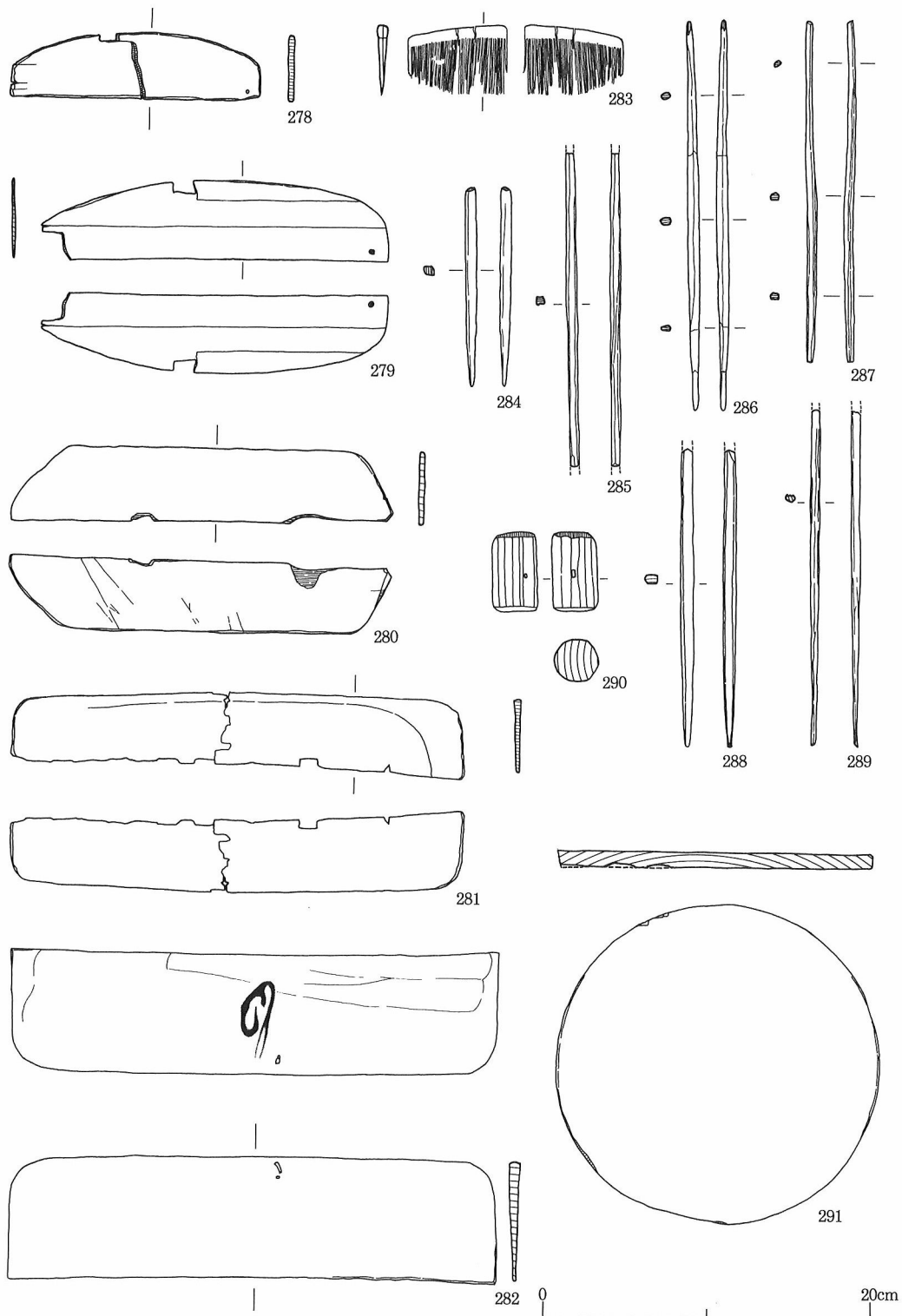
第43图 B-2地区河川5出土木製品実測图(2)



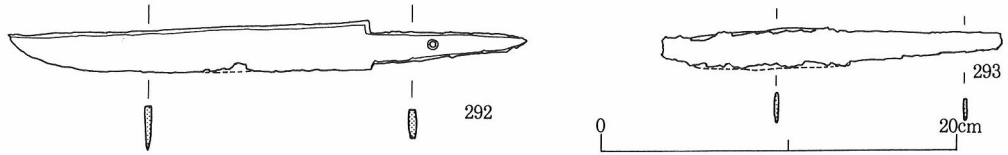
第44图 B-2地区河川5出土木製品実測图(3)



第45図 B-2地区河川5出土木製品実測図(4)



第46图 B-2地区河川5出土木製品実測图(5)



第47図 B-2地区河川5出土鉄製品実測図

上部は埋土で、土師器皿小片・植物遺体などが出土した。この時期、整地4期の溝24と溝26の2条の大溝が活用しており、その東からほとんど遺構は検出されておらず、西側（河川4との間）の土坑・柱穴群などの住居域を画する役割を果たしていたと考えられる。

土坑62は、B-1地区西端で検出し、第4次No.4のSK16の東側部分である。検出幅は南北4m・東西1.4m、深さ0.4~0.5mを測る。土坑内は、ほぼ北西-南東に4ヶの人頭大の石が並んで、その周辺には中小の石とともに、木杭が6本打ち込まれていた。これらの遺構はSK16で検出されたしがらみ状遺構の一部である。下部は灰オリーブ色シルト質砂・砂質シルト（イ・ア）-堆積土、上部はにぶい黄褐色シルト質粘土（土坑）-埋土に分かれ、瓦器碗・土師器皿・瓦質土器の破片と砥石などが出土した。

土坑62の東側には南東方向への溝27、東から東南東方向への溝22、北東方向への溝23が派生していた。溝27・22は幅0.5~0.7m、深さ0.2~0.3m、溝23は幅0.1~0.2m、深さ0.1mを測り、溝27から砥石片、それと各溝内からは瓦器碗・土師器皿などの小・細片が若干出土した。

この時期の柱穴群はB-1地区北西部からB-2地区北東部にかけて、ほぼ円形のピットを85個検出し、そのうちP38（図版38）など7ピットには柱根の一部が残存していた。

河川4は河川5とほぼ同じく南西から北東方向に走り、その東側を検出した。西側の大半は河川3以降の流れによって削り取られていた。その東斜面からは瓦器・土師器皿と伴に矢羽根形・剣形木製品など多量の遺物が出土した。これらの遺物は、河川5出土遺物と同じ目的で行なわれた祭祀に使用され、それを投棄したものと考えられる。

河川4出土の主な遺物

土器（第49図 図版53~56）

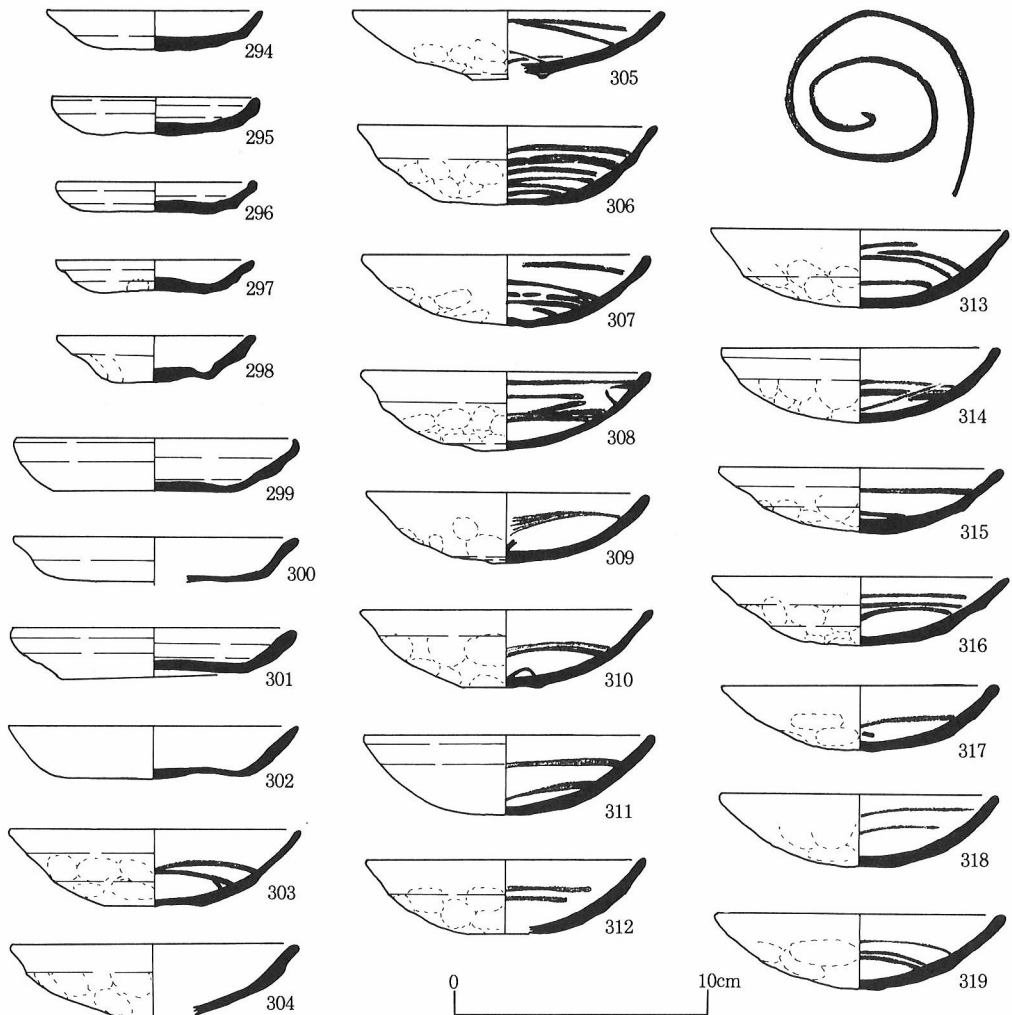
瓦器碗（303~319） これらを含め完形または完形復元できたものは27個。いわゆる大和型1個。和泉型26個で、内3個は極めて退化したはりつけ高台がついてるが、23個にははりつけ高台はみられない。

土師器皿（294~302） これらを含め大皿7枚、小皿8枚。

木製品（第32・50図 図版66）

剣形木製品（320） 完形品。柄部は両面より整形し、先端を四角くおさめている。両側に突出する鏝部は各側面を上下とも斜め方向に切りだし台形状を呈する。刃部は先端より約1/3のところを最大幅をなし、両縁とも両面から削り断面レンズ状を呈する。スギ。

矢羽根形木製品（94・95 第32図） 95は片側下部欠損。先端部は両側とも斜め方向に直線にカットし、両側はやや末広がりぎみに下降して、下部は両側部から中央部に三角形に片面よ



第48図 B-2地区河川4出土土器実測図

り切り込み、さらに上角部と下端近く（欠損しているが両方）にU字形の切り込みを有する。94は一部欠損しているが、先端から両側へやや外弯ぎみに下り、下部は両端から中央へ片面から三角形に切り込んで成形。

これらの遺構などは14世紀前半～中前葉にかけてのものである。

<整地6> - B地区第3遺構面（第53図 図版28～31）

整地6はB-1地区第B・B'層にあたり、調査時には2層に分けて遺物を検出した。上層からは土師器皿（363～366）、瓦器椀、土師器羽釜、瓦質羽釜（361・362）、瓦質三足羽釜、須恵質土器、陶器、磁器、瓦、桃の種などの植物遺体、貝遺体、焼土が出土し、下層からは土師器皿（367・368）、瓦器椀、土師器質羽釜、瓦質羽釜、瓦質三足羽釜、須恵質土器、陶器、青磁などの磁器（369・370）、漆器椀・杭などの木製品、砥石、桃の種などの植物遺体、炭、焼土が出土し、他に瓦質摺鉢、土錘、軽石も出土した（第55図）。この層の上面において、溝14～17、土坑60、P2（第8図 西断面）をはじめ柱穴であるピット群、と一時期後の土坑28な

どの遺構を検出した。

溝14 溝26にはぼ重なるような形で形成され、南～中部にかけては幅5～6mだが、北部で西肩が大きく北西方向に広がり、調査地北端では幅13mを測った。溝内北部の東側には、19本の杭（竹1含む）を打ち込みそれをつなぐ横木のある堰状遺構を検出した。そして杭周辺に堆積した砂層上面には部分的にヨシ束が見られた（図版29）。下部に溝26を巻き上げた土もみられたが、大半は砂・シルトの堆積であった。

溝14出土遺物

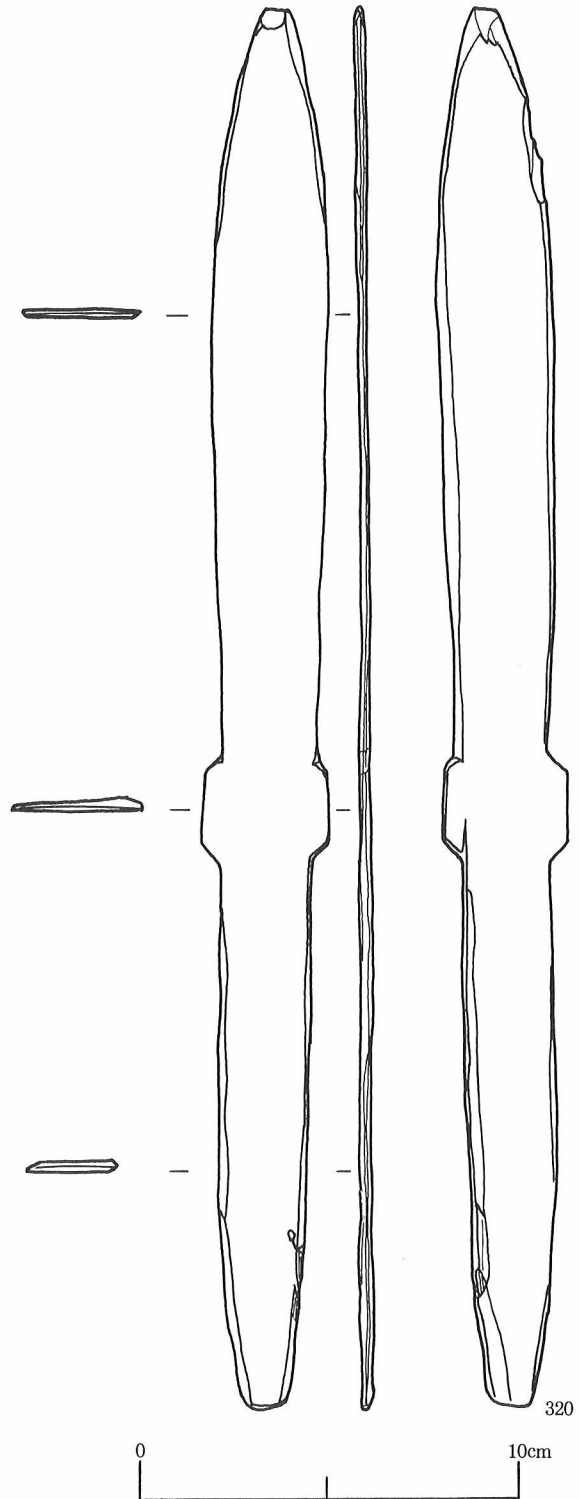
土器（第51図）

下層の溝26巻き上げられたものを含め、瓦器椀（337）・土師器質甕（338）・土師器皿（321～336）などが出土した。

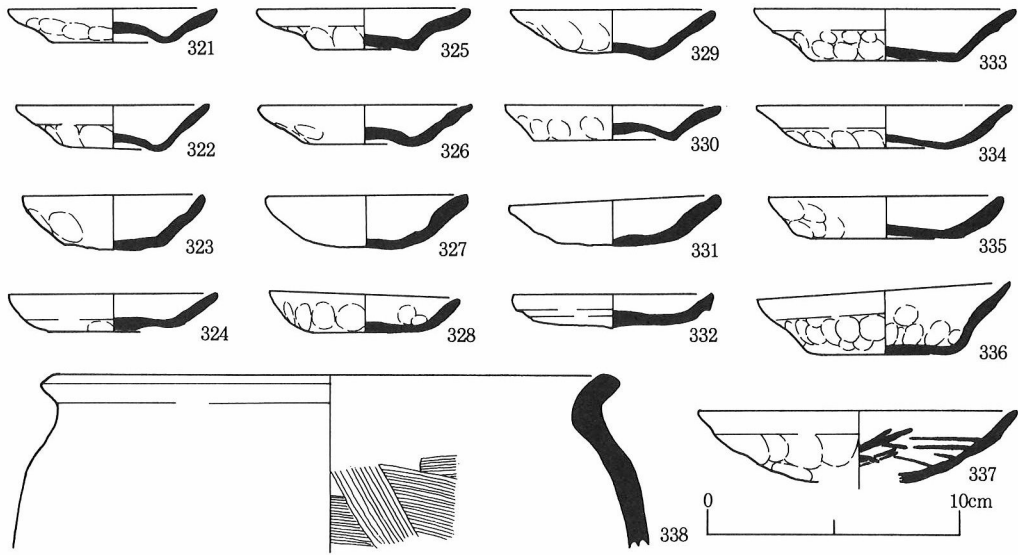
木製品・鉄製品・石製品（第52・54図 図版63～65）

人形（339） 下層出土。やや扁平な立体形の組み合わせ人形の頭部。頭頂上は前斜する烏帽子、後頭部にはまげを削り出し、前面に口、両側面前より目を四角く掘込んでいる。頸部は上方向からカットして細くなり、その下を胴部に差し込むように球状にしている。

へら状木製品（343・346） 343は柄部の後方側欠損。身部は長楕円状で、断面レンズ形を呈する。346は柄部の先端部が尖がり細い。身部は台形状を呈し、先縁辺は使用による擦りへりが顕著である。スギ近似種。



第49図 B-2地区河川4出土木製品実測図

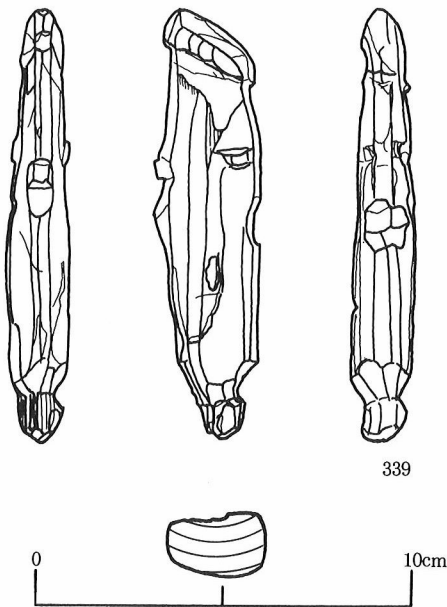


第50図 B-1地区溝14出土土器実測図

有孔円板 (344) 板目材を円形にカットして成形し、中央に小円孔を有する。スギ。

漆器椀 (350~353) いずれも欠損部を有し、塗の剝離も多く残存状況は不良。断面方形の高台から内弯して高く立ち上がる。内面見込みに350・352は鶴? 2羽など、353は不明だが朱塗の文様がみられる。350・352はクリ近似種。

下駄 (345) 上部の一部および片下部欠損。角丸の長方形を呈し、上面のへこみ状況から右足に使用。コウヤマキ。

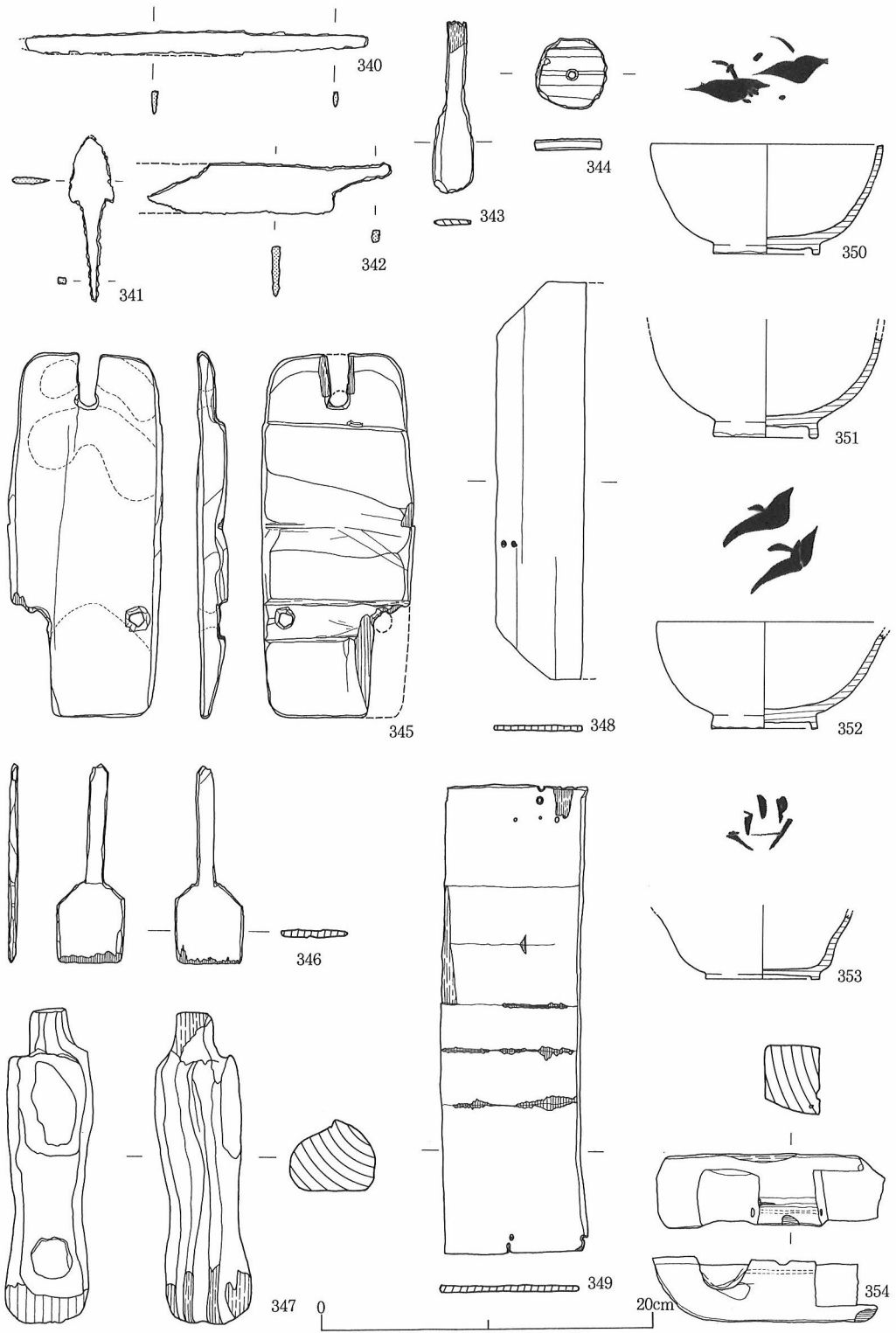


第51図 B-1地区溝14下層出土人形木製品実測図

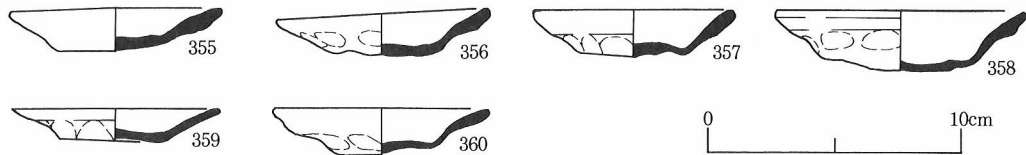
砧 (347) 柄部の大半と身部片面など欠損。柄部は身部より一段低く削り細く、断面は本来円形を呈する。身部中央は使用によるへこみがみられる。コナラ属コナラ亜種。

その他用途不明の部材 (348・349・354) などが出土した。348と349は小円孔を有する板状でともに容器の部材。354は舟形を呈し、半円形および方形の装着用のえぐり部を有する。

刀子 (340・420) 339は銚側は欠損し刃こぼれ顕著。背・刃鬩を有し、茎部は後方へ少し細くなってる。419は一部刃こぼれがみられるがほぼ完形で、茎部に薄板の銅巻きを施し、柄としている。柄部は長さ8.6cm、幅1.2cmを測り、後端をやや弧状におさめている (図版28参照)。



第52图 B-1地区沟14出土木製品実測图



第53図 B-1地区土坑60出土土器実測図

包丁 (342) 鋭側欠損。角丸方形の刃関から下部側を細した短い茎を有する。

鉄鏝 (341) 有茎三角形形式。断面は身部レンズ状、茎部方形を呈する。

石鍋 (421) 破片。復元径約14cm、口縁厚0.8cmを測り、外面口縁下部に幅0.8cm、高さ0.5cmの削り出しの突帯を有し、胴部に径0.5cmの円孔が穿かれている。外面に多量のスス附着。

土坑60 径約5m、深さ0.5mのやや変形した円形を呈すると思われる。北半分は調査地外。土坑内は淡黄色 (5Y8/3) 粗粒砂、暗オリーブ灰色 (2.5GY4/1) シルト質粘土、オリーブ黄色 (7.5GY6/4) などが堆積し、コブシ大～人頭大の石塊と杭材などの木片が散乱していた。土師器小皿 (355～360) などが出土し、上部などは土坑28によって攪乱されていた。

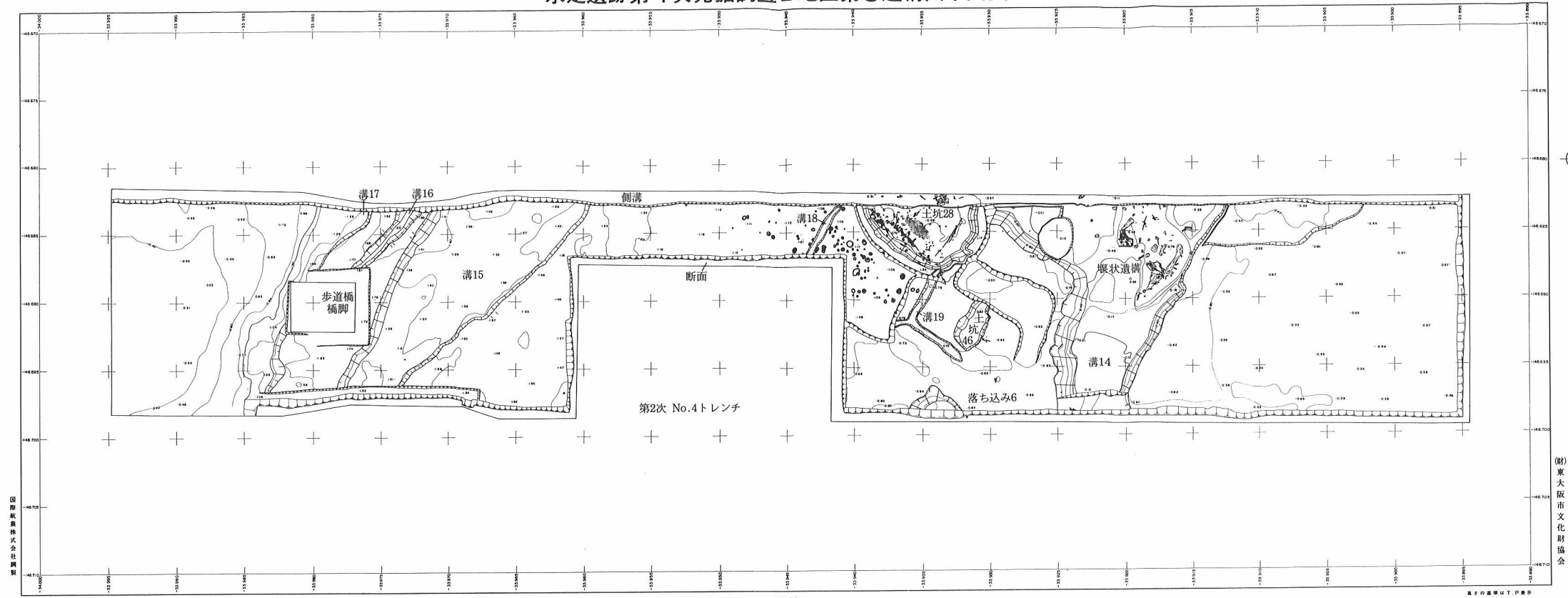
B-1地区北西部からB-2地区北東部にかけて1条の溝と径0.1～0.5m柱穴であるピット群を検出した。

B-2地区西部では河川4埋没後に盛土した上面で3条の溝 (溝15～17) などを検出した。溝はどれも南西から北東に走っていた。溝15は検出の幅・南で4m、北で12m、長さ19.4m、深さ0.1～0.4mを測り、土師器皿・瓦器碗の破片とともに、残長17.4mの石鍋 (420 図版65) などが出土した。溝16は検出の幅0.8～2m、長さ6m、深さ0.1～0.4mを測り、土師器・瓦器の小・細片が出土した。溝17は西側が河川2によって削り取られ本来の幅不明。東肩の一部も歩道橋南橋脚の基礎で切断されていた。検出の復元長15.4m、深さ0.3～0.5mを測り、土師器皿、瓦器碗・瓦質羽釜などが出土した。

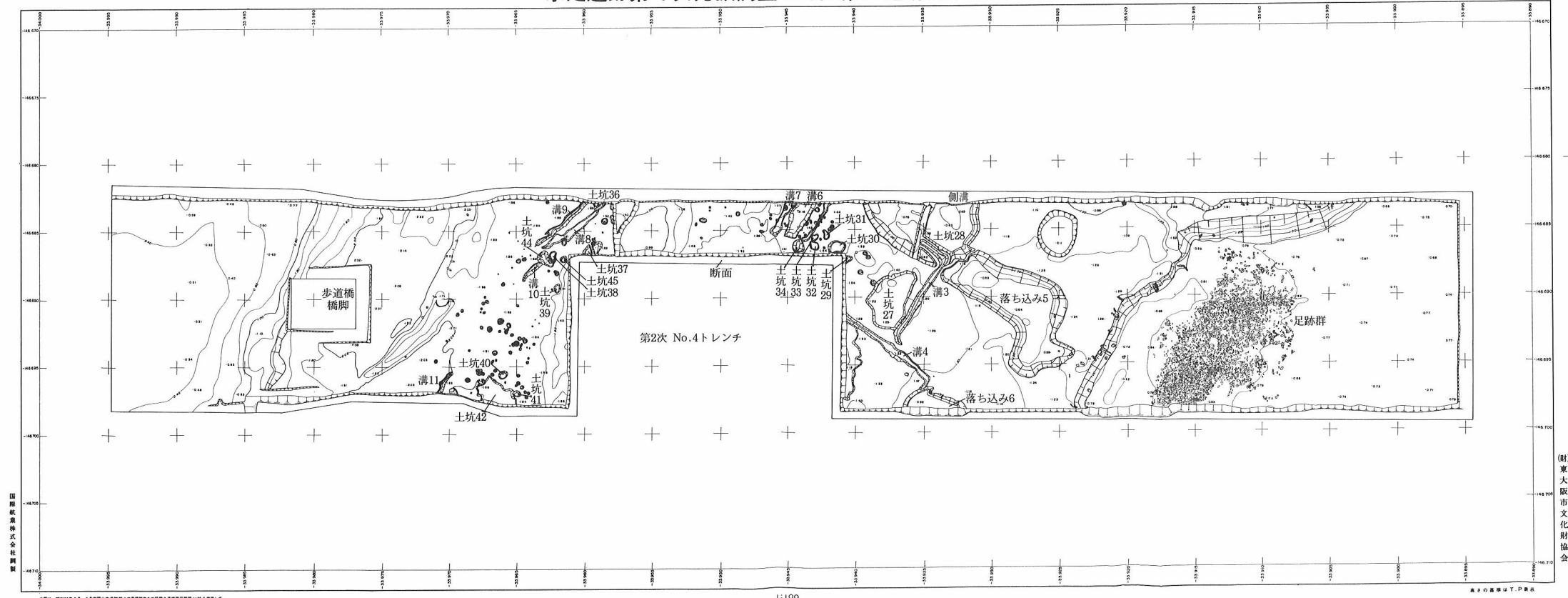
これらの遺構は14世紀中後葉から後半ごろのものである。

土坑28 (第55・56図 図版30) 埋没した土坑60の上に形成されていた。検出長4.2×3.2m、深さ0.65mの不定楕円の浅めのボール状を呈すると思われるが、北半分は調査地外。土坑内の東南および西南側に杭列、ツル材、横木を用いたしがらみ状の施設を検出した。径3～10cmの杭材を10～20cm間隔でやや前後させながら少し外方向に斜めに打ち込み、その上部の一部はツル材で編むようにしてつなぎ、横木 (竹も) を所々に添えるように形作られていた。土坑内は暗オリーブ灰色 (5GY4/2) 粘質土の埋土、黄褐色 (2.5Y5/3) などの砂、暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土、灰色 (5Y4/1) などの粘土、灰オリーブ色 (7.5Y4/2) シルト質粘土とオリーブ黄色 (7.5Y4/2) 砂などの堆積土からなり、水が流れ込んで溜まりながら堆積層が形成されていき、埋没されたと思われる。土坑内中央やや西より (西南しがらみ施設内側) に、2.5×0.8m、厚さ10cmの卵形に集積された多くのセタシジミ、オオタニシ・マルタニシなどのタニシ類、カワニナなどの貝遺体群が見られ、土師器皿 (372～384)、瓦質羽釜 (389・390)、ミニチュア土器 (391) - 第57図- や東播系甕 (393)、備前焼すり鉢 (395)、青磁碗 (397) - 第59図-、砥石

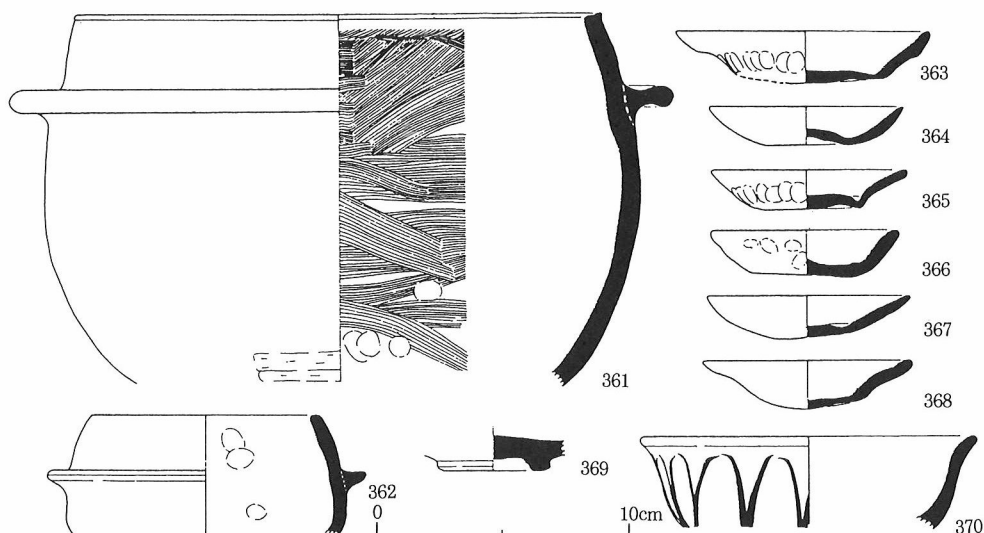
水走遺跡第4次発掘調査B地区第3遺構面平面図



水走遺跡第4次発掘調査B地区第2遺構面平面図



第54図 B地区第3・2遺構平面図



第55図 B-1地区第B・B'層出土土器実測図

片2個と石塊などが出土した。土器の中には下部の土坑60よりまきあげられたものもあった。

B-2地区西側(第2次 No.4の西)でのこの時期以降の遺構は、近代の溝—南南西から北北東方向に走る幅7.7~9m、深さ0.8~1.3mの断面逆台形状を呈する—によって切断され、東部と西部—歩道橋南橋脚付近—に分けられる。また、西部西側は河川2により切断されていた。第6期では短期間に2期の整地(盛土)が行われ、それに伴う各遺構を検出した。1期整地は褐色(10YR4/4)砂・粘質土で、東部では溝1条、土坑3基とピットを30、西部では土坑8基(土坑19~26)、落ち込み1、溝1を検出した(図版35)。2期盛土は褐色(7.5YR4/3)砂・粘質土で、東部では土坑10基(土坑36~45)、溝4条(溝8~11)、ピットを98(第53図 図版34)、西部では土坑4基(土坑15~18)を検出した(図版35)。この中の土坑21からは瓦質すり鉢(394)など、土坑22からは瓦質羽釜(391)などが出土した—第59図—。また、土坑15は東西4m以上、南北10m以上、深さ0.6mの不定のトラック状を呈し—西側の大半は河川2により破損—、その中は暗褐色(10YR3/4)砂質土で、瓦質羽釜(400)、土師器皿(401・402)—第60図 図版56—、青磁碗片、石塊など多くの遺物が出土した。

河川3 旧吉田川の位置にはほぼ平行するようになり、歩道橋南橋脚付近のVI3ライン東で、少し東にふるがほぼ南北方向の東肩と河川内の堆積砂などを検出した。第5次調査P109において、15世紀後半以降の西肩が確認されており—文献⑩—、東肩斜面がゆるやかに傾斜していたのに対し、西斜面は傾斜にきつい凹凸がみられ、西側が瀬にあたっていたようである。その結果、この時期の川幅は約40~45m、深さ2.5~3mを測った。

河川3活用時にその東肩部周辺に黄褐色(10YR5/6)砂質土などの盛土をし—土坑15など埋没—、その上面で2基の土坑を検出し(第59図)、土坑内からは土師器・陶磁器などの小・細片が出土した。

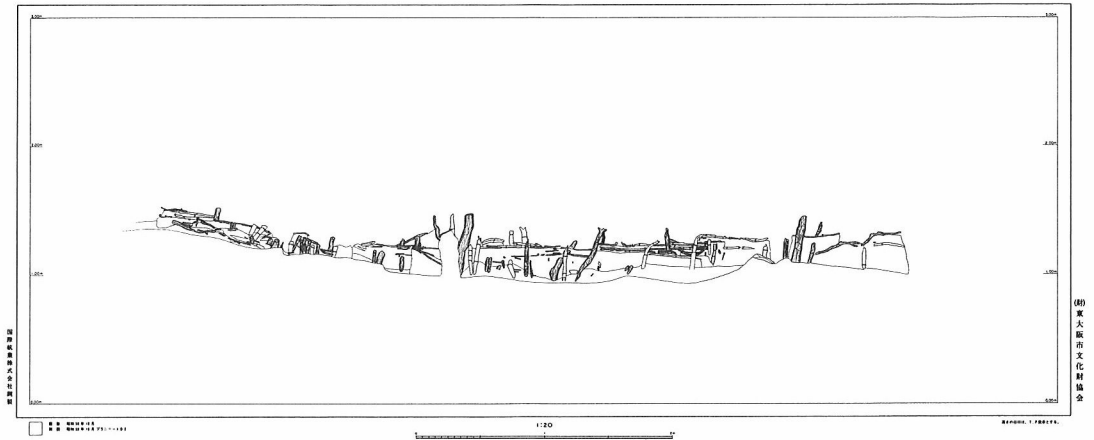
これらの遺構は15世紀~16世紀前半のものと思われる。

< 整地 7 >

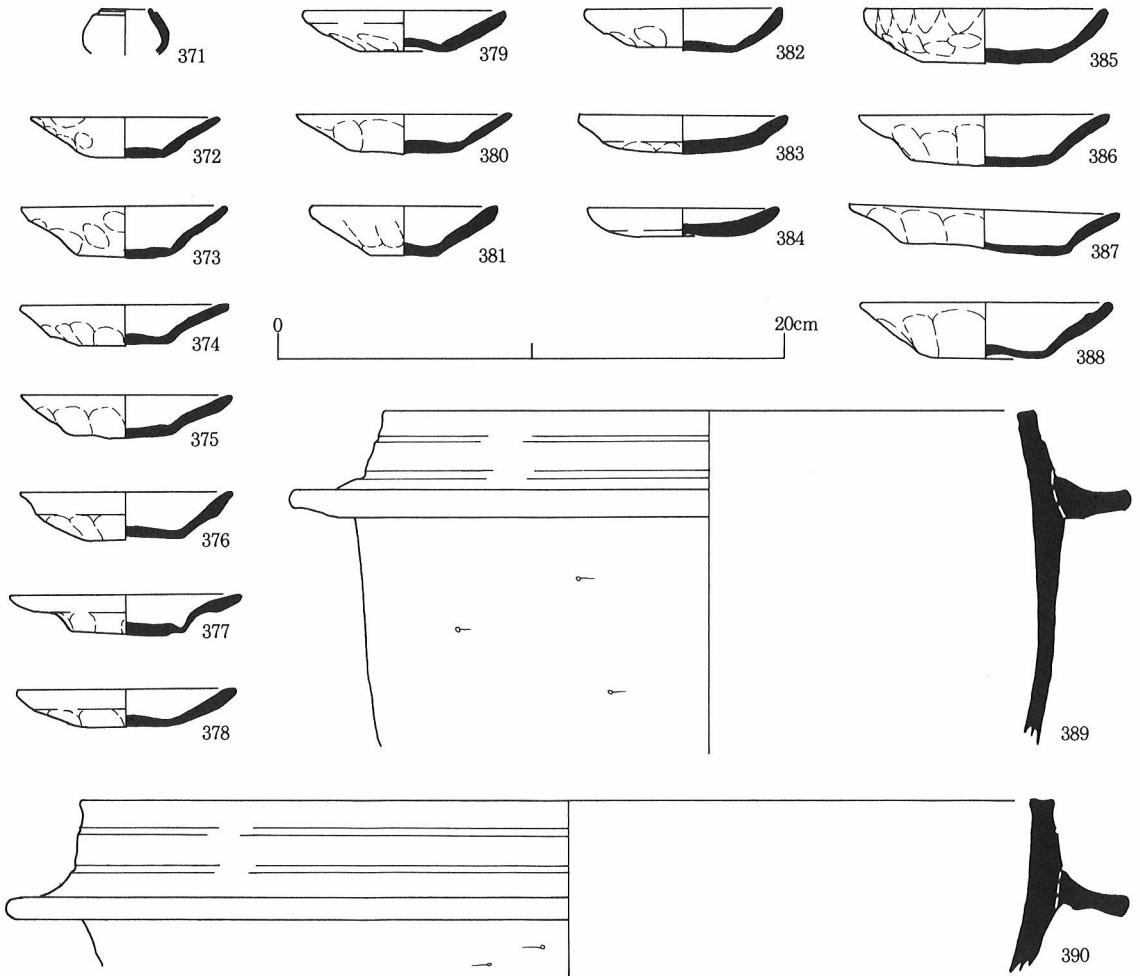
整地 7 は B-1 地区第 A' 層にあたり、土師器皿、土師質羽釜、瓦質羽釜、瓦質三足羽釜、瓦質摺鉢、青磁などの磁器、陶器、須恵質土器、瓦、杭・有孔円板 (418 図版64)・板状などの木製品、動物遺体、多数の桃の種・松ぼっくりなどの植物遺体、貝遺体、軽石、炭、焼土が



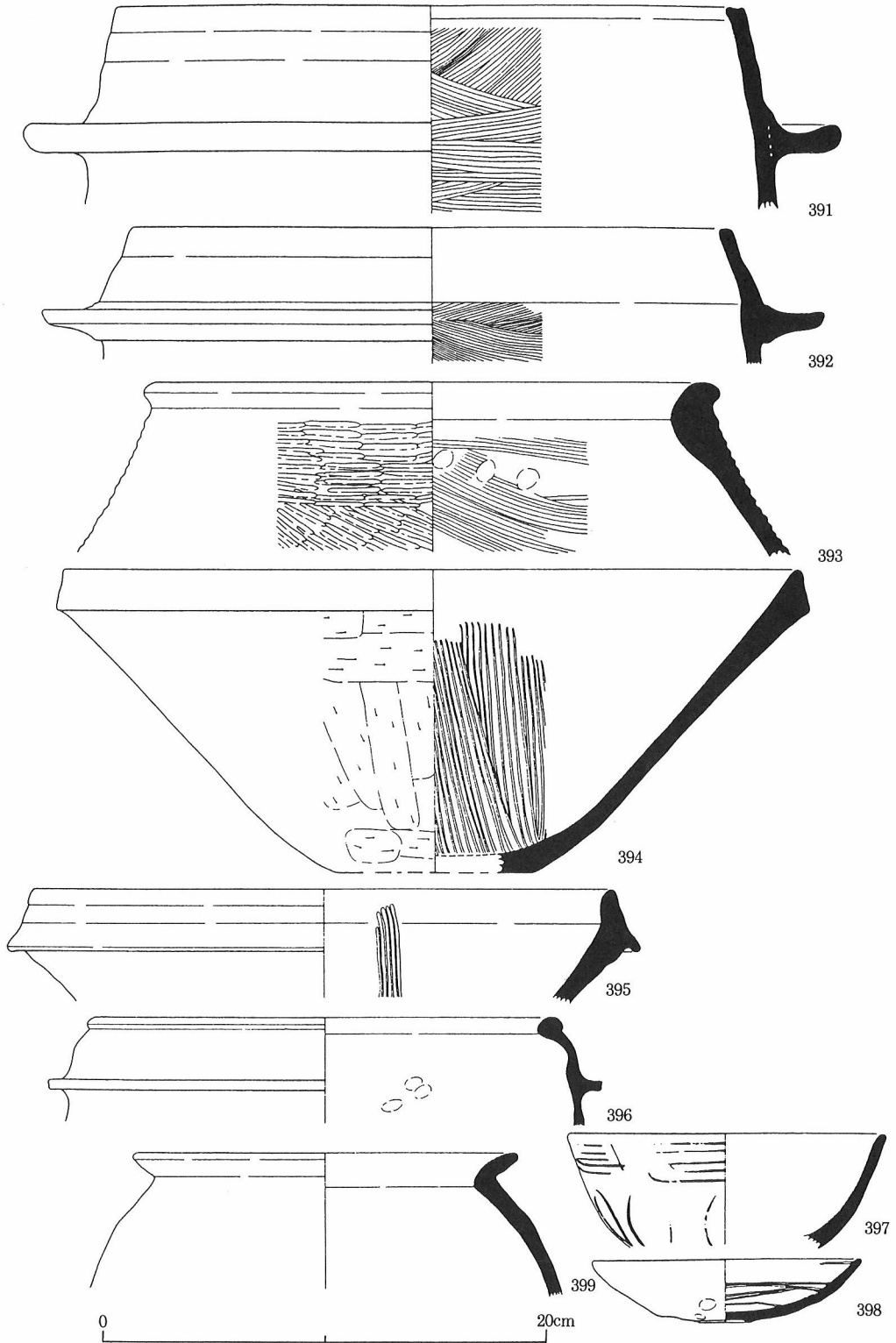
第56図 B-1 地区土坑28平面図



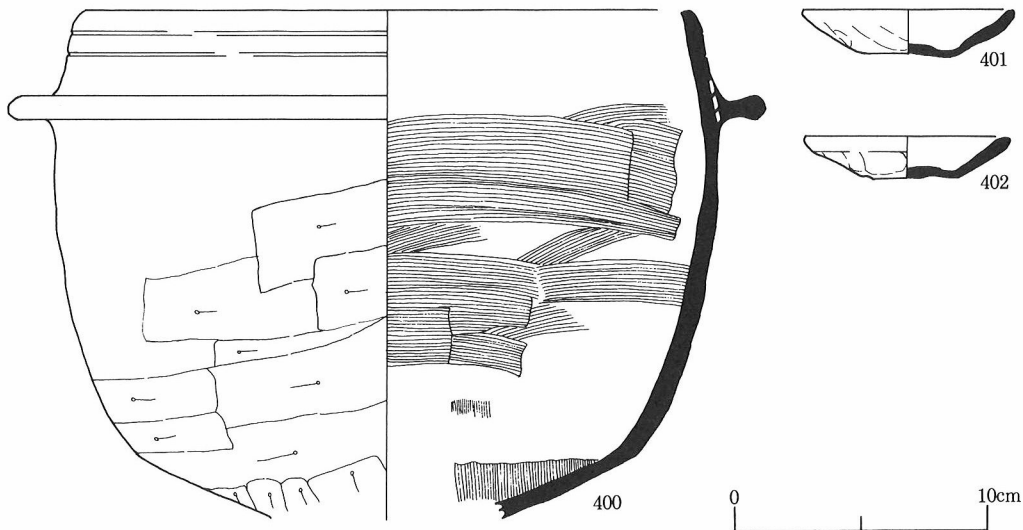
第57図 B-1地区土坑28側面図(南西より)



第58図 B-1地区土坑28出土土器実測図



第59图 B地区土坑21·22·28、沟9出土土器实测图



第60図 B-2地区土坑15出土土器実測図

出土し、とくに下層からは他に漆器椀・曲物の底板・板または棒状などの木製品が出土した。

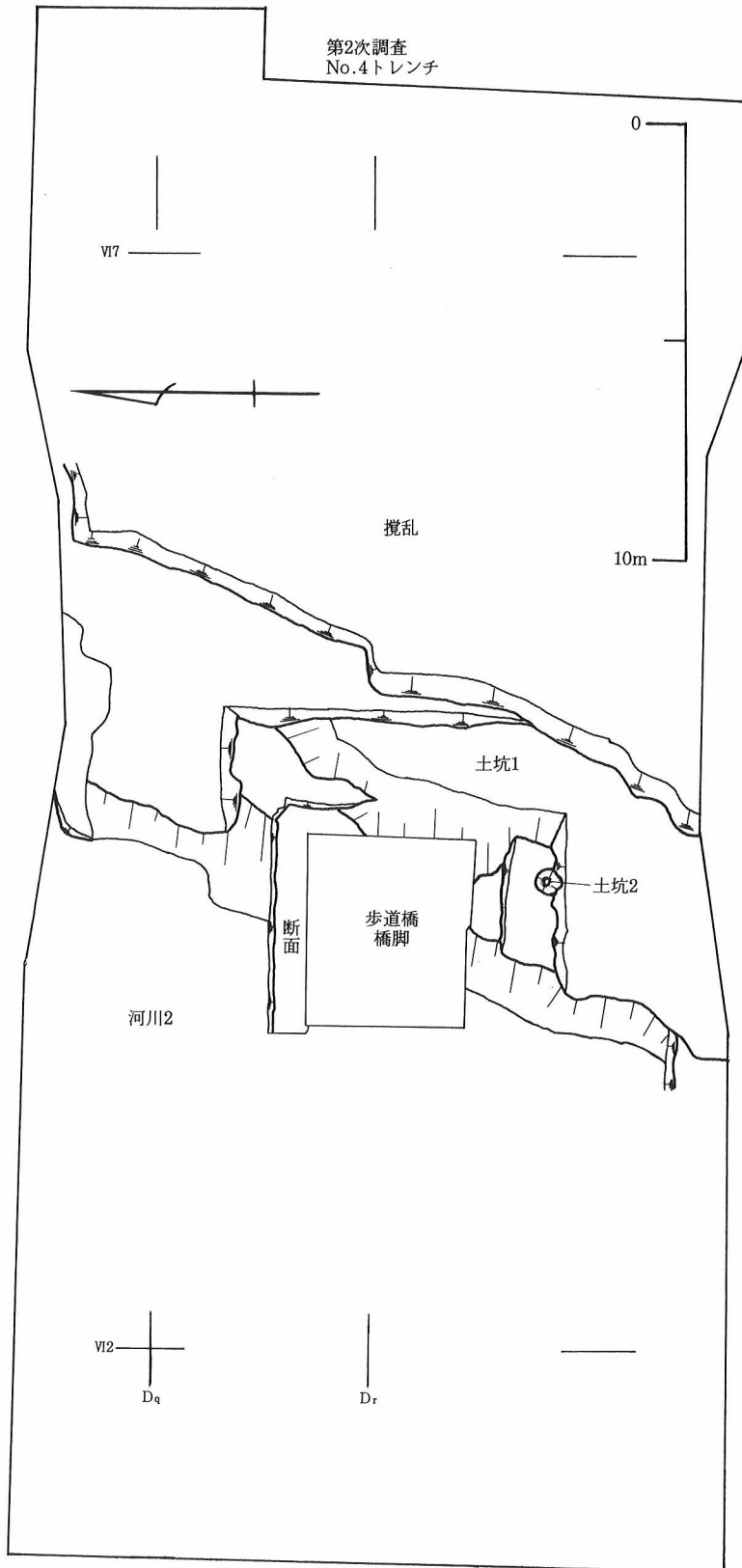
この時期、A地区ではほぼ全面にハス田が広がり、B-1地区東部にもハス田はつづくが、中部の整地7=第A'層上面においては土坑・溝など、B-2地区では柱穴・溝・河川2などを検出した。

A地区第3遺構—ハス田畦畔（第60図 図版36・37）

第9層はハスの実を多量に包含し、恩智川西岸から水走遺跡のほぼ全体に広がるいわゆるハス田層である。第9次調査においても南北方向の畔を確認している—文献⑤—が、明確な畦畔は今回の調査のものだけである。第9層a・b層をカットして精査すると、主に第11層—暗灰色粘土質シルト—を切り込んで作られた畦畔が見られた。A-1・2地区で検出した南北に延びる畔は、この粘土質シルトで形成されており、上部の幅1~1.5m、高さ0.5~0.7mを測る。これに対し、A-2・3・4地区で検出した畦畔は、粘土質シルトと砂質土の混土を盛り上げて形成しており、上部での幅は1~1.2m、高さは北側で0.4~0.6m、南側で0.2~0.3mを測る。A-2・3地区の南側は整地層が広がっていたと考えられる。

第9層のハス田層はa~e層に分かれ、a層—オリーブ黒色シルト質粘土—からは、須恵器・瓦器の小・細片とともに土師器小片、木鏝（404 第61図 図版58）や漆器の椀・皿などの種々の木製品、動物遺体、貝遺体、ハスの実などが出土した。b層—暗緑灰色粘土質シルト—からは、須恵器・瓦器細片と土師器小片が出土した。c層—暗オリーブ灰色シルト質粘土—からは須恵器・瓦器細片と、土師器皿片、陶器片、平瓦の小・細片、木製品、銭貨（皇宋通宝 407 第64図）、動物遺体、炭化物、モモの種、ハスの実などが出土した。e層—暗緑灰色シルト質粘土—からは樺巻き把手—カヤー（405 第61図 図版58）などが出土した。室町時代後半から安土桃山時代。

B地区第A'層上面遺構（第53図 図版32・33）



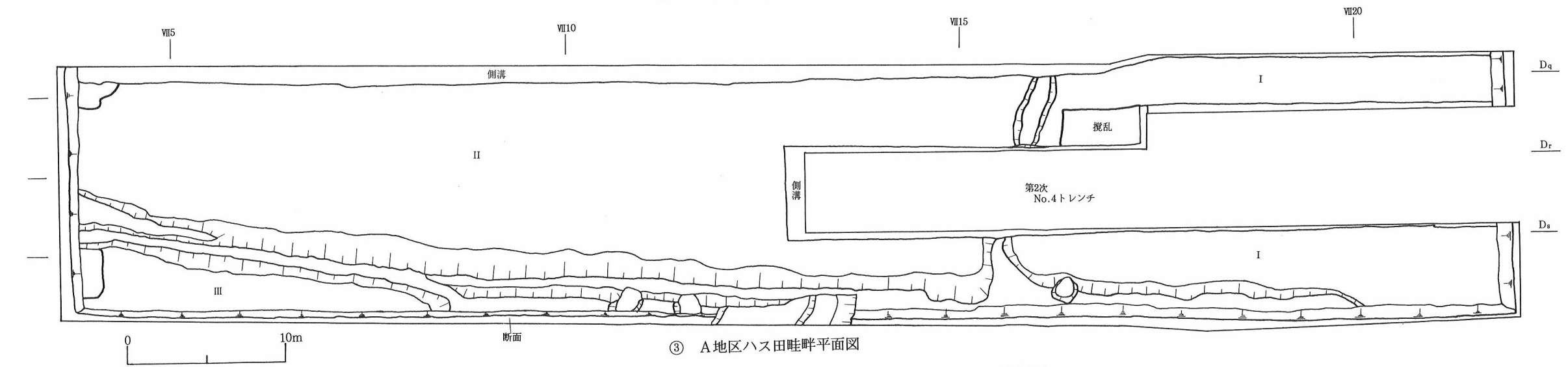
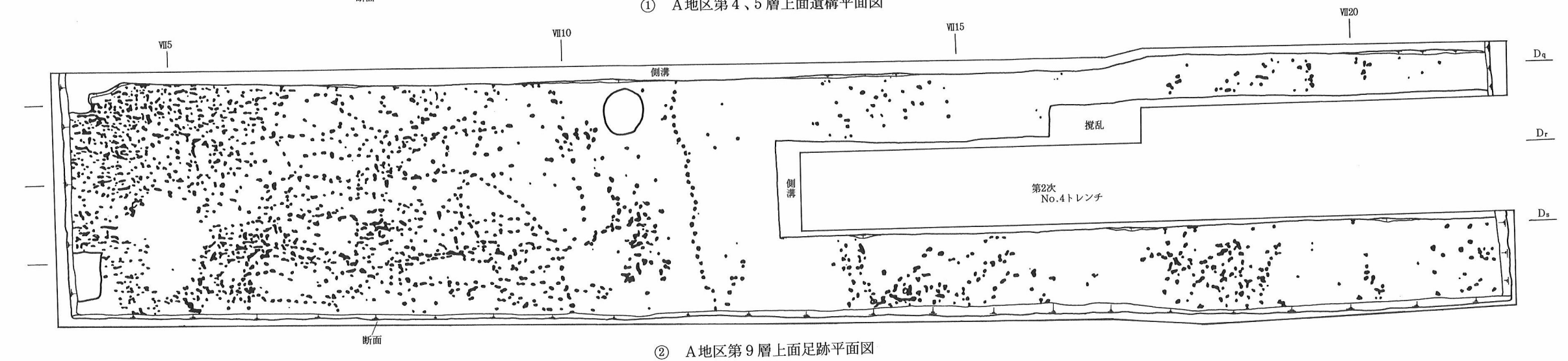
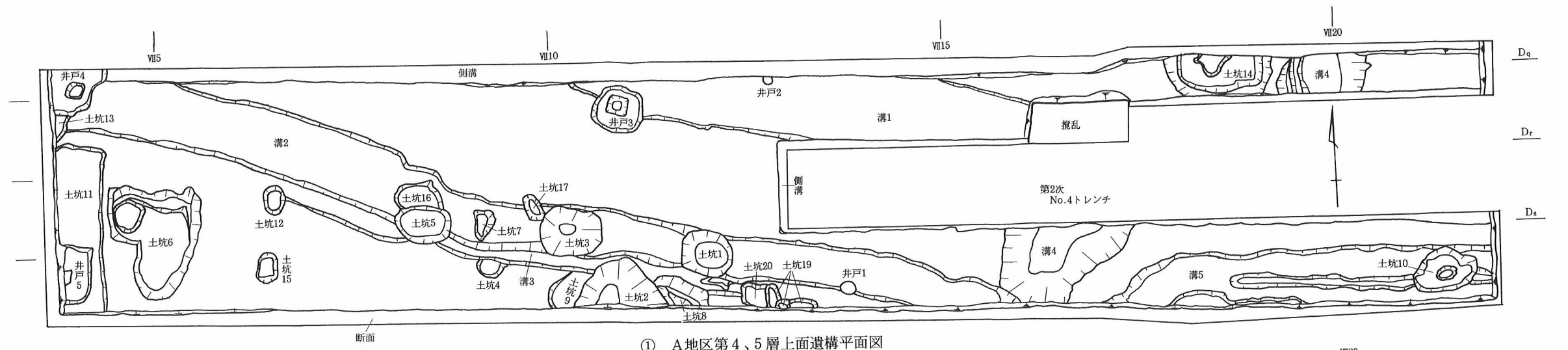
第61図 B-2地区第4層上面遺構平面図

東に広がるハス田と住居域との高低差は0.5~0.7mを測る。調査地域ではB-2地区で検出した河川2との間約60m以上が住居域になっていた。この時期の主な遺構としてはB-1地区の落ち込み5・土坑27と溝・柱穴群などである。

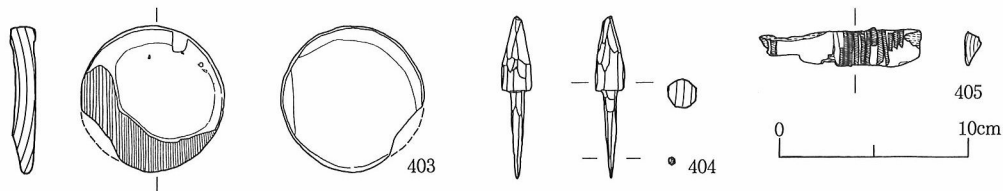
落ち込み5は、幅3~3.6m、長さ11m、深さ約0.6mの偏平なZ状を呈し、東斜面および肩部から人頭大の石4個を検出した。上層は暗オリーブ灰色(5GY3/1)粘土質シルトの埋土、下層は暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)シルト質粘土-下部砂多く含む-に分かれ、土師器小・細片とともに漆器椀-クリ近似種-(図版32)などが出土した。

河川2は、現在の川中歩道橋南橋脚の西側でその東肩などを検出した(図版43)。東肩は中央付近で鉤状に折れていたがほぼ南北方向に走る。

これらの遺構などは



第62図 A地区第11層上面ハス田畦畔、第9層上面足跡、第4・5層上面遺構平面図

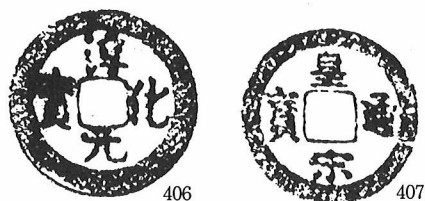


第63図 A地区第8・9層出土木製品実測図

16世紀中～後半のものである。

<整地8>

整地8はB-1地区の第A層にあたり、A地区およびB-1地区東部はひきつづきハス田であり=A・B地区の第8層-暗緑灰色シルト質粘土など、多数の足跡がみられ、整地層上面では落ち込み6、柱穴などを検出した。整地は北側で東方向に広がり、整地とハス田の間には0.5~1mの高低差があった。整地の肩は南西から北東方向に延び、北側で「く」字状に折れて東北東に走る。肩部からは木株(7箇所)や人頭大以上の石10個、木杭?11を検出し、肩部補強などのために木を植え、石・木杭などを配していたと思われる。



第64図 A地区第9層・土坑4出土貨銭(原寸)

A地区第9層上面足跡(第60図 図版38・39)

第9層(ハス田層)上面において、ほぼ全面にわたり多数の足跡を検出した。足跡の大半は人のものであるが、鳥、牛の足跡もところどころで若干検出した。人の足跡は総数2100以上を数え、かなり重なりあってはいるが、南から北方向へのものなど、歩行状況の明確なものも見られた。江戸時代初頭。また、上層の第8層は河川の氾濫により部分的に削平されている所もあったが、この層からは漆器碗底部-クリー(403 第61図 図版58)などが出土した。

B地区第8・9層上面足跡(第60図 図版32・33)

足跡群はハス田区域の西側だけに集中して、入り乱れるほど多くの人の足跡を検出した。かなり重なり合い、踏み込みも浅いものが多く歩行状況を追えるものはほとんどなかった。東側には全く足跡は見られなかった(図版33)。

この時期の住居域からは、落ち込み2基(落ち込み4・6)、溝1条(溝5)および、B-1地区西北部からB-2地区東部にかけて多くの柱穴などの遺構を検出した。

落ち込み6は東西5.8m×南北2m、深さ0.9mを測る。活用時期はほぼ2期に分かれ、第1期の堆積土は西斜面に3層の一部が残存していた。第2期は下層が灰オリーブ色砂礫、上層が植物遺体を多く含む暗褐色シルト質粘土で、第5層の堆積によって完全に埋没した。落ち込み内からは土師器・陶磁器の小・細片などが出土した。

河川1=吉田川は、字名・「川中」の地域が河川域で、調査地周辺ではほぼ南北に流れていた。B-2地区の川中歩道橋南橋脚付近でその東肩などを検出した(図版43)。調査地内での河川内はすべて自然堆積層であり、大和川付け替え時までにはすでに自然堤防状態になってお

り、吉田川の常時の流路はかなり狭くなっていたと考えられる。

これらの遺構などは17世紀代のものである。

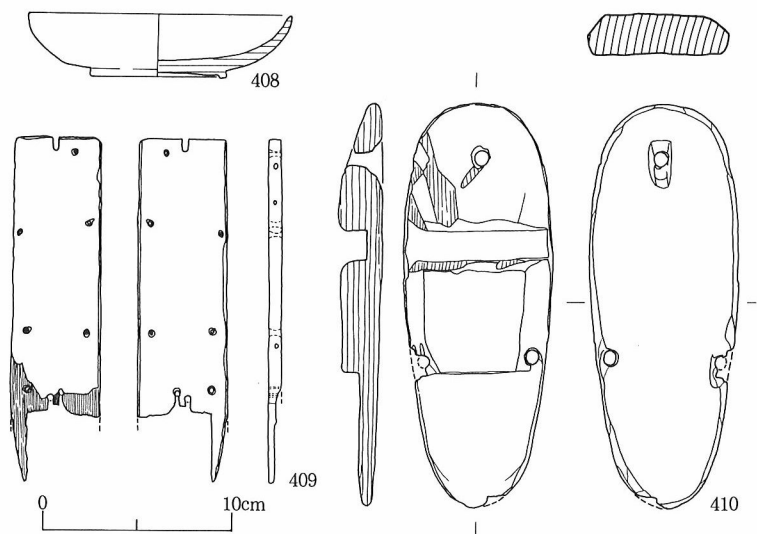
e. 江戸時代前半以降

整地8以降、大和川付け替えまでの間、調査地周辺は河川の氾濫などにより、一時期自然状態に化した。そのため砂・シルト・粘土の堆積が見られ=第7～2層、各層からは若干の遺物がそれぞれ出土した（A地区の層序と主な出土遺物を参照）。

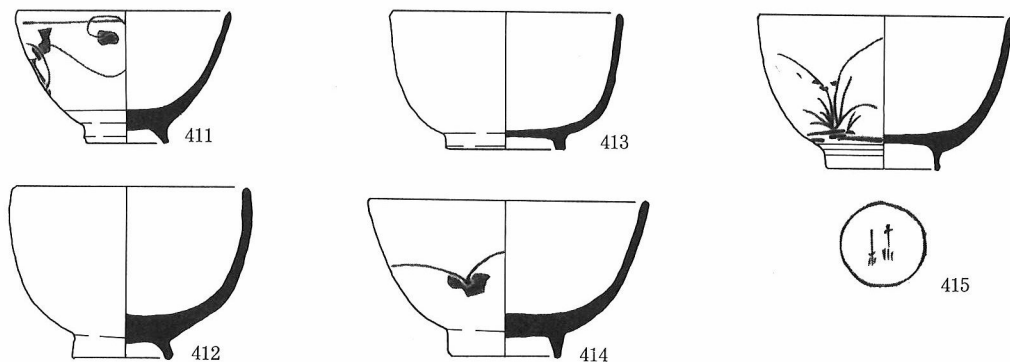
元禄17年・宝永元年（1704）に完成した大和川の付け替え工事は、水走遺跡周辺地域においても大きな変化をもたらした。本遺跡のほぼ中央を南北方向に流れていた吉田川（大和川の1

流）が埋め立てられて、新田として開発され=川中新田=、周辺部も水田・畑と化し、また生活域も形成された。第1遺構（第60・62図 図版40～42）

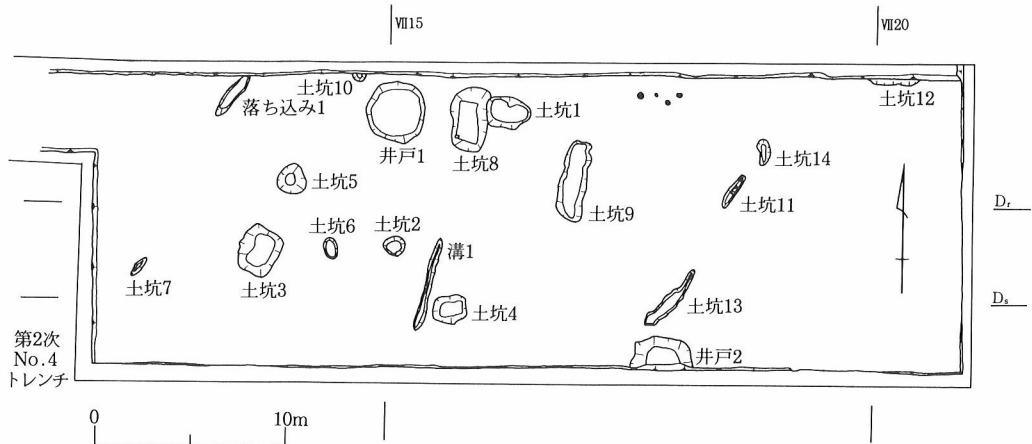
A地区においては第4・5層上面において井戸5基、土坑19基、溝6条を検出した。井戸のうちの1基（井戸2）は近代以降のもの



第65図 A地区土坑6・溝2出土木製品実測図



第66図 A地区土坑6・14出土磁器・陶器実測図



第67図 B-1地区第4層上面遺構平面図

であり、他の4基は上部を瓦積み（ほとんど欠損）、中部は板材を桶状の円筒形をなし、下部は一辺1.2m、高さ2.2mの木枠（4角に丸太材にほぞ穴を設けて横板をはめ、4面に板材を張ったもの）で、近世中・後半のものである（図版42を参照）。A-1・2地区で検出した溝4はやや深いもの（約0.5~1.5m）であったが、A-2地区の溝5および中央付近から西北西-東東南に延びる3条（溝1・2・3）の溝は、深さ0.3m前後の浅いものであった。このうちの溝1・2は幅4.5~5mを測り、耕作に伴う水路と考えられる。土坑も19基検出したが、その用途、時期の明確なものはほとんどなかった。溝2からは漆器鉢-広葉樹-（408 第65図 図版59）、土坑6からは下駄-スギ近似種-（410 第65図 図版60）、部材-スギ-（409 第65図 図版60）、伊万里焼碗（411・412 第66図）、土坑14からは伊万里焼碗・備前焼すり鉢（413~416 第66図）などが出土し、その他の各遺構内からも磁器・陶器・土師器の小・細片とともに漆器碗・曲物などの木製品が出土した。土坑でやや深く第9層以下まで達していた遺構のうちには、銭貨が出土したのものもあった-土坑16から熙寧元宝、土坑4から淳化元宝（406 第64図）-。

B-1地区では第4層上面において、井戸3基、土坑13基、溝2条、落ち込み1基、B-2地区歩道橋南橋脚付近で土坑2基を検出した。各遺構とも近代以降の削平および攪乱をうけており、残存状態はあまり良くなく、遺物の出土も極めて少なかった。これらの遺構は近世中・後期~近代にかけてのものであった。また、近代の整地層である第2層からは貨幣-一元祐通宝-なども出土した。

IV. 東大阪：水走遺跡におけるプラント・オパール定量分析結果

宮崎大学農学部 農作業管理学的研究室

グラフの見方について

1. layers：採取地点の土層模式図，() 内の数字は土層番号，左すみの小数字は表層からの深さをcmで表わしたものの。
2. O.sati.：Oryza sativa. 栽培稲の地上部乾物重。
rice.g：Oryza sativa. の穎果（粳）乾物重。
Phrag.：Phragmites communis. ヨシの地上部乾物重。
Bamb.：Bambaceae. タケ亜科の地上部乾物重。
各植物体重はそれぞれの植物により異なる珪酸体密度係数と土壌中から検出された各植物に由来するプラント・オパール密度をもとに算出されたものである。
3. 土柱模式図の右側に栽培植物，同左側に野，雑草を示している。単位t/10a・cmはその土層の厚さ1cm，面積10a（1000m²）に包含されるプラント・オパールの数から推定した各植物の乾物量をt（トン，1×10³kg）で表わしたものである。例えばその土層の堆積期間中に生産されたことになる。生産量が年間生産量ではないことに注意されたい。
4. 水田址が埋蔵されている土層ではO.sati.の値がピークを形成する場合が多い土層の堆積状況により一概にいえないが、水田址の層位はこのピークと一致するのが通例である。
5. Phrag.（ヨシ）、Bamb.（タケ）の乾物量変遷はその地点における土壌水分状況の時代的変遷を知るうえに役立つ。ヨシは比較的水分の多い湿った環境に生育し、タケ（ササ）は比較的乾燥した環境下で繁茂する。両者の消長をみるとその地点の乾燥変化を推定できる。
6. 最下段は、遺跡名、採取地点、採取年月日を示す。
なお、プラント・オパール定量分析結果の数値表を添付するので参照されたい。

[追記] 土壌の採取は、A地区2回（1984・6・15、7・2）、B地区1回（1984・12・12）実施された。本報告書では紙幅などの関係上、主要なものを抜粋して掲載した。（編者）

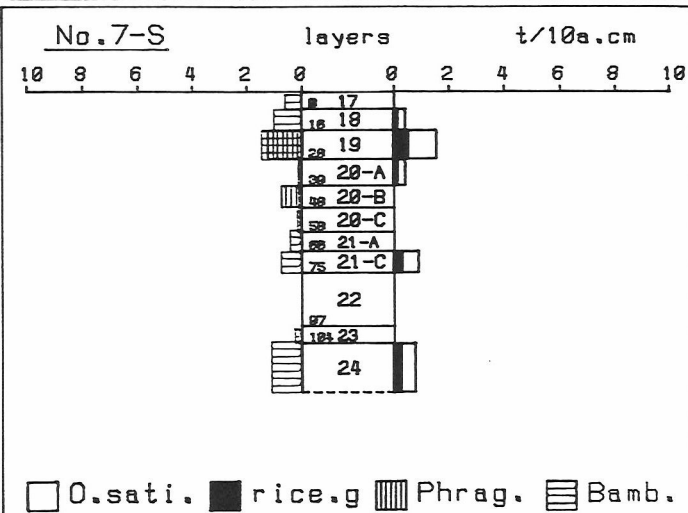
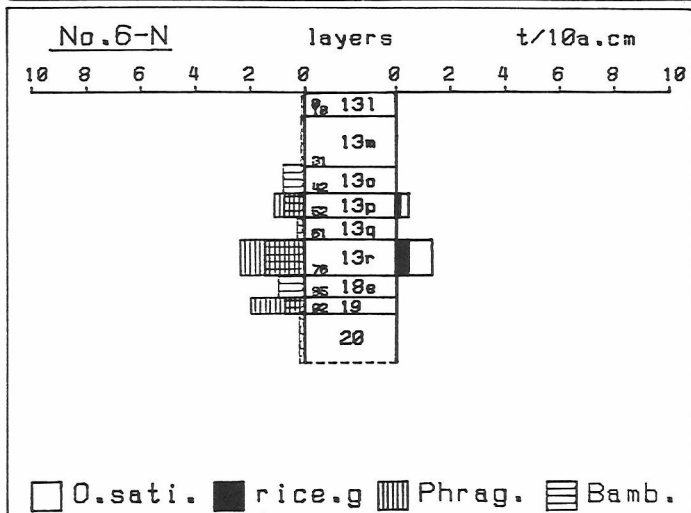
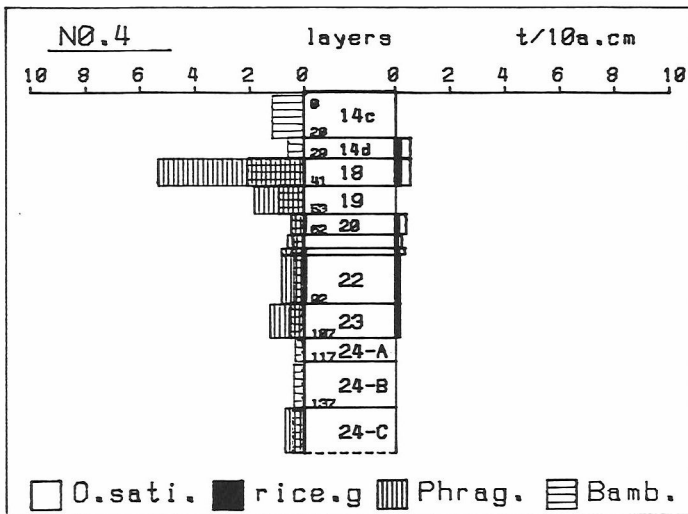
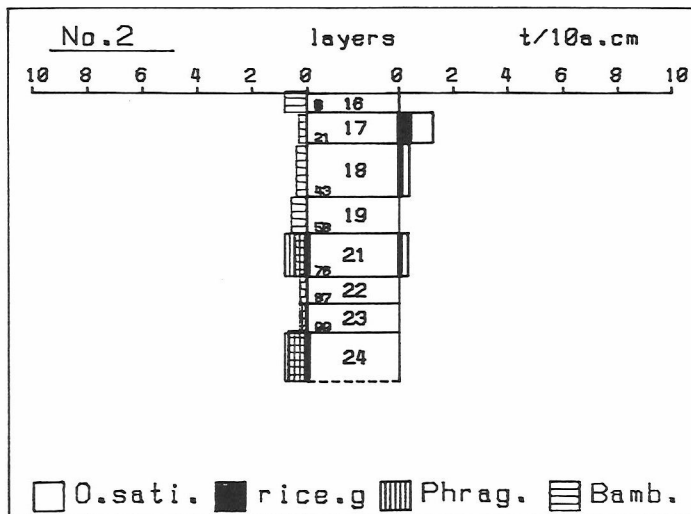
第2表 プラント・オパール定量表

A-2地点 6/15'84・サンプリング

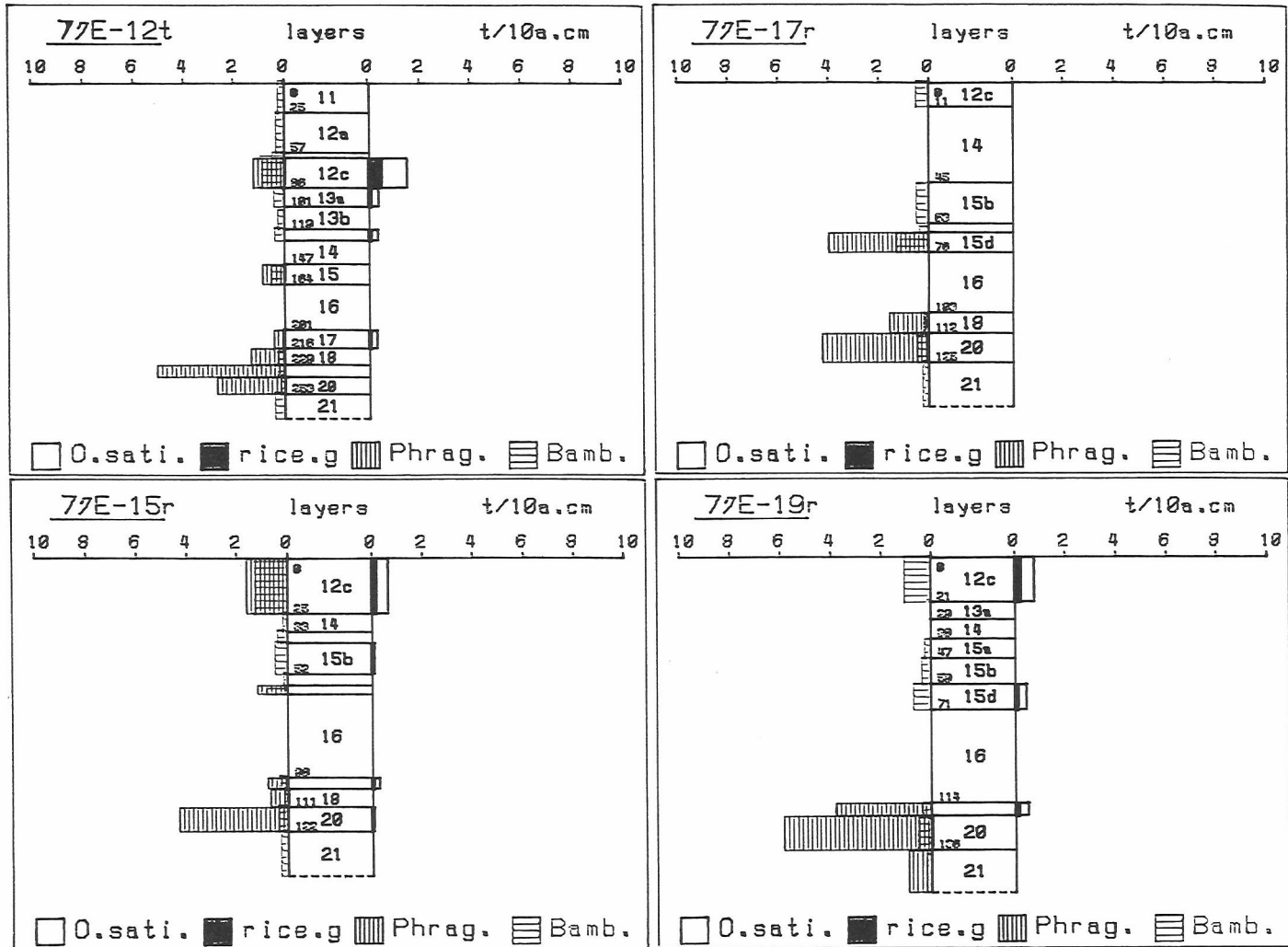
層名	植物体乾重 (t/10a. ca)				A-3地点	イネ (O.sati.)	イネ類 (rice g.)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜類 (Bamb.)
	イネ (O.sati.)	イネ類 (rice g.)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜類 (Bamb.)					
13b	1.292	0.452	0.000	0.843	13a	0.000	0.000	0.000	1.113
13e-1	0.485	0.179	0.000	0.158	13b	0.598	0.209	1.409	0.781
13e-2	0.401	0.140	0.000	0.785	13c	0.000	0.000	1.616	0.336
13f-1	0.413	0.145	0.000	0.943	13d-1	0.000	0.000	0.000	0.865
13f-2	0.495	0.173	0.000	0.323	13d-2	0.000	0.000	0.000	1.305
13g-1	0.000	0.000	1.134	0.393	13d-3	0.000	0.000	0.000	1.387
13g-2	0.421	0.147	0.992	0.893	13e	0.714	0.250	1.684	2.216
13h	0.000	0.000	0.000	0.713	13f	0.566	0.198	0.000	1.479

層名	深さ (ca)	層厚 (ca)	GB数/g	植物名	PO/GB	PO数/g	仮比重	PO数/cc	地上部乾重 (t/10a. ca)	イネ初重 (t/10a. ca)	生産総量 (t/10a)
13b	0	70	309809	イネ ヨシ タケ	2/167 0 8	3710 0 14841	1.184	4393 0 17572	1.292 0.000 0.843	0.452	31.673
13e-1	70	14	309517	イネ ヨシ タケ	1/197 0 2	1571 0 3142	1.049	1648 0 3296	0.485 0.000 0.158	0.170	2.377
13e-2	84	12	290587	イネ ヨシ タケ	1/194 0 12	1498 0 17975	0.910	1363 0 16357	0.401 0.000 0.785	0.140	1.685
13f-1	96	9	330445	イネ ヨシ タケ	1/214 0 14	1544 0 21618	0.909	1404 0 19651	0.413 0.000 0.943	0.145	1.301
13f-2	105	7	318042	イネ ヨシ タケ	1/180 0 4	1767 0 7068	0.952	1682 0 6728	0.495 0.000 0.323	0.173	1.213
13g-1	112	10	300860	イネ ヨシ タケ	0/192 1 5	0 1567 7835	1.044	0 1636 8180	0.000 1.134 0.393	0.000	0.000
13g-2	122	8	329756	イネ ヨシ タケ	1/214 1 13	1541 1541 20032	0.929	1432 1432 18610	0.421 0.992 0.893	0.147	1.180
13h	130	—	324668	イネ ヨシ タケ	0/196 0 10	0 0 16565	0.987	0 0 14859	0.000 0.000 0.713	0.000	—

層名	深さ (ca)	層厚 (ca)	GB数/g	植物名	PO/GB	PO数/g	仮比重	PO数/cc	地上部乾重 (t/10a. ca)	イネ初重 (t/10a. ca)	生産総量 (t/10a)
13a	0	14	306621	イネ ヨシ タケ	0/172 0 14	0 0 24958	0.929	0 0 23186	0.000 0.000 1.113	0.000	0.000
13b	14	12	316199	イネ ヨシ タケ	1/179 1 8	1766 1766 14132	1.151	2033 2033 16266	0.598 1.409 0.781	0.209	2.513
13c	26	8	294369	イネ ヨシ タケ	0/167 1 3	0 1763 5288	1.323	0 2332 6996	0.000 1.616 0.336	0.000	0.000
13d-1	34	10	322363	イネ ヨシ タケ	0/166 0 9	0 0 17478	1.031	0 0 18019	0.000 0.000 0.865	0.000	0.000
13d-2	44	10	313742	イネ ヨシ タケ	0/141 0 12	0 0 26701	1.018	0 0 27182	0.000 0.000 1.305	0.000	0.000
13d-3	54	6	298249	イネ ヨシ タケ	0/139 0 12	0 0 25748	1.122	0 0 28889	0.000 0.000 1.387	0.000	0.000
13e	60	12	335794	イネ ヨシ タケ	1/149 1 19	2254 2254 42819	1.078	2429 2429 46159	0.714 1.684 2.216	0.250	3.003
13f	72	—	305235	イネ ヨシ タケ	1/165 0 16	1850 0 29599	1.041	1926 0 30812	0.566 0.000 1.479	0.198	—



第3表 プラント・オパール定量グラフ (A地区) '84.7.2



第4表 プラント・オパール定量グラフ (B地区) '84.12.12

V. まとめ

今回の調査は、水走遺跡の中でもとくに中世期において中心的役割を果たしていた地域の調査となり、治水・開発状況、集落の変遷過程（成立～廃絶、規模、構造）、祭祀遺物の状態などと、多大の成果をあげることができた。

飛鳥時代以前の遺構・遺物は少なく、今回の調査地域においてこの時期まで人為的活動はほとんど行なわれていなかった。ただし、弥生時代前期の深さ1.5m以上、東西幅80mを越える大落ち込み、2時期の自然流路、とくに2期目＝中期末のものは検出最大幅49m、最大深1.8mの二股に分かれた流路で、当時の地形状況などを知るうえでの貴重な資料である。

古墳時代以降平安時代中ごろまではいまだ遺物量は少なく、集落などに伴う遺構は検出されていないが、奈良から平安時代中葉には不整形の落ち込み－開墾などに伴う掘り返した跡－、2面にわたる足跡群、10世紀後半の条里制に伴う畔などを検出し、調査地域において明確な人為的痕跡が現われてきた。

今回の調査での最も大きな成果は、後述するように平安時代後半から江戸時代にわたり、その活躍が文献資料＝「水走文書」で知られている「水走氏」による開発・支配状況を裏付ける遺構・遺物を確認したことである。それは堰および堤防の構築にはじまり＝A地区、度重なる盛土と大溝で画された住居域の形成などである。住居域は旧吉田川東岸のB地区中央部周辺で検出された。ただし、旧吉田川西岸の第5次調査や第11次調査などにおいても、大溝および柱穴群などの遺構と多量の遺物が検出されており、西岸地域にも住居域が形成されていたことも確認されている。「水走文書」で見ると、「水走」地域の開発は「天養年中（1144・45）」＝季忠のとき庁宣をうけ公的に行っていたことになっているが〔1〕、今回の調査によって若干さかのぼり、11世紀末～12世紀初頭にはすでに開発に取りかかっていたことがわかった。

調査区域において、旧吉田川が江戸時代前半（1704年）の大和川付け替え期の流路とほぼ同じ位置を流れるようになったのは15世紀以降のことである。治水工事が十分完備していたわけではなく、旧吉田川の流路は幾度となく氾濫を繰り返し、そのたびに川幅および流れが変化していた。今回の調査において、河川東肩が時代とともに西へ移行し（河川9から河川1へ）、主に盛土・整地を繰り返した住居地域の状況＝変化がこれに左右されていたことをも確認することができた。また、河川内などから出土した多量の祭祀遺物は、当時の精神生活を知る上などでの貴重な資料となった。

「水走文書」については、林屋辰三郎、戸田芳実などによって研究され、中世御家人・土豪の形態を知る貴重な史料として注目されてきた¹⁾。文書の全容については『枚岡市史 第四巻 史料編』にはほぼ収録されており－第5表参照²⁾、水走系譜－第6表－の前半部分（盛忠まで）についても再考されている³⁾。第7表は水走遺跡の発掘調査結果内容と主に「水走文書」の項目などを対比したものである。以下、水走城および南北朝期の水走氏について若干拙論を付してまとめにかえたい。（以下も〔 〕数字は第5表の文書通し番号、水走氏関係人名は第

第5表 『枚岡市史 第三巻 史料編一』記載「水走文書」の項目一覧

市史番号	史料項目と年月日など	市史番号	史料項目と年月日など
1	源康忠解状案 付源義経外題 寿永3・2 (1184)	2	源義経書状案 (寿永3)・2・24 (1184)
3	藏人甘露寺輔長奉口宣案 元禄2・5・7 (1689)	4	藏人頭中山忠尹奉口宣案 安永9・5・12 (1780)
5	藏人頭甘露寺国長奉口宣案 享和2・5・1 (1802)	6	長慶天皇繪旨 正平24・5・24 (1369)
7	長慶天皇繪旨 弘和1・12・17 (1381)	8	我堂定俊年貢米算用状 永正11・3・3 (1514)
9	藏人業室頼胤奉口宣案 享保3・12・13 (1718)	10	藏人頭中山忠尹奉口宣案 安永9・5・12 (1780)
11	水走忠誠叙位記 安永9・5・12 (1780)	12	藏人頭甘露寺国長奉口宣案 享和2・5・1 (1802)
13	水走家系譜写 <室町後～末か>	14	藤原康高讓状写 建長4・6・3 (1252)
15	藤原康高讓状証文目録写 建長4・6・3 (1252)	16	藤原忠茂讓状証文目録写 正応5・1 (1292)
17	沙弥行意讓状写 正中2・3・5 (1325)	18	藤原康政讓状写 元弘2・2・20 (1352)
19	源憲康以下連署証文写 正平9・8・27 (1354)	20	重持安堵状写 永徳3・10・19 (1383)
21	右衛門佐安堵状写 永徳3・10・19 (1383)	22	水走家系図写一卷別記 <寛保3年 (1743) 文書写本別記>
23	徳川家光朱印状写 慶安1・2・24 (1648)	24	徳川綱吉朱印状写 貞享2・6・11 (1685)
25	徳川吉宗朱印状写 享保3・7・11 (1718)	26	一七と同じ
27	二七と同じ	28	六と同じ
29	七七と同じ	30	一五ノ八
31	板倉勝重御礼写 慶長19・10 (1614)	32	一五ノ一〇
33	一三ノ二と同じ	34	一五ノ一二
35	一三ノ四と同じ	36	一三ノ五と同じ
37	藤原康政処分状写副状共三通 一三ノ六と同じ	38	一三ノ七と同じ
39	一三ノ八と同じ	40	一三ノ九と同じ
41	藤原忠夏讓状写 至徳1・11 (1384)	42	藤原忠夏讓状目録写 至徳1・8・22 (1384)
43	水走長忠知行注進状写 応永23・3 (1416)	44	水走長忠本領注進状写 応永23・3 (1416)
45	私市次郎三郎忠宗以下連署証文写 応永23・3・23 (1416)	46	藏人甘露寺享長奉口宣案写 三三と同じ
47	九と同じ	48	藏人業室頼胤奉口宣案写 享保3・12・13 (1718)
49	中御門天皇宣旨写 享保3・12・13 (1718)	50	藤原忠広位記写 享保3・12・13 (1718)
51	平岡明神額写 享保15・3 (1730)	52	水走系図 享保17 (1732)～寛保3 (1743)

『枚岡市史』によると、1～5は西宮氏蔵、6以下は水走氏蔵。
 13～21は一卷もの
 23～51・22は『寛保三年写本』で、51の後に「平岡旧史考」「同社記一軸写」があり、そして22の系譜に続く。
 最後に、「一七 水走家墓塔銘文」を記している。

6表参照)

水走城

水走城の存在については、

1. 『太平記』 卷第三十五 南方蜂起並びに狂歌等の事に、

～ 河内守護代杉原周防入道、菅田城を落ちて、水速城に楯籠り、ここにしばらく休へて京都の左右を相待たんとしけるが、楠大勢を以て責めける間、一日一夜戦ふて、南都を差して落ちにけり。～⁴

これは正平15年(1360)、南朝方の蜂起に伴い河内の守護代で菅田城にいた杉原周防入道が水速城(水走城)に逃れてきてたてこもったが、すぐ奈良へ逃れて行ってしまった。

2. 『渡辺惣官家文書』によれば、

今度至水走各被相立候之儀誠種々馳走衆祝着候彌可然様可行軒江実見頼入候猶小柳七郎右衛門可申 恐々謹言 六月三日 義宣在判 渡辺孫三郎殿

これは享禄年中(1527～1532)、畠山義宣は渡辺孫三郎に水走城を攻略させ、この攻撃に対する祝と挨拶の書状である⁵。

という記事がある。このことから、14世紀中半ごろから16世紀前半にかけて「水走城」が存在していたことになる。しかし、現在のところこれ以外に水走城についての史料はなく、そのため詳細なことは全く不明で、その考察もほとんどなされていなかった。

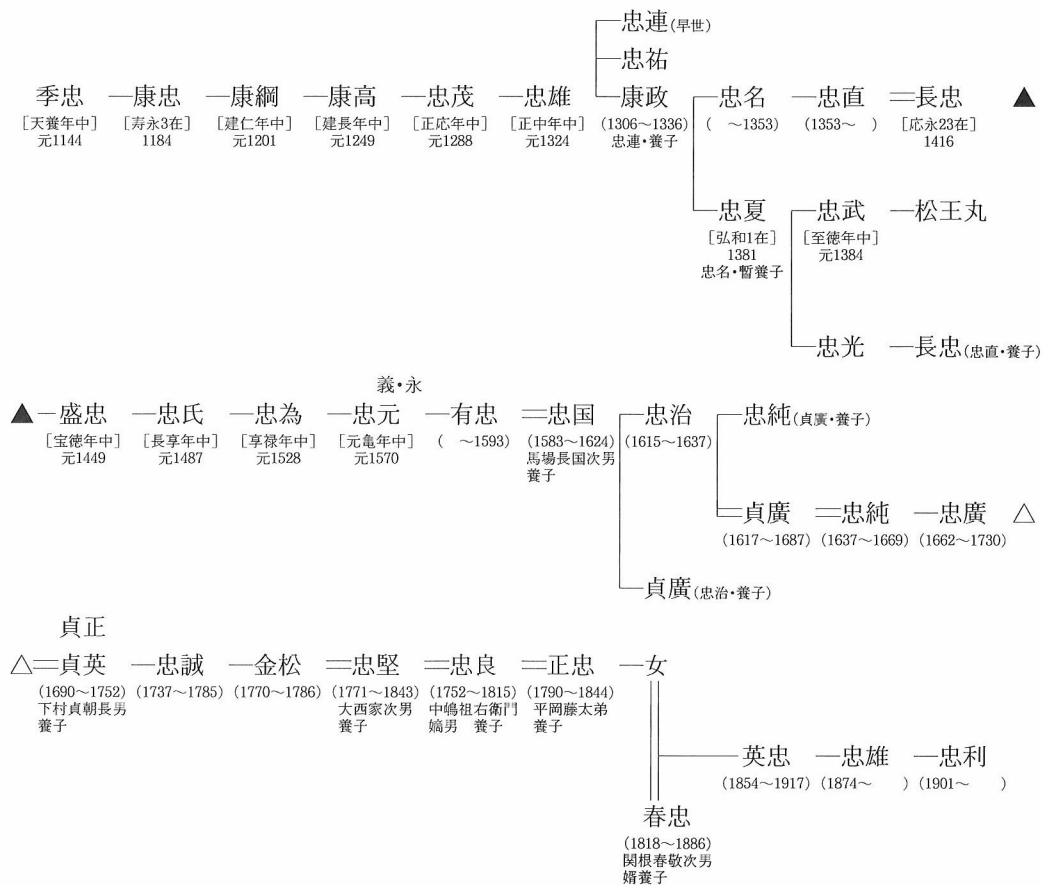
第6表 水走氏家相続・文書関連系譜

水走文書には3種の系譜がある（『枚岡市史第三巻 史料編（一）』「水走文書」以下、「文書」）。

1. 「文書」一三ノ一 季忠～盛忠まで（室町後期～末のもの）－寛保三年写本にも記載あり－
2. 「文書」一四 季忠～真正まで（寛保三年－1743－の文書写本の別記に載）
「文書」では長忠までとしているが、真正（享保十五年－1730－）までの記述
3. 「文書」一六 季忠～忠利（明治37－1901生） 「文書」では、忠雄が欠落している。

上記をもとに、相続および「文書」、「年表」関連のものを作成。

（「元～」は、年号の元年の年）



ただ場所については、『中河内郡誌』が「英田村」の項で松原村（現・東大阪市松原）に比定し、川中誠三は松原集落北部・暗峠越奈良街道北沿の長方形の区画－現・松原1丁目北部の松原公園付近一帯－を具体的に示している（第69図）。これに対し具体的証明は記されていないが『日本城郭大系 12』の「その他の城郭一覧」の「水走城」の欄には「東大阪市水走」とある。

今回の調査で、13世紀末～14世紀初頭の整地4－2期には住居域を画する大溝＝溝24、さらに整地5期の14世紀前半から後半には溝24と溝26との二重の大溝に画された住居域がみられ、整地6期の14世紀後半以降にも大溝＝溝14があり、各時期とも住居域の東側などを画する大溝が存し、これらの時期は鎌倉時代末期から室町時代前期の南北朝期にあたることを確認した。

また、15・16世紀代においても住居域は高台を呈し、水田・ハス田の広がる東部地域（B地区東からA地区）よりも一段高く形成されていた—いづれも西側は旧吉田川—。

とくにこの住居域からは生活用具類とともに刀、刀子、鉄鏃が出土し、武士が在していたと考えられる。また、13世紀中半以降14世紀前半にわたる河川から出土した祭祀遺物のうち、木製品の多くが武器形を呈しており、戦勝祈願などの祭祀に使用されたと思われる。

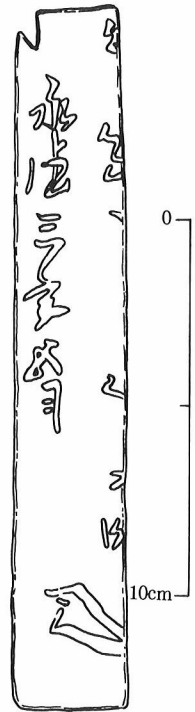
これらのことから、今回B地区で確認した住居域は河川を利用した環濠集落から発展した、「水走」の名を冠する「水走城」と考えてよいのではないと思われる。ただ、河川（旧吉田川）西部の第11次調査では13世紀末から14世紀前半ごろの大溝とピット群、第5次調査では14世紀代の南北方向の溝などが検出されており、鎌倉時代後半から室町時代中半にかけては川を挟み東西に分離していた時期があったと考えられ、たいへん興味深い。

それは康政が元弘2年に、嫡男宝寿丸＝忠名と次男登々丸＝忠夏に譲り状を書き与えて知行所職を分け、忠名への譲り状に「水走北内式町故東殿方」とあることである〔18〕。この「東殿方」は旧吉田川の東岸側、すなわち今回の調査地B地区周辺の住居域を示し、後述するように1383年に北朝方から所領の安堵を受けた忠夏は、旧吉田川西岸側の第7次調査で北朝年号の木簡が出土していることから（後述）、旧吉田川西岸側の第11・5次調査周辺の大溝などを伴う住居域＝「西殿方？」などを譲り受けたのではないかとと思われる。

東岸の城域については西端は河川（旧・吉田川）であり、東端は各時期の大溝（溝24、26、14）と落ちによって画され、東西幅は40～50mを測る。北端は第14次調査で13世紀後半の南北方向の大溝の一部は検出されているが不明である。南端も第15次調査地で柱穴・土坑など、第17次調査域北西部で室町時代の南北方向の溝などが見られるが、明確ではない。しかし、東西幅に対し南北方向に長い城域を呈していたと考えられる。これに対し西岸の城域は東端は河川（旧・吉田川）であるが、第11次調査で13世紀末から14世紀前半の柱穴・土坑群と大溝¹⁰、第5・7次調査の東側域で14から15世紀代の護岸施設、土坑と南北方向の3条の溝など（西側域では永徳3年銘の木簡は出土しているがこの時期の遺構はほとんどない）¹¹は確認されていて、この地域周辺と考えられるが現段階においては不明と言わざるを得ない。いずれにしても、河川を利用した環濠集落的域を脱していないものであったと考えられる。

南北朝期の水走氏

先の『太平記』の記述に信があるとするれば、北朝方である杉原周防入道が水走城に入ったということは一向かえ入れたとするれば、正平15年＝1360年には水走氏がすでに北朝方に関係していたことになる。しかし、水走氏は忠名の子・忠直が1369年と1381年に南朝の長慶天皇から



第68図 第7次調査
出土の木簡
(P4 文献⁹より)

所領・知行についての論旨を受けており〔6・7〕、北朝との関係が明確になるのは、1383年4月9日付けで忠夏が安堵状を受けた〔20・21〕前後ごろからのことで、矛盾が生じる。

1383年といえば南朝の年号では「弘和3年」であるが、北朝の年号は「永徳3年」である。この「永徳3年」銘のある木簡 一…（花押） 永徳三年五月一 が、河川西部の第7次調査のP102地区から出土している（第68図）¹²⁰。この「水走遺跡」から出土した北朝年号を記した木簡は奇しくも忠夏が北朝方より所領の安堵状を受けた年にあたり、この木簡が北朝との関係を証明してくれたことになる。

そこでまず、1383年ごろの水走氏のことを「水走文書」を中心に見てみよう。この時期の水走氏の当主は忠夏で、彼は康政の次男である。兄の忠名が1353年に卒し、同年に忠名の子・忠直が生まれている。そのため、本来なら忠直が家督を相続することになるが、忠直＝多聞丸が幼少であったことから、忠夏が兄・忠名の養子となって暫時家督を相続することになったようである。このことは、正平9年（1354）の「源憲康以下連署証文」〔19〕や「系譜」〔22・52〕の注記から知ることができる。

水走文書を見ていくと、この時期は水走氏にとって大きく変革したときであった。それは、忠夏の父・康政は南朝方の武将として従軍し（1336年）〔22〕、忠直は南朝の長慶天皇の論旨で知行が認められていること〔6・7〕など、直系が南朝方に組していたのに対し、忠夏は1383年に知行の安堵などを北朝方の（高階）重持？および（畠山）右衛門佐一「文書」の貼紙などに義就とあるが、河内守護の基国かーからうけている〔20・21〕。また忠夏の子・忠武への讓状〔41〕・讓与目録〔42〕に記されている年号が北朝の「至徳」（元年－1384）である。

これは、当時の氏族が家の存続をはかるため、兄弟が南朝・北朝双方に分かれていた結果と思われる。すなわち、兄・忠名（その子・忠直も含め）は南朝方、弟・忠夏は北朝方に組していたのであろうことは上記の「文書」の内容から推察することができよう。すなわち、前記の杉原周防入道の水走城への入城は、忠夏が当主（領主）の時期であり、なおかつ「西殿方？」であったとしたら可能と思われる。

上述したように、1353年の忠名の没後、忠夏が相続（暫定）し、忠直は成長に伴い1381年に南朝方から忠名の跡目を相続することになったようである。しかし、二年後の1383年に忠夏が北朝方から知行安堵をうけていることは両者の間に何らかの相克があったとも考えられる。すなわち、忠直はそれまでと同様南朝方から知行安堵をうけており－忠直の相続は忠夏が相続する際の源憲康ら一族との約束－、この処置に対し忠夏は不服として北朝方から知行安堵をうけたのではあるまいか。これは相続の内容が兄で養父の忠名からとせず－「系譜」に「忠直依幼稚而暫為忠名没後養子」〔22・52〕－、「親父康政跡事任相続」〔21〕と父の康政からの相続と記していることから窺える。または、忠直の没年は不明であるが1381年から1383年の間で没または隠居し－「系譜」〔52〕の忠直からの長忠の項に「多門丸 早世」（多門丸は忠直のこと）とあるが、すでに30才前にはなっている－、その後再度忠夏が相続して、そのおりに北朝方から知行安堵されたともとれる。しかし、それならそれまで通り南朝からでよいはずであ

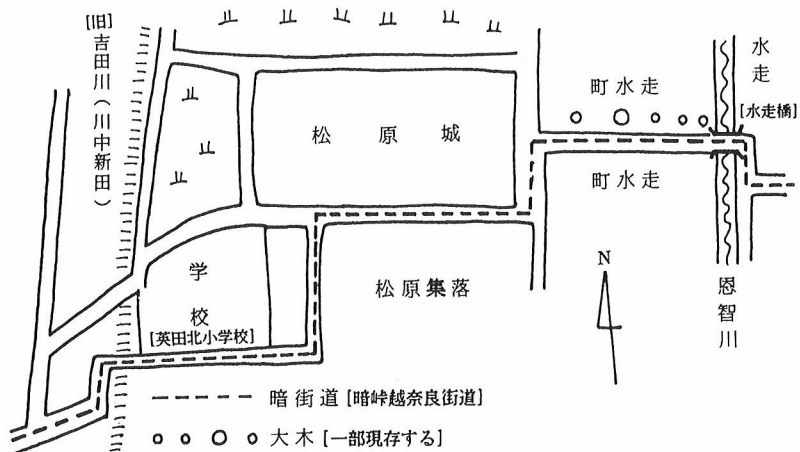
るが、北朝方からうけていることは早くから通じていたためと考えられよう、もちろん時流のためかもしれないが一すでに南朝の衰れは明白で、1391年には合一。いずれにしても水走氏がこの時期2派に分かれていたことは十分推察することができる。

忠夏の跡目は忠武が継ぎ、その後はその子の松王丸が相続するはずであったが、早世などにより三男の忠重が養子になった。「系譜」[22・52]に「新判官養子」=新判官は忠武。しかし、忠重の後には次男・忠光の子の長忠が跡目を継いだようである。そのうえ、南北朝の合一もなされ、直系の忠直が早世(?)で子がいなかったためか(和解して)、長忠がその養子となる形をとることで直・傍系が一本化したのであろう。

以上簡単に拙論を展開したが、水走城の全容の解明を含めた「水走」の歴史的な位置付けについては今後の調査・研究の進展に期待したい。

註 (P100 水走氏関連文献抄、P4 文献 参照)

- 1 林屋 1955・1962、戸田 1963・1967・1970など。
- 2 枚岡市役所 1966、第二部 第七類 水走文書 として、佐藤虎雄・解題執筆。
- 3 若松 1999、一付編1ー。
- 4 新編日本古典文学全集57 『太平記④』 小学館 1998・7。
- 5 枚岡市役所 1966、第二部 第二類 古文書 一五 畠山義宣書状写。
枚岡市史 1967、第三章 中世の枚岡。
- 6 片岡 1922。「傳えていふ。松原村はもの杉原村なりしが、何時頃よりか杉を松にかへたるなり、と。」として、上記の『太平記』の水走城に入城した杉原周防入道との関連で記している。しかし、杉原周防入道が水速城=水走城にいたのはたった一兩日のことであり、この関係で論ずることは困難と言わざるを得ない。「南山巡狩録」所収の「高木遠盛申状」一延元3年(1338)閏3月22日条ーに見える「松原城」を『大阪府全志』は当地・松原村としているが、『日本城郭大系』では松原市の「松原城」(所在・松原市岡)に比定している(東大阪市の項に「松原城」はない)。
- 7 川中 1984。「松原城(水走城)」としての1項と図(第69図)を記している。この比定推定地は現在遺跡として周知されていないことなど、これまで物的資料は確認されていない。註6に記したように水走城=松原城の関係は否定されると思われる。
- 8 田代・渡辺・石田 1981。また、『太平記』の各注釈書の中では、「東大阪市水走」とするものもあれば(註4)、「不詳」としているものもある(例・新潮日本古典集成本など)。
- 9 P4 文献⑨。
- 10 P4 文献⑩。
- 11 P4 文献⑪。
- 12 同上。



第69図 川中比定の松原城(水走城)址推定地略図
—川中1984より、一部変更、[]は編者追記—

第7表 水走遺跡と水走氏関係年表－11世紀後半～19世紀中半－

世紀	遺構など (第4次調査・中心)	西暦	年号	領主名	水走氏関係(「水走文書」中心に) －水走の地関係抜粋－ 主な出来事 西暦
11	堰の築造 後半～12初頭				院政開始1086
12	堤防の構築 前半				大江御厨成立1119ごろ
	A、B－1溝ナド 中半	1144	天養1	季忠	季忠、水走の地開発－天養年間－
	<整地1>後半				
	<整地2>末～13前半	1184	寿永3	康忠	康忠解状、付・義経外題 [所領安堵、御家人]
	大溝(A溝8ナド)				源頼朝、征夷大将軍1192
	}				
13	2次・土坑墓 前半	1201～	建仁	康綱	
		1249～	建長	康高	
	<整地3>中～後半	1252	建長4		康高讓状－忠持アテ－ －水走私領壺所～－ 康高讓渡証文目録－忠持アテ－ －同郡七条水走里卅六町－
	落ち込み、土坑、 柱穴ナド [集落形成へ]	1288～	正応	忠茂	
		1292	正応5		忠茂調度証文目録－忠雄アテ－ －同郡七条水走里卅六町－
14	<整地4>13末～初頭				
	柱穴群、大溝ナド				
	河川5－祭祀遺物	1325	正中2	忠雄	沙弥行意(忠雄)讓状－康政アテ－ －～水走里廿一、二、三ヶ坪内、式町讓与忠祐～－
	11次・大溝、柱穴群				
	<整地5>前半～	1332	元弘2	康政	康政讓状－忠名アテ－ －水走北内式町 故東殿方～－
	柱穴群、大溝、土坑ナド				
	河川4－祭祀遺物				鎌倉幕府滅亡1333
		1336	建武3		康政、南朝方従軍 康政卒 足利尊氏、征夷大将軍1336
	5次・溝ナド				
		1353(南)	正平8	忠名	忠名卒
		1354	正平9	忠夏	源憲康以下連署証文
		1360	正平15		河内守護代・杉原周防入道、菅田城から逃れ、 水走城に入る－『太平記』－
		1369	正平24	忠直	長慶天皇繪旨[玉櫛庄の松高と貞久知行、認]
		1381(南)	弘和1		長慶天皇繪旨[忠名跡知行、認]
	7次・木筒「…(花押) 永徳三年五月」	1383(北)	永徳3	忠夏	(高階)重持安堵状－忠夏アテ－ (畠山)右衛門佐安堵状－忠夏アテ－
		1384(北)	至徳1		忠夏讓状－忠武アテ－ 忠夏讓状目録 ～一所 水走南内一圓 河成并堤外 一所 同北内式町六十七歩東殿御分～－

					南北朝合—1392
15	<整地 6 > 柱穴群、溝ナド	1416	応永23	長忠	長忠知行注進状 長忠本領注進状 忠家等連署請文
		1449~	宝徳	盛忠	
		1487~	長享	忠氏	
16	<整地 7 > ハス田形成 柱穴、土坑ナド	1514	永正11		我堂定俊年貢米算用状
		1527~	享禄	忠為	渡辺孫三郎の水走城攻略に畠山義宣書状 —『渡辺惣官家文書』—
		1570~	元亀	忠元	
		1593	文禄 2	有忠	有忠卒 室町幕府滅亡1573
17	10次ナド・噴砂跡				慶長大地震おこる1596 徳川家康、征夷大將軍1603
	<整地 8 > A・B第2遺構面 足跡群	1624	寛永 1	忠国	忠国卒
		1637	寛永14	忠治	忠治卒
		1669	寛文 9		貞廣の養子・忠純卒
		1687	貞享 4	貞廣	貞廣卒
		1689	元禄 2	忠廣	藤原輔長奉口宣—忠廣・正六位下—
18	A・B第1遺構面 溝・井戸・土坑	1718	享保 3		大和川付け替え1704 [川中ナド新田の開発へ]
		1730	享保15		中御門天皇宣旨(忠廣・正五位下)
		1744	延享 1		貞英・養子 忠廣卒 『平岡旧史考』成る
		1752	宝暦 2	貞英	貞英卒
		1785	天明 5	忠誠	忠誠卒
		1786	天明 6	金松	金松卒 忠堅・養子
19		1802	享和 2	忠堅	忠良・養子
		1809	文化 6	忠良	正忠・養子
		1811	文化 8	正忠	忠良、水走氏墓塔建立
		1815	文化12		忠良卒
		1839	天保10		春忠・婿養子
		1843	天保14	春忠	忠堅卒
		1844	天保15		正忠卒 江戸幕府滅亡1867

- <水走氏関連文献抄> (著・編者 五十音順) ー水走遺跡の調査関係は、P4 文献 参照ー
- 井上正雄 『大阪府全志』 卷之四 大阪府全志発行所 1922 (再版 清文堂 1985)
- 片岡英宗編纂主任 『中河内郡誌 全』 1922 (再版 名著出版 1972・8)
- 川中誠三 『南十字星』 川中誠三先生御遺稿南十字星出版会 1984・9
- 日下雅義 「西国武士団の環境ー水走氏支配圏の復元」 『週刊朝日百科日本の歴史』 1 中世 I ー
- ① 源氏と平氏 東と西 朝日新聞社 1992・6・13
- 工藤敬一 「鎌倉時代の領主制」 『日本史研究』 53 日本史研究会
- 四条史編さん委員会 『河内四條史』 第二冊 史料編 I 1977・4
- 竹内理三編 『平安遺文』
- 田代克己・渡辺武・石田善人編集 『日本城郭大系』 12 大阪・兵庫 新人物往来社 1981・3
- 戸田芳実 「中世の封建領主制」 『岩波講座日本歴史』 6 中世 2 岩波書店 1963・2
- 戸田芳実 『日本領主制成立史の研究』 岩波書店 1967・2
- 戸田芳実 「御厨と在地領主」 木村武夫編 『日本史の研究』 ミネルヴァ書房 1970・5
- 林屋辰三郎 「鎌倉政権の歴史的展望」 『古代国家の解体』 東京大学出版会 1955・10
- (初出『日本史研究』 21 日本史研究会 1954・4)
- 林屋辰三郎 「中世史概説」 『岩波講座日本歴史』 5 中世 1 岩波書店 1962・12
- 東大阪市遺跡保護調査会編 『東大阪遺跡ガイド』 1978・10
- 東大阪市教育委員会 『水走氏館跡の調査 東大阪市発掘調査概要12』 1973
- 東大阪市教育委員会 『わが街再発見 東大阪市の歴史と文化財』 1、2 1989・3、1990・3
- (再版 1・2号合冊号 1992・3)
- 東大阪市教育委員会 『わが街再発見 東大阪市の石造物』 3 1999・3
- 枚岡市役所 『枚岡市史 第一巻 本編』 1967・1
- (第三章 中世の枚岡 第一～三節 佐藤虎雄 第四節 久保田収 など)
- 枚岡市役所 『枚岡市史 第三巻 史料編一』 1966・3 (第二部 第七類 水走文書)
- 藤井直正 「水走氏と水走文書のこと 枚岡における中世史の発見」 『郷土誌 ひらおか』 12
- 河内郷土研究会 1963・3
- 藤井直正 『東大阪市の歴史』 松籟社 1983・4
- 藤井直正 「水走氏の人びと」 『郷土史のたのしみ』 財団法人東大阪市文化財協会 1997・3
- (初出 『東大阪消防』 第35号 1985・8)
- 布施市役所 『布施市史 第一巻』 1962・12 (第四章 中世の布施地方 戸田芳実)
- 若松博恵 「水走氏系譜再考 (一) ー季忠から盛忠までー」 『河内ふるさと文化誌 わかくす』
- 第36号 わかくす文芸研究会 1999・11 ー付編 1 ー

水走氏系譜再考（一）

－季忠から盛忠まで－

はじめに

現在、水走氏系譜は3類4種の系譜が知られている。すなわち、文書写一卷の巻頭に記載している季忠から盛忠までの系譜（以下 系譜Ⅰ）、同巻に付されている季忠から忠利までの系譜（以下 系譜Ⅱ）、『寛保三年写本』にある季忠から貞英までの系譜（以下 系譜Ⅲ）であり、『寛保三年写本』には系譜Ⅰの写しも記されている。これら3類の系譜はすでに『枚岡市史第三巻 史料編一』（以下 『史料編一』）の「水走文書」の中で紹介されている。『史料編一』記載の「水走文書」は、当時現存していた水走氏関係の文書をほとんど網羅しており、その功績は極めて大きく、第5表に記しているように52項目の史料が所収されている。ただし、『寛保三年写本』原本には「平岡旧史考並付録」「同社記一軸」＝枚岡神社『御神徳記』の写しが系譜の前に記されているが、この2項については記載されていない。記載内容を原本と詳細に比較してみると若干の写し間違い（以下 誤記）がみられる。そのため、今回は水走氏の系譜の前半部分＝季忠～盛忠について、『史料編一』の誤記を指摘・訂正するとともにその内容について簡単な注釈を加えてみたいと思う。「水走文書」各文書の後の〈 〉内の数字は第5表の通し番号である。

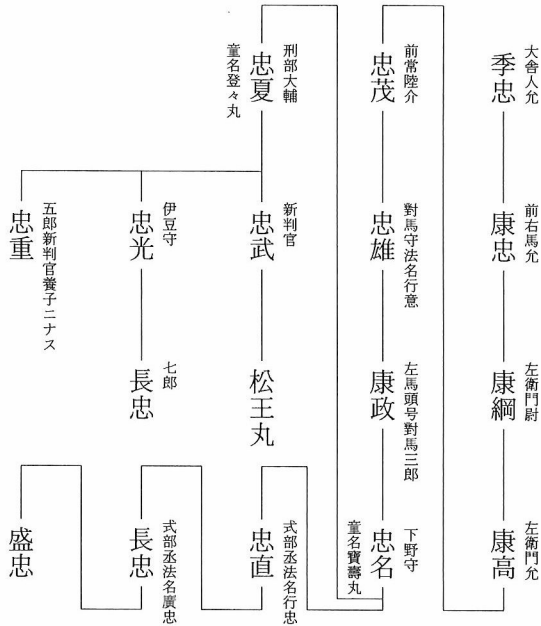
系譜の復元と注釈

1. 各系譜の成立年代

系譜Ⅰ＝『史料編一』の一三ノ一<13>は「盛忠」まで記し、官名、法名、呼名、童名など極めて簡潔な内容である。『史料編一』の〔解題〕に「この系譜は盛忠が宝徳年中（1949～52 筆者・記）に在世した人であるので、室町時代後期か末期に整えられたものであろう」と記されているように、系譜Ⅰの成立はほぼこの記述に従ってよいと考えられる。

系譜Ⅱ＝『史料編一』の一六<52>は忠利（明治34年・1901生）まで記しているが、筆跡状態を詳細に観察すると、貞英の三女の誕生年月日－享保17年（1732）壬子正月元日－と名までは同一筆跡で、貞英の長男・忠誠（元文3年・1736生）の記述－貞英および3人の女の後半部分も含め－からは筆跡が異なり、以下随時追記して忠利に至っている。また後述するように、貞英までを記した系譜Ⅲは系譜Ⅱをさらに訂正・追記などして記されたものであり、このことからこの系譜の第1期分の成立年代は享保17年から寛保3年（1743）までの間と考えられる。

これに対し、系譜Ⅲ＝『史料編一』の一四<22>は、『寛保三年写本』の別記として記されたものであり、3系譜では一番新しいものとなる（系譜Ⅱは第1期分）。これは記載内容を系譜Ⅱと比較してみると、系譜Ⅱの訂正部分＝墨線などによる抹消、加筆などを正書し、誤記－后村上天皇→後村上天皇など－を訂正し、さらに追加－康政のところ－に『三楠實録』からの記



第8表 〔系譜I〕

事、「下村系の系譜」など一して記していることから窺うことができる。『史料編一』には「寛延三年(1750)」(「源義経書状案写」のところのみ「寛延三年」の貼紙あり)と記されているが、原本を照会してみると、各写文書にある年号などの頭注に、「寛保三年」とそれまでの年数とを□内に記してあり、「寛保」であることが判る。

以下、系譜 I、II、IIIの順に従って見ていくが、各項目の注釈に関しては前記しているものを優先し、重複を避けて記していくこととする。

2. 系譜 I

この系譜は水走家に伝わる文書写一巻の巻頭に記載されているものである。この巻は「水走家系譜写」<13>、「藤原康高議状写」<14>、「藤原康高議状証文目録写」<15>など9項の文書の写を記載している (<13>~<21>)。

この系譜については、『寛保三年写本』中の「記録三卷写」に記述形態の同じものが書き写されているが、この写本系譜には「忠夏」の項に「忠名之次男」の字句が追加されていて、「忠名之次男 童名登々丸」(名の左に並記)となっている。

<注釈>

・康忠

〔前右馬允〕 『史料編一』には「允」を「充」とあるが誤記。

・康高

〔左衛門允〕 『史料編一』には「允」を「充」とあるが誤記。系譜II・IIIは「允」を「尉」と訂正している。

・忠夏

〔童名登々丸〕 『寛保三年写本』にはその右に「忠名之次男」の文字がみられる。実際は康政の次男で、兄・忠名の養子になった。

・忠直

〔式部丞法名行忠〕 『史料編一』には「行忠」を「行意」としているが誤記。

・松王丸

童名のみであり、早世か。

- ・長忠
長忠は忠光の子と、忠直の子（養子、系譜IIで後述）としての2ヶ所に記されている。

〔七郎〕 呼名

- ・忠重
〔五郎新判官養子ニナス〕 五郎は呼名。新判官は長兄の忠武。忠武には子の松王丸が記されているが、早世したためか、忠重がその養子になったことを記している。

- ・盛忠
名のみで、官職名などの記述なし。

3. 系譜II

この系譜は、明治34年生まれの忠利まで記されているが（現在はさらに、益雄・為雄・節子分と「記」が追記されている）、前述したように第1期は享保17年から寛保3年までに成立。第1期が貞英の項（実質は三女の誕生年月日・名）までであることは、系譜IIIと共通しており、両系譜は成立年を含め極めて近い関係にあるといえる。

第9表 官・位階相当表（抜粋）－拙文関連の参考資料－

地方官 国衛 小中大 国国国	中央官						正五位 以上 上 従五位 下 正六位 上 下 従六位 上 下 正七位 上 下 正八位 以下
	その他			八省の被官		八省	
	(勘解由使)	左右馬寮	左右衛士府 (近衛府)	左右大舎人寮	右弁官	左弁官	
守	頭						
守						大輔	
守 介						大丞	
介			(判監)			小丞	
守	判官		大尉				
			少尉				
		大允		大允			
		小允		小允			

(京大日本史辞典編纂会編『新編日本史辞典』付録より作成)

<注釈>

〔同河内郡切川城主〕 『史料編一』は「国」を「國」としているが誤記。系譜IIIでは「國」。切川は現在の東大阪市喜里川町にあたると思われるが、城の所在・内容の詳細は不明。「藤原忠夏讓状目録写」<42>に「一所 切川城内并四壁七段余」とその右欄外に「河内郡切川村（小字一筆者・記）」と加筆されている。これは長子の忠武にあてたものであり、系譜IIIの忠武のところには墨線で抹消されているが「切川城主」の文字が見える。

〔太平記三十五巻作水速城〕 『太平記』巻第三十五の「南方蜂起の事付けたり畠山関東下向の事」の条に、「～ 河内の守護代、杉原周防入道は、菅田の城を落ちて、水速の城にたて籠り、ここにしばらく支えて京都のさうを待たんとしけるが、楠、大勢を以つて息も継がず攻めけるあいだ、一日一夜戦ひて、南都の方へぞ落ちにける。～」と記している－延文5年・正平15年(1360) <新潮日本古典集成『太平記 五』 山下宏明校注 新潮社 1988年。以下、新潮本『太平記五』>。

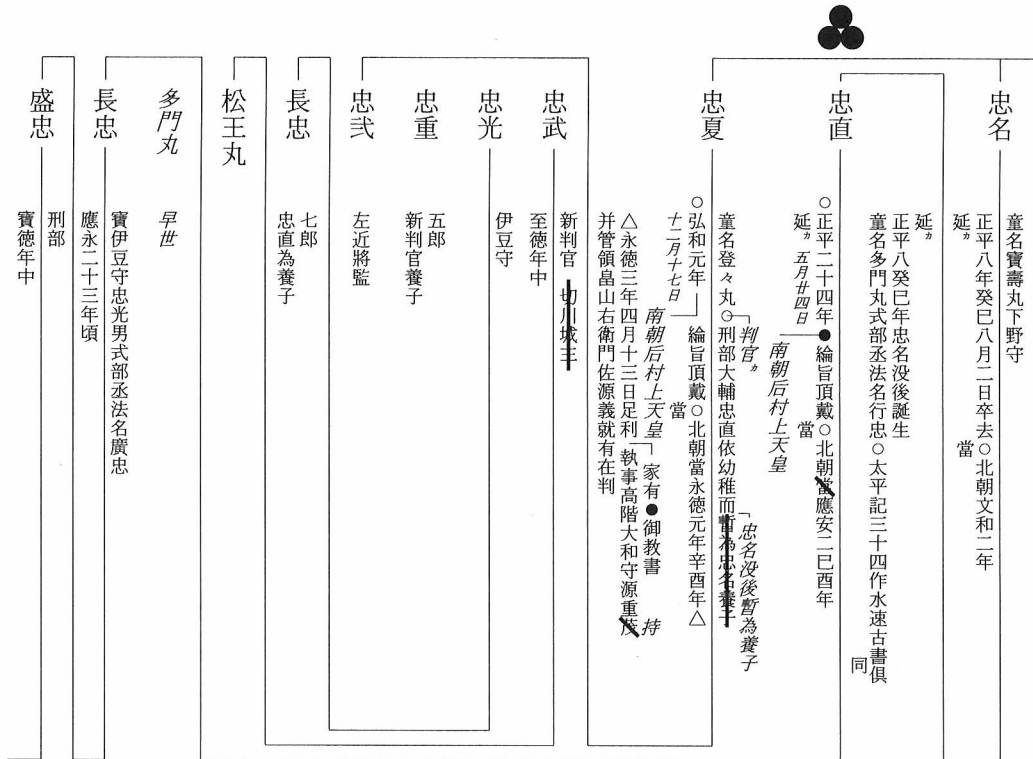
〔天兒屋根命十二世雷大臣命裔孫平岡連後胤河州枚岡社務職〕 『史料編一』は、「速城」のみを改行し2行にしているが原本は1行であり、「臣」と「裔」との間の「命」が欠落している。また、「作」と「水」間の「ル」は原本にはなく誤記。

- ・季忠

〔天養年中賜廳宣由康忠解状記之〕 『史料編一』では「康」を「源」とあるが誤記。「源康忠解状案」<1>の中に「～ 水走者依為重代相傳地 親父季忠去天養中申賜廳宣 遂開發大功 被停止万雜公事 令進済官物之間～」とある。

- ・康忠

〔壽永三年二月右大将源頼朝卿賜御下文〕 『史料編一』では、「源」と「二位」の間を1マス分けてあるが原本にはない。また、「卿」と「御」の間に「○」を入れているが「賜」である。「頼朝卿御下文」と記しているのは『寛保三年写本』に「一 右大将源頼朝卿御下文写」として「源義経外題」<1>（安堵状）を記



述しており、これをさしている=『史料編一』[解説]。これは、本宅を安堵する代りに御家人の軍役に勤仕するように裁定したものである。

[并伊与守源義経有請文] 『史料編一』は「経」を「經」とし、「与」を「豫」とあるが誤記。「伊与守」は「伊予守」。請文は「源義経書状案」<2>で、康忠以外は御厨の軍役を免除すると下知したものである。

・康綱

[建仁年中頃] 建仁は1201年2月～1204年2月。

・康高

[建長年中] 建長は1249年3月～1256年10月。

・忠茂

[忠持] 忠茂の別名。

[正應年中] 正應は1288年4月～1293年8月。

・忠雄

忠雄の項については、原本に記されているが『史料編一』ではこの部分が欠落しており、忠茂から忠祐たちにつながっている。

[正中年中] 正中は1324年12月～1326年4月。

・忠連

系譜 I にはなし。

[民部丞叙従五位下号民部大夫] 『史料編一』では「従」を「從」としているが誤記。

[早世] 早世したために、弟(三男)の康政が忠連の養子となって家督を相続することになったようである(後述)。

第10表 (系譜Ⅱ)

藤原姓

水走系譜

本國河内 旗紋下藤

簀紋甘藤

同河内郡切川城主。太平記三十五卷作

水速城

孫

十二世雷大臣裔平岡連後胤河州杖岡社務職

天兒屋根命後胤河州杖岡社務職切川城主の太平記三十五作水速城



季忠

大告人允

天養年中賜聽忠解狀記之

康忠

前右馬允

壽永三年二月御執書

請文

源上佐頼朝賜御下文并「伊与守」源義經有
右大將源

康綱

左衛門尉

建仁年中頃

康高

左衛門尉

建長年中

忠茂

忠持

前常陸介

正應年中

忠雄

對馬守法名行意

正中年中

忠連

民部丞叙從五位下号民部大夫

早世

忠祐

對馬二郎

康政

徳治元丙午年誕生号對馬三郎左馬允任左

衛門督△建武三年丙子五月二十五日卒去

行年三十有一歳 △忠連為養子

(斜体字は、くずし字)

・忠祐

〔對馬二郎〕 『史料編一』では「二」を「三」と記しているが誤記。弟の康政が對馬三郎（後述）であり、ともに父の忠雄が對馬守であったことからそれをうけての命名か。

・康政

〔徳治元丙午年誕生〕 誕生年の明確なものとしては初出。徳治元年は1306年。

〔号對馬三郎左馬允任左衛門督〕 『史料編一』は「号」を「號」としているが誤記。系譜Ⅰには「左馬頭」とある。

〔△建武三年丙子五月二十五日卒去行年三十有一歳〕 明確な死亡年月日および享年を記した初出。建武3年は1336年。康政の死について、『枚岡市史第一巻 本編』は湊川の戦いで戦死したのではないかとしている。湊川の戦いは5月26日で、康政の死亡日はその前日にあたり、断定はできないが、康政は当時南朝方に与してしかも楠木正成の傘下にいたことから、この戦いに参戦して死亡した可能性は高いと思われる。

〔△忠連為養子〕 ほとんど楷書体で記されているのに、これは草書体で筆跡も異なり、のちの加筆。長兄・忠連の早世により、その養子となって家督を継いだことを明記したもの。

・忠名

〔正平八年癸巳八月二日卒去〕 正平は南朝の年号。正平8年は1353年。「正」の左に「延カ」とあるが（忠直の項にも2ヵ所ある）不詳。

〔當北朝文和二年〕 当時水走氏は南朝方に与していたことから「正平」を先に記しているが、その後北朝の相当年号・年を並記している、南北朝期の忠直・忠夏の項も同じ。本来「北朝當文和」とあり、「當」を墨線で抹消しているが、『史料編一』には抹消印の「、」がついていない。

・忠直

『史料編一』の記述方法は印字の関係などからか原本と異なった記述がある—忠直の名の上の「・」印がず

れており、縦線右側の語尾の「書俱同」を左上に改行、左側の「五月廿四日」「南朝后村上天皇」はくずし字で追記一。

〔正平八年癸巳忠名没後誕生〕 誕生月・日は不詳であるが、忠名が同年の8月2日に没しており、「没後」とあることからそれ以降の誕生となる。童名は多門丸とある。

〔太平記三十四作水速古書俱同〕 『太平記』巻第三十四の「新將軍南方進発の事 付けたり 軍勢狼籍の事」の条に、「～ 互ひに時を待ってまだ戦はざるところに、丹下・俣野・菅田・酒匂・水速・湯浅太郎・貴志の一族五百餘騎、弓をはづし冑を脱いで降人に成つて出でたりければ～」とある＝延文5年・正平15年2月3日（新潮本『太平記五』）。新編日本古典文学全集『太平記④』（長谷川端校注・訳 小学館 1998年。以下、小学館本『太平記④』）によると、巻第三十四「楠正儀和田軍意見の事」の条に、「～正儀・正氏等は和泉・河内の勢を相伴ひ、水速早・金剛山に引き籠り、～」とある＝延文4年・正平14年（1359）。しかし新潮本『太平記五』では「水速早」は「千剣破」となっている－底本の相違一。

〔正平二十四年（五月廿四日）（南朝后村上天皇）繪旨頂戴〕（ ）は筆者・記で、くずし字の加筆部分。『史料編一』は、原本の加筆的記述では記しておらず、「后」を本来の「後」と記すが誤記。正平24年は南朝の年号で北朝では応安2年にあたり、1369年。後村上天皇は前年の正平23年3月に崩御している。この繪旨は「長慶天皇繪旨」<6>であり、玉櫛庄松高・貞久の知行を認めたものである。忠直は12年後の弘和元年の「長慶天皇繪旨」<7>で正式に家督相続が認められている。『史料編一』は「頂戴」後の「○」左の「當」が上にずれている。

・忠夏

〔童名登々丸（判官カ）刑部大輔〕 登々丸と刑部の間に「○」を記し、「判官カ」と右に同筆跡で加筆。系譜Ⅰにはなく、系譜Ⅲでは「判官刑部大輔」と記している。

〔忠直依幼稚而忠名没後暫為養子〕 『史料編一』は忠直以下の訂正文を二行に記しているが、原本は一行。兄の忠名が亡くなり、その子の忠直が幼稚（誕生直後）であったことからしばらく忠名の養子となって家督を相続したことを記している。忠夏はあくまでも暫定的相続で、忠直が家督相続することは「源憲康以下連署証文」<19>によって確認されていた。

〔弘安元年（十二月十七日）（南朝后村上天皇繪旨）頂戴〕（ ）は筆者・記で、加筆部分はくずし字。『史料編一』では「后」を本来の「後」と記しているが誤記。「弘安元年」は南朝の年号・「弘和元年」の誤りで、北朝の永徳元年にあたり、1381年。前記のように、後村上天皇は1368年3月に崩御しており、「繪旨」は「長慶天皇繪旨」<7>であり、この繪旨は忠夏ではなく忠直がうけたものである。

〔永徳三年四月十三日足利（家有・御教書）執事高階大和守源重持并管領畠山右衛門佐源義就在判〕（ ）は筆者・記で、くずし字。『史料編一』は、加筆部の「・」を「○」としているが誤記。また、単に「重持」とあるが、原本は最初「重茂」と記して後「茂」を墨線抹消し、右に「持」と追記。「義就」の右に「、、」と抹消印を記してあるが、原本には墨線での抹消はなく、その下の「有」を墨線抹消している。永徳3年は1383年。執事高階大和守重持は「重持安堵状」<20>をさすが、重持（貼紙－重茂）の名は高階氏系図にはなく、観応元年（1350）に国司に任官された大掾大江重茂との関係も示唆されている－『史料編一』〔解題〕－が不詳。また管領畠山右衛門佐義就在判についても「右衛門佐安堵状」<21>をさす。義就は延徳2年（1490）に没しており、永徳3年に生存していたとは考えられず、3代前の基国（河内国守護、右衛門佐に任じられている）ではないかといわれている－『史料編一』〔解題〕－。

・忠武

〔至徳年中〕 至徳は北朝の年号で、1384年2月～1387年8月。

・忠弼

忠弼は系譜Ⅰにない。『史料編一』は「弼」を「貳」としているが誤記。

・長忠

忠光－長忠の項

〔忠直為養子〕 後記に忠直＝多門丸が早世したことから、養子となって家督を相続したことを明記。系譜

I・IIIにある呼名の「七郎」は記されていない。

忠直—長忠の項

〔多門丸 早世〕 草書体の加筆で、多門丸は忠直のこと。

〔實伊豆守忠光男〕 忠直の子になっているが、本当は忠光の子であることを明記。

〔應永二十三年頃〕 應永23年は1416年。これは「水走長忠知行注進状」<43>・「水走長忠本領注進状」<44>の年代である。

・盛忠

〔刑部〕 「寶徳年中」とともに系譜Iにはない。

〔寶徳年中〕 寶徳は1449年7月～1452年7月。

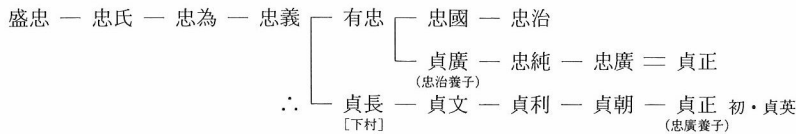
4. 系譜III

この系譜は、冊子『寛保三年写本』の別記として記されたものである。『史料編一』の〔解題〕には「長忠」までとしているが、実際は「貞正（貞英）」—享保15年（1730）の社務職相続の記—まで記述されている。すなわち、『史料編一』では忠直と忠夏間に横線を入れているが誤記で、忠直からの線は養子としての長忠へ、そして盛忠以下へとつながり、忠武からの線は松王丸につづいている。以下、系譜I・IIに記されていない記述を中心にその内容を見てみよう。

<注釈>

〔并下村系〕 この系譜は盛忠の曾孫・忠義の次男・貞長の家系のことである。貞長は一家を建てて「下村」を称し（母方の姓）、その4代後の貞正（貞英）が水走忠廣の養子になっている。下村系の系譜はこの系譜IIIにのみ記されており、系譜IIにはない。系譜IIIが貞正で終っていることから、この系譜の成立が貞正と深く関係し、その出自を明確にするために下村系の系譜を挿入したものと考えられる。

<「下村系」関連略系譜>



〔天兒屋根命十二世雷大臣裔孫平岡連後胤河州枚岡社務職〕 『史料編一』では印刷の字数の関係から「職」だけを改行し2行にわたっているが、本来は1行。また、「兒」を「兒」、「職」を「職」としているが、ともに誤記。

・季忠

『史料編一』には季忠の名などを四角く囲んでいるが、その線は原本にはない。

・康忠

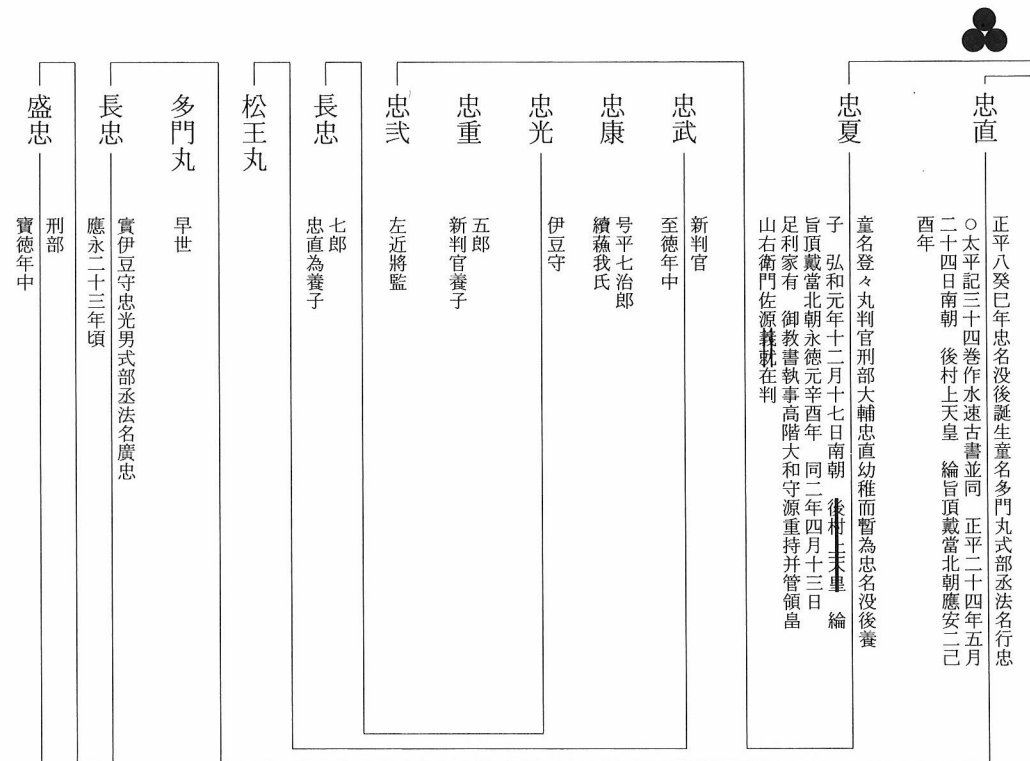
〔并伊豫守源義経 有請文〕 『史料編一』は「并」を「杵」、「有」を「右」としているが、ともに誤記。また「右請文」を義経の下に記しているが、原本では改行して2行になっている。

・忠雄

〔左馬允〕 系譜I・IIにはない。

・忠連

〔民部丞叙従五位下号民部大夫〕 『史料編一』では「従」を「從」、「号」を「號」と記しているが、ともに誤記。



・康政

[号對馬三郎] 『史料編一』は「号」を「號」とし、「對馬三郎」を「對馬四郎」としているが誤記。
 [建武三年丙子年五月二十五日卒去行年三十有一歳] 『史料編一』は「卒」のあと1マス分をあげているが「去」の字がある。

[所謂三楠實録上巻八建武三年正月七日中略先陣ハ平岡生地丹下等五百余騎云云] 『史料編一』では、「ハ」は欠落、「生地」と「丹下」の間を1マス分あげているが不要、「余」を「餘」とするが誤記。この記述は系譜IIにはない。

『三楠實録』（上之八 〇二十六）の建武三年一月七日の条には、

～ 然レバ正成。五千余騎ノ内。二千余騎ヲ八幡ノ城へ籠メ。又千余騎ヲ飯盛二籠メテ。川尻ヲイカニモ堅固ニ差塞トナリ。五百余騎ハ始メヨリ瀬田ニアリ。残テ千五百余騎ヲ三手ニ分タリ。先陣ハ平岡。生地。丹下等五百余騎。中ハ正成近衆六百余騎。後陣ハ斎藤。新庄。本庄ノ者興四百余騎ニテ打セタリ。～

とある。この内容について『枚岡市史第一巻 本編』は2種の解釈がされている（栗原修二氏より教示、『三楠實録』のコピーの提供もうける）。

1) 「第三章 中世の枚岡 第二節 中世中期の枚岡の南北対立」

～平岡の生地に先陣し丹下五〇〇余騎と大いに戦った～

2) 「第三章 中世の枚岡 第三節 中世の枚岡神社」

～先陣として平岡・生地・丹下ら五百余騎とある～

「生地」は建武年間に楠木正成に味方して城も築いた恩智満一がいて、その後の左近なども南朝方に与していた「恩智=恩地」（八尾市）と考えられく小学館本『太平記④』卷第三十四に「生地」があり、新潮本『太平記五』は「恩地」と記している一底本にした写本の相違一、平岡（枚岡・東大阪市）・丹下（羽曳野市）とともに地名を列記したものであり、2)の解釈が正しく、平岡・生地・丹下の各地域の武士の総勢・五百余

第11表 (系譜III)

藤原姓

水走系譜 本國河内 旗紋下藤
并下村系 同國河内郡切川城主○太平記三十五卷作

天兒屋根命十二世雷大臣裔孫平岡連後胤河州枚岡社務職



季忠

大舍人允
天養年中賜廳宣由康忠解狀記之

康忠

前右馬允
壽永三年二月右大將源賴朝御賜 御下文并伊与守源義経
有請文

康綱

左衛門尉
建仁年中頃

康高

左衛門尉
建長年中

忠茂

忠持

前常陸介
正應年中

忠雄

左馬允
對馬守法名行意
正年中

忠連

民部丞叙從五位下号民部大夫
早世

忠祐

對馬二郎

康政

德治元丙午年誕生号對馬三郎左馬允任左衛門督忠連為養子
建武三丙子年五月二十五日卒去行年三十有一歲所謂三楠実録上卷八建武三年正月七日先陣八平岡生地丹下等五百余騎云○則康政属于南朝之時也

忠名

童名寶壽丸下野守
正平八年癸巳八月二日卒去當北朝文和二年

騎が楠木正成の傘下にいたことを記している。

〔是則康政属于南朝之時也〕 これも系譜IIにはない。「則」の上に「○」を記し、左斜め下へ線を出して「是」字を同一筆跡で加筆している。『史料編一』は「属」を旧字の「屬」としているが誤記。

・忠名

〔正平八年癸巳八月二日卒去～〕 『史料編一』では、「卒」のあと1マスあけているが「去」の字がある。

・忠直

〔太平記三十四卷記水速古書並同〕 「並」は系譜IIでは「俱」。

〔當北朝應安二己丙年〕 『史料編一』は「丙年」を「～二己」につづけて記しているが、原本は改行している。

・忠夏

〔足利家有御教書執事高階大和守重持并管領畠山右衛門佐源義就在判〕

『史料編一』は「并」を「八杵」とあるが誤記。また「義就」に抹消印の「ヽヽ」が記されていない。

・忠康

〔号平七治郎〕 『史料編一』は「号」を「號」にしているが誤記。

〔續菰我氏〕 『史料編一』は「菰」を「蘇」としているが誤記。

忠康は系譜I・IIにはなく、この系譜のみに記されており「菰我氏」に養子にいったことになっている。

「藤原忠夏讓与目録写」<42>には「一所從等事」として「菰我^{改行}平七治郎 同子孫等」とあり、忠夏から忠武に讓与された所從のひとりとして記されている。

今後の課題

水走遺跡第4次発掘調査の報告書の作成にあたり、これまでの同遺跡内での発掘調査の成果が、水走氏による開発を裏付ける考古資料となると考えられることから、『水走文書』との関連を検討する必要に迫られた。『水走文書』は前述したように『史料編一』に記載されているが、その信憑性を再確認するため、現存する『水走文書』を閲覧して対比し、史料の再検討をすることにした。今回、閲覧の許可をいただいた水走益雄御夫妻に厚くお礼申し上げます。閲覧に際しては系譜だけでなく、各文書についてもいくつか気付いた点があった。拙文はこの史料検討の一端であり、今後は忠氏（盛忠の長子）以下の系譜およびの各文書について、原本と『史料編一』所載の「水走文書」との照会とその注釈などの基礎的作業をまず実施し、その後、各文書間の関連、発掘調査による考古資料との関係などを含め、『水走文書』の再検討をおこなっていきたいと考えている。

〔追記〕

1984年度に実施された水走遺跡第7次発掘調査のP102地区から、「永徳三年五月」と記された木簡が発見された。「花押」などもあるが、割れており記述内容は不明。残存の長さ18.4cm、幅3cmを測る（第68図 参照）－「水走遺跡（5次・7次）現地見学会資料」1984・9・8 大阪府教育委員会－。「永徳」は北朝の年号であり、「永徳3年」は1383年で、南朝では「弘和3年」にあたる。永徳3年は、忠夏が北朝方から知行を安堵された年（4月19日付け）であり<20・21>、月こそ違えくしくも同じ年であることは興味深い。

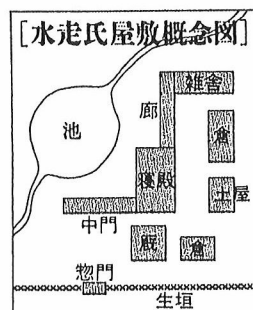
<付記>

付編1は、「わかくす」第36号に掲載した拙文である（P100 若松 1999）。本報告書に深く関わりとことから転載することにした。転載にあたっては、縦書きから横書きに改めたため適宜漢数字をアラビア数字に変え、誤字・脱字を訂正するなどの変更を行った。また「V. まとめ」の表・図と重複するものについては削除し、明記したものは本書の表番号に変えた。

水走氏館跡と水走氏の墓塔

水走氏の館＝屋敷については、「水走文書」にある建長4年(1251)6月3日付の「藤原康高讓状写」<14>に、

五条	
一屋敷一所	
六間壹面寢殿一字	七間廊一字
惣間 ^(ママ) 一字	中門七間一字
三間土屋一字	三間壹面厩屋一字
五間倉一字	三間倉一字
六間雑舎一字	



第70図 (P100 日下1992より)

とあり、当時の領主の屋敷状況を知る好史料といえる。昭和48年(1973)に後述する墓塔の北接地域－五条町1320－で発掘調査が実施されている。調査の結果、中世末から近世の遺構(溝状遺構、方形落ち込み、池泉遺構、柱穴)と土師器、瓦質土器、陶磁器、瓦、木製品、かんどし、寛永通宝、植物遺体などの遺物が検出され、鎌倉期の瓦も出土したがこの時期に相当する遺構は発見されていない(P100 東大阪市教育委員会 1973、田代・渡辺・石田 1981)。ただし、当該地周辺に水走氏の館＝水走屋敷のあったことは、村絵図などの絵図類、地籍、伝承－『大阪府全志』(P100 井上 1922)の「枚岡南村 大字河内」の項に「東方字山田に水走左近の宅跡あり…一天正7年(1579)のこととする・筆者－」等－などから類推されており(P100 藤井 1963・1997参照)、墓塔の南接地域など今後の調査に期待したい。

墓塔(第70図)は、周知の遺跡・水走氏館跡内の東大阪市五条町5-2にある五輪の供養塔で、文化8年(1811)9月に水走飛驒守忠良(嘉言)によって造立されたものである。方形石組の上に2石の方形基礎・請花・反花座と五輪を配したもので、高さ3.18mを測る。五輪の前面(西面)に梵字の種子が上から「キャ」「カ」「ラ」「バ」「ア」と刻まれている。また、上段の方形基礎石の西面から北面にかけて銘文が刻まれている。西面には忠道(系譜に見当たらない)以下の6名の実名と3名(忠廣・貞正・忠誠)の戒名－第6表参照一、北面は1行8字の19行にわたるが判読しがたい文字も多く全内容を知ることにはできないが、墓塔造立のいわれ－この墓塔が先世のためのものであること、水走氏が天兒屋根の後裔で平岡(枚岡)神社の社務を務めてきたこと、造立者の出自、先世の墓が荒廃していることなど一・造立年月日・造立者名が記されている(忠良については、P100 藤井 1963参照)。墓塔は昭和46年(1971)5月に東大阪市の指定文化財(史跡)になっている。



第71図 水走氏の墓塔と銘文
(銘文はP100 枚岡市役所1996、
 藤井1997より)

墓塔銘文

(西面)

水走刑部丞藤原朝臣忠道

左近有忠

左近忠國

左近忠治

左近貞廣

左近忠純

神嶽院殿清翁教信居士

峻高院殿觀樹白澄居士

清光院殿觀阿道靜居士

(北面)

水走氏先世墓碑銘

水走家者天兒屋根

之裔而世々平岡之

社務也

嘉言

辱自

河州茨田郡大

久保地郡中島氏

焉先世之墓荒

年久無碑文何徵

而

恩後世荒

者

也

者

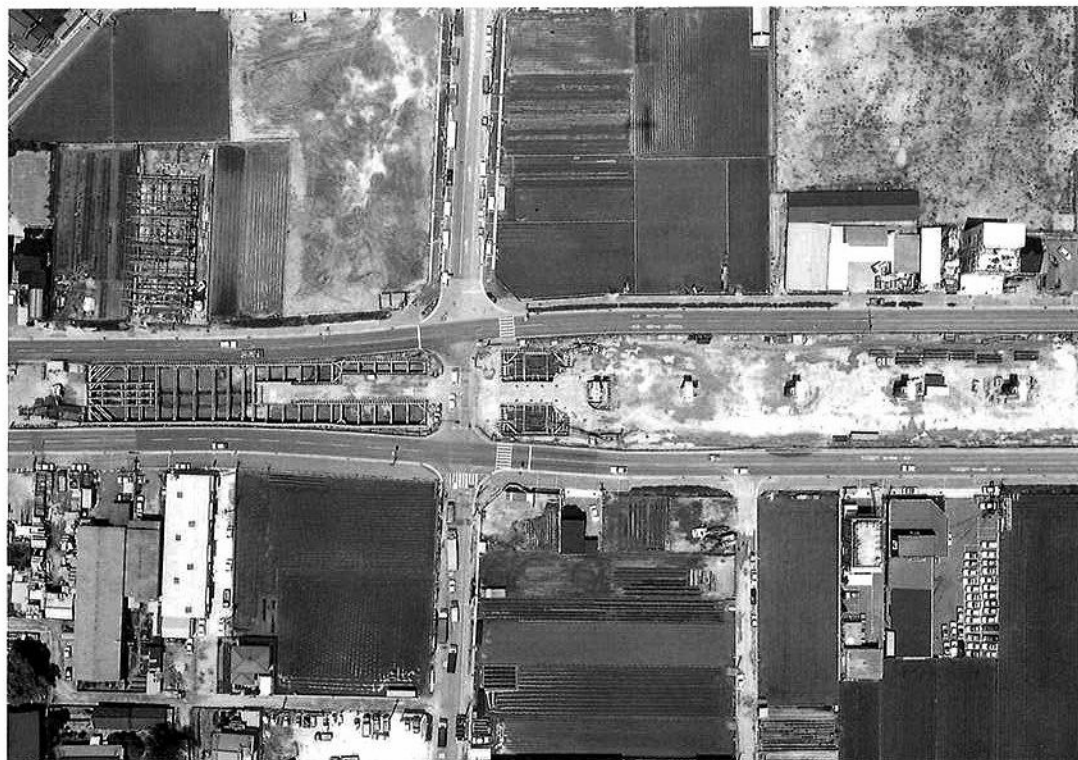
也

從五位下藤原朝臣

水走飛驒守

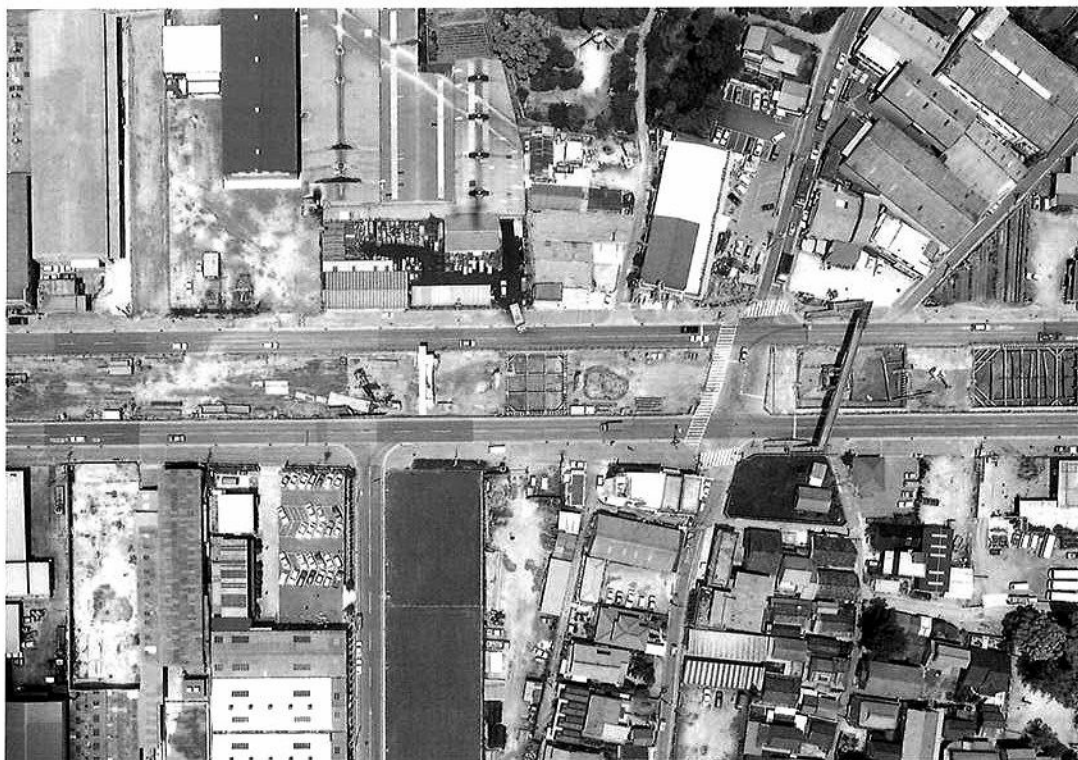
建石

版 圖



↑ A地区

↓ B地区



調査地航空写真



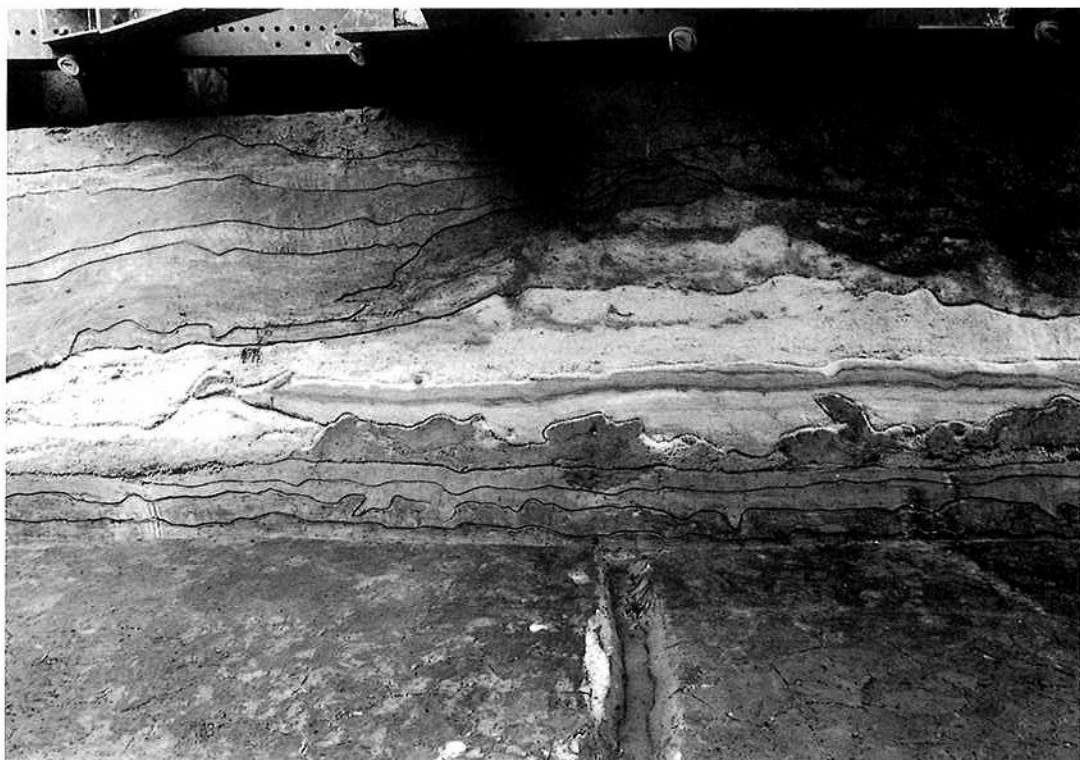
1. B地区 調査前（東より）



2. A地区 調査作業風景（西より）



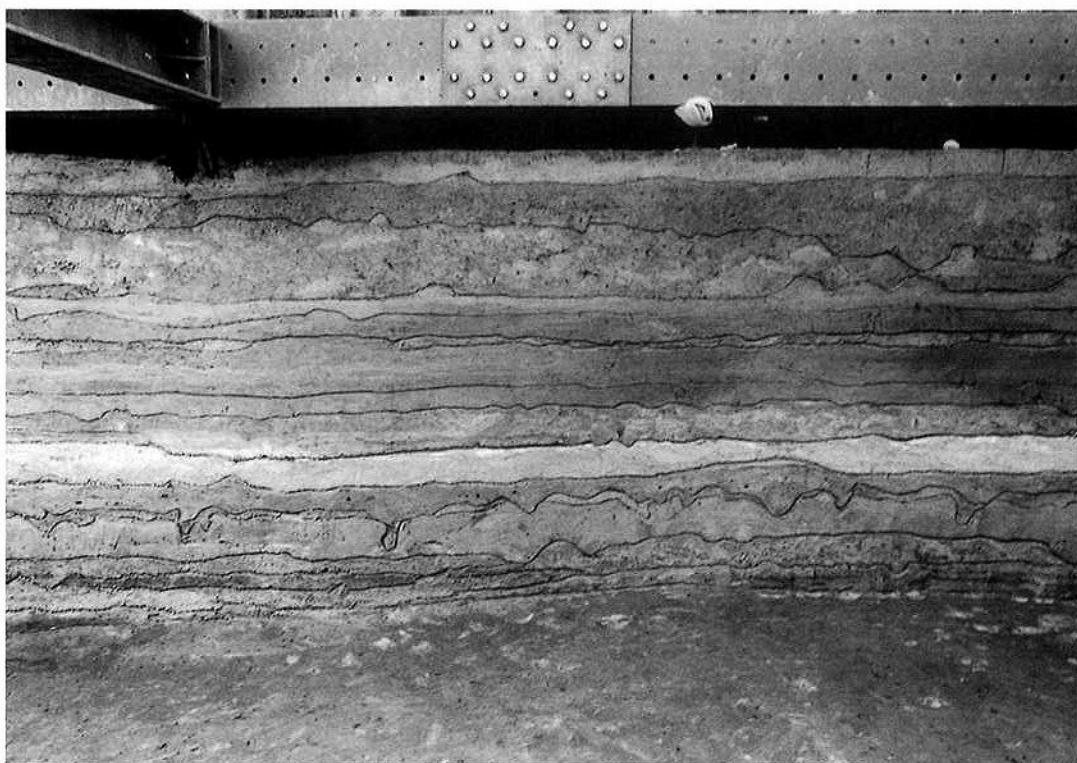
1. A地区 南断面 (上) 1



2. A地区 南断面 (下) 1



1. A地区 南断面 (上) 2



2. A地区 南断面 (下) 2



1. A地区 西断面 (上)



2. A地区 西断面 (下)



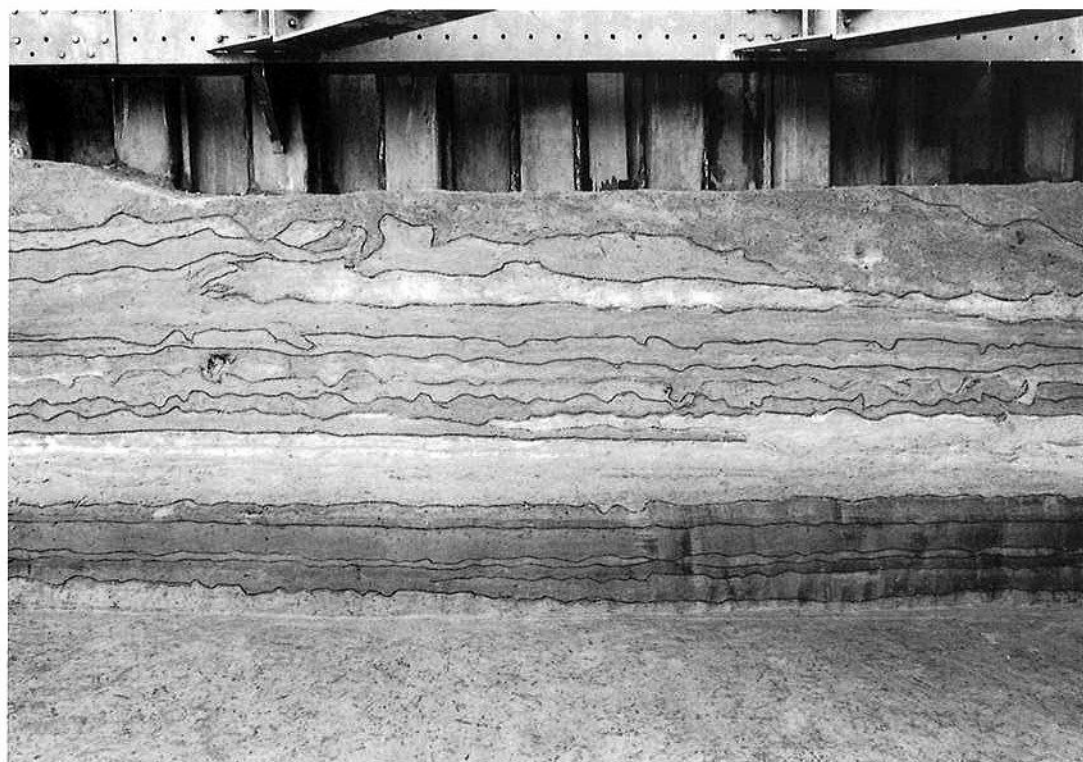
1. A地区 南断面（最下部）



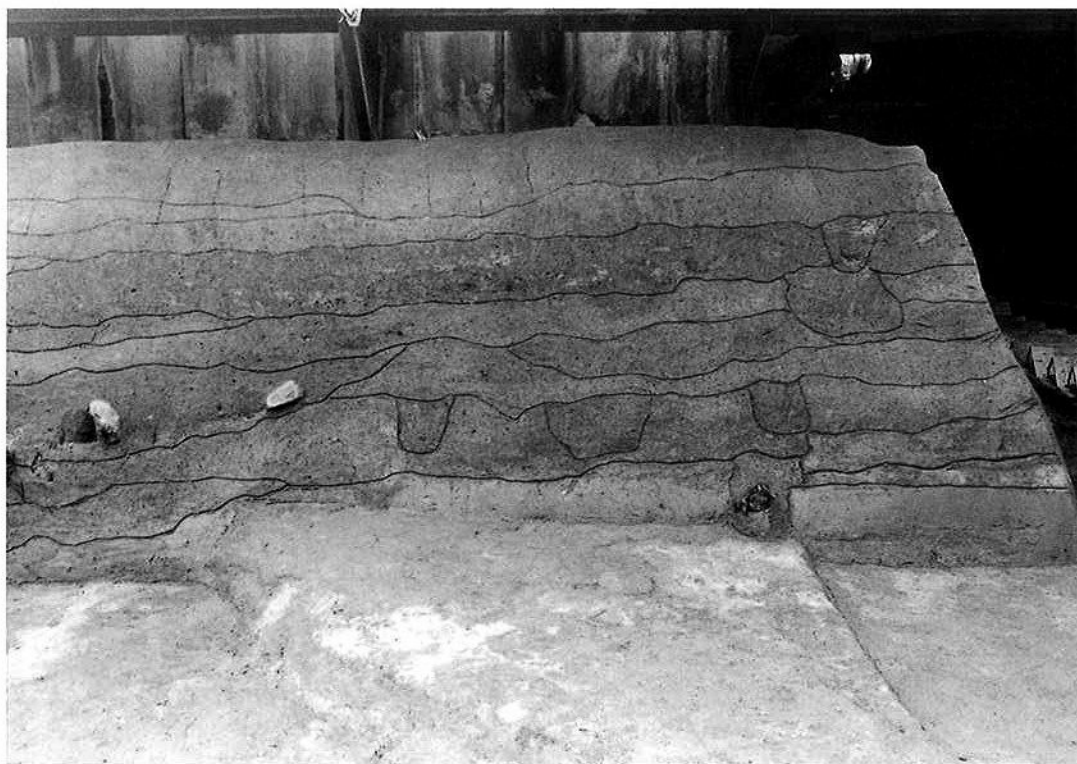
2. A地区 南断面（上）1



1. B-1地区 南断面(上) 2



2. B-1地区 南断面(下)



1. B - 1 地区 西断面 (上)



2. B - 1 地区 西断面 (下)



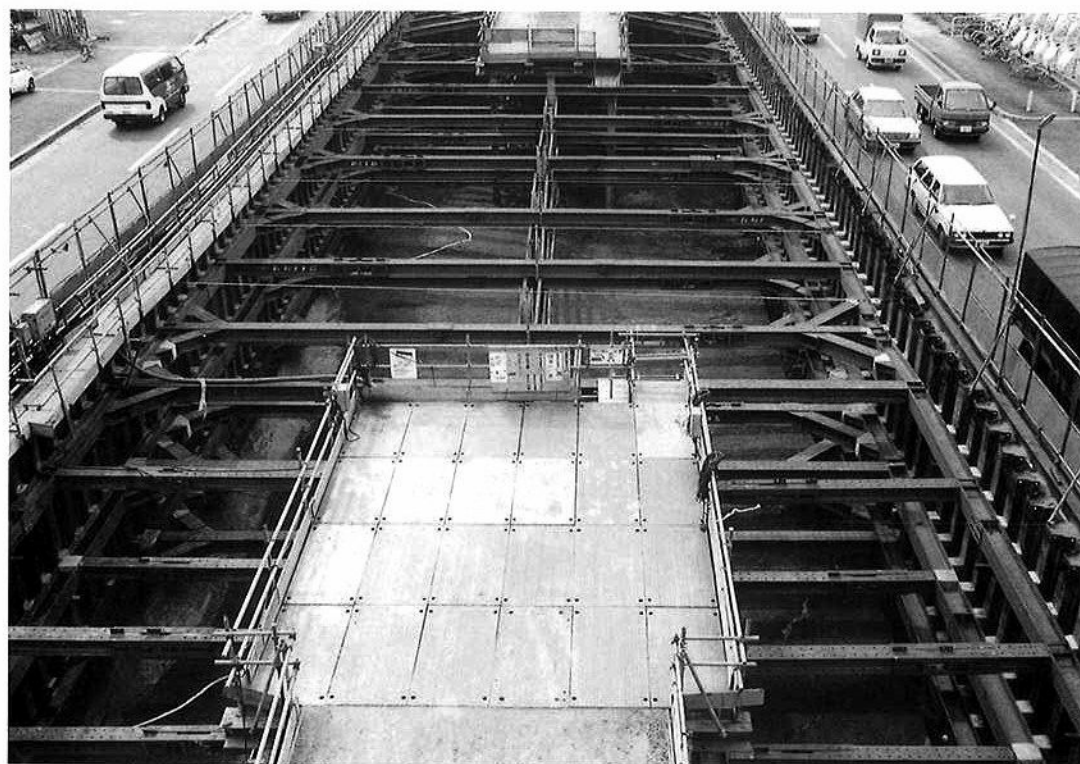
1. B - 2 地区 南断面 (上)



2. B - 2 地区 南断面 (下)



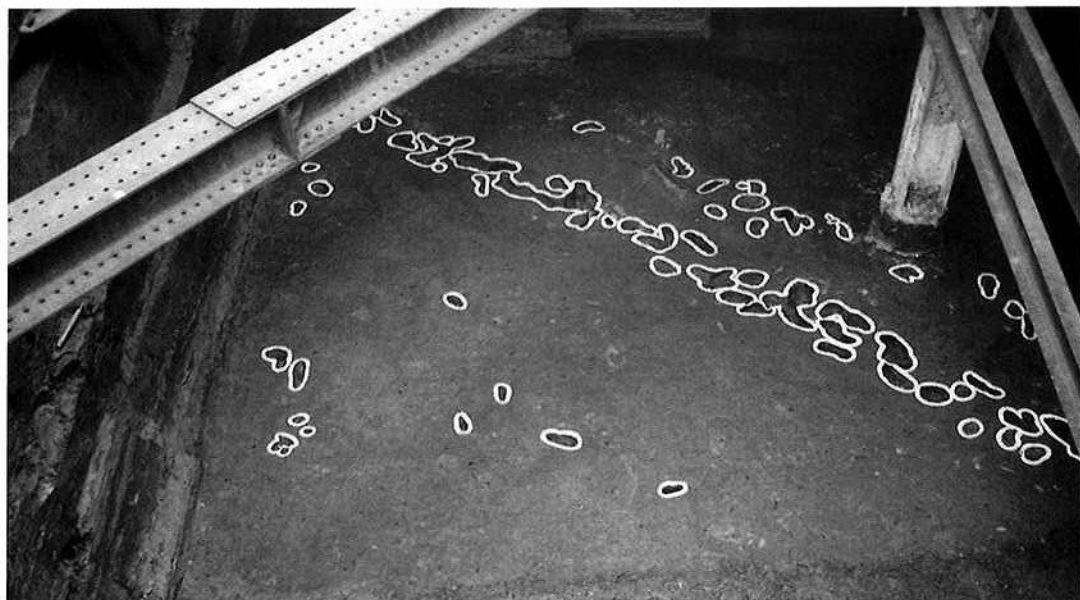
1. A - 2 地区 第35層上面落ち込み (西より)



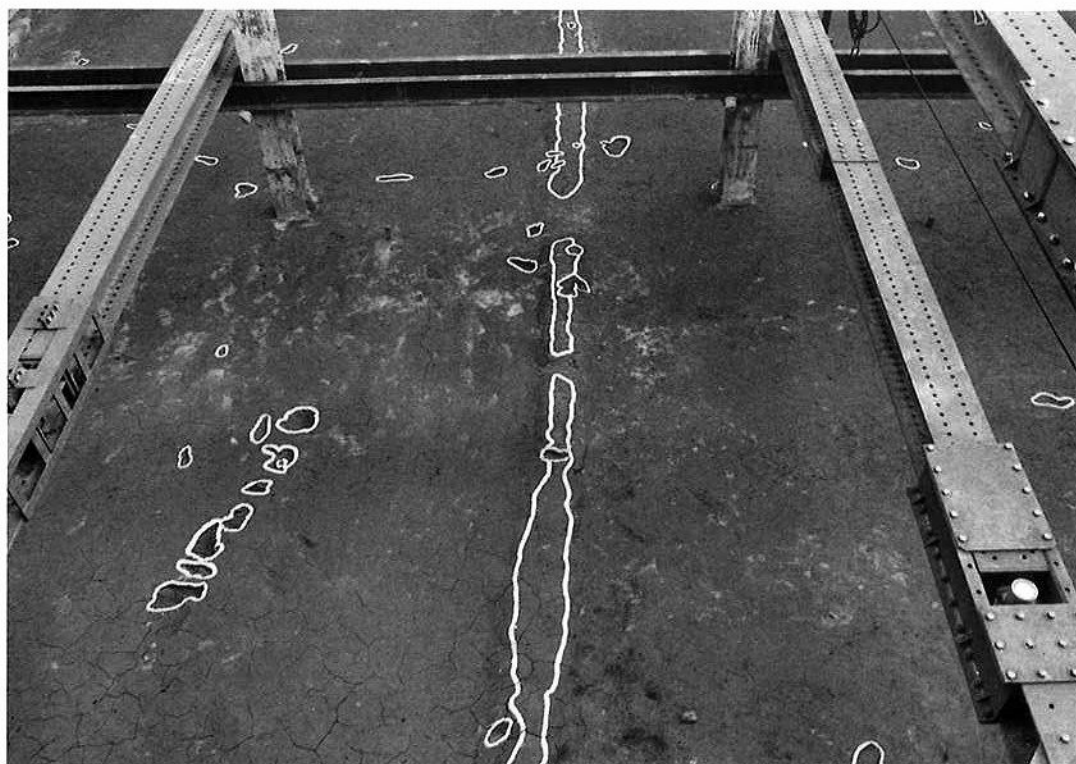
2. A地区 第30層上面自然流路 (東より)



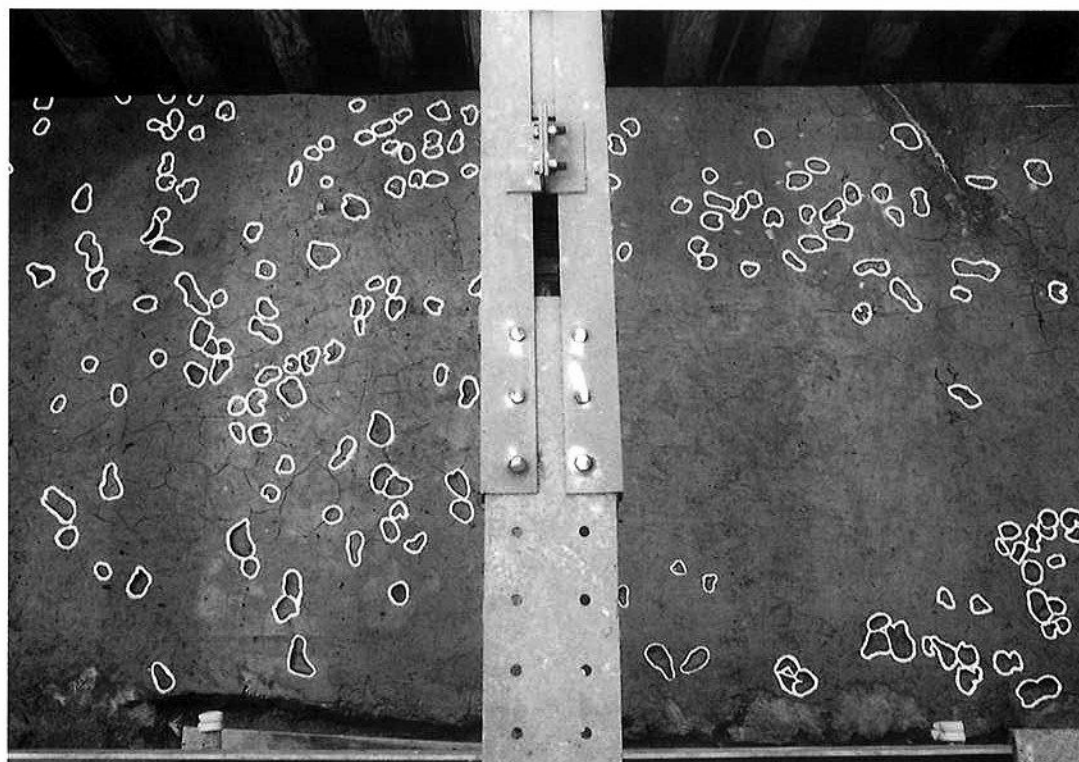
1.A-3地区
第21層上面足跡
(南より)



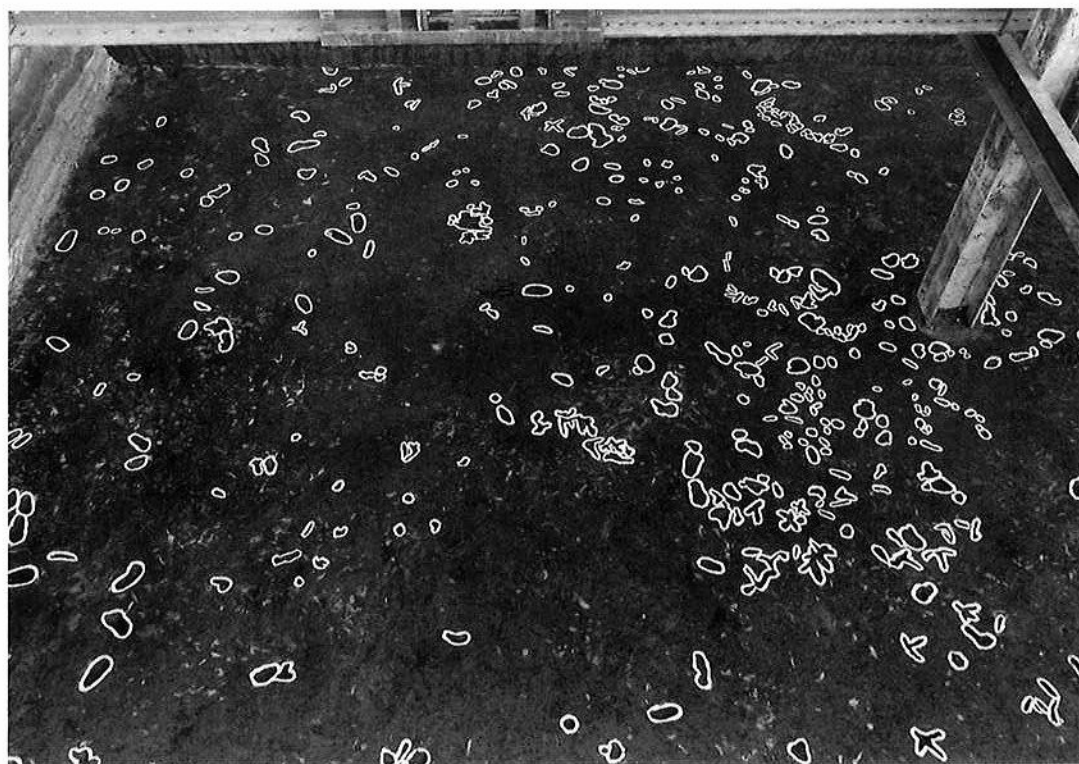
2.A-4地区 第21層上面足跡 (東より)



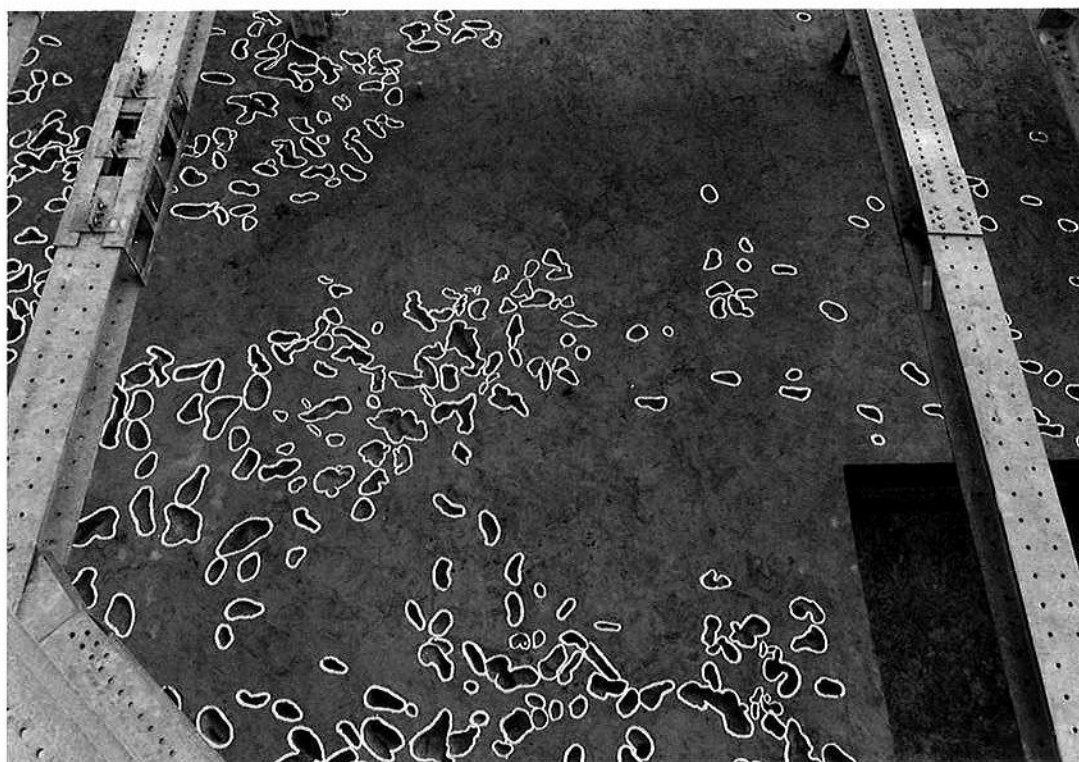
1. A - 3 地区 第18層上面畔・足跡（南より）



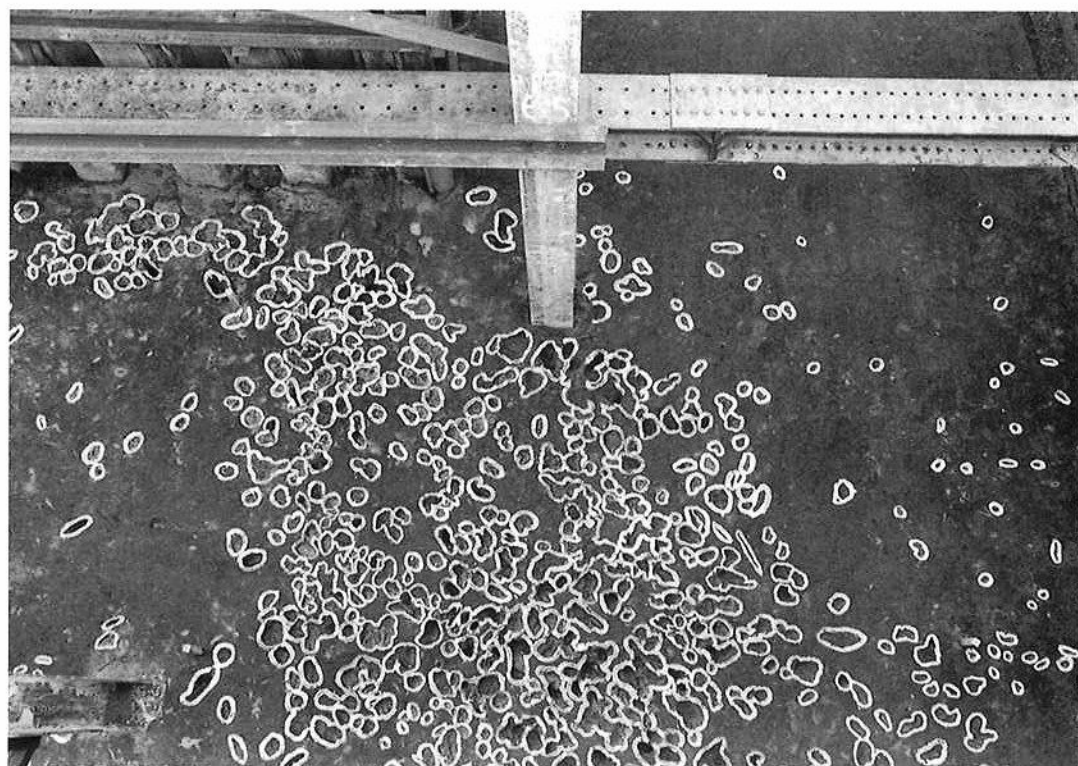
2. A - 1 地区 第18層上面足跡（南より）



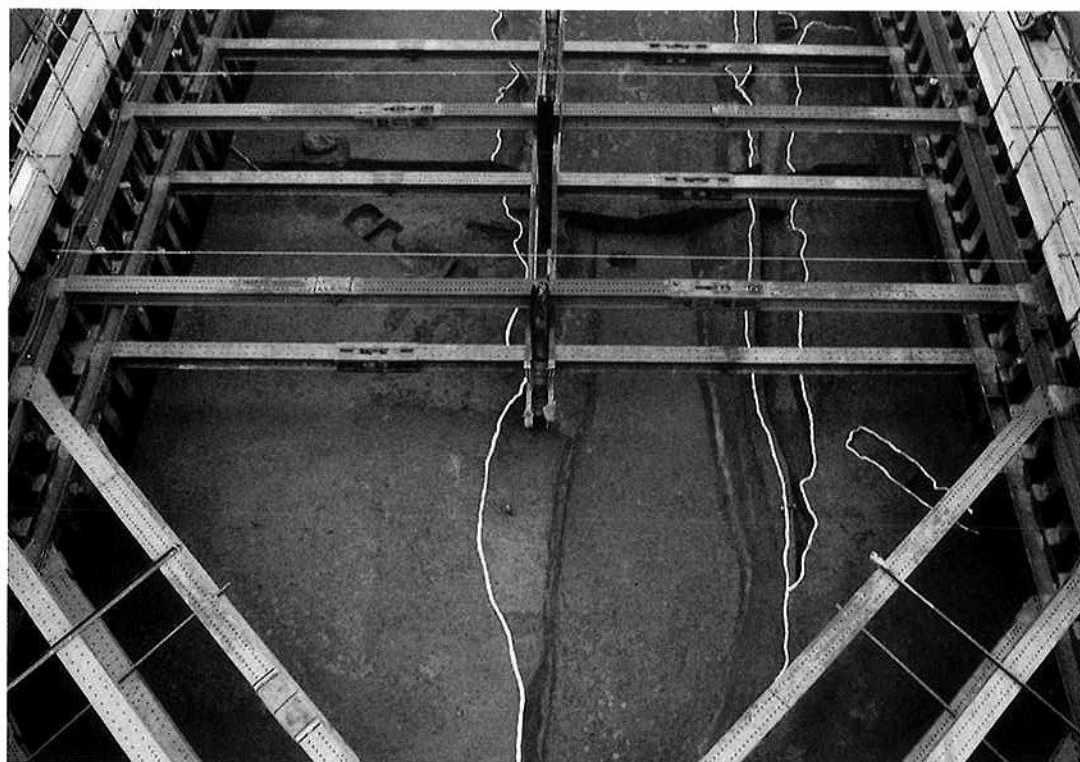
1. B-1地区 第15層上面足跡（南より）1



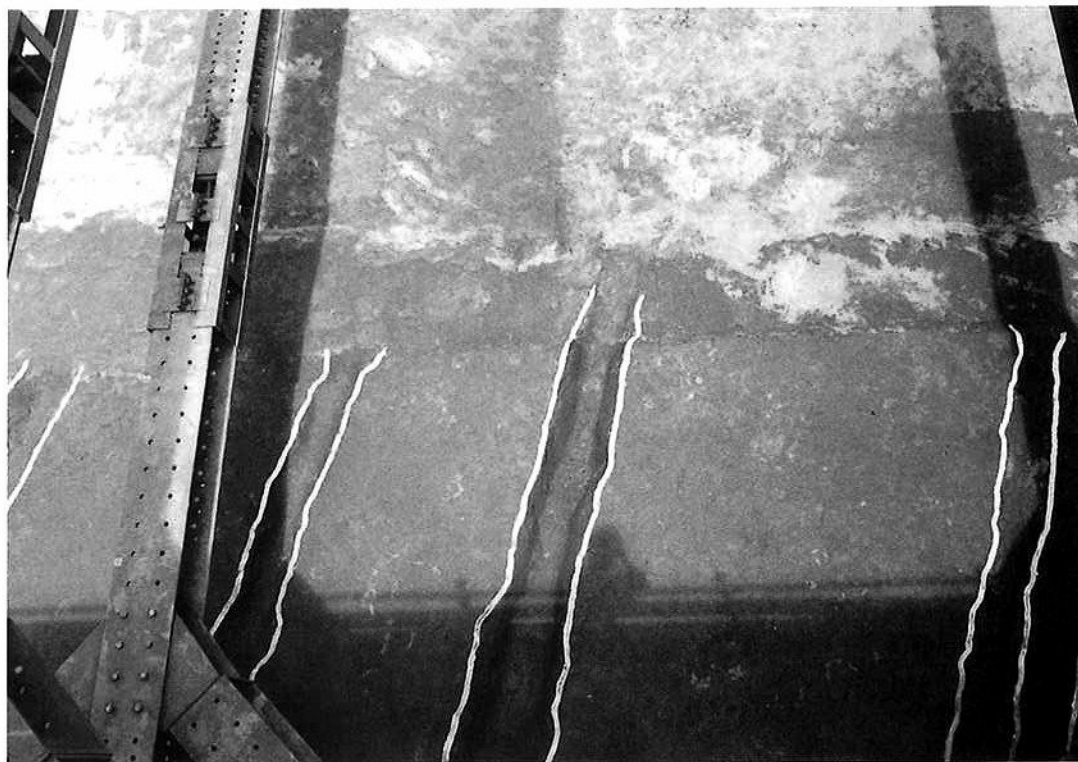
2. B-1地区 第15層上面足跡（南より）2



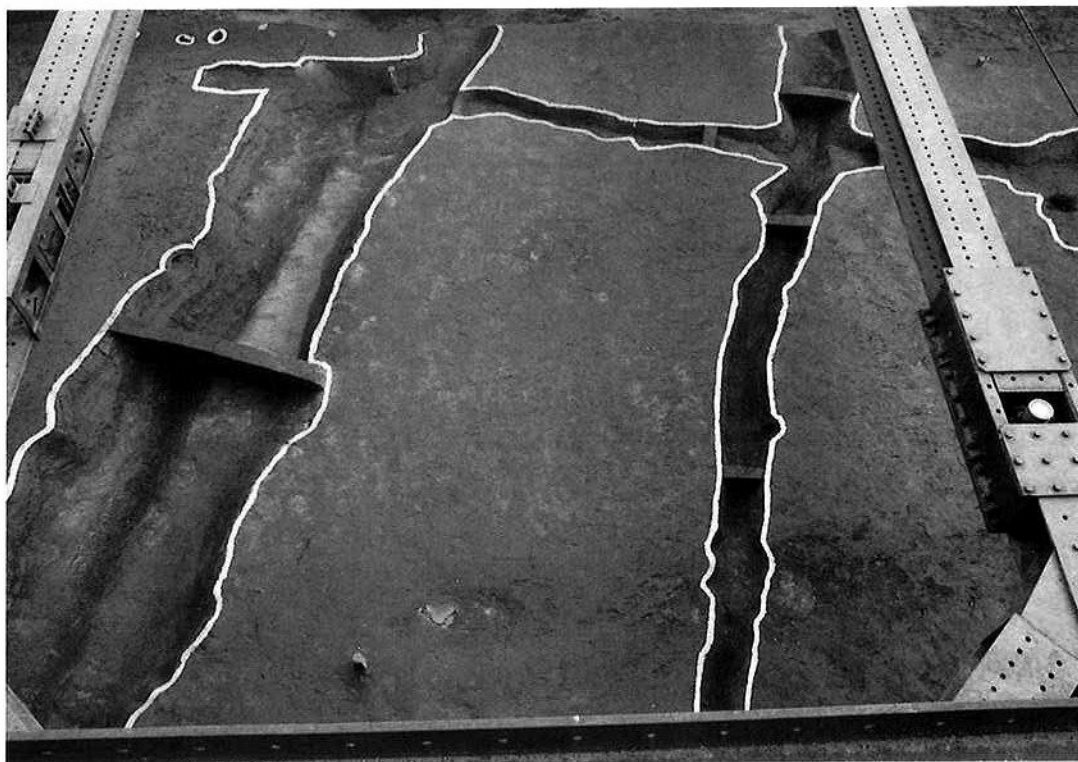
1. B - 2 地区 第15層上面足跡 (東より)



2. B - 1 地区 溝 32・33 (西より)



1. A - 3・4地区 第16層上面遺構 (南より)



2. A - 3地区 第16層上面遺構 (北より)



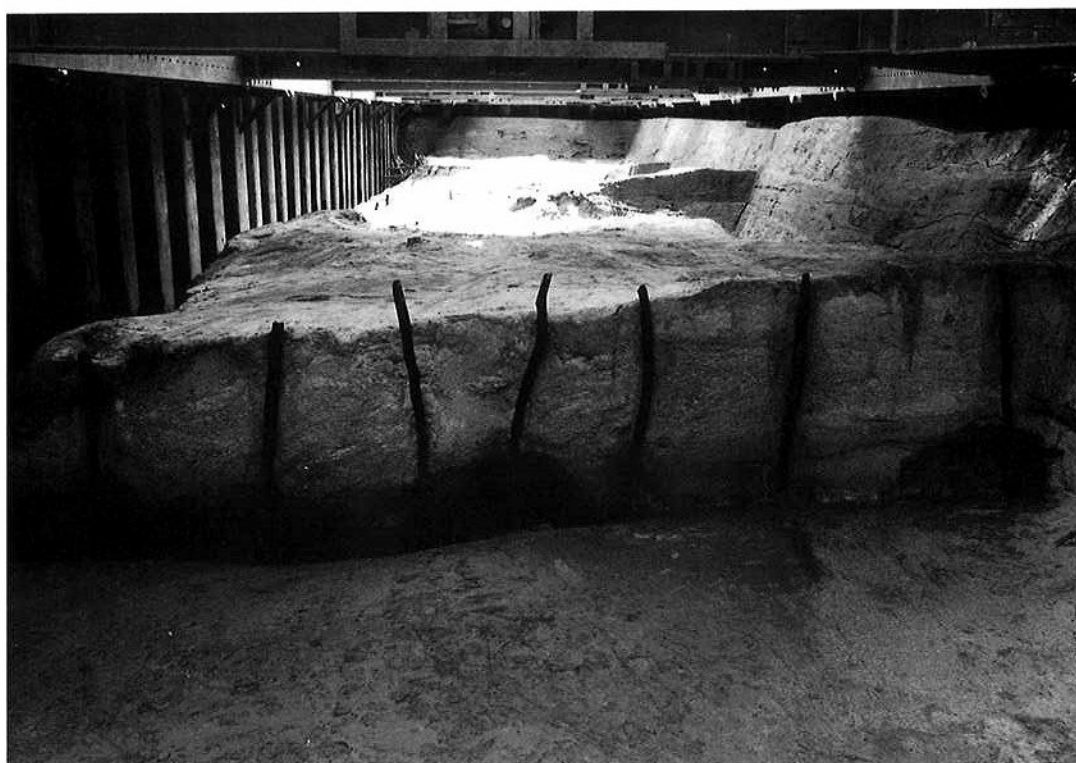
1. A - 1 地区 第13層上面足跡（南より）



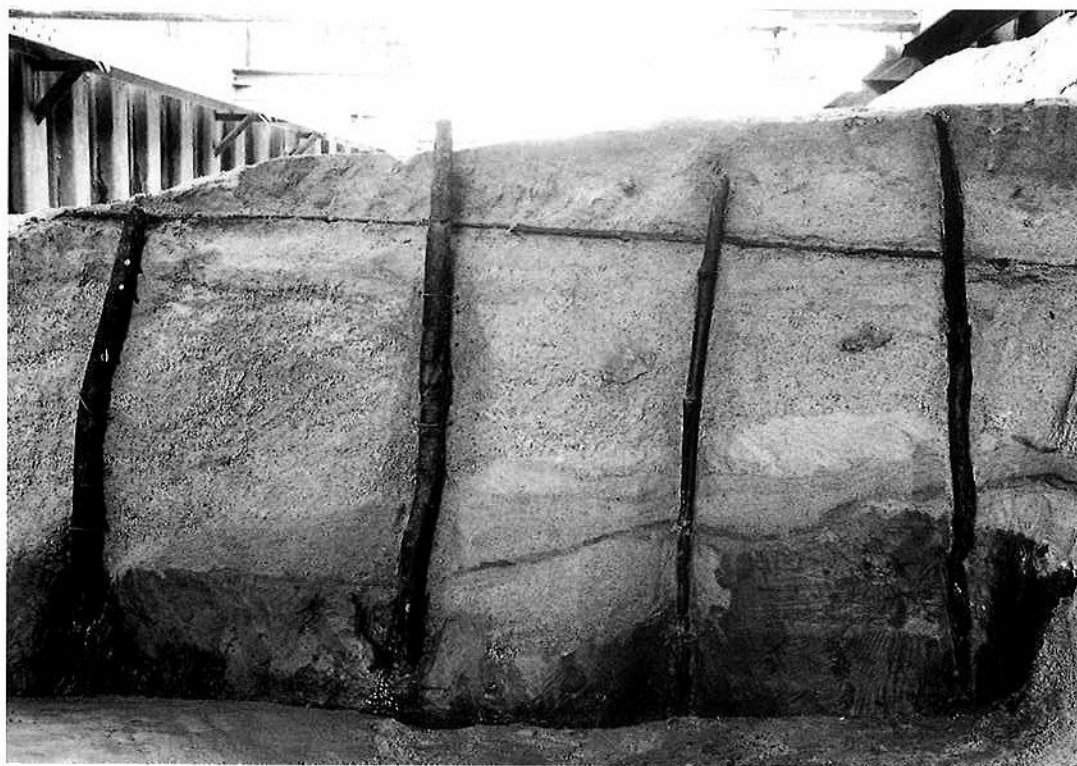
2. A - 4 地区 第13層上面足跡（西より）



1. A - 2 地区 堰状遺構上部 (西より)



2. A - 2 地区 堰状遺構断面 (西より)



1. A - 2 地区 堰状遺構断面部分 (西より) 1



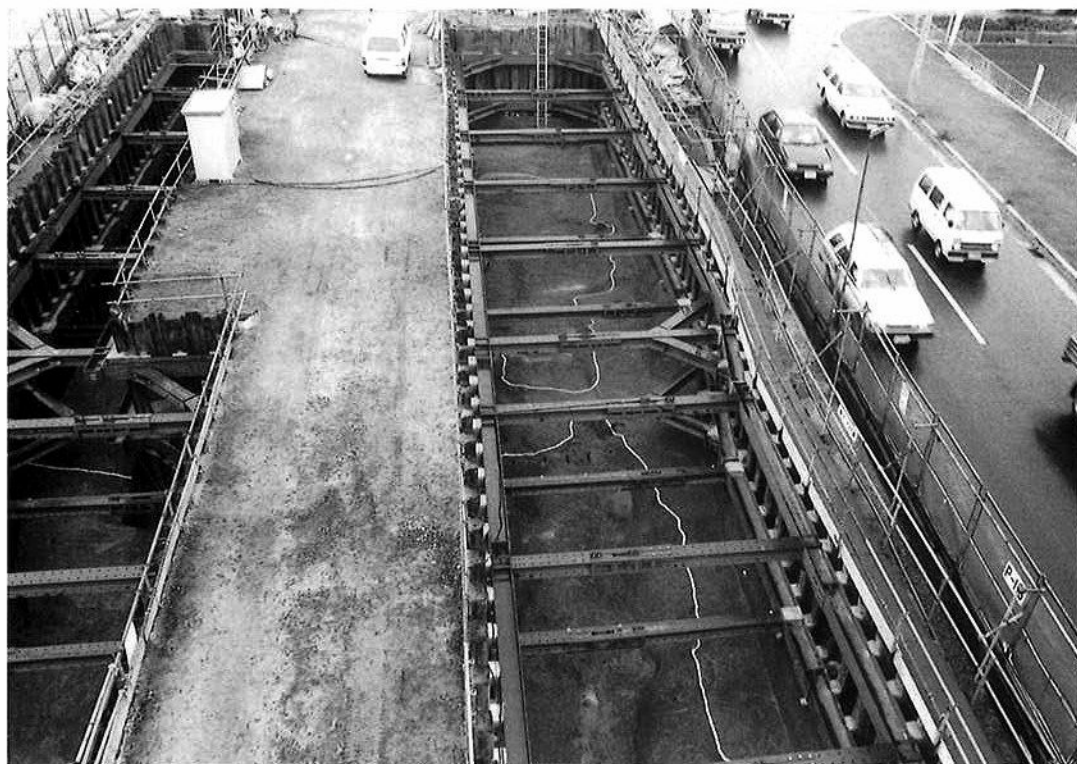
2. A - 2 地区 堰状遺構断面部分 (西より) 2



1. A - 2 地区 堰状遺構部分 (東より)



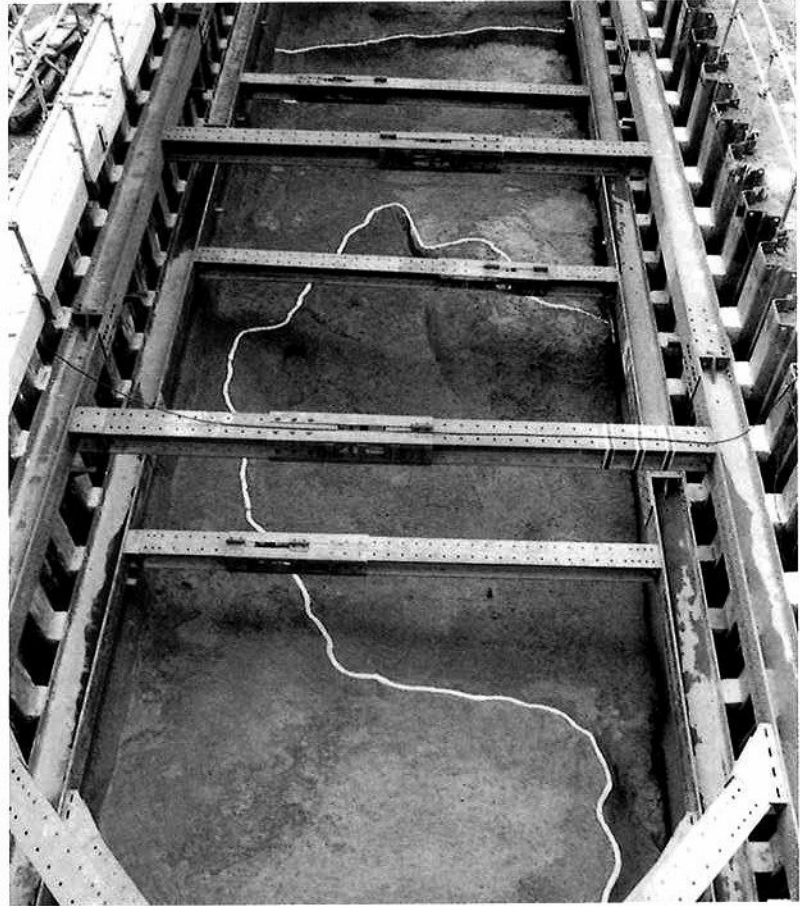
2. A - 2 地区 堰状遺構部分 (西より)



1. A - 1・2地区 堤防状遺構（西より）



2. A - 3・4地区 堤防状遺構（東より）



1. A-2 地区
溝9・溜まり状遺構
(東より)



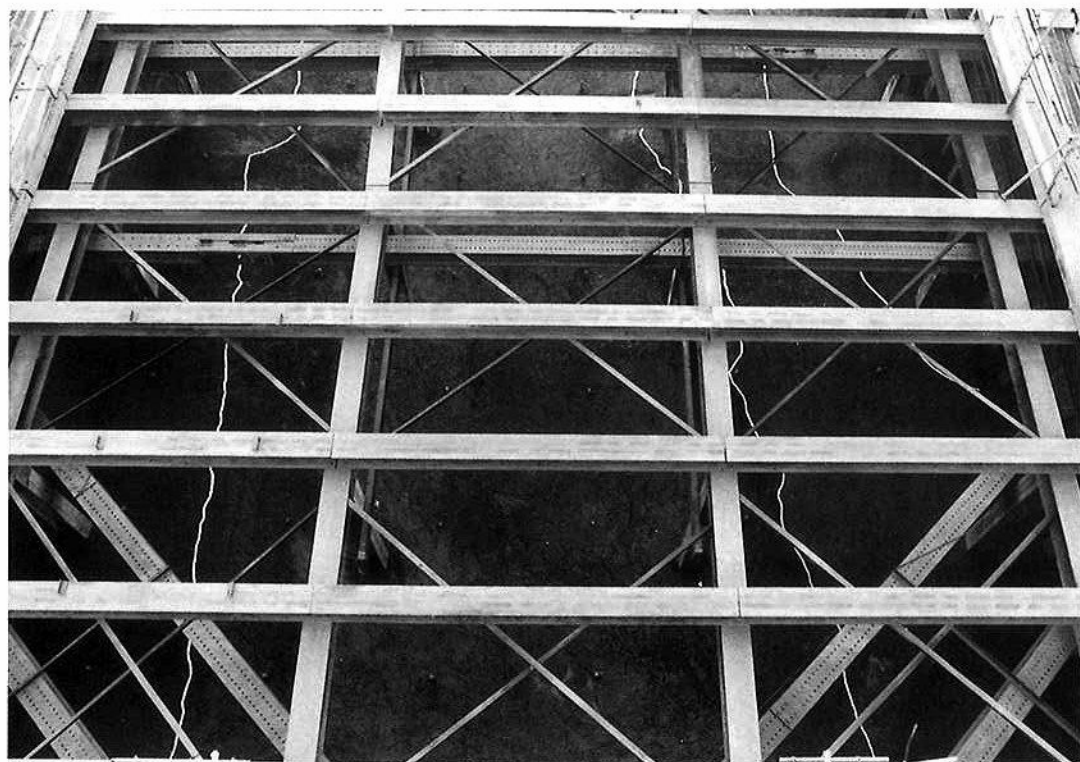
2. A-1・2 地区 溝8・10 (西より)



1. A-3・4地区 溝8 (東より)



2. 溝8内漆器碗出土状況



1. B-1地区 溝13 (東より)



2. B-2地区 河川6内遺物出土状況



1. B - 1 地区 溝 24 遺物出土状況



2. B - 1 地区 落ち込み 7・溝 24・25 (西より)



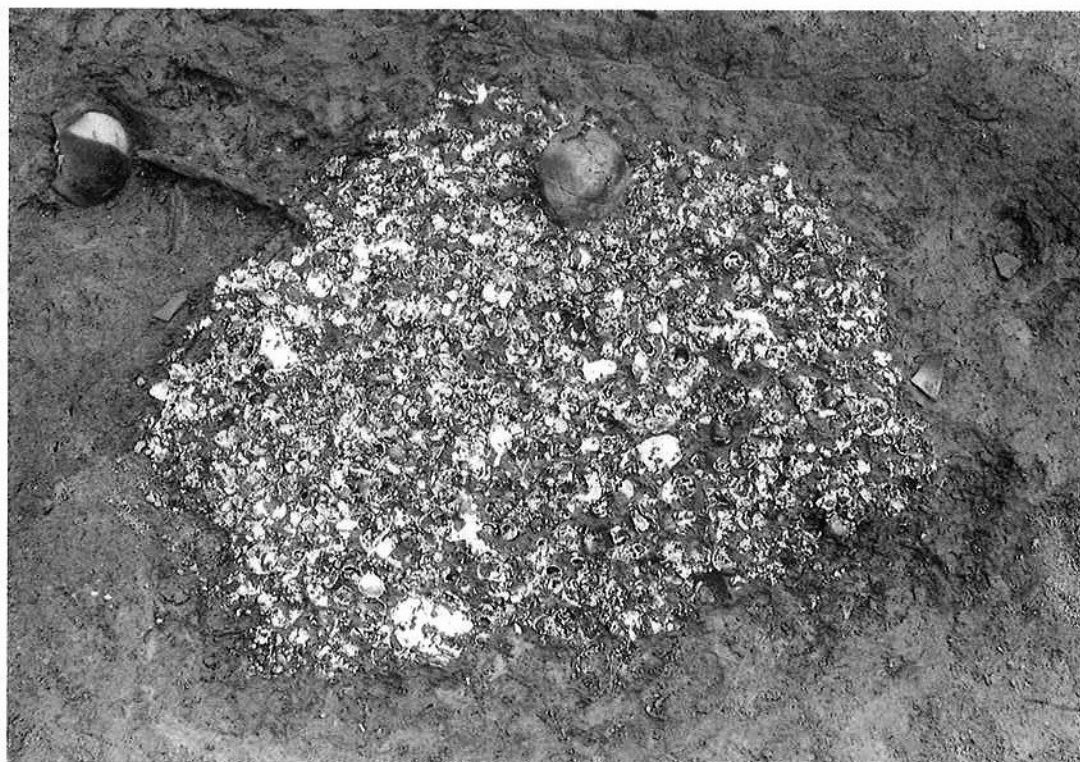
1. B-2地区 河川5 (東より)



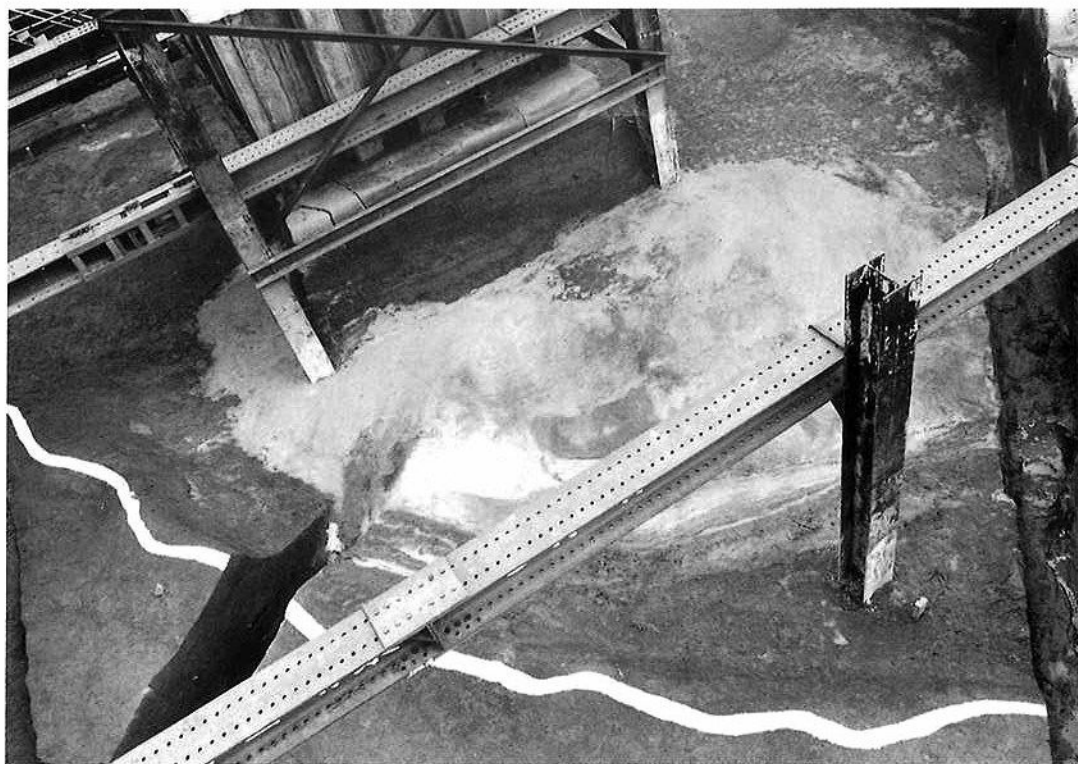
2. 河川5内上層遺物出土状況



1. 河川5内下層遺物出土状況



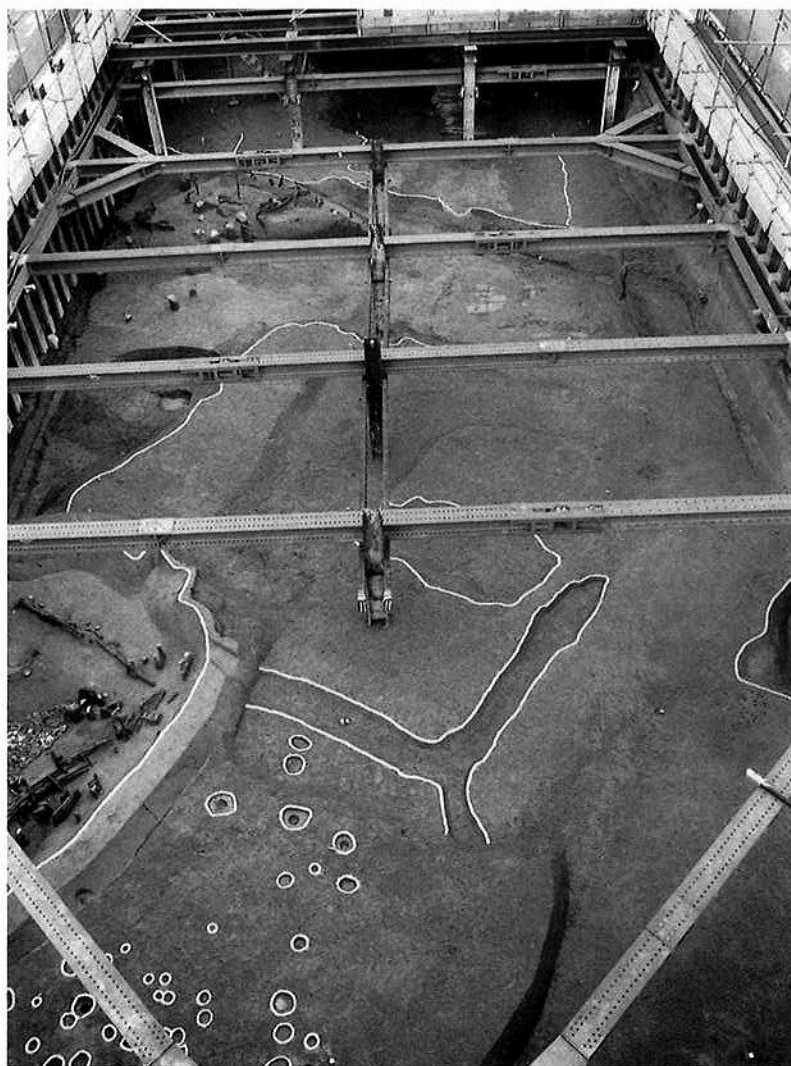
1. 河川5内貝層遺物出土状況



1. B-2地区 河川4 (東南より)



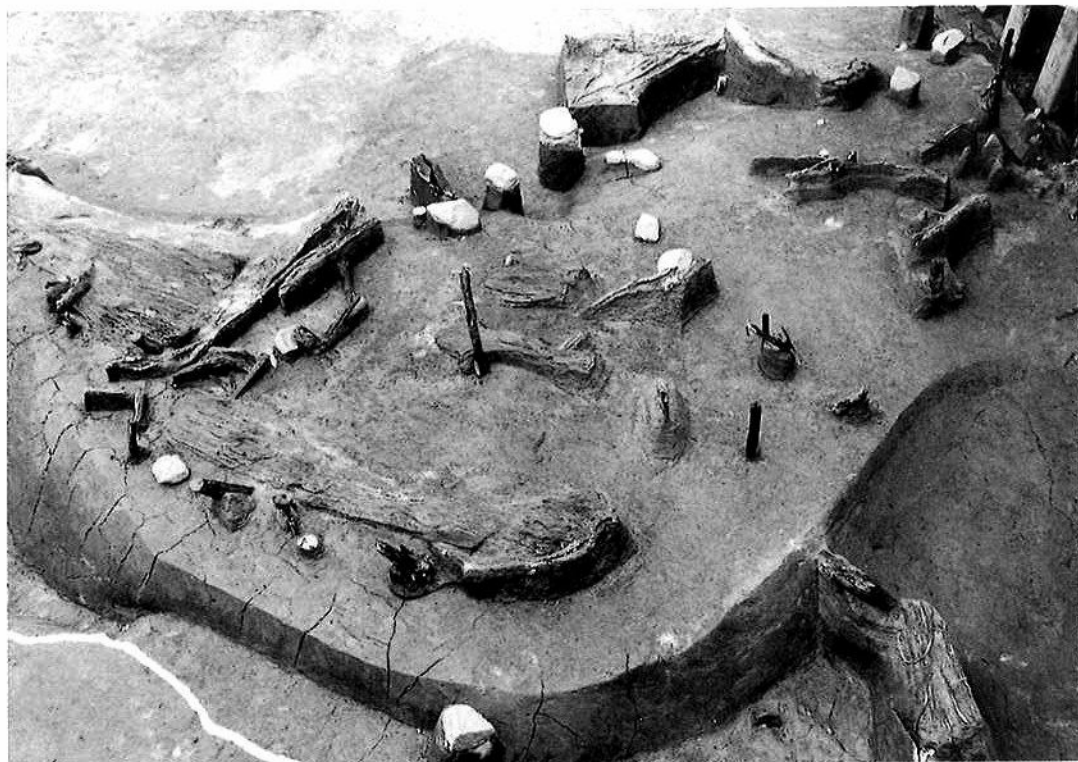
2. 河川4内遺物出土状況



1.B-1地区
第3遺構
(西より)



2.B-1地区 溝14上層小柄出土状況



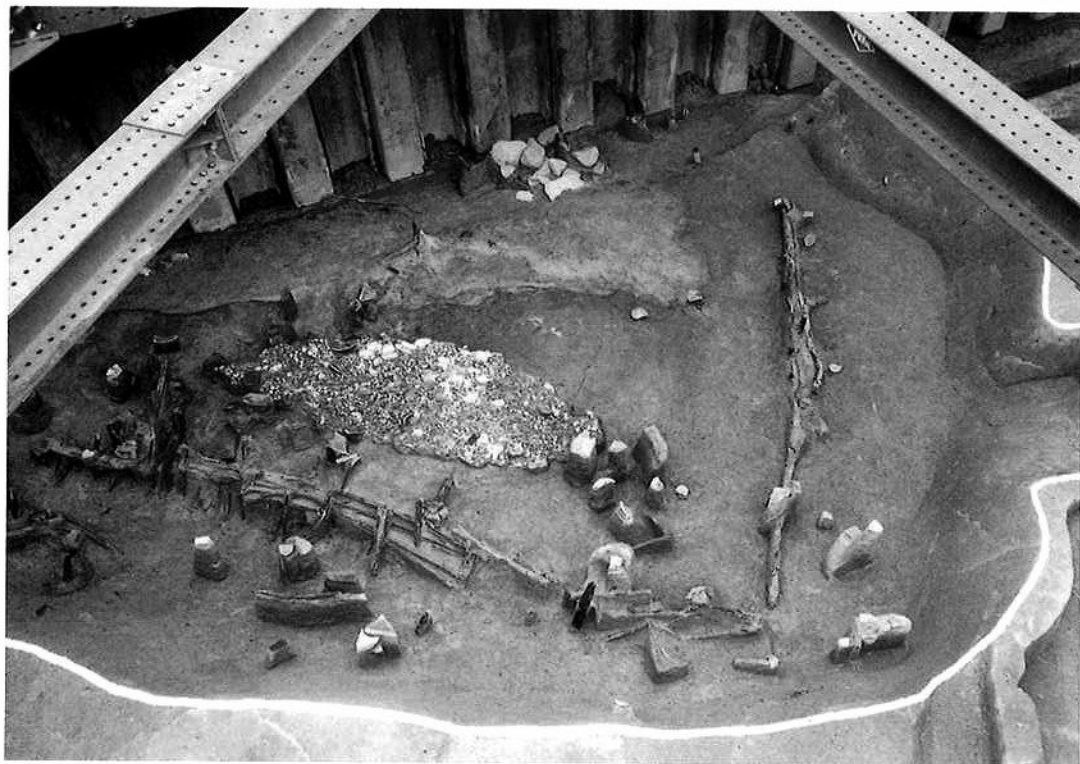
1. B-1地区 溝14 堰状遺構 (東より)



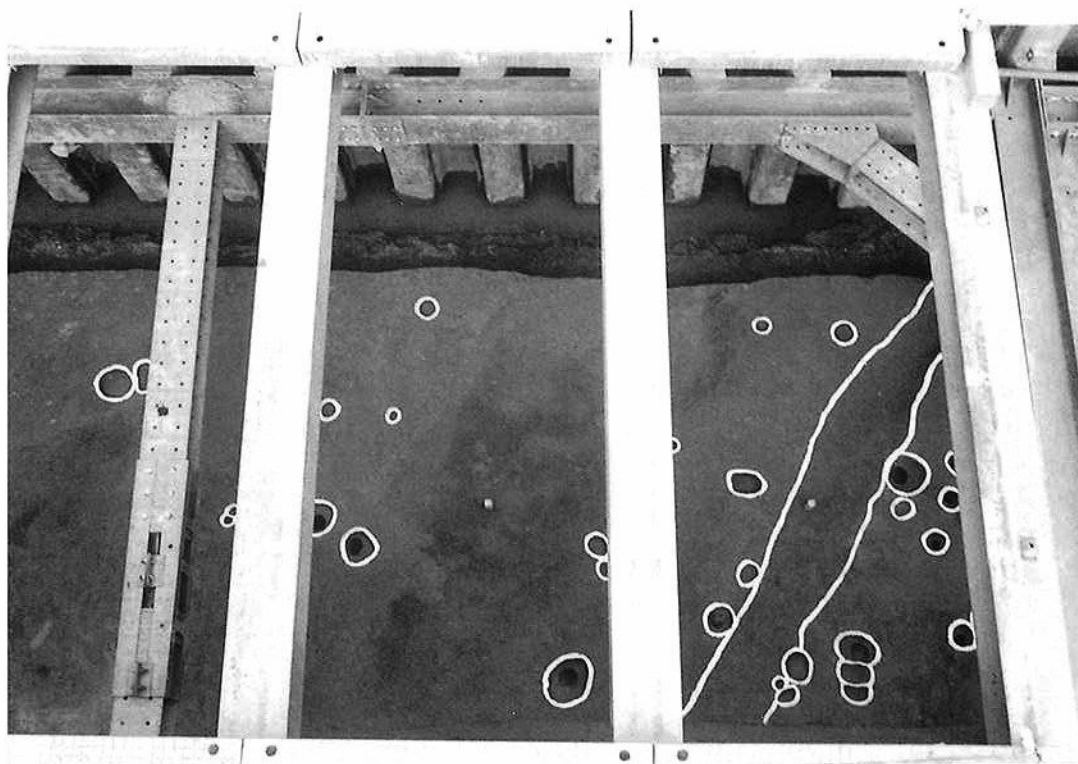
2. B-1地区 P38 柱根検出状況



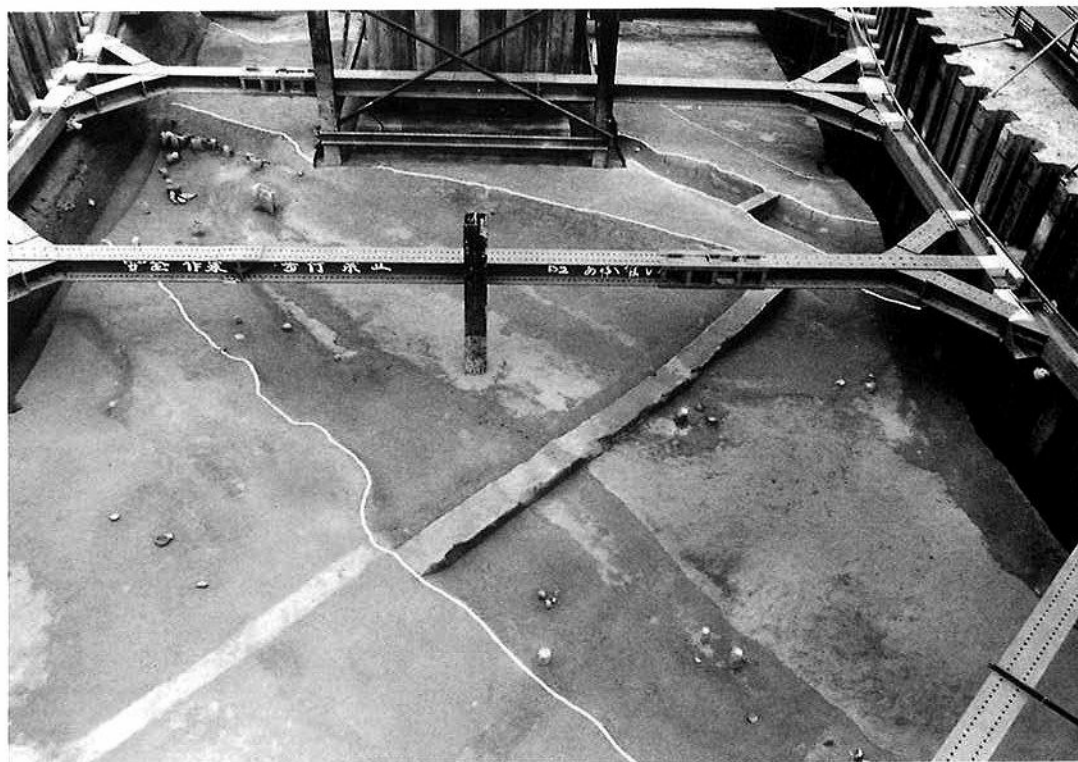
1. B-1地区 土坑28上層遺物出土状況(南より)



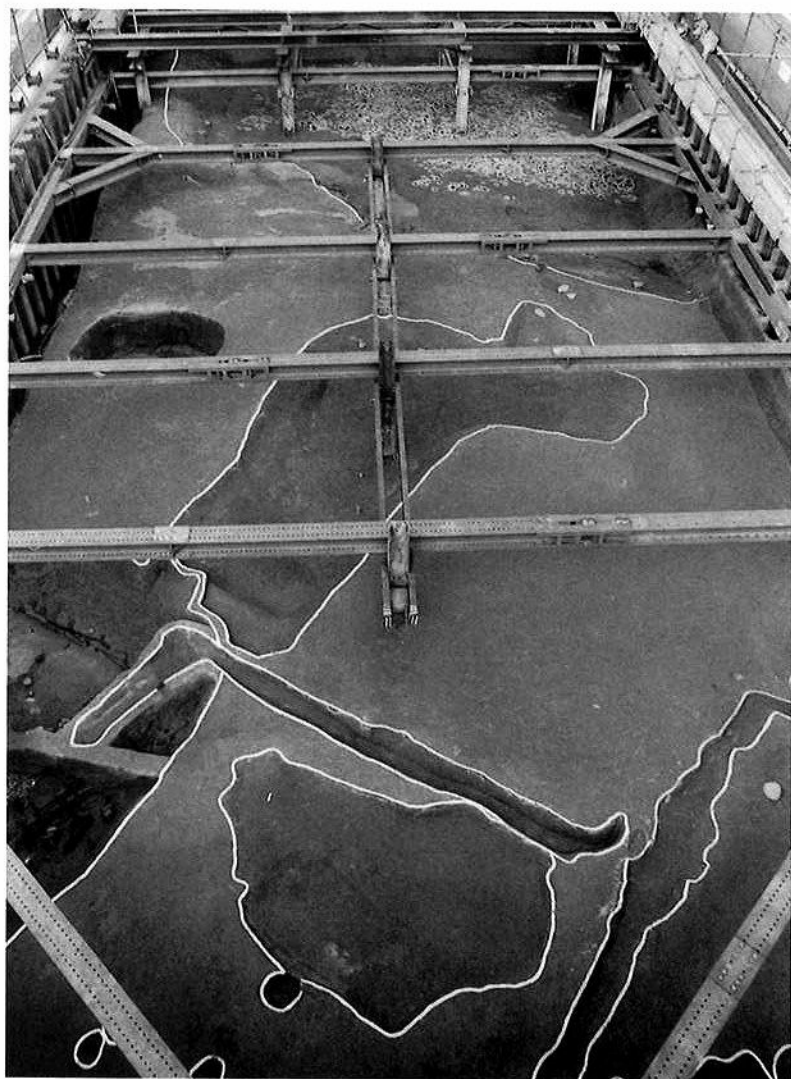
2. B-1地区 土坑28下層遺物・遺構検出状況(南より)



1. B-2地区 第3遺構 (南より)



2. B-2地区 第3遺構 (東より)



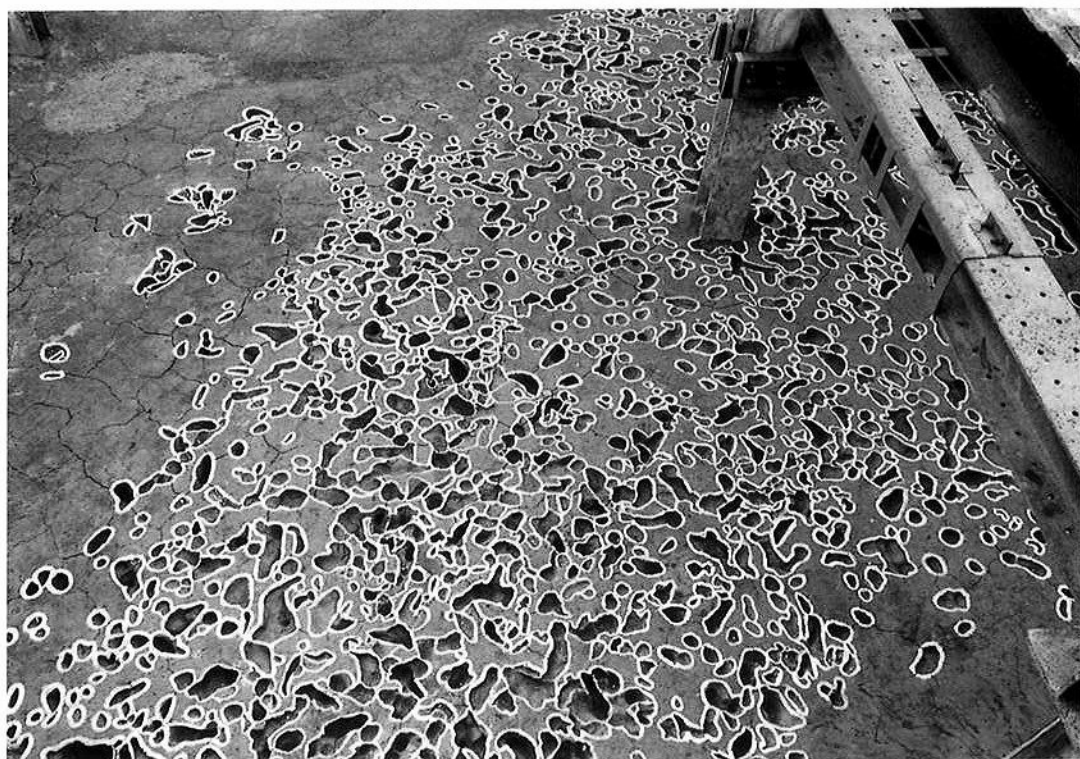
1.B-1地区
第2遺構(西より)



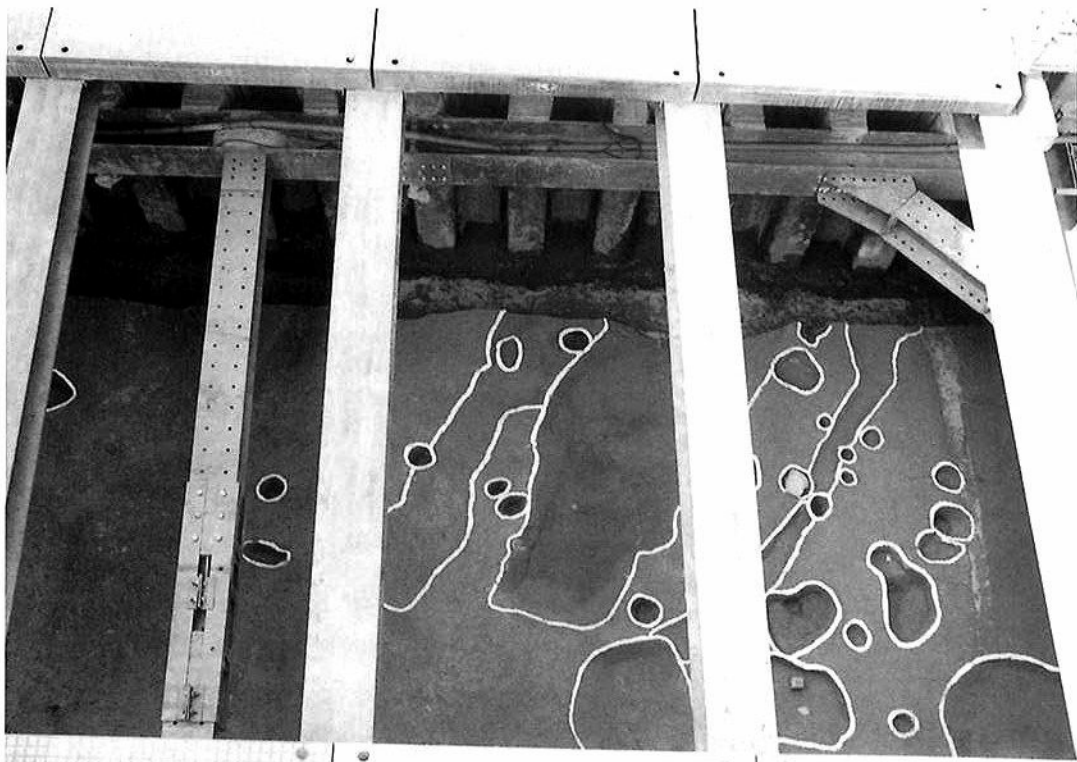
2.B-1地区 落ち込み5内漆器椀出土状況



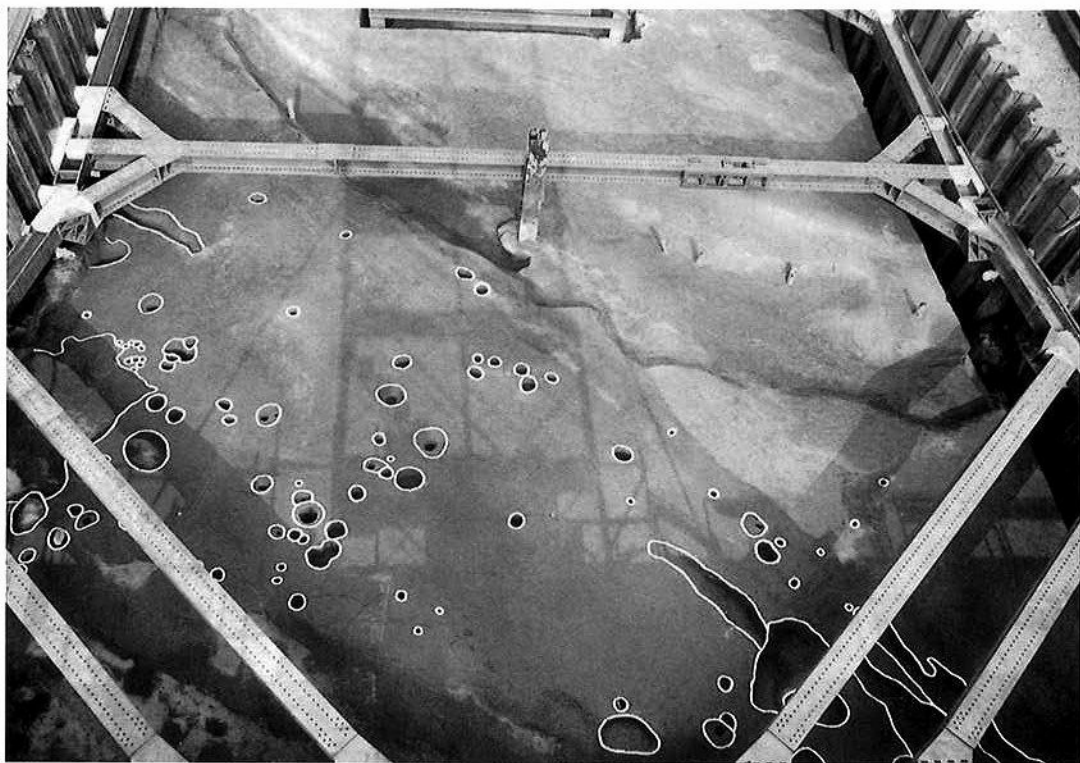
1. B - 1 地区
第 2 遺構 (西より)



2. B - 1 地区 第 2 遺構足跡 (北より)



1. B-2地区 第2遺構 (南より)



2. B-2地区 第2遺構 (東より)



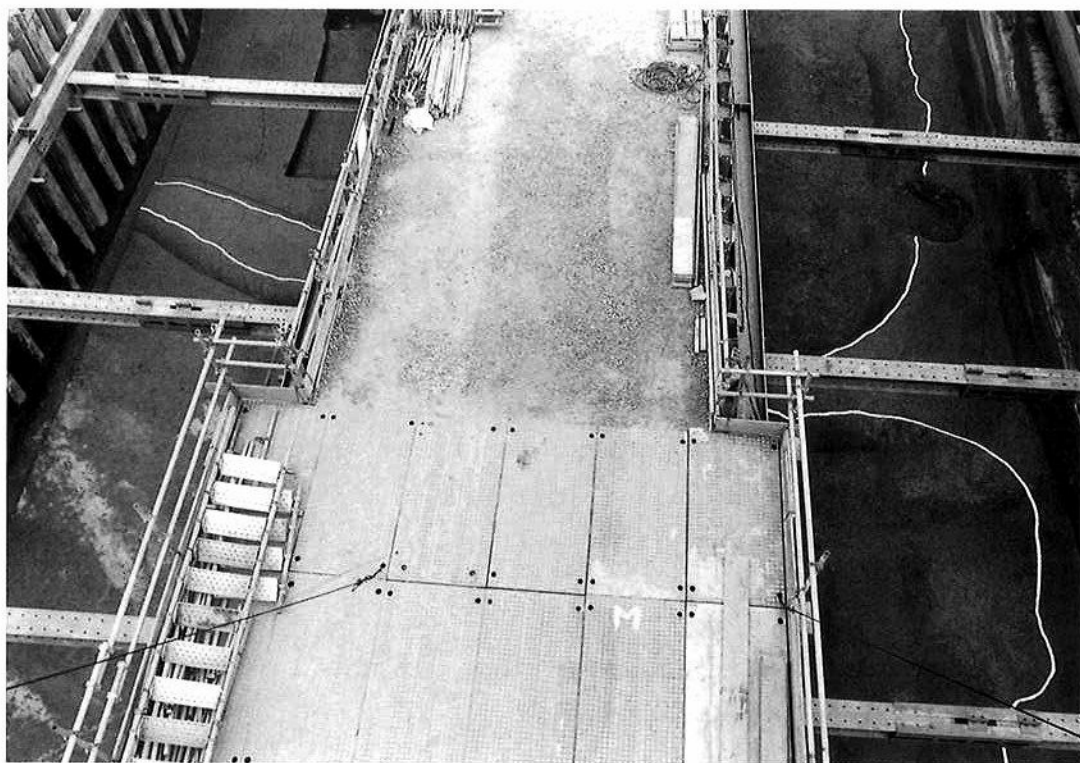
1. B-2地区 溝1、落ち込み1、土坑19~26 (東より)



2. B-2地区 土坑15 遺物出土状況 (東より)

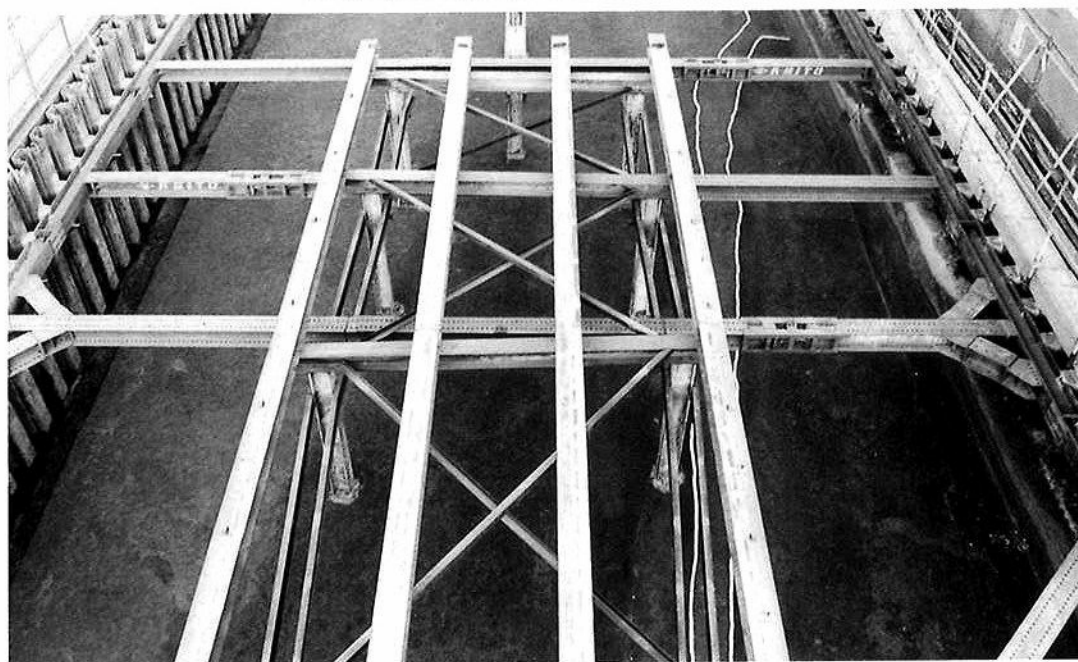
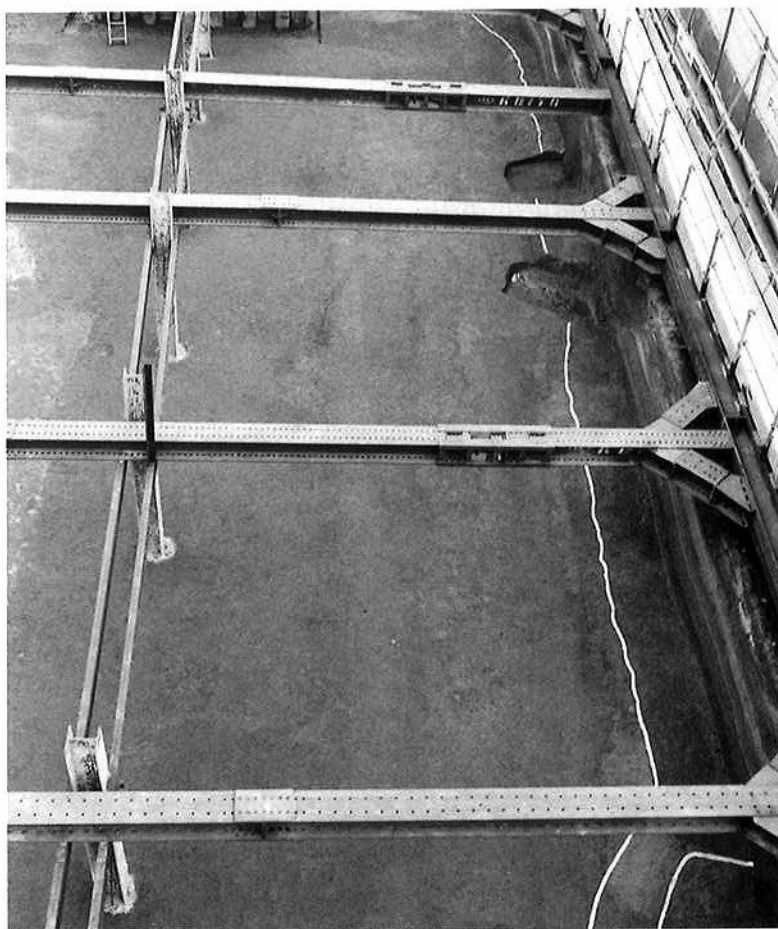


1. A - 2 地区 ハス田畦畔 (東より)



2. A - 1・2 地区 ハス田畦畔 (西より)

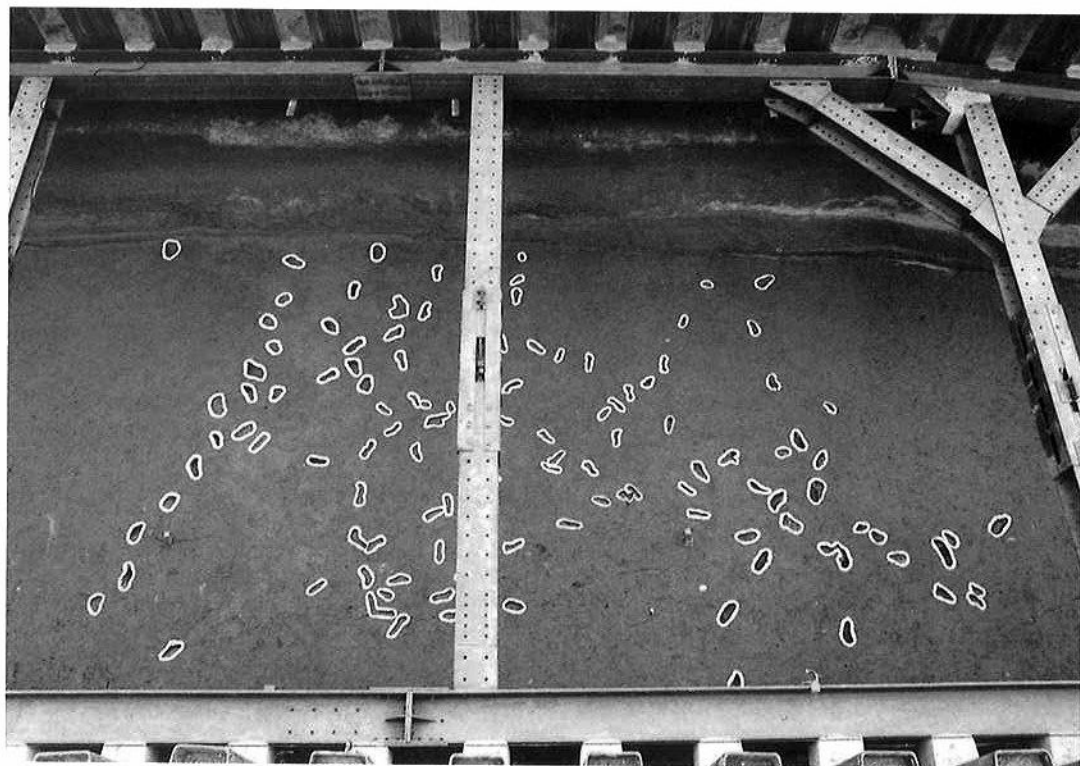
1. A - 3 地区
ハス田畦畔
(西より)



2. A - 4 地区 ハス田畦畔 (西より)



1. A - 1 地区 第9層上面足跡 (北より)



2. A - 2 地区 第9層上面足跡 (北より)



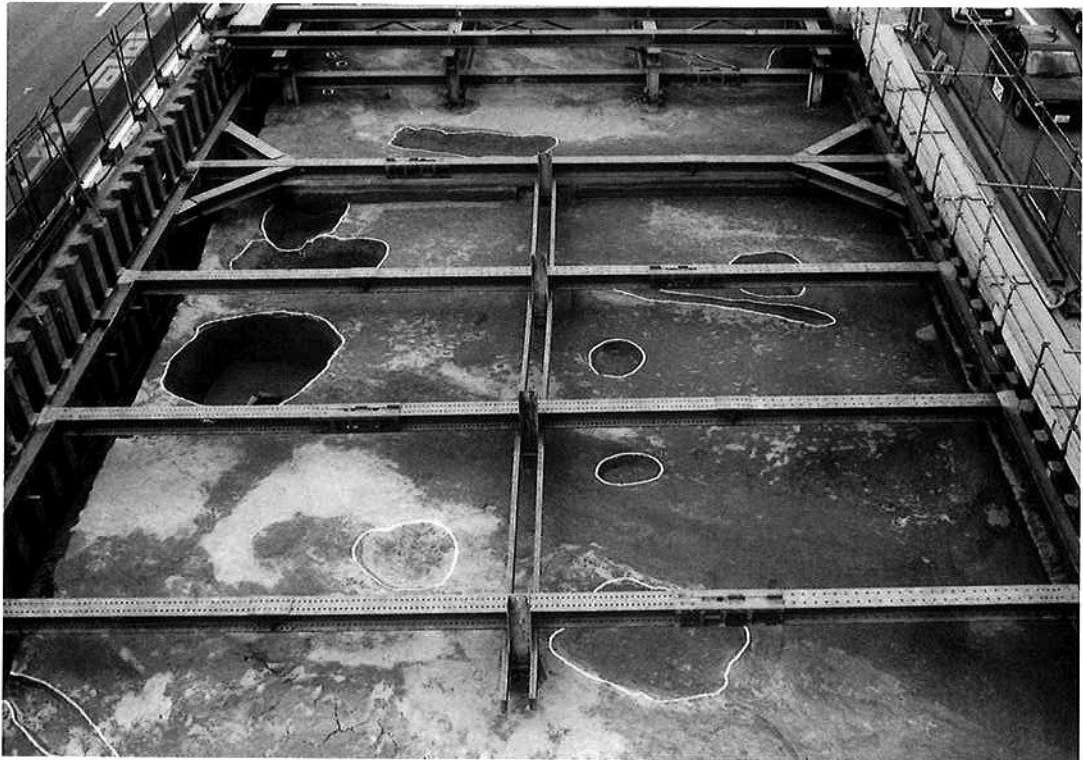
1. A - 3 地区 第9層上面足跡 (西より)



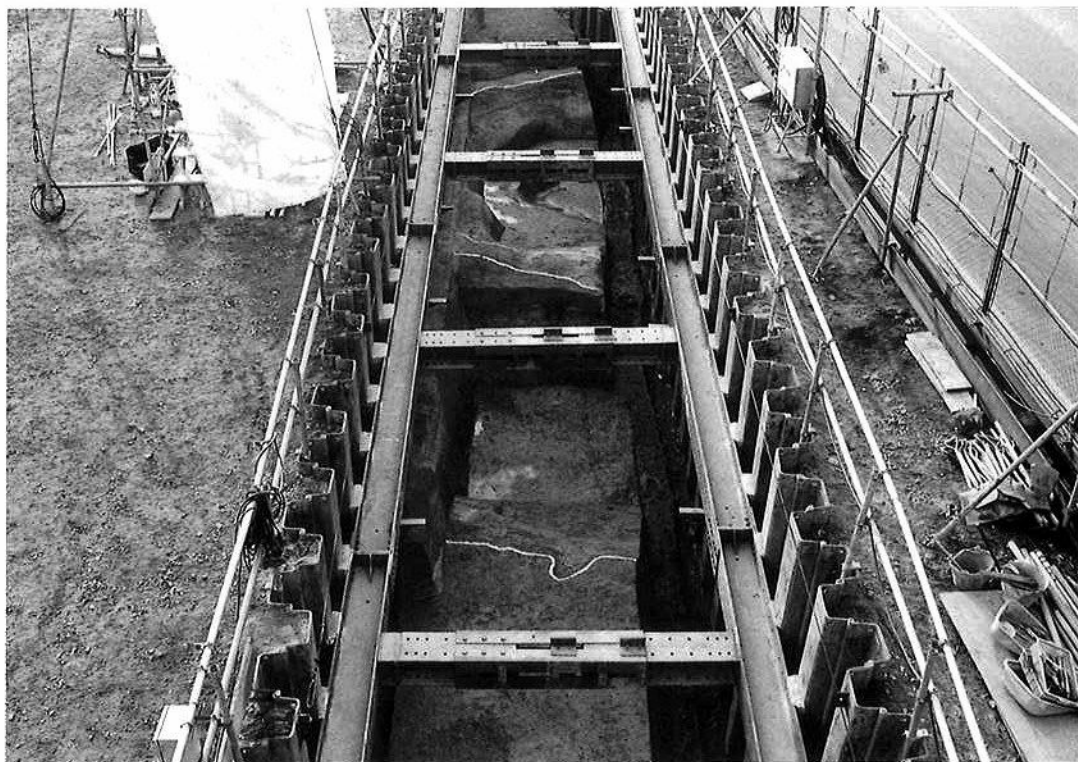
2. A - 4 地区 第9層上面足跡 (西より)



1. A-3・4地区 第4・5層上面遺構 (東より)



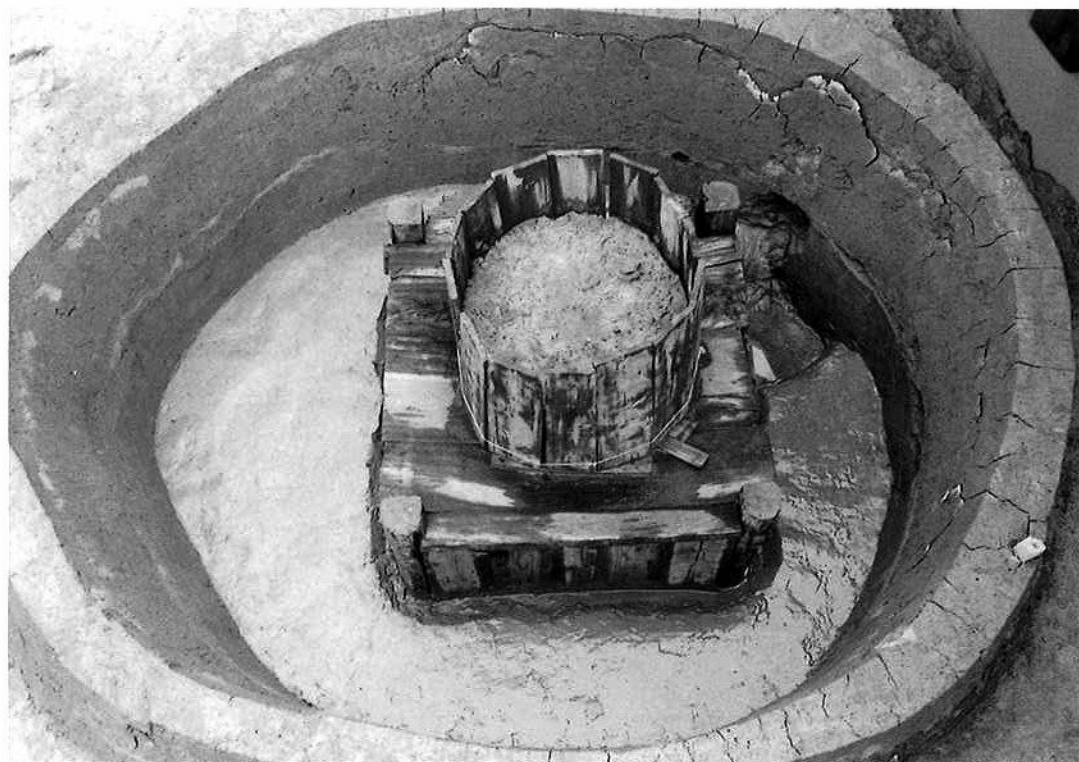
2. B-1地区 第4層上面遺構 (西より)



1.A-1地区 第4・5層上面遺構（東より）



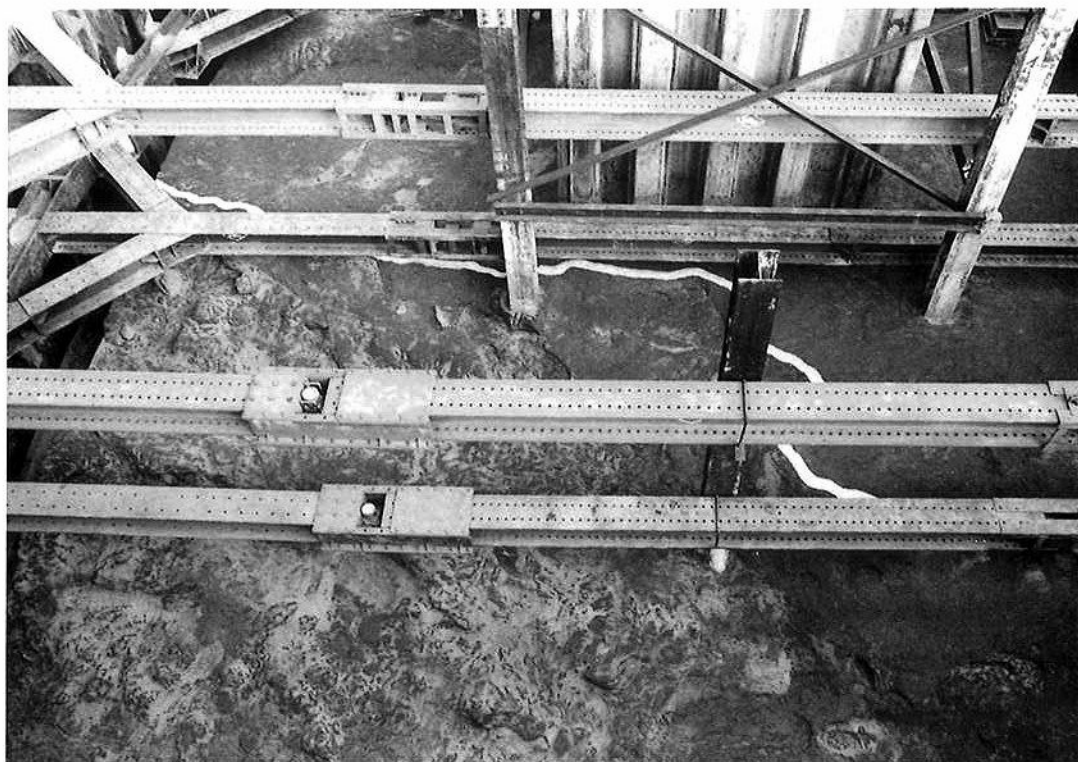
1.A-2地区 第4・5層上面遺構（北より）



1. A - 3 地区 井戸 3 上部



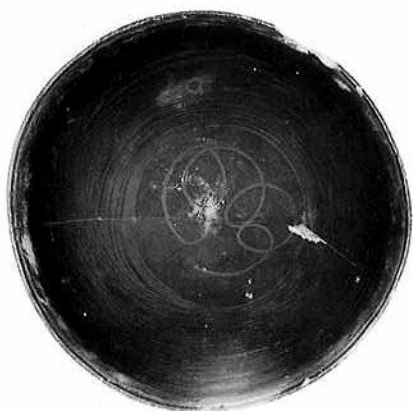
2. A - 4 地区 井戸 4 下部側面



1. B-2地区 河川2 (西より)2



2. B-2地区 河川2東肩 (西より)1



19'



19



21'



21



22



54



55



56



57



59



58



60



61



132'



132



131'



133'



131



133



135'



138



136



135



140



139'



141



137



139



142



143'



166



155



143



156



149



153



146



167



150



154



152



162



163



161



170



160



169



159



172



171



158



168



148



178



147



179



151



180



174



181



175



182



176



183



184



191



185



194



186



195



187



197



189



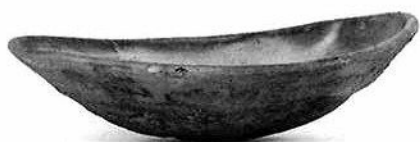
198



190



199



201



209



200



208



203



211



202



210



207



214



204



213



219



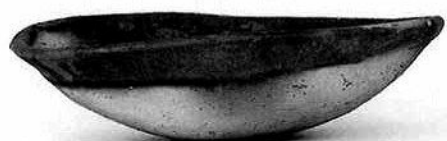
227



215



226



222



228



220



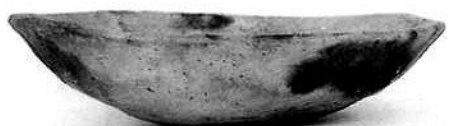
230



225



231



223



232



233



234



242



235



243



236



294



237



295



238



296



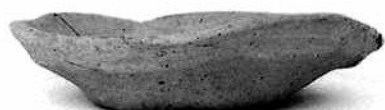
239



297



240



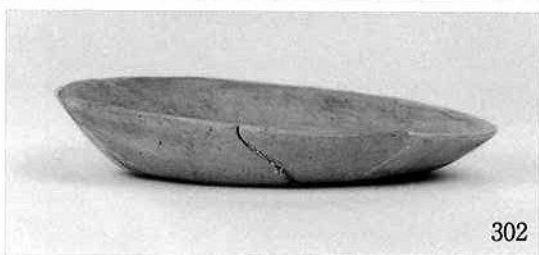
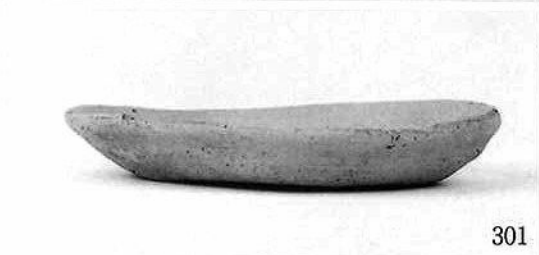
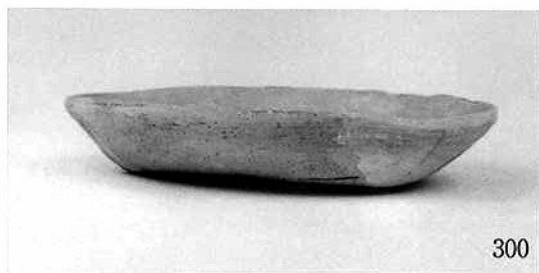
298



241



299



306'



307'





309'



317'



309



317



308



313



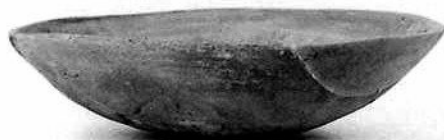
310



314



312



315



319'



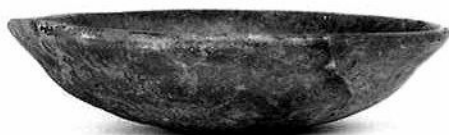
316



318



319



102



100'



101



402



100



403



27



27'



10



10'



417



4



4'



5



6



7



8



9



403



405



404



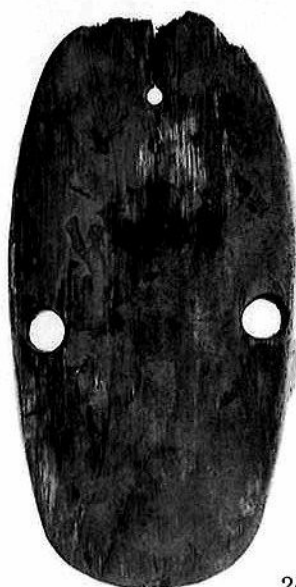
23



25



26



24



24'



24''



51'



408'



51



408



51''



49



52



50



410[〃]



410[′]



410



409



53



53[′]



262'



262



263



268



282



282'



67



69



409



68



119



119'



119''



118



120



120'



120''



124



124'



121''



121'



121



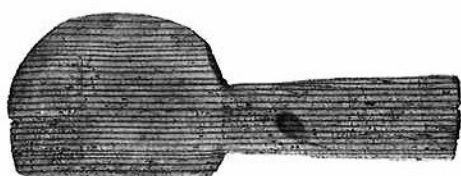
117



123



123'



122



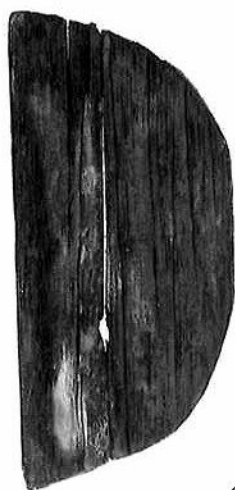
339



339'



90



92



91''



91'



91



93



340



342



353'



341



353



343



346



418



345



345'



345''



419



89



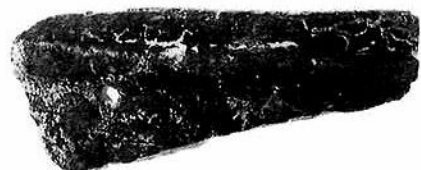
420'



421'



420



421



422



422'



423



424



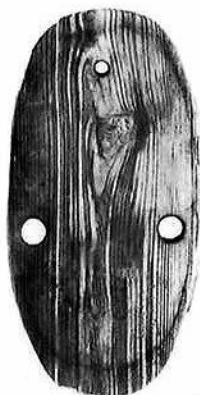
292



99



293



97



97'



97''

320



98



98'



96



94



95



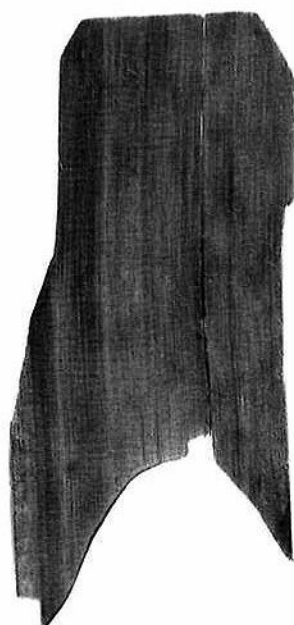
270



272



271



259



257



260



261



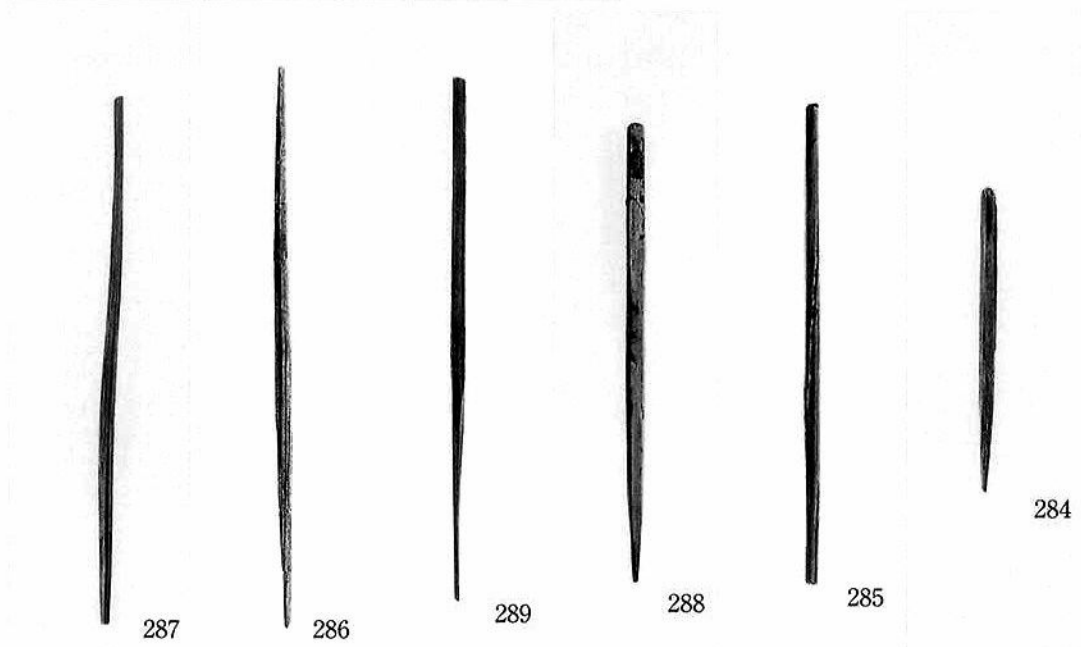
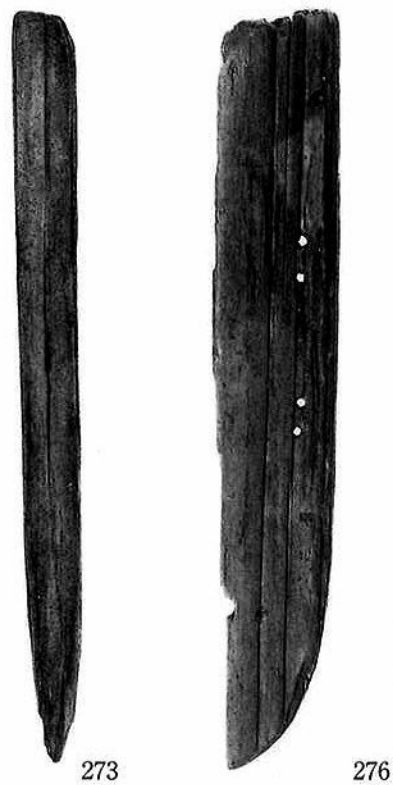
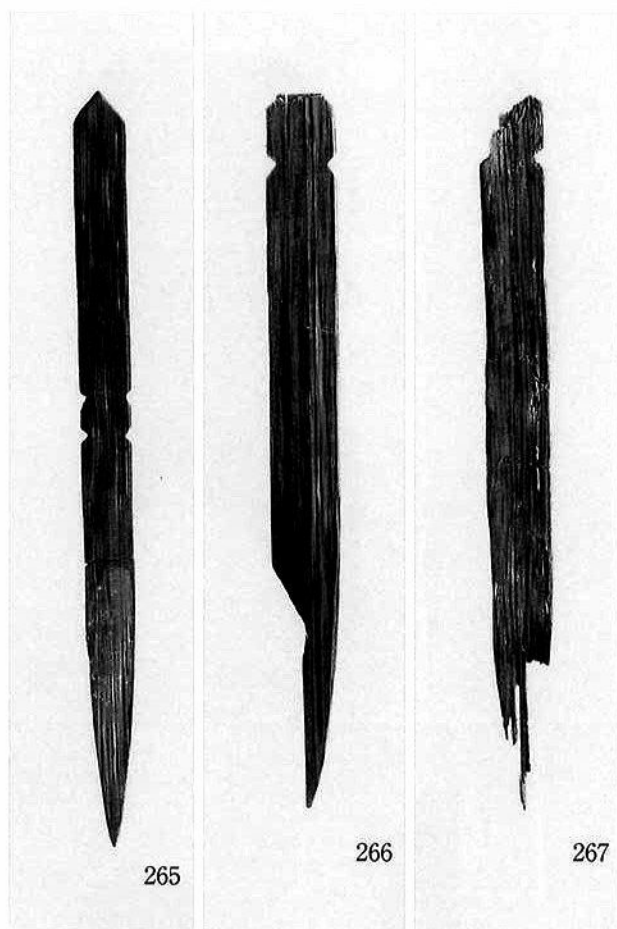
256



275



258





253



253'



255



269



254



283



281



274''



274'



274



277



278



280



279



281



290



264



344



350'



352'



350



352



351



348



354'



354



347



349

報告書抄録

ふりがな	みずはいいせきだい4じはくつちょうさほうこく						
書名	水走遺跡第4次発掘調査報告						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	若松博恵・宮崎大学農学部農作業管理学研究室						
編集機関	東大阪市教育委員会 財団法人東大阪市文化財協会						
所在地	〒577-0843 大阪府東大阪市荒川3丁目4番23号 電話 06-6728-9361						
発行年月日	2000年11月30日						
ふりがな 所取遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
みずはい 水走	おおさか みずはい 大阪府東大阪市 みずはい 水走・川中	27227			1984. 1 .30 } 1984.12.28	2859m ²	鉄道・高速道路建設工事
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
水走	集落	弥生 平安 鎌倉・室町 江戸	自然流路 足跡・堰・堤防 溝・柱穴・土坑・ 河川 足跡・井戸・溝	弥生式土器・石鎌・骨製品 土師器・黒色土器・瓦器・木製品 土師器・瓦器・木製品・鉄製品・ 石製品・貨銭・貝遺体・陶磁器 陶磁器・木製品		人形・武器形などの祭祀 用木製品	

水走遺跡第4次発掘調査報告

2000年11月30日

発行所 東大阪市教育委員会
財団法人東大阪市文化財協会

印刷所 株式会社 中島弘文堂印刷所

水走遺跡第4次発掘調査報告

正誤表

P	行目	誤	正
4	27	i987	1987
26	7	第13・14図	図版13・14
102	10	□内	□内